一橋大学審査学位請求論文

ズールー・ナショナリズムと人種隔離政策
—創られた「伝統」の変容・浸透・放棄の過程—

上林朋広

一橋大学大学院社会学研究科
SD131010

ZULU NATIONALISM AND RACIAL SEGREGATION:
THE PROCESS OF TRANSFORMATION, INFILTRATION AND REJECTION OF THE INVENTED “TRADITION”

KAMBAYASHI, Tomohiro

Doctoral Dissertation
Graduate School of Social Sciences
Hitotsubashi University

私は、博士学位請求論文を作成するにあたり、「一橋大学における研究活動に係る行動規範」*および、本研究科の「大学院生研究倫理規範」**を遵守したことを、ここに宣誓します。

＊「一橋大学における研究活動に係る行動規範」（2007年7月4日）

＊＊「一橋大学大学院社会学研究科　大学院生研究倫理規範」（2015年11月11日）

2020 年 1 月 27 日

学位申請者(自署)：　上林明広

ズールー・ナショナリズムと人種隔離政策
―創られた「伝統」の変容・浸透・放棄の過程―

目次

序章……1
第1章　模倣すべき過去・失敗としての未来：ナタール植民地におけるモーリス・S・エヴァンズの「原住民」政策論から連邦レベルの人種隔離政策へ……27

第2章　南アフリカにおけるアメリカ南部黒人教育の受容：折衝の場としてのアフリカ人教育……51

第3章　キリー・キャンベルの収集活動から見る歴史意識の変容：南アフリカにおけるアーカイブズ構築の一事例……73

第4章　創られた「伝統」の浸透：ズールー語教科書の出版と歴史意識……108

第5章「部族的」歴史を書く：アフリカ人学生の歴史エッセイと白人審査官……137

第6章　部族と普遍の間：Z. K. マシューズの人類学・原住民法研究から見る市民権要求の論理……169

終章……201

資料文献一覧……217

年度別ズールー語指定教科書一覧……226

序章

はじめに

南アフリカはことあるごとに、その暴力に満ちた歴史を想起させる。歴史を政治的に利用することは、アパルトヘイト体制を築く際にも、その体制と闘う際にも、そしてその体制が終わった後の政治においても、重要な役割を果たしてきた。アフリカーナーという民族が不当に虐げられてきたという記憶はアパルトヘイト形成の原動力であった。他方、黒人を労働者として使役させられるのみの存在に貶めるアパルトヘイトに闘いを挑む際には、アフリカ人自身の栄光を思い起こすことが必要であると論じられた。そして、アパルトヘイトが終わり、四半世紀が過ぎた現在においても大学では知の脱植民地化が喧しく叫ばれている。

このように歴史の政治利用は様々な面において見られる。しかし、20 世紀南アフリカの歴史を、人種隔離支配と解放運動の歴史として捉えた時、また 21 世紀へのアパルトヘイトの遺制を考える時に、前景に迫り出してくるのは、アフリカ人を伝統に、白人入植者を文明に位置づけ、両者を法的にまた空間的に分断し統治するという二重の統治体制であった[1]。そしてアフリカ人の伝統性を語る時に問題となるのが、その伝統が植民地支配に合わせていかに改変されたか、あるいは創造されたのかという点である。日本の歴史学において顧みられることは少ないが、悠久不変と考えられている伝統の多くが実際には近代になってから意識的に創られたものであるとする「伝統の創造」論に関する議論の基になった論文集においてヨーロッパ史の大家エリック・ホブズボームとともに編者を務めたのが、ジンバブウェを中心とする南部アフリカ史の専門家テレンス・レンジャーであった[2]。レンジャーが寄せた論文「植民地期アフリカにおける創られた伝統」は、白人入植者、植民地官僚そしてアフリカ人自身が植民地化の過程で創り出した「伝統」が植民地支配の基礎となったと主張し、アフリカ史において現在も議論される命題を打ち出した[3]。その後、アフリカにおける「創られた伝統」をめぐっては、植民地化以前と以後で連続性はあるのか、誰が創造に関わったのか、創られた伝統は誰に、どのようにして受け入れられたのかなど諸点に渡

---

[1] マムダニは、南アフリカを含めた脱植民地化後に残る植民地主義の影響として、制定法によって統治される「市民」と慣習法（特定の「部族」のものとされる法）によって統治される「臣民」という二重の法体系がもたらした都市と農村の分離と、首長を中心とした伝統的権威による脱中心化された独裁を指摘する。Mahmood Mamdani, *Citizen and Subject: Contemporary Africa and the Legacy of Late Colonialism* (Princeton: Princeton University Press, 1996).南アフリカにおける伝統的権威のポストアパルトヘイト時代まで含めた歴史をたどることでマムダニを批判した、Lungisile Ntsebeza, *Democracy Compromised: Chiefs and the Politics of the Land in South Africa*, Afrika-Studiecentrum Series, v. 5 (Leiden ; Boston: Brill, 2005).も参照。

[2] E. J. Hobsbawm and T. O. Ranger, eds., *The Invention of Tradition*, Past and Present Publications (Cambridge: Cambridge University Press, 1983).

[3] レンジャー T, 「植民地下のアフリカにおける創り出された伝統」 in ホブズボウム・レンジャー編『創られた伝統』 前川啓治・梶原景昭訳 (紀伊國屋書店, 1992).

って論じられてきた[4]。

本論文は、南アフリカを中心としたアフリカ史における「創られた伝統」をめぐる議論を取り上げて、 南アフリカにおける歴史の政治的利用のひとつとして 20 世紀前半の人種隔離統治を対象として、「創られた伝統」の形成及び浸透の過程という観点から分析する。対象地域は主に 1910 年の南アフリカ連邦形成時においてもっとも人口が少なく面積も狭かったナタール州である。また統治おける「創られた伝統」論として俎上に載せるのは、当地に住むズールー人とされる人々の「伝統」をめぐってなされた議論である。地域と時代を限定し、統治政策の変遷とその中での「伝統」の利用を分析することで、本論文は、植民地主義を抽象的な概念としてではなく、時代を経るごとにその形態を変える実体として把握することを試みる。

ナタール州は、その人口・面積の小ささにもかかわらず、アフリカ人首長を媒介として利用し、アフリカ人の「伝統」的な法を用いるという点で、連邦レベルでの人種隔離統治のあり方に大きな影響を与えた。また宣教師が担ってきたアフリカ人教育への 1920 年代からの州政府の介入は、アパルトヘイト初期のアフリカ人教育制度の基礎を築いたバンツー教育法（1953 年）の先駆けとして捉えることができる。さらに重要なことに、ナタール州は 1913 年土地法への反対運動を契機として成立した政治団体、南アフリカ原住民会議（South African Native National Congress のちのアフリカ民族会議（African National Congress）、以下 ANC）の初期の指導者を多く輩出している。ただし、初代議長ジョン・デュベ（John L. Dube）を中心としたナタール出身の活動家は南アフリカ国民としての権利や国際人権を求める運動として ANC を捉える解放運動史観において、ズールー人の伝統に引きずられた保守的な指導者として見なされるようになるのである。しかし、より普遍的な権利を求める運動として ANC を展開していくことを阻害した伝統主義者という二項対立の図式でデュベなどミッション教育を受けたズールー人エリートを裁断してはならない。彼らの生涯は、宣教師が説くキリスト教文明、人種隔離という制度下でのズールー人の伝統、そしてズールー人あるいはアフリカ人としての尊厳という一見して同時に成り立たせることが不可能なものを、なんとかしてすべて手に入れようとそれぞれを縒り合わせる、その点において苦心に満ちたものであった。本論文が焦点を合わせる学校教育において、植民地支配のもとで創られた伝統がいかにして浸透していたのかに着目することは、人種隔離体制を支配と抵抗という二分法を超えて、アフリカ人エリートの歴史意識と、植民地支配下での「伝統」との、もつれあう歴史[5]という観点から考察することを可能にするだろう。

序章の以下の部分では、本論文の意義を二つの視点から提示する。第一に、ナタールを中心とした南アフリカの人種隔離政策における伝統の利用という本論文の主題を、植民地責任論及び

---

[4] 詳しくは、本序章の問題設定及び先行研究を参照。

[5] ここでの、「もつれ合う」は、entanglement の訳語である。Entanglement という概念については、Sarah Nuttall, *Entanglement: Literary and Cultural Reflections on Post Apartheid* (Johannesburg: Wits University Press, 2009).を参照。

「創られた伝統」論という方法論的視座を中心に植民地研究に対する本論文の貢献を提示する。第二に、本研究の対象である南アフリカ、特にナタールを中心とした人種隔離政策及び抵抗運動に関する先行研究を整理し、本論文がそれらの研究をいかに乗り越えようとしているのかを、そのための研究視角とともに説明する。そして、先行研究の乗り越えが各章でいかに論じられているかを本論文の構成とともに明示する。

第1節 問題設定

1. 1. 歴史的展開の中の植民地主義

1994年、南アフリカ共和国は全人種が参加する選挙を初めて実施した。南アにおける人種差別の長い歴史に終止符を打つ、その記念すべき投票の場所としてアフリカ民族会議（ANC）議長マンデラ（Nelson Mandela）は、初代議長デュベ（John Dube）ゆかりの地オシャングゲ学院を選んだ。デュベは1912年のANC設立に携わった人物であり、彼の墓所はオシャングゲ学院にあった。マンデラは、「82年前に種をまかれた使命が今ついに実を結ぼうとしているわけだから、わたしがその墓所の近くで一票を投じることは、歴史の大きな環を完成させる行為であった」と回想する。マンデラの投票は、ANCの使命が完了したことを象徴する行為であった。投票所に向かう道のりで彼は闘争中に死んでいった人々を思い出す[6]。

この1994年以前の出来事を全て、アパルトヘイトの終焉への段階として並べる歴史観(まさにマンデラの自伝のタイトル「自由への長い道」である)は、南アフリカの支配的な公的記憶とも言えるだろう[7]。しかし、過去を解放の時点へと収斂するように並べる歴史観には問題もある。そこから零れ落ちるものがあまりに多いのだ。マンデラの投票場所、オシャングゲ学院の設立者であったデュベは実際にはANC中心史観では捉えきれない人物である。彼は、ANCの創立の中心人物の一人であると同時に、保守的な政治家としての側面もあった。アフリカ人同胞に対して自助努力の重要性を説き、また領域的な人種隔離それ自体には反対しないという、その後のANCの原則からは逸脱する思想の持ち主でもあった。このようなデュベが示す捉え難さは彼のみに見られるものではなく、人種隔離・アパルトヘイト体制下のアフリカ人の行動の多くに見られるものであった[8]。本論文が対象とする歴史をめぐる議論の場は、白人宣教師・官僚や黒人学生・教師など様々

---

[6] ネルソン・マンデラ『自由への長い道: ネルソン・マンデラ自伝（下)』東江一紀訳 (日本放送出版協会, 1996), 435.

[7] Annie E. Coombes, *History after Apartheid: Visual Culture and Public Memory in a Democratic South Africa* (Johannesburg: Wits University Press, 2004).

[8] Shula Marks, *The Ambiguities of Dependence in South Africa: Class, Nationalism, and the State in Twentieth-Century Natal* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1986).あるいは、マンデラ自身を、矛盾を体現する人物として考えることもできるかもしれない。伝統的エリートの家系に生まれ、ミッションスクールで学び、武力闘争を唱えつつも、移行期にあって南アフリカの人々の和解に尽力した（と同時にアパルトヘイト後の経済的不平等の拡大へと道を開いた）政治家として、彼の生涯は矛盾に満ちている。そして、その矛盾は彼の払った犠牲が、27年に及ぶ獄中生活だけではないということにも思い

な出自を持つ人々の意図が関わり合う場であり、またそのような議論を可能にした制度、例えば学校教育や慈善・教育財団において支配・被支配の関係が見られるとしても日常においては物理的な暴力というよりイデオロギー的な側面が強い場である。それゆえに、そこでの言動は過分に「曖昧さ」を持つ。本論文の目的の一つは、デュベが示すような現在の政治的な価値観では捉えきれない「曖昧さ」を 20 世紀前半の南アフリカという文脈に置き直すことによって理解することである。

本論文は、南アフリカにおける人種隔離の歴史を、解放のモメントとしての 1994 年を終点とするのではなく、またアパルトヘイト政策を打ち出した国民党が選挙で勝利した 1948 年を始点とするのでもない。対象としてはアパルトヘイト開始以前に記述の多くを割き、また問題意識としては現代の南アフリカを含みこむ形で論じていく。アパルトヘイト体制の崩壊という終点を離れて、人種隔離とそれへの抵抗の歴史を研究することには、その正確な理解につながるという以外にも利点がある。ゼイクス・ムダは、以下の批判は南アフリカ黒人の大部分を代弁するものではないと留保をつけながらも、移行期においてマンデラを中心とした ANC が白人に対して過剰な譲歩をし、結果として植民地時代に築かれた不平等の構造が残されたとする批判が高まっていると指摘する[9]。政府に対する批判は、様々な場におけるデモやストライキとなって表れている。これらの抗議は、先に示したマンデラの和解のナショナリズムの影響力に陰りが見えていることも明らかにする[10]。また、ムダは批判の声は大学のキャンパスを中心とした若者たちの間で特に高いと述べている[11]。それは、2015 年にケープタウン大学でセシル・ローズの像の撤去を求める学生運動として始まり、その後南ア各地の大学へ波及し、また国際的も広がりを見せた Rhodes Must Fall 運動、またそこから派生した種々の運動に象徴されている。この運動の指標が Decolonizing the University/大学の脱植民地化であった。しかし、いかなる意味で大学は植民地化されているのかと問うならば、その内容は必ずしも明確ではない[12]。

を馳せさせるものだ。

[9] ゼイクス・ムダ「マンデラの矛盾 (総特集 ネルソン・マンデラ) – (追悼)」 くぼたのぞみ訳 『現代思想』 42, no. 3 (March 2014): 28.

[10] Antina Von Schnitzler, *Democracy's infrastructure: techno-politics and protest after apartheid* (Princeton: Princeton University Press, 2016), 3.

[11] ムダ, 「マンデラの矛盾」 28.

[12] 運動が求めるものは様々であり、例えば植民地エリートの銅像の撤去から、教員におけるアフリカ人の割合の少なさの是正、シラバスで指定される教科書・課題図書の著者の中にアフリカ人が少ないことを批判するものや、授業料の撤廃を求めるものまである。フォーリスト運動を植民地主義の過去を等閑視してきた南アフリカの歴史学の矛盾の表れと見る永原の論調とは異なり、学生運動の批判の矛先は主に ANC の大統領ズマを中心とした実力者と未だに経済的な実権を握っているとされる国内の白人資本家に向けられている。永原陽子, "植民地責任論," in 新自由主義時代の歴史学, ed. 歴史学研究会, vol. 1, 第 4 次　現代歴史学の成果と課題 (績文堂出版, 2017), 86. フォーリスト運動の動向を簡潔にまとめた記事として、牧野久美子, 「「Must Fall」運動を振り返る -- 2015 年の南アフリカにおけるプロテストの軌跡」 アフリカレポート, April 12, 2016, https://ir.ide.go.jp/index.php?active_action=repository_view_main_item_detail&page_id=39&block_id=158&it

批判の対象である「植民地化」の内容が不明確であるのは抗議運動だけではない。アフリカ史家のクーパーは、コロニアリズム研究の果たした理論的な貢献を評価しながらも、この分野における「植民地主義」が歴史から切り離された形で抽象的に扱われていると指摘する[13]。またジェフ・ガイも 19 世紀ナタール植民地の歴史というより限られた領域においてであるが、この植民地のアフリカ人統治政策が間接統治のモデルとしてのみ捉えられ、その歴史的展開が捨象されてきたと主張する[14]。1948 年以降のアパルトヘイト政策を含め南アフリカにおける人種隔離政策は一貫した政策ではなく、その場の状況に合わせて即興的に為された施策[15]が、積み重なって形成されたものであるとするならば、現在の南アフリカにおいて「脱植民地化」をする必要があるとして、その「脱植民地化」されるべき植民地の遺制はいったいどのようにして造られ、また残ったのかが問われなくてはならない。このように問い、また答えようとすることで変革をより的確に想像することを可能にする視座を提供することを目的としたい。

そして、その視座は植民地主義に何か一つの基礎があると措定するのではなく、人種隔離政策の進展を背景とした統治と抵抗の絡み合いを精察しようと試みるものだ。社会経済史家の網中は、植民地主義や植民地に関わる諸問題が、「宗主国の規律権力のもとで進行する一定の時間と空間においてよりも、むしろ、その進行が一度中断された後に生じる諸現象のなかで、その本質がより明確に映し出される」という、朴美貞の言葉をひきながら、2008 年に南アフリカで起きた移民排斥の暴動を植民地時代に造られた労務管理のあり方の帰結であると説明する[16]。そして、網中は、ポスト・アパルトヘイトの現在においても植民地期以来の経済構造の本質に変化はなく、これこそが植民地主義の本質でありその遺制であると主張する。この点は、網中が対象とし、詳細に分析したモザンビークを中心とした移民労働者に関しては確かに妥当するかもしれないが、南アフリカ黒人と白人の関係など看過されている点も多く、社会経済的な構造を植民地主義の本質であると規定することは単純にはできないだろう。また、構造と意識を組み合わせて、南部アフリカにおける植民地化の総体的な本質を明らかにしようとしたコマロフの立場も本論文は取ら

---

em_id=47680&item_no=1.を参照。

[13] Frederick Cooper, *Colonialism in Question: Theory, Knowledge, History* (Berkeley: University of California Press, 2005), 3–4.

[14] Jeff Guy, *Theophilus Shepstone and the Forging of Natal: African Autonomy and Settler Colonialism in the Making of Traditional Authority* (Scottsville: University of KwaZulu-Natal Press, 2013), 1–13.

[15] ポゼルはアパルトヘイト体制の初期において一貫したビジョンというものはなかったと指摘する(Posel 1997)。アパルトヘイトの形成をめぐる史学史としては峯陽一の論考を参照.（峯 2009）「解説『新版　南アフリカの歴史』を読む―リベラル・ラディカル論争をこえて」レナード・トンプソン『南アフリカの歴史』明石書店（宮本他訳）を参照)。フーコーは『コレージュ・ド・フランス講義 1977-1978 年度　安全・領土・人口』（筑摩書房、2007 年）で、統治を体系だった政策群としてではなく、技術の積み重なりとして捉える見方を提示している(フーコー 2007, 11)。

[16] 朴美貞「植民地遺制を考える：植民地の記憶をめぐる綱引き」西川長夫・高橋秀寿編『グローバリゼーションと植民地主義』 (人文書院, 2009), 313–32; 網中昭世, 『植民地支配と開発 : モザンビークと南アフリカ金鉱業』 (山川出版社, 2014.

ない[17]。本論文は、むしろ植民地主義に何か一つの本質があると仮定しそれを明らかにしようとする試みではなく、植民地統治とそれへの抵抗の変遷のプロセスに注目する。フーコーに則り統治が技術の積み重なりであると考えるならば、本論文の意義は植民地主義の直接的な遺制を論じるのではなく、過去の施策に後年異なる意味づけが与えられ新しい植民地統治の政策に利用される、そしてそれに伴い抵抗のあり方も変化する、という過程を明らかにすることであろう。

この点において本博士論文は、2009 年の同タイトルの研究書の出版以降日本の歴史学界において大きな影響力を持っている植民地責任論と一線を画す。植民地責任論は、戦争責任論の射程を、不問にされてきた植民地化という前史に広げ、また脱植民地化後の社会が直面する問題を国民国家という枠組みで捉えることの限界を指摘するという貢献をした[18]。ただし、同名論文集に収録されている論文の内容に明らかなように、具体的な分析対象は、脱植民地化後の記憶論や旧宗主国の動向を中心とした国際規範の形成に偏っており、植民地とされた地域とそこに住んだ人々の歴史それ自体は看過されている。しかしながら、植民地主義の遺制やその補償のあり方という植民地責任論が取り組もうとした課題を考察するにあたっては、植民地主義の歴史的展開それ自体を精査する必要がある。この点は南アフリカにおける土地制度改革をめぐる問題によく表れている。ズマ政権下で南アフリカは、土地改革を巡って、それまでは補償の対象外とされていた 1913 年以前の土地の喪失についても補償されるべきだという見直し論が広範に支持されるようになった。しかし、誰が土地を所有すべきなのかという論点については、アパルトヘイト体制崩壊後も伝統的権威として存続する首長職にある有力者たちが、土地の元々の所有者の子孫としてその権利を主張し、それがズマ及びラマンポーザ政権内においても一定の支持を得ているという構図が存在する。それゆえに、首長という政治権力のあり方が、植民地主義の下で、またアパルトヘイト体制下で様々な変容を得たことを踏まえて、議論する必要があるのだ。本論文は南アフリカにおける植民地主義という体制とその下で創り出された「伝統」の具体的な変容過程を論じていく[19]。

現在の南アフリカは、アパルトヘイト体制のような分りやすい「巨大な悪」がない中で、政治的対立は紛糾している。植民地的遺制（と考えられるもの）をすべからく取り除こうとする動きがある一方で、ANC の一党支配体制による腐敗を諸悪の原因と考える人々もいる。また、新自由

---

[17] John L. Comaroff and Jean Comaroff, “The Colonization of Consciousness in South Africa,” *Economy and Society* 18, no. 3 (August 1, 1989): 267–96, https://doi.org/10.1080/03085148900000013; Jean Comaroff and John L. Comaroff, *Christianity, Colonialism, and Consciousness in South Africa* (Chicago: University of Chicago Press, 1991); Jean Comaroff and John L. Comaroff, *The Dialectics of Modernity on a South African Frontier* (Chicago: University of Chicago Press, 1997).

[18] 永原陽子編『「植民地責任」論: 脱植民地化の比較史』 (青木書店, 2009).

[19] そのような試みの一例として、ズールー人の伝統的権威への恭順を示す Ukukhonza という行為の歴史的展開とその政治的意味をたどったジル・ケリーの研究をあげることができる。Jill E. Kelly, *To Swim with Crocodiles: Land, Violence, and Belonging in South Africa, 1800-1996* (East Lansing, Michigan: Michigan State University Press, 2018); Jill E. Kelly, “How a Chief Defied Apartheid and Upheld Democracy for the Good of His People,” The Conversation, August 20, 2019, http://theconversation.com/how-a-chief-defied-apartheid-and-upheld-democracy-for-the-good-of-his-people-121771.

主義のような世界的な潮流に現在の南アの問題の原因を帰する立場をとる人々もいる。アパルトヘイト体制成立以前の、20 世紀前半における人種隔離体制の変遷とアフリカ人との関わりを対象とする本研究に現在的な価値があるとすれば、それは人種隔離体制の終わりが見えず、対抗する方針も固まらない中での手探りの苦闘を辿ることで、ポスト・アパルトヘイトの政治状況を捉え直すことができることだろう。人種隔離とそれへの抵抗を二項対立的に描くのではなく、体制に翻弄されつつ生きる人々をその活動の機微を含みこむ形で描き、現在の価値基準から裁断するのではなく、人々が当時置かれていた状況を踏まえて丁寧に記述することによって、常に議論が二極化しやすい南アという対象を論じる上での歴史的な定点を提供することが、現在の南アフリカに照らした際の本研究の目的である。次に、本論文で対象とするナタールという具体的な地域においてズールー人の「伝統」の創造及び浸透の過程が、どのようにこの目的を達成するのに貢献するのか述べていこう。

1.2. 議論され、見直される対象としての「伝統」

本論文は、20 世紀前半の南アフリカ、特にナタール州（現クワズールー・ナタール州）における歴史をめぐる議論を検討することで、統治体制と結びついた「伝統」への歴史意識の変化が、アフリカ人エリートが人種隔離政策に対峙する際の政治姿勢の転換をもたらしたことを明らかにする。

ナタール州のアフリカ人統治政策は、1910 年の南アフリカ連邦成立以後、連邦全体での人種隔離政策のモデルとなり[20]、また植民地期アフリカを考察する場合でも、特に伝統的権威を利用した統治として、間接統治の先駆けとして論じられるなど、南アフリカのみならずアフリカ全体における植民地統治のあり方を考える上で重要な政策である[21]。ナタール州を間接統治のモデルと考えるハミルトンに代表される研究は、理論的にはレンジャーとホブズボームの描き出した「伝統の創造」論に基づき[22]、具体的な歴史的事象としては、19 世紀ナタール植民地におけるアフリカ人統治の基礎を造ったとされる人物セオフィラス・シェップストンの政策に注目し、シェップストンの政策が首長を中心とした伝統的権威を利用する統治としてアパルトヘイト体制を含めた後世の統治政策に影響を与えたと論じてきた。また『伝統の創造』論はシェップストンの統治の対象となったズールー人のナショナリズムを論じる上でも重要な理論的背景となってきた[23]。

---

[20] Marian Lacey, *Working for Boroko: The Origins of a Coercive Labour System in South Africa* (Johannesburg: Ravan Press, 1981).

[21] David John Welsh, *The Roots of Segregation; Native Policy in Colonial Natal, 1845-1910* (Cape Town, New York: Oxford University Press, 1971); Mahmood Mamdani, *Citizen and Subject: Contemporary Africa and the Legacy of Late Colonialism* (Princeton: Princeton University Press, 1996).

[22] E. J. Hobsbawm and T. O. Ranger, eds., *The Invention of Tradition*, Past and Present Publications (Cambridge: Cambridge University Press, 1983).

[23] Carolyn Hamilton, *Terrific Majesty: The Powers of Shaka Zulu and the Limits of Historical Invention* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1998).

本論文の第一の目的は、シェップストンの政策の影響に関しての批判的検討である。本論文はまず、19 世紀半ばのナタール植民地においてアフリカ人統治のあり方が規定され、それが 20 世紀においても継続されたとする先行研究に対して、シェップストンの政策が人種隔離政策の文脈で考察されるようになったのは、20 世紀に入ってからであったと指摘する。その上で、シェップストンの実像を提示するガイの伝記的研究を参照しつつ[24]、20 世紀初頭のアフリカ人首長の反乱を契機としてナタール植民地におけるアフリカ人統治政策の見直しが生じ、その中で産業化の進展により侵食されつつあるアフリカ人の伝統を保持するための理想的な政策としてシェップストンの政策が再提示されるに至ったと主張する。さらに本論文は、この過去の政策の捉え直しを含む議論が、間大西洋的な空間の広がりを持っていたことを明らかにする。すなわちアメリカ南部が南アフリカと同様に「黒人問題」を抱えつつも、産業化が進んだ未来像として捉えられ、その未来像から照射される形で南アフリカのあるべき統治政策が根拠付けられたのである。

次に本論文は、創られた伝統の伝播と検討の過程について論じる。20 世紀初頭からのアフリカ人統治政策の形成を論じることから分かるのは、統治のために創造された伝統は、一度創られた後継続して利用されるという一回性のものではなく、むしろ検討され組み替えられるプロセスの下にあるということである。伝統の創造に関する議論は、創造の主体として白人入植者・行政官、及び伝統的アフリカ人エリートを想定してきた[25]。しかし、ピーターソンが指摘するように、これまでの議論においては、創造に関わった人々を超えて創られた伝統の正当性がいかにして、認められていったのか（あるいは拒絶されたのか）が等閑視されている[26]。そこで、本論文は、「伝統」の浸透が図られた場としてアフリカ人教育に着目する。具体的には、1910 年代半ばからの、「よりアフリカ人の生活に適合した教育」を目指したアフリカ人教育改革を分析することで、創られた伝統が検討に付され、利用または反発されるプロセス、及びその議論の広がりの範囲を明らかにする。

ナタール州の教育改革はアフリカ人の「伝統的な生活」を保持するために、労働規範の重視と母語の教授を主張していた。そこで本論文は、まずアメリカ南部黒人教育（特にアラバマ州の黒人学校タスキーギ学院）をモデルとして職業訓練に重点を置いたカリキュラムの導入をめぐる議論を検討する。タスキーギ学院を中心とした職業訓練を重視するアメリカ南部黒人教育理念の受容に向けた活動が南アフリカにおいて、白人とアフリカ人のそれぞれが異なる意図を持ちながらも「人種間協調」というスローガンのもとに関わりあう場になっていたことを、アフリカ人教育に関わった人々の言説・活動を検討することで指摘する。ナタール州において教育改革を推し進めた教育学者・政治家であるロラム（Charles T. Loram）にとって、アフリカ人教育は、白人とア

---

[24] Guy, *Theophilus Shepstone and the Forging of Natal*.

[25] Hobsbawm and Ranger, *The Invention of Tradition*; Hamilton, *Terrific Majesty: The Powers of Shaka Zulu and the Limits of Historical Invention*.

[26] Derek R. Peterson, *Ethnic Patriotism and the East African Revival: A History of Dissent, c. 1935-1972* (Cambridge: Cambridge Univerisity Press, 2013), 3.

フリカ人の分離を保証するものであり、アフリカ人はヨーロッパ化せずに「部族」の伝統を守るべきものであった。しかし、白人統治者が人種隔離政策の遂行を目的として設計した教育改革をも、アフリカ人学生・教員は主体的に利用しようとする。人種隔離が進み、アフリカ人の権利が制限される中での権利獲得を目指す運動に携わったミッション・スクールで教育を受けたアフリカ人教員たちは、黒人のみで運営されるタスキーギ学院の運営方針がアフリカ人の経済的な自立性と機会の拡大という未来の目標へのモデルとなると考えたのである。

次に、教育改革においてもう一つの柱であったアフリカ人の母語、特にズールー語教育と語学教育を通したズールー文化の学習を対象に、教科書及びアフリカ人学生が書いた歴史エッセイを分析することで、人種隔離政策下におけるアフリカ人の民族意識の浸透の過程を明らかにする。ズールー語・歴史教育は、アフリカ人社会は首長が統治する各部族に分けられるという「部族主義」を学校教育という場において教え込む役割を担った。しかし、本論文は、アフリカ人知識人や学生たちにとって、アフリカ人の歴史に関して議論を行い、自民族の過去を描くことが、支配体制のイデオロギーに追従するだけではなく、対抗的なナショナリズムの基盤となっていた側面があることを明らかにする。

最後に本論文は、アフリカ人教育者・政治家であった Z.K. マシューズの政治思想の変遷をたどることで、人種協調の試みの放棄がいかに生じ、暴力的革命が肯定されるに至ったかを明らかにする。先述のロラムの庇護のもとで教育を受けたマシューズの「原住民法」の調査研究、及び人種隔離政策批判の分析から、本論文は、統治体制と結びついた伝統を批判的に見直すことが、より平等な社会として南アフリカの未来の理想像を描くことにつながったと主張する。

以上、全体を通して本研究は、ズールー・ナショナリズムの創出と浸透の過程を、アフリカ人統治政策の形成過程という州・連邦レベルのつながりというマクロな視点から、教育現場における「伝統」の教授というミクロなレベルまで様々な側面から描き出す。この「伝統」の形成・浸透過程の分析に基づいて、歴史意識の変化が 20 世紀前半南アフリカにおける人種間協調の盛衰と暴力の是認という政治姿勢の転換を促進したと主張する。

それでは、このような本論文の全体としての主張は、先に述べた植民地主義自体の可塑性と歴史的展開に注意を払うべきだという本論文の問題設定にどのように貢献するのだろうか。東アフリカにおけるイギリス植民地支配を事例として、歴史学者のスピアは「伝統」を用いた統治における制限性を重視し、アフリカ人は植民地化以前・以後を通じて常に「伝統」について議論し、政治的に利用してきたと論じた[27]。この見解を踏まえるならば、アパルトヘイト後にマンデラやディズモンド・トゥトゥが和解の精神としてアフリカ人の人道主義の表れとしてのウブントゥを説くことや、伝統的権威が土地の「返還」を要求することは、過去から続く「伝統」をめぐる政治の現代版として捉えることができるだろう。そして現代まで続く「伝統」の政治を検討するた

[27] Thomas Spear, “Neo-Traditionalism and the Limits of Invention in British Colonial Africa,” *The Journal of African History* 44, no. 1 (2003): 3–27.

めには、植民地主義のもとで創造された「伝統」を、一枚岩的なものとしてその本質を仮定するのではなく、流動的かつ交渉の余地のある議論の場として「伝統」を捉え直す必要があるだろう。本論文は、「伝統」がいかに人種隔離政策の実施とその政策に基づいた体制への抵抗において用いられたのかを検討することで、南アフリカにおける過去の利用のメカニズムの一端を明らかにする。

しかし、「伝統」を用いた統治はもちろんのこと、交渉の場としての「伝統」という考え方も過去の研究において既に提示されてきた概念である。序章の以下の部分では、先行研究を紹介し、そこで提示された議論を本論文がいかに乗り越えようとしたのか、またその際の研究視角を説明する。

第２節 先行研究と本論文の視角

本論文は、ズールー民族ナショナリズムと人種隔離政策の結びつきを、南アフリカとアメリカ合衆国との関係、特に教育分野を中心に検討する。以下では、先行研究群とその中での本論文の位置付けを大きく、1. ズールー・ナショナリズムと人種隔離政策に関する研究、2. 南アフリカとアメリカ合衆国との関係、特に黒人教育を通した繋がりに関する研究に分けて論じる。

2.1 ズールー・ナショナリズムと人種隔離政策に関する研究

本論文は、創られた伝統としての伝統的権威とズールー・ナショナリズムの形成過程、及びその学校教育を通じた浸透を主な対象とする。これまでズールー・エスニシティ/ナショナリズムに関しては多くの研究がなされてきた。大別すれば、その研究群は①間接統治の形成とそこでのズールー王家を中心とした「伝統」の役割[28]、②1970 年代以降のインカタ自由党、特にガッチャ・ブテレジの影響力の分析[29]に分けることができる。以下では、前者の研究群を中心にまとめつつ、本論文のズールー・エスニシティ/ナショナリズム研究における意義を説明する。

2.1.1. 間接統治の形成と「伝統」の役割

先述のように、ウェルシュはイギリス帝国史の観点から、原住民長官シェップストンによって考案された首長の任命と「原住民法」の制定を中心とするナタール植民地のアフリカ人統治は、

---

[28] Welsh, *The Roots of Segregation; Native Policy in Colonial Natal, 1845-1910*; Hamilton, *Terrific Majesty: The Powers of Shaka Zulu and the Limits of Historical Invention*; McClendon Thomas V., *White chief, black lords : Shepstone and the colonial state in Natal, South Africa, 1845-1878* (University of Rochester Press, 2010); Guy, *Theophilus Shepstone and the Forging of Natal*.

[29] Hamilton, *Terrific Majesty: The Powers of Shaka Zulu and the Limits of Historical Invention*; Thembisa Waetjen, *Workers & Warriors: Masculinity and the Struggle for Nation in South Africa* (Cape Town: HSRC Press : Distributed in South Africa by Blue Weaver, 2006); Marks, *The Ambiguities of Dependence in South Africa*; Gerhard Maré and Georgina Hamilton, *An Appetite for Power: Buthelezi's Inkatha and South Africa* (Johannesburg: Ravan Press, 1987).

間接統治のモデルとして、アフリカ史全体における意義を持つと指摘した[30]。その後の研究は、統治体制の形成過程において、シェップストンの政策だけでなくアフリカ人首長を中心とした伝統的権威の協力が重要な役割を果たしてきたことを明らかにした[31]。ナタール植民地のアフリカ人統治に関する研究としては、その形成とともに崩壊過程にも注目が集まった。特に、1906 年の反植民地闘争の顕著な例である「バンバタの反乱」が、シェップストン・システムの機能不全の証明として多くの研究の対象となってきた。この反乱の原因に関しては、様々な理由が挙げられ、論争のテーマとなってきた。具体的には、白人入植者社会の拡大と過酷な税制を重視する立場[32]や、この反乱を鉱山で働く若い世代と家長との間の世代間闘争として提示する研究[33]、そして「ズールー人」意識の拡大が反乱におけるアフリカ人の連帯をもたらしたとする主張を上げることができる[34] 。このようにバンバタの反乱に関しては多くの研究がなされているものの、その後の統治改革についてはそれぞれの研究においてエピローグ的に触れられるに過ぎず、研究の主題として取り上げられてはこなかった。しかし、同時代的な文脈を重視するならば、バンバタの反乱後には統治体制の見直しが進み、政治家や行政官によって多くの論考が書かれたのである[35]。そして、南アおける連邦レベルでの領域的人種隔離を理論的に提唱した最初期の論者はナタール植民地出身者が多いというデュボウの主張を踏まえるならば、同時代の論考は反乱の余波としてだけではなく、過去を見直すことによる将来的な隔離政策への示唆という観点からも考察されなければならない[36]。

---

[30] Welsh, *The Roots of Segregation; Native Policy in Colonial Natal, 1845-1910*; Mamdani, *Citizen and Subject*.

[31] Hamilton, *Terrific Majesty: The Powers of Shaka Zulu and the Limits of Historical Invention*; McClendon, *White chief, black lords*; Guy, *Theophilus Shepstone and the Forging of Natal*.

[32] Shula Marks, *Reluctant Rebellion: Disturbances in Natal, 1906-08.* (Oxford: Clarendon Press, 1970); John Lambert, *Betrayed Trust: Africans and the State in Colonial Natal.* (Scottsville: University of Natal Press, 1995).

[33] Benedict Carton, *Blood from Your Children: The Colonial Origins of Generational Conflict in South Africa* (Charlottesville: University Press of Virginia, 2000).

[34] Michael R. Mahoney, *The Other Zulus: The Spread of Zulu Ethnicity in Colonial South Africa* (Durham, NC: Duke University Press, 2012).

[35] Maurice S. Evans, *Black and White in South East Africa : A Study in Sociology*, 1916; James Stuart, *A History of the Zulu Rebellion* (London: Macmillan, 1913); Edgar Harry Brookes, *The History of Native Policy in South Africa from 1830 to the Present Day*, 2nd rev ed (Pretoria: Van Schaik, 1927).これらの論者に関して、研究がなされていないわけではない。しかし、それらは統治政策の見直しという観点からのものではない。例えば、ナタール植民地議会議員であったエヴァンズに関しては、アメリカ南部の観察者として検討がなされている。C. V. ウッドワード『アメリカ人種差別の歴史』清水博他訳 (福村出版, 1998); George M. Fredrickson, *White Supremacy: A Comparative Study of American and South African History* (Oxford University Press, USA, 1981).また行政官であったジェームズ・スチュワートに関しては、彼の行ったアフリカ人へのインタビューが過去を正確に反映しているのかについて多くの議論がなされてきた(Hamilton 1998, 2011; Wright 1996)。

[36] Saul Dubow, *Racial Segregation and the Origins of Apartheid in South Africa, 1919-36* (Houndmills: Macmillan, 1989).

2.1.2. ズールー・エスニシティ/ナショナリズム[37]の再編成

1910 年の南アフリカ連邦成立後から 1920 年代までを対象とした研究は、主に支配と抵抗におけるズールー人の「伝統」の役割を分析してきた。支配と抵抗は、大別するならば上からのズールー・エスニシティの利用と下からの利用と言い換えることができるだろう。上から、すなわち統治における白人行政官と企業家のズールー・エスニシティの援用と、ズールー王家を中心とした伝統的権威の協力を対象とする研究は、シャカの子孫であるソロモン（Solomon kaDinuzulu）を中心としてエスニシティの再編成が行われたと主張する[38]。しかし、ソロモンをズールー人の統合の象徴として利用すべきだという点では一致をみたものの、それぞれの動機は異なっていた。一方で白人行政官や、本論文の第 4 章の対象である収集家キリー・キャンベルの兄で、砂糖産業の大立者ウィリアム・キャンベルを中心とした企業家たちは、第一次大戦へのズールー人の動員や、労働力調達におけるズールー王家の協力を主眼として、ソロモンを最高首長（supreme chief）として認定することを考慮していた[39]。他方、アフリカ人側は伝統的権威とクリスチャンのエリートで異なるものの、統治における「伝統」の重視を利用して、自身の地位を向上させるという思惑は共通して持っていた。ソロモンを中心としたズールー王家は、1879 年のイギリス軍の侵略後、内戦状態に陥ったズールーランドを自身の権威によって統合することを目論んだのに対して[40]、ミッション・スクール出身者であるクリスチャン・エリートたちは、1913 年の土地法を中心としてアフリカ人が所有できる土地が制限される中で、首長権限による土地の配分を求めてズールー王家及び白人行政官に近づいたのである[41]。

このように統治の観点から、20 年代に白人行政官、クリスチャン・エリート、伝統的権威の連合が生じたのであるが、それは同時期の下からのズールー・エスニシティの再編成を伴っていた。その具体的な例として、都市部で開始された組合運動、産業商業組合（Industrial and Commercial Union）のナタール農村部への拡大を検討したブラッドフォードは、組合の勧誘活動において、ズ

---

[37] ズールー・エスニシティ/ナショナリズムとは奇妙な表記だと思われるかもしれない。しかし、ゲルナーの有名な定式化を踏まえるならば(ゲルナー 2000, 1)、この表記は誰がズールー人であるのか（シャカを中心としたズールー王家に連なる人々という狭義とズールー語を話す人々という広義の対立）、帰属すべき政治単位はどうあるべきか（ズールーランド、ナタール植民地/州、南アフリカ連邦）の 2 点をめぐって、「ズールー人であること」が問われたという、本研究が扱う 20 世紀前半の政治状況を反映するものである。

[38] Marks, *The Ambiguities of Dependence in South Africa*; Nicholas Cope, *To Bind the Nation: Solomon KaDinuzulu and Zulu Nationalism.* (Pietermaritzburg: University of Natal Press, 1993).

[39] Cope, *To Bind the Nation*.

[40] Jeff Guy, *The Destruction of the Zulu Kingdom: The Civil War in Zululand, 1879-1884.* (Pietermaritzburg: University of Natal Press, 1979); Cope, *To Bind the Nation*.

[41] Marks, *The Ambiguities of Dependence in South Africa*; Nicholas Cope, "The Zulu Petit Bourgeoisie and Zulu Nationalism in the 1920s: Origins of Inkatha," *Journal of Southern African Studies* 16, no. 3 (September 1990): 431–51, https://doi.org/10.1080/03057079008708245.

ールー王家が白人に奪われた土地を取り戻してくれるという言説が使われていたことを重視する[42]。また 19 世紀末からのヨーロッパやアメリカからの宣教師の管理から離れて独立教会を立ち上げる動きにおいても、キリスト教とズールーの伝統を接合させるという特徴が見られた[43]。またこのような伝統を用いた体制批判の顕著な例として、アフリカ系アメリカ人の「飛来」が白人を追い出し、植民地支配からの解放をもたらすという言説の流布を上げることができるだろう[44]。

このような上下両方向からのズールー・エスニシティの再編成を媒介する存在として、ラ・オッセは中間的知識人の存在を挙げる。ラ・オッセは、ペトラス・ラムラとライモン・マリングという二人のミッション・スクール出身者の伝記を辿りながら、ミッション・スクールで学びながらも信徒との日々の関わりの中でアフリカ人民衆の苦境に触れたことが、彼ら二人が保守派に対峙しながらズールー人の歴史を人種隔離政策への批判と絡めて描くという行為につながったと指摘する[45]。本論文は、ラ・オッセの指摘に示唆を受けながらも、彼が考察の対象としなかった、ズールー・ナショナリズム浸透の制度的基盤を考察する。すなわち、アメリカの財団の協力によって成立した白人とアフリカ人が議論をするサークルのような共同の場と、教育現場である。本論文は、これらの場に着目することで、一方では「創られた伝統」としてのズールー・ナショナリズムの浸透の過程を明らかにし、他方で、その浸透の過程で白人行政官によって作られた像が特にアフリカ人文学者たちに反発を受けるという事態を分析する。

さらに本論文は、これまでの研究では等閑視されてきた時代である 1930 年代・40 年代にズールー・エスニシティの大衆への浸透が進行したと主張する。ズールー・エスニシティ/ナショナリズムに関する研究においては、この時代を対象とするものはほとんどない。この状況は、先にまとめた研究の方向性を考えれば納得のいくものである。1930 年代初頭までに、ソロモンの死によってズールー人の統合の象徴は失われ、また政府の統制によって ICU の活動が衰退し、ズールー人エリート内の対立が沈静化したことから、30 年代以降においては、ズールー・エスニシティ/ナショナリズムを主眼とする研究はほとんど見られない[46]。このような研究状況に対して、本論

---

[42] Helen Bradford, *A Taste of Freedom: The ICU in Rural South Africa, 1924-1930.* (New Haven: Yale University Press, 1987).

[43] Joel Cabrita, *Text and Authority in the South African Nazaretha Church* (Cambridge: Cambridge University Press, 2014).

[44] Ewing Adam, *The Age of Garvey: how a Jamaican activist created a mass movement and changed global Black politics* (Princeton University Press, 2014).

[45] Paul La Hausse de Lalouviere, *Restless Identities: Signatures of Nationalism, Zulu Ethnicity and History in the Lives of Petros Lamula(c. 1881-1948) and Lyomn Maling(1889-c.1936)* (Pietermaritzburg: University of Natal Press, 2000).

[46] ズールー・アイデンティティに関して、53 の論文を集めた大分な論文集 Zulu Identities でも 30、40 年代に焦点を当てたものはない。Benedict Carton, John Laband, and Jabulani Sithole, eds., *Zulu Identities: Being Zulu, Past and Present* (Scottsville, South Africa: University of KwaZulu-Natal Press, 2008). 例外的に、教員団体であるズールー・ソサエティを対象としたマークスの論文、及びダーバンにおけるアフリカ人の余暇を扱ったヴァヘッドの論文が挙げられる。Shula Marks, “Patriotism, Patriarchy and Purity: Natal and the Politics of Zulu Ethnic Consciousness,” in *The Creation of Tribalism in Southern Africa*,

文は、1930 年代及び 40 年代の行政官や文学者のサークルや教育現場に注目することで創られた過去像の浸透と、その像への反発と逆用という事態が進行していたのだと主張する。すなわち、一見静態的に見える 30〜40 年代においてこそ、過去像の問い直しが行われていたのだ。

上記のように、ズールー・エスニシティ/ナショナリズムに関する研究は管見の限り見つけることができないものの、文学誌・教育史においてはある程度の研究蓄積が見られる。そこで以下ではそれぞれの分野をまとめつつ本論文の視点を提示したい。

2.1.3. 文学史的研究

歴史研究が 1930 年代以降を等閑視しているのに対して、文学研究においてはこの年代のズールー文学に関する多くの研究書・論文を見つけることができる。それは端的にこの年代におけるズールー語書籍やズールー人作家による英語の著書の出版が多く見られるようになったという歴史的状況を反映している。1930 年にデュベが、ズールー語で書かれた初の小説 *U-Jeqe, Insila kaTshaka*(*Jeqe, Body Servant of Shaka* として翻訳されている)を発表した。この本を口火として、その後「新しいアフリカ人(New African)」と呼ばれる文学者が歴史を題材として小説・劇・詩を英語及びズールー語で発表するようになる。特にジョモ(H.I.E. Dhlomo)とヴィラカジ(B.W. Vilakazi)に関しては、詩・劇作においてズールー人の過去に題材をとったこと、また執筆言語をめぐる論争を繰り広げたこともあり、多くの論者が彼らの作品をズールー人のアイデンティティと結びつけて論じてきた[47]。例えばアットウェルに代表される文学史的研究の多くは、ポストコロニアリズム批評の観点から、この時期の文学作品を思想面における植民地近代の発露であったと提示する[48]。また、本論文との関心と関わる範囲においては、執筆時の隔離政策への批判するための過去の利用であると考えるジョモを中心とした歴史小説論もある[49]。

しかし、歴史研究の観点から見た場合、この時期の文学作品を中心にその歴史観を分析した文学研究には特有の弱さも存在する。それは、「テキスト」を重視する文学研究における、テキストの媒体・利用の仕方を軽視する傾向である。アフリカ人作家の著作、またズールー語で執筆された書物の影響力を検討する際には、その形成・流通が重要である。ズールー語で論考や著書が書かれる時、執筆の動機は特定の要請に基づいていることが多く、また読者は顔の見える存在で

---

ed. Leroy Vail (Berkeley: University of California Press, 1989); Goolam Vahed, "Control of African Leisure Time in Durban in the 1930s," *Journal of Natal and Zulu History* 18, no. 1 (December 10, 1998), http://www.kznhass-history.net/ojs/index.php/jnzh/article/view/257.

47 Tim Couzens, *The New African: A Study of the Life and Work of H.I.E. Dhlomo* (Johannesburg: Ravan Press, 1985); Bhekizizwe Peterson, *Monarchs, Missionaries & African Intellectuals* (Trenton, NJ: Africa World Press, Inc., 2000); David Attwell, *Rewriting Modernity: Studies in Black South African Literary History* (Athens: Ohio University Press, 2005); Bhekizizwe Peterson, "Black Writers and the Historical Novel: 1907-1948," in *The Cambridge History of South African Literature*, ed. David Attwell and Derek Attridge, African Edition (Cambridge: Cambridge University Press, 2012), 291–307.

48 Attwell, *Rewriting Modernity*.

49 Couzens, *The New African*; Peterson, *Monarchs, Missionaries & African Intellectuals*.

あったからだ。例えば、上記の文学者たちが論考を発表した媒体は、ナタール教育省が発行する *Native Teachers Journal* であることが多く、また、単著として発表されたものも、ズールー語で書かれたものは、教科書として指定されることを前提に出版されたいたという事例を挙げることができるだろう[50]。

それゆえに、内容面の分析のみに基づいて、ズールー人の歴史を素材とした文学作品は、ピーターソンが主張する「植民地主義への文化的形態の抵抗であった」という結論に即座に飛びつくのは性急であろう[51]。アフリカ人教育での「歴史」の利用に関する白人行政官とアフリカ人エリートとの間の当時の議論を踏まえて、どのような読み方が為されていたのかを明らかにしていく必要性があるのだ。そして、また検討する作品としても、ズールー人文学者の作品だけではなく、例えばジェームズ・スチュワートによるズールー語読本など白人行政官のものも含めることで、歴史をめぐる議論を、ロンズーデールが述べるようなエスニシティをその共同体のあるべき姿を議論する場として有効に検討することができるだろう[52] 。

2.1.4. 教育史的研究

バンツー教育法（1953 年）が施行された 50 年代、ソウェト蜂起（1976 年）のあった 70 年代に比べると少ないが、1930 年代、40 年代は教育史の分野においても研究蓄積が見られる。ただし、ナタール州に限定した研究よりは、連邦全体のレベルで論じたものが多い。以下ではこの分野の研究を、教育と人種隔離政策との関わりという点からまとめたい。

南アフリカにおけるアフリカ人教育史においては、ミッション教育から政府主導の教育への移行の契機として 1953 年のバンツー教育法の施行が注目を集めてきた。この法律は教育カリキュラムのアフリカ化を説き、また「民族集団」に基づいた施設の分離を志向する点で、アパルトヘイト政策の教育面での完遂を目指したものとして考えられてきた。政府による教育政策への介入に関しては、アフリカ人の都市化への対応として、30 年代からの都市部における政府設立の学校の増加や[53]、40 年代の学生の学校を管理運営するヨーロッパから派遣された宣教師への反乱が、ミッション教育への政府の介入を正当化したと論じられてきた[54]。またイデオロギーの次元では、教育学者・行政官が人類学・社会学など「科学的」な議論を展開することで、教育政策の主導権

---

[50] 発表媒体への注目は、読み方を規定する状況を明らかにすることにもつながり、その点で史料の利用の仕方をめぐる議論ともつながる。この点については本論文の視角で説明する。

[51] Peterson, *Monarchs, Missionaries & African Intellectuals*, 3.

[52] John Lonsdale, “Moral Ethnicity & Political Tribalism,” in *Inventions & Boundaries: Historical & Anthropological Approaches to Ethnicity & Nationalism*, 1994, 131–50.

[53] R. Hunt Davis, “Administration of African Education in South Africa,” in *Apartheid and Education: The Education of Black South Africans*, ed. Peter Kallaway (Cape Town: Ravan Press, 1984).

[54] Jonathan Hyslop, *The Classroom Struggle: Policy and Resistance in South Africa 1940-1990.* (Pietermaritzburg: University of Natal Press, 1999).

を宣教師から奪っていく過程が明らかにされてきた[55]。

しかし、近年では制度的・思想的な面を重視する上記の動向に対しての批判もなされている。例えば、1953 年のバンツー教育法を分岐点と見る上記の研究に対して、ドイツの宣教師団体ヘルマンスバーガー（Hermannsburgers）に注目したチザムは、教育法施行以前からアフリカ言語による教授を重視していたこと、施行後も宣教師が影響力を保持していたことを理由に 1953 年法のみを見るのではなく、教育現場・地域社会に焦点を当てた研究の必要性を主張している[56]。しかし、先行研究においては、個人の回想録[57]や、特定の学校[58]または教員団体[59]を対象とした研究がほとんどであり、学生・教員・地域コミュニティ・宣教団体・政府などの相互関係の中での教育史を下から描き出す、というチザムの野心的な提案が実現されるまでには多くの時間がかかりそうである。本論文は、ズールー語・歴史教育に関わる行政官・教員・学生の相互作用の中で、「アフリカ人の生活に適合した教育」というスローガンが実態化され、影響力を与えるその過程を下から捉え直すという点で、チザムの提案する総体としての教育史の見直し向けた第一歩を目指す。

2.1.5.　小括

以上、先行研究を、エスニシティ/ナショナリズム、文学史、教育史という三つの分野に分けて論じてきた。大雑把にまとめると、20 世紀前半における歴史の利用に関しては、二つの見方が存在する。一方は文学史を中心として、歴史を論じることを植民地主義への反発と抵抗と関連付ける立場であり、(B. Peterson 2012)、他方は歴史実践を人種隔離体制への協力と、体制の浸透の過程と見る立場である(Marks 1989)。本論文は、まず上記の二つの観点から対象とされた人物たちが、媒体・人脈の点で繋がっていることを指摘した上で、ズールー史の実践を、人種隔離体制に対してズールー・エスニシティ/ナショナリズムがどのような立場にあるべきかが論じられた場として分析する。以上を踏まえて本論文は、①ズールー語・歴史教育の役割は何だったのか、②どのようなズールー・エスニシティ（ナショナリズム）像が提示されていたのか、③誰の、ど

---

55 Sue Krige, “Segregation, Science and Commissions of Enquiry: The Contestation over Native Education Policy in South Africa, 1930–36,” *Journal of Southern African Studies* 23, no. 3 (September 1997): 491–506, https://doi.org/10.1080/03057079708708552; Cynthia Kros, *The Seeds of Separate Development: Origins of Bantu Education*, 1st ed (Pretoria: Unisa Press, 2010).

56 Linda Chisholm, *Between Worlds: German Missionaries and the Transition from Mission to Bantu Education in South Africa* (Johannesburg: Wits University Press, 2017).

57 Bernard Magubane and Mbulelo Mzamane, *Bernard Magubane: My Life & Times* (Scottsville, South Africa: University of KwaZulu-Natal Press, 2010); Noni Jabavu, *The Ochre People* (Johannesburg: Ravan Press, 1982); Z. K. Matthews and Monica Wilson, *Freedom for My People: The Autobiography of Z.K. Matthews: South Africa, 1901-1968* (Cape Town: David Philip, 1981).

58 Meghan Healy-Clancy, *A World of Their Own: A History of South African Women's Education* (Scottsville: University of Kwazulu-Natal Press, 2013).

59 Mohamed Adhikari, *“Let Us Live for Our Children”: The Teachers' League of South Africa, 1913-1940* (Cape Town: Bachu, 1993); Marks, “Patriotism, Patriarchy and Purity: Natal and the Politics of Zulu Ethnic Consciousness.”

のような歴史観が、影響力があったのかという三点を考察する。

2.2. 南アフリカとアメリカ合衆国との関係、特に黒人教育を通した繋がりに関する研究

ズールー人の歴史に関する議論を、人種隔離政策の深化とそれへの反発との関連で検討するということが本論文の第一の柱とすれば、歴史に関する議論がアメリカ合衆国との深い結びつきの下で展開されてきたことを明らかにすることが第二の柱である。アメリカ合衆国、特に南部とのつながりは、歴史に関する議論が展開される、その場の制度的な基盤になっていただけでなく、議論の際の枠組みを提供していたのだ。

以下では、①南アフリカとアメリカ合衆国の双方を視野に入れた研究がいかになされてきたかをその方法論的視点という点からまとめ、次に②黒人教育を通した両地域の繋がりに関する研究を整理した上で、本研究の位置付けを明らかにする。

2.2.1. 比較史から相互連関の歴史へ[60]

南アフリカとアメリカ合衆国の双方を視野に入れた研究は、1970 年代より比較史の観点からなされてきた。代表的な研究として、フレデリクソンの二つの著作を挙げることができる[61]。比較史の主要な観点は、南アフリカとアメリカという二つの社会を比較することで、それぞれの特徴を明らかにすることであった。それゆえに、その研究の多くが、両国の人種関係に関する政策や白人優越思想を独立変数として扱ってきた。しかしクーパーが指摘するように、実際には両国の歴史は思想的・人的な交流において密接に結びついているゆえに、2 つの個別的な事例として扱うことはできない[62]。さらに、トランスナショナル・ヒストリーの興隆とも相まって、1990 年代後半以降は両国の歴史を比較史としてではなく、相互連関の歴史として扱う研究が増加した。対象となる分野も人種隔離体制から広がり、文学[63]、宗教[64]、福祉政策[65]、反アパルトヘイト運動[66]など

---

60 アフリカを対象とした比較史と、アフリカ史、特に南ア史の世界史における位置付けに関する論考として、永原陽子「アフリカ史・世界史・比較史」平野克己編『アフリカ比較研究 : 諸学の挑戦』(日本貿易振興会アジア経済研究所, 2001).を参照

61 Fredrickson, *White Supremacy*; George M. Fredrickson, *Black Liberation: A Comparative History of Black Ideologies in the United States and South Africa.* (Oxford: Oxford University Press, 1996).

62 Frederick Cooper, “Race, Ideology, and the Perils of Comparative History,” ed. George M. Fredrickson and James T. Campbell, *The American Historical Review* 101, no. 4 (1996): 1122–38, https://doi.org/10.2307/2169637.

63 Stéphane Pierre Raymond Robolin, *Grounds of Engagement: Apartheid-Era African American and South African Writing* (Urbana: University of Illinois Press, 2015).

64 James T. Campbell, *Songs of Zion: The African Methodist Episcopal Church in the United States and South Africa* (New York: Oxford University Press, 1995).

65 Tiffany Willoughby-Herard, *Waste of a White Skin: The Carnegie Corporation and the Racial Logic of White Vulnerability* (Oakland, California: University of California Press, 2015); Saul Dubow, *Scientific Racism in Modern South Africa* (Cambridge: Cambridge University Press, 1995).

66 Francis Njubi Nesbitt, *Race for Sanctions: African Americans against Apartheid, 1946-1994* (Bloomington:

多岐にわたっている。しかし、両国におけるアフリカン・メソディスト教会の結び付きを扱ったキャンベルの研究[67]や、カーネギー財団のプアホワイト調査における南アフリカ白人知識人の役割を分析したデュボウ[68]などの研究を除き、その多くはアメリカを出自とする思想・制度の影響力の拡大を関心の中心としており、移転・受容の過程で南アフリカの白人・黒人が果たした役割に注意が払われることは少ない[69]。

アメリカ合衆国から南アフリカへの黒人教育思想の移転という本論文の対象は、ともすればアメリカ的制度の伝播のみを扱うように考えられるかもしれない。しかし本論文は、アメリカ南部で形成された教育思想に影響を受けた教育改革が、南アフリカという文脈においていかに変容したかを扱うことによって、思想の伝播という、ともすれば一方向的になりがちなテーマにおける南アフリカ側の主体性を強調する。本論文は南アフリカ黒人・白人両者の教育制度改革における主体性に注目することで先行研究群に対して、以下の三つの貢献をする。

2.2.2. 南アとアメリカ合衆国間の黒人教育思想移転の歴史における本論文の位置付け

まず本論文は、南アフリカにおけるアメリカ南部黒人教育の受容を目指す運動が、白人政治家・官僚と黒人知識人とが緊張感を持ちながらも、協働する場であったと主張する。アメリカ合衆国から植民地アフリカへの黒人教育の移転を対象とする研究は、植民地期アフリカへのアメリカ南部黒人教育の影響を、支配者側である白人に関しては植民地統治に関する技法の移転の一環として、また被支配者であるアフリカ人に関してはパン＝アフリカニズムの一例として個別に論じてきた[70]。植民地統治における教育改革という視点においては、この研究分野に先鞭をつけたキングの研究が、イギリス領東アフリカ（特にケニヤ）及び西アフリカ（ゴールドコースト、特に現ガーナ）を対象として、植民地行政官のタスキーギ学院への注目が、白人と同じ権利を求めるアフリカ人エリートの養成ではなく、労働力の創出を重視し、植民地下の人種的階層に不満を表明しないエリートを作り出すことを目的としていたと指摘する[71]。またイギリス領以外では、ジマ

Indiana University Press, 2004).

67 James T. Campbell, *Songs of Zion: The African Methodist Episcopal Church in the United States and South Africa* (New York: Oxford University Press, 1995).

68 Saul Dubow, *Scientific Racism in Modern South Africa* (Cambridge: Cambridge University Press, 1995).

69 この傾向は、アフリカ系アメリカ人と植民地及び独立期のアフリカ各国との結びつきを扱った諸研究にも見られる。Kevin Kelly Gaines, *American Africans in Ghana: Black Expatriates and the Civil Rights Era* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2006); Mary L. Dudziak, *Exporting American Dreams: Thurgood Marshall's African Journey*, With a New afterword by the author edition (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 2011); Penny M. Von Eschen, *Race against Empire: Black Americans and Anticolonialism, 1937–1957* (Ithaca, NY: Cornell University Press, 1997).

70例外的にキャンベルの論考は南ア白人・黒人双方の南部黒人教育の受容を扱っているが、両者の差異を指摘するに留まり、理解の相違の意味するところを提示してはいない。James T. Campbell, "Models and Metaphors: Industrial Education in the United States and South Africa," in *Comparative Perspective on South Africa*, ed. Ran Greenstein (London: Macmillan Press, 1998), 90–134.

71 Kenneth King, *Pan-Africanism and Education: A Study Of Race Philanthropy And Education In The Southern States Of America And East Africa.* (Oxford: Clarendon Press, 1971).

ーマンがドイツ領トーゴに注目し、同植民地での綿花栽培を目的としてタスキーギ学院から技術指導員を招くという経済的な側面に注目した繋がりを明らかにしている[72]。南ア史の文脈においては、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジで学んだ南アフリカ・ナタール州の教育視学官チャールズ・ロラムの役割を強調し、彼の教育改革をアフリカ人教育が人種隔離政策に組み込まれていくプロセスの端緒であった指摘されている[73]。白人側の統治技法の移転という側面に注目した研究に対して、アフリカ人側に焦点を合わせた研究は、タスキーギ学院及び同校校長であったブッカー・T・ワシントンへの関心の高さを、文明の階梯においてアフリカ人が上昇していくことを目指す「人種の引き上げ(racial upliftment)」論の文脈でなされたことを強調する[74]。それは、タスキーギ学院が各アフリカ植民地からのアフリカ人エリートの訪問先になっていたことでも明らかであるが[75]、南アにおいては、特に自身アメリカで学び、ブッカー・T・ワシントンを尊敬していたANC初代議長のジョン・デュベに研究が集中している。そして、デュベのオシャングゲ学院創設と運営方針が、人種隔離体制の強化という状況下でのアフリカ人の政治的権利と経済的な権益を確保するための戦略であったことが指摘されている[76]。このように白人側・黒人側に分かれてきた先行研究に対して本論文は、白人側・黒人側双方の受容を視野に入れて白人行政官と黒人エリートの両者にタスキーギ学院への関心が共有されていたのはなぜかという問いを検討することを通して、南アにおけるアメリカ南部黒人教育の受容に向けた活動が、アフリカ人教育に関わる異なる人種の人々が関わり合う場となっていたことを示す。タスキーギ学院というモデルは、南アにおいて白人教育者に公的な善意の装飾を損なうことなく植民地権力を補強しようとする際に利用できるものであったと同時に、植民地の従属的な立場に置かれた人々の自身の権限を少しでも拡大しようという目的と共鳴し、実際に行動する際に依拠することができるものであったのだ。

次に本論文は、教育制度改革の実施の側面に注目することで、カリキュラムの変更を中心とした教育制度の変更が、人種隔離に批判的な黒人ナショナリズムの生成につながるという意図せざる結果を招いたと主張する。先行研究は、特にナタールの教育主任教育視学官であったチャール

---

72 Andrew Zimmerman, *Alabama in Africa: Booker T. Washington, the German Empire, and the Globalization of the New South*, America in the World (Princeton, N.J. ; Woodstock: Princeton University Press, 2012).

73 R. Hunt Davis, "Charles T. Loram and an American Model for African Education in South Africa," *African Studies Review* 19, no. 2 (September 1976): 87, https://doi.org/10.2307/523566; Joseph Daniel Reilly, *Teaching the "Native": Behind the Architecture of an Unequal Educational System* (Cape Town: HSRC Press, 2016).

74 「人種の引き上げ」論に関しては、ゲインズの論考を参照 Kevin Gaines, *Uplifting the Race : Black Leadership, Politics, and Culture in the Twentieth Century* (Chapel Hill, N.C: University of North Carolina Press, 1996).

75 Campbell, "Models and Metaphors: Industrial Education in the United States and South Africa"; Michael O. West, "The Tuskegee Model of Development in Africa: Another Dimension of the African/African-American Connection," *Diplomatic History* 16, no. 3 (1992): 371–87.

76 W. Manning Marable, "Booker T. Washington and African Nationalism," *Phylon (1960-)* 35, no. 4 (1974): 398–406, https://doi.org/10.2307/274742; Heather Hughes, *First President: A Life of John Dube, Founding President of the ANC* (Auckland Park, South Africa: Jacana Media, 2011).

ズ・T・ロラムの役割に注目し、彼の単純労働とアフリカ言語の教授を重視するカリキュラムの変更を、アパルトヘイト体制成立後に施行されたバンツー教育法の先駆けとみなしてきた[77]。しかし、ロラム自身は1920年に連邦政府の原住民政策委員会（Native Affairs Commission）の委員に就任するためにナタール教育省の職を辞しており、教育監督業務の実際は後任のダニエル・マルコム（Daniel Mck.Malcolm）が引き継いでいる。本論文はマルコムのもとでなされた、ズールー語・歴史教育の実施過程に注目することで、どのような教授がなされていたのかを明らかにする。またアフリカ人（特にズールー人）学生が実際に執筆した作文を史料として用いることで、学生が「部族」と「伝統」を強調する教育内容に対してどのような反応を示したのかを描き出す。以上の教育の実施過程に注目することで、本論文は、マルコムを中心とした教育官僚が、ズールー語・歴史教育を「再部族化」のための有用な道具とみなす一方で、この科目が、教科書執筆者としての作家・教員・学生に対して、人種隔離制度に批判的な歴史意識を涵養する機会を与えていたと主張する。

最後に本論文は、最初に述べた協調関係がいかに崩壊し、黒人知識人が平等の権利を得るためには暴力も辞さないという急進主義を受け入れるようになる過程をアフリカ人教員・政治家であったマシューズ（Z. K. Matthews）の政治思想の変遷から明らかにする。20世紀前半を対象とする南アフリカにおけるアフリカ人教育史の研究において、バンツー教育法をその最終的な帰結とする分離かつ不平等な体制の形成過程に注目が集まり、黒人教員の活動は等閑視される傾向があった。アメリカの宣教団によって設立された学校で教鞭をとった後、イェール大学に留学し先述のロラムの下で「原住民法」についての学位論文を執筆するなど、マシューズの経歴にはアメリカの影響が色濃く反映されている[78]。ロラムや、バンツー教育法に理論的な基礎を提供した教育学者のアイスレン（W.W.M. Eiselen）など白人教育学者と思想的な背景を共有しつつも(アイスレンについては教育史学者クロスの研究書を参照[79])、最終的には非常に急進的な立場に至ったマシューズを対象とすることで、これまで人種隔離体制の成立という帰結が重視されてきた20世紀前半のアフリカ人教育史を黒人政治運動における急進主義という観点から捉え直す。

第３節 本研究の方法論的視角

本論文は、主に以下の三つの観点から、ズールー・ナショナリズムという植民地主義のもとで涵養され、学校教育においてその浸透が図られた「創られた伝統」を検討する。

3.1.トランスナショナル・ヒストリー

---

[77] Davis, “Charles T. Loram and an American Model for African Education in South Africa”; Daniel R. Magaziner, *The Art of Life in South Africa* (Athens, Ohio: Ohio University Press, 2016); Reilly, *Teaching the “Native”: Behind the Architecture of an Unequal Educational System*.

[78] Matthews and Wilson, *Freedom for My People*.

[79] Kros, *The Seeds of Separate Development*.

本論文は、異なる大陸の複数の地域の同時代的な影響関係を扱うトランスナショナル・ヒストリーの視角から、黒人教育思想の伝播を検討する。本研究は、しかし、アメリカ南部から南アフリカへの教育思想の伝播を一回性のものとしてではなく、複数回にわたり、しかもそれぞれにその意味が異なる思想の移転過程として扱う。すなわち、アメリカ南部と南アという二つの社会を比較する際の軸が見出され、その中でタスキーギ学院の有用性が確認される段階から、白人教育学者・官僚により教育制度の移転が制度化される段階、南アフリカ白人とアメリカの財団の主導によってつくられた制度によりアフリカ人教員のアメリカ留学が促進された段階へと移転の形態は変化していったと本論文は主張する。南アフリカとアメリカとの繋がりに注目した研究としては、財団など制度に注目したもの（上からのトランスナショナル・ヒストリー[80]）、個々のアフリカ人の移動や社会運動など個人レベルでの人・思想の流通を扱ったものがある（下からのトランスナショナル・ヒストリー[81]）。これは大まかに統治と抵抗にそれぞれ対応すると考えられる。本論文は、アフリカ人知識人が、アメリカの財団によってつくられたコネクションを利用しつつ、人種隔離政策への批判を展開していく過程を論じる点で、これまでの研究の視点をつなぐものである。

3.2 社会史的観点からの思想の分析

先に指摘したように、創られた伝統の観点から、南アフリカにおける統治を論じた研究は、白人行政官及び伝統的権威を主な対象としており、「伝統」が創造された後、どのように受容されたか、あるいは拒否されたのかについては明らかにしていない[82]。本論文は、「伝統」の流通経路としての学校教育に注目することで、人々が書かれたものを読み、また自身そこから得たものに基づいて執筆するという日常的な行為に注目する書物史の視点から思想の実際の移転の過程とその影響を分析する。具体的には、ブッカー・T・ワシントンの自伝の南アフリカにおける受容の過程を辿ることでワシントンとタスキーギ学院の影響力がいかに広がっていったのか、またその際ワシントンのイメージがいかに変容したのかを明らかにする。また、教育改革の要の一つであったズールー語・歴史教育の実施を明らかにする資料（例えば教科書の執筆・選択に関わるもの、また実際の試験問題や学生の作文の内容など）を用いることで、ロラムまたマルコムが中心になり実施したカリキュラムの変更の影響を明らかにする。書物を読み・書くという具体的な現場に

[80] 例えば、以下の文献を挙げることができる。Edward H. Berman, *The Ideology of Philanthropy : The Influence of the Carnegie, Ford, and Rockefeller Foundations on American Foreign Policy* (Albany, NY: State University of New York Press, 1983); Dubow, *Scientific Racism in Modern South Africa*; Brahm Fleisch, "The Teachers College Club: American Educational Discourse and the Origins of Bantu Education in South Africa, 1914-1951" (Ph.D. Dissertation, Columbia University, 1995); Willoughby-Herard, *Waste of a White Skin*.

[81] 例として以下の文献を挙げることができる。Campbell, *Songs of Zion*; Robert Trent Vinson, *The Americans Are Coming! : Dreams of African American Liberation in Segregationist South Africa* (Athens: Ohio University Press, 2012).

[82] Peterson, *Ethnic Patriotism and the East African Revival*.

着目する社会史的な視点から論じることで、本論文は、ともすれば大味になる「伝統の創造」論や、財団に注目したトランスナショナル・ヒストリーを補完し、下からの思想の伝播の過程、及び伝統の創造が個々の受容の行為を通じて再規定され、意味を変容させる過程を明らかにする[83]。

3.3 「伝統の創造」論と民族ナショナリズム

さらに、本論文は、南アフリカにおけるアフリカ人教育を、教育が与えたエスニシティ・ナショナリズムへの影響という観点から考察する。南アフリカにおいて、エスニシティ・ナショナリズムを対象とすることは、特定のナショナリズム（あるいは特定のエスニシティ）が、どのカテゴリー（あるいはどのレベル）に属するのかという点から非常に複雑な問題を引き起こす[84]。本論文は特にズールー・エスニシティ（あるいはナショナリズム）に注目し、教育におけるズールー・エスニシティの表象を、白人官僚による統治のための利用、ズールー人知識人・教員・学生間でのズールー人であることの規範をめぐる対立という二つの側面から考察する。

第４節 本論文の章構成

本博士論文は、６章からなり、ナタール州及び連邦全体でのアフリカ人の「伝統」を用いた人種隔離統治の形成と、その統治にアフリカ人エリートが組み込まれていく過程、及び抵抗運動においてその協力関係が放棄されるに至るまでの過程を描く。第１章と第６章はナタール州と連邦レベルでの議論をつなぐ形で、人種隔離政策におけるシェップストン・システムの利用と、アフリカ人エリートの一部が彼らを統治体制に組み入れようとする政府の試みを拒否したことを説明する。この二つの章は本博士論文の大枠を設定する。それに対して、間に挟まる第２章から５章は、白人入植者とアフリカ人を法的・空間的に分離し、統治する体制においていかにしてアフリカ人の「伝統」が規範的なものとして教えられ浸透していったのかを跡付けることを目的としている。

第１章では、人頭税への反対から生じた 1906 年のアフリカ人首長バンバタの反乱以後の「原住民」政策見直しの機運の中で領域的人種隔離論を展開したナタール議会議員エヴァンズに注目し、彼の「原住民」統治論を検討する。課税への反対を目的としたバンバタの反乱以後、植民者の自治政府の「原住民」政策の失敗が指摘され、改革の必要性が唱えられる。その際にモデルとされたのが、1893 年の自治政府成立以前、特に初代原住民政策長官であったセオフィラス・シェップストンの政策であった。本章では、実際には白人入植者とアフリカ人との勢力均衡を目指して、即興的・場当たり的に形成された統治政策が、鉱業の発展に伴う産業化の波の中で、アフリ

---

[83] この点に関しては、アフリカ史におけるリテラシーの意義に注目したバーバー編の論文集を参照のこと。Karin Barber, ed., *Africa's Hidden Histories: Everyday Literacy and Making the Self* (Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, 2006).

[84] 例えば、エスニシティの可塑性を説く松田の研究を参照。松田素二『抵抗する都市：ナイロビ移民の世界から』 (岩波書店, 1999).

カ人の「伝統的生活」を保持することを目指す政策のモデルとなっていく過程を、エヴァンズを中心とした「原住民」問題の専門家の著作から明らかにする。

第２章は、南アフリカにおけるアメリカ南部黒人教育の受容を、白人側・黒人側に分けて論じた上で、タスキーギ学院を中心とした職業訓練を重視する教育理念の受容に向けた活動が南アフリカにおいては白人と黒人が、緊張感を持ちながらも関わりあう場になっていたことを明らかにする。すなわち、白人教育者にとってタスキーギ学院のモデルは、そのパターナリスッティックな意匠を損なうことなく、アフリカ人を従順な労働者として押し込めるための教育改革を推進するために役に立った一方で、アフリカ人教員・政治家にとっては白人支配体制から譲歩を引き出し、黒人の自立性と機会を拡大するための手段であったのだ。本論文全体のテーマに関連付けながら換言すれば、タスキーギ学院という同一のモデルを参照しながらも、アフリカ人の農業を中心とした牧歌的な過去と結びつく形での教育を捉えアフリカ人の伝統の保持を主張する白人教育者に対して、アフリカ人教員・政治家たちはアフリカ系アメリカ人を南アのアフリカ人が進むべき未来像と捉え、タスキーギ学院を経済的な従属状態から脱するための手段と考えていたと言うことができるだろう。

第３章は、本章では、南アフリカ・ナタール州ダーバンの郷土史家キリー・キャンベルに注目し、彼女の史料収集活動を詳述することで、彼女のアーカイブ形成の試みが、一方で入植者社会の発展と他方でアフリカ人の伝統保持を目的とする特定の歴史像を提示することにつながっていたことを明らかにする。 本章の目的は、書物や工芸品を収集し、整理するという行為を通して、キャンベルが、南アフリカの歴史を物語る秩序を構成し、入植者社会の発展を中心として自分自身を、そして南アフリカに住む人々を位置付ける、その様態を跡付けることである。

第４章は、1930 年代から 50 年代にかけてのナタール州のアフリカ人教育におけるズールー文学･歴史教育を分析することで、ズールー・ナショナリズムの内容とその広がりを明らかにする。具体的には、学校教育で使用されたズールー語の教科書とその教科書が使用された科目の試験問題など教科書の読み方を規定するような文書を史料として用いることで、本章は、主任原住民教育視学官であったダニエル・マック・マルコムを中心としたナタール州教育行政と保守的なズールー知識人の協力のもとで生み出されたズールー語の歴史叙述が、人種隔離政策と親和性を持つように、 ズールー・ナショナリズムを特定の形態へと導こうとする試みであったと主張する。

第５章は、キリー・キャンベルが主催し、マルコムが審査官を務めたズールー部族歴史エッセイ・コンテストを対象とする。本章は、コンテストに応募されたズールー人学生の歴史エッセイを分析することで、「創られた伝統」としての「部族」がいかに学校教育という回路を通じて浸透していったかを論じる。本章は、ズールー人の学生や教師が書き送り、そしてマルコムが読むという一連のプロセスを植民地支配という制約を受けながら成立した白人行政官と教育を受けたアフリカ人との間の交渉の場としてみる。この見方によって明らかになるのは、部族を単位とする統治という創られた伝統の浸透の過程であり、その過程を自分たちに利するようと試みるアフリカ人の姿、そしてその試みに対する制約である。

第６章では、アフリカ人人類学者マシューズ（Z. K. Matthews）を対象として、彼の政治思想の変遷をたどることで、人種間の協調という幻想が崩れ、暴力を伴う解放運動が黒人運動家たちに肯定されていく過程を明らかにする。 本章は、マシューズが人種隔離政策を支持した「原住民」問題の専門家と、人類学への関心を共有しながらも、政治姿勢としては大きく異なる立場をとった理由を明らかにする。具体的にはマシューズの「原住民法（Native Law）」への批判と、彼の政治活動の背後にある理念を結びつけることで、マシューズが、全人種が平等の権利を持つ南アフリカを目指し、そしてそれゆえにこそ暴力を肯定するに至る過程を明らかにする。

第５節 各章内の構成及び史料、用語について

5.1 各章ごとの先行研究の配置について

前節では、本論文全体の先行研究を整理した。それに対して、各章の冒頭では、その章が扱う対象に関してなされてきた研究を紹介して、整理している。このような書き方は一見して、先行研究に関する検討を行った箇所が重複し、博論全体での主張が不明確になると思われるかもしれない。しかし、以下の 3 つの理由からこのような構成上の選択は必要であり、正当化できるものであると考えている。

第一に、各章の初めに付した先行研究のまとめは、その章の対象を扱ったこれまで研究が、本論文全体の「創られた伝統」の形成と浸透というテーマから切り取られた時にどのように見えるのかを明らかにするものである。それゆえ、研究の層は厚いものの日本では知られていない、南アフリカ史の研究動向を紹介しつつ、その中での本論文の位置付けを明確にすることができると考えている。

第二の理由としては、日本のアフリカ研究・歴史学の分野でアフリカ地域を対象とした研究がなされる際の、先行研究を検討し、その上で独自の見解を加えるという作業の軽視が挙げられる。その必要性が幾度も唱えられながらも、日本の歴史学またアフリカ研究の中で、アフリカ史研究は独自の研究領域としては発展してこなかった[85]。この点は、対象地域への留学や研究者の交流が進み、研究視点の共有とともに日本（語）での研究の独自性が問われているヨーロッパ史・アメリカ史の状況とは大きく異なる[86]。以上の状況を鑑み、本博士論文は、対象とする時代・地域ともに、英語で書かれた博士論文と比べると、かなり大きめなものとなっている。先行研究の検討を二重に配置することで、日本語で書かれた論文としてのインパクトを保ちつつ、特に南アフリ

[85] 日本におけるアフリカ史研究の必要性を説いた論考としては、例えば以下の文献を挙げることができる。宇佐美久美子『アフリカ史の意味』 (山川出版社, 1996); 吉國恒雄, 「アフリカを史学する立場」 アフリカ研究 2001, no. 58 (2001): 37–40; 松田素二「アフリカ史の可能性」佐藤卓己編『歴史のゆらぎと再編』(岩波書店, 2015), 175–202.

[86] 日本におけるアメリカ史研究におけるそのような状況を指摘した論文として、中野聡「アメリカ史研究の現状と課題」立教アメリカン・スタディーズ 32 (2010): 9–20.を参照。

カ人研究者が英語で書いた論文の動向を考慮した精緻な議論が行われうると考えている。

第三に、本博士論文が、最終的にはPDFファイルとして公開されると想定されることが挙げられる。確かに印刷され冊子体としてまとめられた際の本論文のリーダビリティは損なわれるかもしれないが、画面上での読書であれば容易に読み飛ばすことが可能である[87]。それゆえ、南アフリカ史研究の史学史的まとめを含んだ形での提出の方が、最終的には本博士論文の価値を高めると判断した。

5.2 ズールー語史料からの引用について

第2、4、5章で用いるズールー語史料に関しては、引用した際、脚注に原文を書き抜きしたものを提示するという形式を採用した。原文が英語の場合とは異なり、ズールー語史料のみこの形式をとった理由は二つある。第一に、本論文執筆者のズールー語能力が未だに発展途上にあり、英語と比して訳文に誤りが含まれる可能性がやや高いことが挙げられる。原文を併記することで、論文を公開した際、批判・検証に開かれたものにしたいと考えた。第二に、アフリカ言語を使った歴史叙述の実例として本論文を提示することで、アフリカ言語で書かれた文書・書籍が、アフリカ史における重要な史料となりうる点を強調できると考えたからである。そして、アフリカ言語で書かれた史料の重要性を説くことは、オーラリティとリテラシーの短絡的な二分法を超えて、その混ざり合いと狭間に置かれたアフリカ人知識人のあり方を問題とする本博士論文第4章・第5章の主張に沿ったものでもある。

5.3 人種・エスニシティその他の集団区分を表す用語について

南アフリカにおいては、集団を表す用語が時代とともに変化し、そして、その変化は同時代の政治状況と密接に結びついていた。例えば、バンツー諸語を母語として話すアフリカ人の総称は、原住民（Native）、バンツー（Bantu）、黒人（Black）、アフリカ人（Africans）などそれぞれ含意の異なる単語があり、どの単語を用いるかは時代とともに変化してきた。また「部族（tribe/isizwe(uhlobo)）」、「首長（chief/inkosi）」などアフリカ人統治行政と密接に関わる用語も、今まで用いられてきたズールー語・英語間での訳語が、疑問視されるに至っている[88]。それ自体で博士論文が書けてしまいそうな複雑さを持つ特定の集団を指す用語の問題に対処するために、本論文は、統一した用語を用いるのではなく、各用語が出てきた際にその文脈を含め

[87] また、本論文が章末注ではなく脚注を採用したのも、ディバイス上での読書を重視したためである。紙の書籍と電子書籍という形態がもたらす読書のあり方の相違については、Robert Darnton, *The Case for Books: Past, Present, and Future* (Oxford: PublicAffairs, 2010), chap. 5.を参照。電子情報の氾濫の中での冊子体という形態が持つ意味については、Anthony Grafton, “Codex in Crisis: The Book Dematerializes,” in *Worlds Made by Words: Scholarship and Community in the Modern West* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2009), 288–324.を参照。

[88] 例えば、Jill E. Kelly, *To Swim with Crocodiles: Land, Violence, and Belonging in South Africa, 1800-1996* (East Lansing, Michigan: Michigan State University Press, 2018), xxi–xxii.を参照。

て必要な限りでどのような人々を指すのか説明するという方針をとった。

また「原住民（Native）」、「カファー（Kaffir）」など現在侮蔑的に用いられる用語に関しては、引用文以外では極力用いないという方針をとった。ただし、「原住民」は「部族」とともに、特定の人々をこの呼称で指し示すことで特定の形態をとるアフリカ人統治が可能になるということを説明するためにカッコ付きで用いた[89]。

[89] 政治学者のマムダニは、2007 年のハーバード大学デュボイス・レクチャーを基にした著書において、自身の『市民と臣民』の議論を拡張する形で、植民地支配下に置かれた特定の人々を「原住民」として定義することが、アフリカのみならずアジアを含めたすべての植民地体制の基礎を築いたと主張している。Mahmood Mamdani, *Define and Rule: Native as Political Identity* (Cambridge, Mass: Harvard University Press, 2012).

第１章　模倣すべき過去・失敗としての未来:ナタール植民地におけるモーリス・S・エヴァンズの「原住民」政策論から連邦レベルの人種隔離政策へ

はじめに

私は今、絵はがきを見ている。それは、古い白黒の写真で、一度破かれた後、断片をつなぎ合わせたものだ。写っているのは、黒い顔と白い手である。写真の右側に左手が見え、その手は厚さ 10cm 程の台を持っている。台の上には人の首が載っており、台を持つ手と置かれた首との双方の大きさから切り取られた首が縮んでいることが分かる。口は半開きになり、目は落窪んでいる。瞳は写真が不鮮明なため、見ることができない。絵はがきのキャプションは次のように説明する。「バンバタの首。オリジナルのネガは当局の命により破棄された。これは見つかった断片を複製したものである」。おそらくは 1906 年にナタール植民地政府に反旗を翻したアフリカ人首長、バンバタの首であるのだろう[1]。

「破棄された／destroyed」という言葉に注目しよう。胴体から切り離されたバンバタの首の写真―それは植民地支配がその根底において〈殺す〉という暴力によって成り立っていることを示す―は、いかに名目的であれ、アフリカ人を父のように慈しみを持って指導し、文明に導くという「白人の責務／white man's burden」を担っていると考えていたナタール植民地白人エリートにとって、忌避すべき事態であった[2]。ナタール植民地議会議員として、「原住民」政策に関わってきたイギリス系白人モーリス・エヴァンズは、バンバタの反乱を、それまでの同植民地における「原住民」政策の失敗を示すものであり、政策の革新が必要であると説いた[3]。その際、彼が新し

---

[1] 絵はがきは、Illustrated History of South Africa 3rd ed. p.287 に掲載されている。 バンバタの反乱の原因、及び戦闘の過程に関しては、Shula Marks, *Reluctant Rebellion: Disturbances in Natal, 1906-08.* (Oxford: Clarendon Press, 1970). を参照。マークスは、切断は、バンバタであることを同定するために行われたと述べている（p.225）。植民地化されたアフリカにおいて切り取られた首が持つ象徴的意味について、永原陽子「マンドゥメの頭はどこにあるのか―ナミビア北部・クワニャマ王国の歴史と現在―」永原編著『生まれる歴史，創られる歴史: アジア・アフリカ史研究の最前線から』刀水書房、2011 年 pp. 135−145. を参照。同論文において永原は、ヨーロッパ諸国がアフリカを征服した際に、王や主張の首を刎ね、さらし首にし、またヨーロッパに持ち去られた例が多くあることを指摘し、アフリカ人の記憶の中で王や首長の断頭と、頭のない胴体を埋葬せねばならなかったことが植民地支配の暴力として記憶されていると述べている。このナタール博物館に所蔵されているこの写真が、本物のバンバタを写しているのかについては議論がある。ジェフ・ガイ（Jeff Guy）はいくつかの写真を挙げながらその真偽を議論している。バンバタの首とされた写真の中には、明確に作り物と分かるものや、永原が論じた首長マンドゥメの首が切り取られた際の写真がバンバタの首と取り違えられているものなど多種多様なものがある。Jeff Guy, *Remembering the Rebellion: the Zulu Uprising of 1906.* (Scottsville, SA*:* University of KwaZulu-Natal Press, 2006). pp.128-131.

[22] Nathan Preface to Maurice S. *Evans Black and White in South East Africa*. pp.xi-xii.

[3] Maurice S. Evans. *Native Problem in Natal*. (Durban: P. Davis &Sons, 1906).　モーリス・エヴァンズ（Maurice S. Evans, 1854-1920）はイギリスからナタール植民地で農場を経営していた兄を頼って移住し、農業経営で成功を収めた後、ナタール議会議員に選出されるという経歴を持つ人物である。George M. Frederickson "Introduction" in Maurice S. Evans, *Black and White in the Southern States*. University of South Carolina Press, 2001 (rep.1915).

い政策の核に据えたのは、徹底した白人と黒人の隔離であった。

0.1. 先行研究のまとめと本章の構成

本章の前半では、エヴァンズの人種隔離論を、ナタール植民地における領域的隔離政策の展開に位置付け、彼が挙げる人種隔離の論拠を考察することで、南アフリカにおける領域的人種隔離政策という統治のあり方が形成されてきた一端を明らかにする[4]。対象とする主なテキストは、『南東アフリカにおける黒人と白人(Black and White in South East Africa)』（1911）である。この著作を検討することを通して、本章は、南アフリカにおける最初期の人種隔離論者の一人とされるエヴァンズが、「人種間の接触による白人・黒人両人種の退化（degenerate)」を避けるという理由で、領域的人種隔離を提唱していたことを明らかにする[5]。

本章の後半では、シェップストン・システムというナタール植民地における原住民統治における祖型が、いかにして連邦レベルでの人種隔離政策の形成に影響を与えたのかを検討する。イギリス系の知識人がアパルトヘイト体制の理論的背景を提供したとするデュボウの議論(Dubow 1989)を踏まえつつ、彼らの人種隔離政策論の基礎となっているのがナタール州の経験であることを明らかにする。しかし、シェップストン・システムの内容は論者によって変化した。本章では、そのシェプストン・システム像の変異がもった幅の意味を、ジェイムズ・スチュワート（James Stuart）を中心としたナタール州の行政官や、エドガー・ブルッケス（Edgar Brookes）またヒートン・ニコルズ（Heaton Nicholls）などナタール出身の学者・政治家の原住民統治論の系譜をたどることで明らかにする。この分析に基づいて本章では、1906 年のバンバタの反乱後、シェップストン時代の統治への回帰がその際には統治者のアフリカ人に関する知識の深さや統治者とアフリカ人臣民との精神的な近さがあるべき政策の模範とされたのに対して、1930 年代における連邦レベルの政策論争においては、シェップストンがもったとされる絶対的な権力がその政策論の中心に据えられたと主張する。

以上の内容を持つ本章は、南アフリカの人種隔離政策の歴史的研究に対して、大きく三つの貢献をする。

第一に、バンバタの反乱を契機とした統治政策の見直しが、その後の南アフリカ連邦全体における人種隔離政策の形成につながったことを明らかにする。ナタール植民地のアフリカ人統治に関する先行研究は、バンバタの反乱を反植民地闘争の顕著な例として、また初代原住民長官シェップストンの名を冠した統治方法であるシェップストン・システムの機能不全の証明として分析

[4] 南アフリカにおけるアパルトヘイト政策は狭義には、1948 年に国民党政権によって開始されたものである。アパルトヘイト政策に関する研究における今日の共通理解によれば、アパルトヘイトは一貫した政策ではなく、その場の状況に合わせて即興的に施行された政策が、積み重なって形成されたものである(峯陽一. 2009. 「解説『新版　南アフリカの歴史』を読む―リベラル・ラディカル論争をこえて」レナード・トンプソン『南アフリカの歴史』明石書店（宮本ほか訳）を参照)。フーコーは『コレージュ・ド・フランス講義 1977-1978 年度　安全・領土・人口』（筑摩書房、2007 年）で、統治を体系だった政策群としてではなく、技術の積み重なりとして捉える見方を提示している。

[5] エヴァンズを最初期の人種隔離主義者として取り上げた論考としては、Saul Dubow. *Racial Segregation and the Origins of Apartheid in South Africa, 1919-36*. Macmilan, 1989.がある。

してきた。それゆえ、この反乱の原因に関して、様々な理由が挙げられ、論争のテーマとなってきた。具体的には、白人入植者社会の拡大と過酷な税制を重視する立場や[6]、この反乱を鉱山で働く若い世代と家長との間の世代間闘争として提示する研究[7]、そして「ズールー人」意識の拡大が反乱におけるアフリカ人の連帯をもたらしたとする主張を上げることができる[8]。このようにバンバタの反乱に関しては多くの研究がなされているものの、その後の統治改革についてはそれぞれの研究においてエピローグ的に触れられるに過ぎず、研究の主題として取り上げられてはこなかった。しかし、同時代的な文脈を重視するならば、バンバタの反乱後には統治体制の見直しが進み、政治家や行政官によって多くの論考が書かれたのである[9]。

第二に、本章は、エヴァンズの人種隔離論が、その要素として、過去の見直しと、将来像としてのアメリカ南部の提示によって理由づけられていたことを明らかにする。ナタールにおけるアフリカ人統治政策に関する先行研究は、19 世紀半ばのナタール植民地において原住民長官であった、シェップストン（Theophilus Shepstone）のよって、アフリカ人統治のあり方が規定され、それが 20 世紀においても継続されたと主張する。しかし、エヴァンズの議論を検討することで明らかになるのは、シェップストンの政策が人種隔離政策の文脈で考察されるようになったのは、20 世紀に入ってからであったという事実である。その上で、シェップストンの実像を提示するガイの伝記的研究を参照しつつ[10]、20 世紀初頭のバンバタの反乱を契機としてナタール植民地におけるアフリカ人統治政策の見直しが生じ、その中で産業化の進展により侵食されつつあるアフリカ人の伝統を保持するための理想的な政策としてシェップストンの政策が再提示されるに至ったと主張する。さらに本章は、この過去の政策の捉え直しを含む議論が、間大西洋的な空間の広がりを持っていたことを明らかにする。すなわちアメリカ南部が南アフリカと同様に「黒人問題」を抱えつつも、産業化が進んだ未来像として捉えられ、その未来像から照射される形で南アフリカのあるべき統治政策が根拠付けられたのである。

第三に、人種隔離（Segregation）という思想の内容の変遷と揺れ幅が持った意味を明らかにする。1980 年代まで支配的であった、人種主義はマルクス主義史学の安価な労働力を人為的に作り出すための制度であったという見方[11]に対して、ソール・デュボウは、人種隔離という考え方が、

---

[6] Shula Marks, *Reluctant Rebellion: Disturbances In Natal, 1906-08.* (Oxford: Oxford University Press, 1970); John Lambert, *Betrayed Trust: Africans and the State in Colonial Natal.* (Scottsville: University of Natal Press, 1995).

[7] Benedict Carton, *Blood from Your Children : The Colonial Origins of Generational Conflict in South Africa* (Charlottesville : University Press of Virginia, 2000).

[8] Michael R. Mahoney, *The Other Zulus : The Spread of Zulu Ethnicity in Colonial South Africa* (Durham, NC : Duke University Press, 2012).

[9] Maurice S. Evans, *Black and White in South East Africa: A Study in Sociology; with a Preface by Matthew Nathan.*, 1916,; J Stuart, *A History of the Zulu Rebellion, 1906, by j. Stuart.* (London: Macmillan, 1913); Edgar Harry Brookes, *The History of Native Policy in South Africa from 1830 to the Present Day*, 2nd rev. ed. (Pretoria: Van Schaik, 1927).

[10] Jeff Guy, *Theophilus Shepstone and the Forging of Natal: African Autonomy and Settler Colonialism in the Making of Traditional Authorityy.*, 2013,

[11] Harold Wolpe, “Capitalism and Cheap Labour-Power in South Africa: From Segregation to Apartheid,” *Economy and Society* 1, no. 4 (November 1, 1972): 425–56, https://doi.org/10.1080/03085147200000023; Marian Lacey, *Working for Boroko: The Origins of a Coercive Labour System in South Africa* (Johannesburg:

異なった思惑を持つ人々を糾合する機能を果たした点が重要であったと唱えた。デュボウは、アフリカ人に対する人道的な政策の必要性を強調するリベラルな立場に立つ学者や、アフリカ人居住地であるリザーブを労働力獲得のため活用することを試みる資本家層など様々な論者が人種隔離を南アフリカが直面する問題の万能薬として挙げていたことを明らかにした[12]。また、人種隔離が一枚岩ではなかったとするデュボウの主張は、政策実施面においても裏付けられている[13]。しかし、デュボウは、人種隔離政策の進展に伴って人種隔離を論じる際の論点が移行していったことを見過ごしている。シェップストン・システムを論じるナタール出身の学者・政治家の系譜から見えてくるのは、シェップストンを持ち出す際の焦点が、アフリカ人に関する深い知識と彼らに対する共感から、その宣言によって法を制定しアフリカ人を従わせる強権的な権力のあり方へと移っていくことである。本章では、この関心の推移が原住民行政法における「原住民法」の利用や、ケープ州におけるアフリカ人男性の選挙権の喪失という、人種隔離の制度的な確立を反映していると主張する。

具体的な叙述に入る前に、エヴァンズの「原住民」統治論の梗概を提示し、併せて本章各節の梗概を述べることで、錯綜した南アフリカ史を扱う本章の道標としたい。

『南東アフリカにおける黒人と白人』の結論部においてエヴァンズは、今後の「原住民」政策における根本的原則として、3 つの指針を挙げている。それは 1.白人が統治しなければならない、2.議会は、専門家から成る委員会に権限を委譲し、不必要な介入を避けること、3.人種隔離を徹底し、それぞれの人種に会った発展を促すこと、である[14]。

以上の 3 つの原則のうち、本章は 2 番目と 3 番目を取り挙げ、それぞれの原則を主張する際にエヴァンズが提示する理由とその政治的・経済的背景を検討する[15]。第 1 節では、なぜ「原住民」

Ravan Press, 1981).

[12] Saul Dubow, *Racial Segregation and the Origins of Apartheid in South Africa, 1919-36* (Houndmills: Macmillan, 1989).

[13] Deborah Posel, *The Making of Apartheid, 1948-1961: Conflict and Compromise* (Oxford: Clarendon, 1997).

[14] Maurice S. Evans Black and White in South East Africa. p.310. 文言は以下のとおりである。

I lay down as a basis three fundamental principals:-

1. The white man must govern.
2. The parliament elected by the white man must realize that while it is their duty to decide upon the line of policy to be adopted, they must delegate a large measure of power to hose specially qualified, and must refrain from undue interference.
3. The main life of policy must be the separation of races as far as possible, our aim being to prevent race deterioration to preserve race integrity, and to give to both opportunity to build up and develop their race life.

[15] 一つ目の原則については、本章で検討することはしないが、白人の植民地アフリカにおける入植者の居住権とその非外在性は、ヨーロッパ人がアフリカ人に対する政策やアジア系移民労働者について語るときに不問にされる点である。そして、入植者が自らを名指しするときに、出身国ではなく「アフリカ人」であることを誇示するという事態が、入植者が本国との不一致を意識し、入植者自身が一つのまとまりをもった集団であると自覚した場合に生じてきた。その南アフリカにおける具体例が、オランダ系入植者を中心としたアフリカーナーナショナリズムであった。アフリカーナーナショナリズムの形成に関しては、T. Dunbar Moodie. *The Rise of Afrikanerdom: Power, Apartheid,and Afrikaner Civil Religion.* University of California Press,1975 を参照。同種の事態はアルジェリアにおけるフランス人入植者が「アルジェリア人」を名乗る場合にもみられる。工藤晶人『地中海帝国の片影：フランス領アルジェリアの 19 世紀』東京大学出版会、2013 年、pp.271-276

政策の形成と実施において専門家への依拠と議会の不介入が主張されたのかをバンバタの反乱の原因という観点から考察する。その際、カルチュラル・スタディーズの立場からポストコロニアル理論を研究してきたスチュアート・ホールの言説と主体の形成の相互構築に関する議論をもとに、「原住民」政策という言説とその専門家との同時的な発生があったと主張する。

次に専門家としてエヴァンズが提案した領域的人種隔離に移ろう[16]。人種隔離の徹底を主張する際に、エヴァンズは大別すれば２つの根拠を提示している。１つは、人種の接触・混交によるヨーロッパ人入植者とその子孫の退化（degenerate）であり、もう１つは白人との接触によるアフリカ人の生活への個人主義の広がりがもたらす、特に教育を受けたアフリカ人が抱く現状への不満とその帰結である。第２節では前者の論点、すなわち「貧困白人(poor white)」や「人種の退化」、「混血（miscegenation）」という事象を、アン・ローラ・ストーラーの白人入植者世界の性質とその境界の管理という議論を参考に考察する。第３節では、アフリカ人の支配体制への反発への対応という側面に視点を転じ、アフリカ人エリートのアフリカ人リザーブ[17]への押し込めという観点から、エヴァンズの人種隔離論を検討する。

第４節では、エヴァンズのアメリカ南部視察記を検討し、エヴァンズが自身の提唱する領域的人種隔離を補強する実例としてアメリカ南部を提示していたことを明らかにする。

第５節では、ナタール植民地における原住民政策と連邦レベルでのアフリカ人統治政策とのつながりを、ナタール植民地初代原住民政策長官であったシェップストンの政策をめぐる議論という観点から検討する。

以上で、論文概要の説明を終え、次にエヴァンズに「原住民」政策論を書かせる契機となったバンバタの反乱と、その原因へと移りたい。

第１節　リザーブの変容：不介入の原則と専門家の誕生

南アフリカの歴史は、血と死に満ちている。それは、南アフリカ史において重要な契機となっ

---

[16] 南アにおける人種隔離は、都市内での居住区や公共施設の分離という側面（後に「小アパルトヘイト」と呼ばれる）と、国内を成文法と慣習法が支配する地域に分割し、後者にアフリカ人を押しとどめるという領域的隔離（後に「大アパルトヘイト」と呼ばれる）という二つの側面があった。本章は主に後者を扱う。この点に関しては、アメリカ合衆国における人種隔離と対比させる形で南アフリカの特徴を記述した峯陽一「アメリカの経験、南アフリカの経験」川島正樹編著『アメリカニズムと人種』名古屋大学出版会、2005 年が参考になる。

[17] 1913 年土地法は、国土の 7%をヨーロッパ人入植者も含め「原住民」以外が居住・購入することの不可能な土地として設定した。リザーブは基本的には都市から離れた農村地域であり、「原住民」にはそれ以外の土地取得は許されず、この法律は人種隔離政策の基礎と考えられている。同法成立以前のナタール植民地では、南アフリカ連邦及び共和国時代には都市内のアフリカ人の居住が法的に定められて地区を指すロケーション（location）が、リザーブを指す用語として使われてきたが、本章では混乱を避けるため一貫してリザーブという語を用いることにする。また、本章では、南アにおける人種隔離政策が、産業化に伴うアフリカ人の都市化に対応し、アフリカ人首長が収めると定められた土地であるリザーブにいかにアフリカ人を押し込めようとしていたかという点を扱う。都市内の居住区の分離に関しては、Maynard Swanson “The Sanitation Syndrome,” *Journal of African History* Vol. 18, No. 3 (1977): 387-410.を参照のこと。

た出来事が、戦争や暴力的な事件であるというだけではなく、それぞれの出来事において、過剰な血が流され、過剰に人が死ぬ、ということでもある。血の川の闘い、ランガリバレレの反乱、ボーア戦争（南アフリカ戦争）、バンバタの反乱、ランド蜂起、シャープビルの虐殺、ソウェト蜂起、80 年代の内戦状態、移行期の主導権をめぐる対立とそれに付随する虐殺・暗殺。1652 年にオランダ東インド会社が中継地点として喜望峰に基地を造ってから、犯罪の氾濫する国としての南アという現在に至るまで、それは続いてきた。

このように考えるのであれば、バンバタの反乱も血なまぐさいエピソードの１つとして片付けられると想定されるかもしれない。しかし、この出来事は反乱が起きた時期ゆえに、南アフリカにおけるアフリカ人支配の歴史において１つの結節点として位置付けられるのである。バンバタを中心にナタールの首長たちが植民地政府に対して蜂起した 1906 年は、国家統一をめぐる問題が議論されていた、南アフリカ史における転換期にあたる。それはオランダ系移民の子孫を中心とするアフリカーナーが統治するトランスヴァール共和国内の金鉱山をめぐって争われ,1899 年から 1902 年まで続いた南アフリカ戦争（ボーア戦争）はイギリス軍の勝利に終わったがアフリカーナーが支配してきた２つの共和国（トランスヴァールとオレンジ自由国）とイギリスの二つの植民地（ケープとナタール）をどのように１つの国として統治していくのかという問題に関してはいまだに決着を見ないという時期であった（1910 年に南アフリカ連邦として統一が達成される）。争点の１つはアフリカ人統治政策であり、4 つの国・地域が個別に実施してきた政策をどのように統合するのかという課題が生じていたのである。統合をめぐる代表者会議において、ナタール植民地政府代表は自国のアフリカ人統治政策を南アフリカ連邦全体で施行するべき模範的政策であると主張していた[18]。バンバタの反乱は、彼らの自信を打ち砕き、反乱の原因の究明と政策の見直しが唱えられるに至った。

実際、エヴァンズはバンバタの反乱はナタール植民地の白人にとって驚きであり、アフリカ人について知らなくてはならない、それも農場などでアフリカ人と付き合うことによって得る日常的な知識ではなく、人類学・社会学などの「科学的」知に基づく専門家の知識が必要であると主張する[19]。それゆえエヴァンズは、アフリカ人に対して表面的な知識しか持ち合わせていないとされる一般的な入植者と対比される形で規定された専門家を重視するこが必要であり、入植者白人の利害が反映されると考えられるナタール議会の「原住民」政策への不介入が原則とされるべきだと提案するのである。次に彼のこの主張とその根拠を理解するために、バンバタの反乱に至るまでのナタール植民地におけるアフリカ人支配の歴史を振り返っておきたい。

1.1. バンバタの反乱

ナタール植民地の形成は、1806 年にケープ植民地がオランダ支配からイギリス支配へと変わったことに起因する。ケープ植民地における支配体制の移行は、奴隷制の廃止など、それまでオラ

[18] L. M. Thompson. *Unification of South Africa 1902-1910*. Oxford University Press, 1960. pp.42-49
[19] BWSEA pp.12-13, p.17 ちなみに、BWSEA のサブタイトルは A Study in Sociology である。

ンダ東インド会社統治下において当然のことと考えられていた制度の制限につながり、イギリス系入植者が支配するケープ植民地政治への反発がオランダ系植民者の間で高まった。その結果として彼らはケープ植民地を離れて北上し、自分たちの入植地をアフリカ人王国と闘いながら築いていったのである[20]。

その中で、1838 年に最初に設立されたのがインド洋沿いのナタール共和国であった。しかし、1843 年にこのアフリカーナーの共和国がイギリスのケープ植民地に併合される。アフリカーナーによるアフリカ人の抑圧を防止することが目的とされたが実際には近年の研究が明らかにしたようにアフリカ人王国とケープ植民地との緩衝地帯を作ることが目的であった[21]。併合されたナタール植民地が抱えていた問題は、まず植民会社の広告にも関らず、カナダやオーストラリア、ニュージーランドなど他植民地と比較した際のナタールへの魅力の乏しさ故にイギリスからの入植者が集まらなかったことであった。また植民地経営の費用をいかに少なく抑えるかという課題も抱えていた。この状況に対応するために考案されたのが、植民地政府によって任命された首長による間接統治という手法であった。初代ナタール植民地の原住民長官に任命されたセオフィルス・シェップストン(Theophilus Shepstone)はアフリカ人だけが住むことができる土地を保有地として確定し、入植者がその土地を保有することを禁じるという政策を採った。当初白人入植者による農業は、サトウキビ産業以外は零細なものであり、アフリカ人が賃金労働者として農場で雇われるということは少なかった。サトウキビ産業はアフリカ人ではなく、インドからの契約労働者によって賄われていたのである[22]。

しかしこの状態は、鉱業の急速な発展によって急速に変化する。1867 年にダイヤモンド鉱業、1886 年に金鉱業の操業が開始される。鉱業はそれぞれキンバリーとヨハネスブルクという都市を瞬間的に生みだし、それぞれの都市はひと山当てようという男たちとその男たちを相手に商売をしようという商人たちの欲望を糧に膨張していった。これらの都市は、その影響力をナタールという辺境の地まで及ぼした。それまで自給的な農業を行っていた白人入植者たちは都市の人口への食糧供給のための商業的農業を発展させた。この農業形態の変容が、アフリカ人と入植者たちの関係を劇的に変化させることとなったのである。農地を拡大させ、賃金労働者としてアフリカ人を活用させたいという入植者たちの欲求は、アフリカ人への労働力供出をその言外の目的としたアフリカ人への課税へとつながり、また農地を拡大することをもくろむ入植者たちはアフリカ人リザーブを侵食していった。このような傾向は、1893 年にナタールが独自の議会を持つ自治政府として認められ、入植者がその政治的影響力を拡大したために、加速した。税金は、現金によって支払うこととされ、現金収入の必要からアフリカ人たちは賃金労働者として農地で働くことを余儀なくされた。またそれまでアフリカ人に土地を貸していたナタール植民会社は商業的農業

[20] T. R. H. Davenport and Christopher Saunders. *South Africa: A Modern History 5th ed*. Macmillan 2000, pp.42-54.
[21] Ibid. pp113-116. Nigel Worden. *The Making of Modern South African 5th ed.* Wiley-Blackwell, 2012.
[22] ナタール植民地における間接統治については、David Welsh. *The Roots of Segregation: Native Policy in Colonial Natal, 1845-1910*. Cape Town; New York: Oxford University Press

によって得た資金を元手に高額で買い取る入植者に、土地を売却することとなったのである[23]。

特にアフリカ人の反発を引き起こしたのは、結婚している成人男性に課される小屋税(hut tax)、及び未婚の成人男性に課される人頭税(pall tax)であった。課税がこの形態を取った理由を峯は「広大な土地が広がり、かつ大部分の農産物が自家消費されるアフリカ社会では、土地や収穫を単位として課税することは不可能であるから、各地で人頭税と小屋税が導入された」と説明している[24]。そして、課税の実施は、「部族」の首長を中心に実施された。ナタール植民地に限らず、イギリスによるアフリカの植民地化の過程で「部族」は、アフリカ人を捕捉し、徴税や労働を課すために通時的に不変であり、空間的に固定された存在としてアフリカ人に対して押し付けられたのである[25]。これらの税を任命された首長たちは、臣民から徴税をしなければならなかった。しかし、植民地政府が要求する徴税額はアフリカ人にとっては過大なものと感じられ、首長たちはアフリカ人臣下と植民政府との間で板挟みになっていたのである。

このような苦境に立たされた首長に追いうちをかけるように、植民地政府は 1906 年に人頭税を増額することを決定する。これが反乱への契機となった。既にその年には白い鶏や豚など白人を連想させる家畜が殺され、その血がまかれるなど不穏な空気が漂っていた。そして、イギリス人徴税官が殺害されるという事件が起こり、この事件をきっかけに、首長の中でも小規模な地域を治めているバンバタが植民地政府に反旗を翻し、彼に同調する首長たちが加わり、大規模な反乱が生じたのである。この反乱自体は植民地軍によってすぐに鎮圧され、植民地政府側の死者 30 名に対し、アフリカ人死者が 3000 名を超えるという無残な結果に終わった。バンバタはナタール植民地北部のズールーランドに逃げ込んだものの、捕えられ、冒頭で述べたように馘首された。このように反乱自体はすぐに鎮圧された。しかし、植民者たちにとってアフリカ人は、敵であると同時に労働力であり、殺すことはできたとしても本来は生かし、活用せねばならない人々であった。それゆえ、この事件はナタール植民者、とくにそれまで「原住民」政策に関ってきた者たちの間に、政策を見直さねばならないという気運を生みだしたのである[26]。

このような状況下で、反乱直後にナタール植民地政府は、ナタール原住民問題委員会（Natal Native Affairs Committee）を組織し、原因と対応策を見極めようとしたのである（先述のようにエヴァンズも委員の一人であった）。この委員会において注目すべきは、同委員会が提示した個々の

---

[23] 上記のナタール経済の変容に関しては、John Lambert. *Betrayed Trust: Africans and the State in Colonial Natal*. University of Natal Press, 1995. を参照した。ナタール植民会社による土地の売却に関しては、Henry Slater, “Land, Labour and Capital in Natal: The Natal Land and Colonisation Company 1860-1948,” *Journal of African History* Vol. 16, No. 2 (1975), pp. 257-283 を参照。

[24] この点に関しては、ボツワナの例であるが、峯陽一「モレポローレと砂漠のフロンティア--1920 年代末の英領ベチュアナランドにおける遊動民の捕捉について」『二十世紀研究』 (6), 1-26, 2005, p.8 が参考になる。南アフリカにおけるアフリカ人への課税と、アフリカ人が課税をいかに彼らの世界観に引きつけて理解していたかに関する研究としては、Sean Redding. *Sorcery and Sovereignty: Taxation, Power, and Rebellion in South Africa, 1880-1963*. Athens: Ohio University Press, 2006.を参照。

[25] 松田素二『抵抗する都市―ナイロビ移民の世界から』岩波書店、1999 年 pp.102-104.

[26] バンバタの反乱に至る経緯及び反乱の過程の説明は、Shula Marks. *Reluctant rebellion: the 1906-8 Disturbances in Natal*. Clarendon Press, 1970.に詳しい。

対応策よりも同委員会のアフリカ人を知ろうという姿勢であるように思われる[27]。1906 年 10 月から調査活動を開始し 301 名のヨーロッパ人入植者、906 名のアフリカ人と「その他の人種」の人々に対して個別の聞き取り調査を実施した。また各地で会合を開き、少なくとも 5500 名の首長およびヘッドマンや、キリスト教改宗者など様々なアフリカ人が意見を表明する機会を得たという[28]。

以上述べてきた反乱発生の経緯をエヴァンズも理解しており、実際エヴァンズは課税と白人農民による土地の侵食が反乱を引き起こしたのだとして、当時の政策を批判している[29]。エヴァンズは白人入植者が有権者となり、独自の議会を持つことは肯定していたが、有権者は自己の利益しか考慮せずアフリカ人に対しては賢明な政策をとることができないと否定的に評価を下すのである。それゆえ、「原住民」政策は専門家に任せなくてはならないのである[30]。『南東アフリカにおける黒人と白人』の序文においてナタール植民地総督であったマシュー・ネイサンはエヴァンズを広範な知識を持ち原住民に関する政策を論じるうえでもっとも適した人物として紹介する。しかしエヴァンズの著書もその一部を成す「原住民」政策という言説それ自体が、白人入植者の個別的利益を離れて大局的にアフリカ人の状況を捉え判断を下す存在として規定される専門家という主体・立場を作り出したのだと考えるべきであろう[31]。この言説においては、人種間の対立を回避し、各人種が独自に持つ価値を追求することを助けることが「原住民」政策の至高の目的とされ、白人農家の利益などは、この目的に沿う限りにおいて考慮される[32]。そのため、この言説の内部で論じる限りにおいてはその目的の善性を否定することは難しくなってしまうのである。次に、この各人種の独自発展を目指すというエヴァンズの人種隔離論に目を向けよう。

第 2 節　「貧困白人（poor white）」と領域的人種隔離

人種隔離という言葉で、エヴァンズは、それまでに行われてきたリザーブによるアフリカ人の

---

[27] 対応策としては、アフリカ人統治政策の実務にかかわる行政官（Magistrate）の増員や法令のズールー語での広報を拡張することなど、全部で 21 カ条あげられている。Report of the Native Affairs Commission 1906-7.(London, 1908.) pp.40-41.

[28] Ibid p.7. ヘッドマンは首長の下位に位置する役職である。

[29] この点に関しては、Evans は *Native Problem in Natal* においてより直截的な批判を行っている。

[30] BWSAE　pp.311-312.

[31] このような言説の捉え方に関しては、Stuart Hall ed. *Formations of Modernity*. Polity Press, 1992. p.202. を参照。専門家による「原住民」政策の策定への関与はナタールに留まらず、1920 年にスマッツ政権下で連邦政府の「原住民」政策に助言を行う原住民問題委員会（Native Affairs Commission）が組織され、またアフリカ人統治の行政面をになう原住民問題省（Department of Native Affairs）の官僚に対して大学で人類学を学ぶことが奨励されるなど、20 世紀前半にその度合いを強めていった。Dubow, Racial Segregation and the Origins of Apartheid in South Africa.

[32] 例えば、エヴァンズの南アフリカ議会への報告書 Report by Mr. Maurice S. Evans C.M.G. of the Native Areas in Natal Recommended by the Natives Land Commission を参照。この報告書において、エヴァンズはアフリカ人が分離して生活できる土地をある程度は確保すべきであるという見解を述べている（p.12）。もっとも、アフリカ人の農業生産効率が非常に低いためそれを高めることによってより狭い土地をアフリカ人に割り当てることが可能だという指摘もしており、この点は彼がアメリカ南部の黒人教育、特に農業教育に重点を置いたタスキーギ学院に関心を抱いたこととつながっているように思われる。

間接統治という以上のことを主張しようとしている。彼は、「これまで私の議論を追ってきた読者には明らかだと思うのだが、私の提案の大原則はこれまで試みられたことがない程度にまで人種隔離を行い、家庭生活及び人種の健全さの保持、また人種間の同じ場所にいること（overlapping）、接触、対立を防ぐことにある」と述べる[33]。エヴァンズにとって、土地を分けることは簡便にアフリカ人を統治する手段としてだけではなく、「白人」という人種の健全さ（integrity）を守るための手段でもあったのだ。そして、「人種保全」を達成する上で彼を悩ませていたのが、南アフリカにおいて白人が力強さ（virility）を失っているのではないかという不安である。そのひとつの現れが「貧困白人」であった。

南アフリカにおいて「貧困白人」が問題として顕在化するのは 1890 年代であり、カーネギー財団が 1930 年代に実施した調査は、アフリカーナー・ナショナリズムを刺激し、後のアパルトヘイト政策につながったと指摘されるなど、南アフリカの人種隔離政策形成において「貧困白人」は避けては通ることができない課題である[34]。19 世紀後半における、ヨーロッパ系入植者の困窮化と「貧困白人」の問題化を扱ったコリン・バンディの論文が指摘するように、南アにおいて「貧困白人」がもたらすと考えられた脅威には、犯罪だけでなく、人種の境界の曖昧化があった。土地を持たず、農場の小作人となり最後には都市の浮浪者にまで落ちていく困窮した白人は、同じ労働現場で、カラードやアフリカ人労働者と一緒に彼らと同様の労働作業に従事していた。さらに都市の貧困居住区において白人と黒人が隣り合って暮らしていることは、公衆衛生の観点から不安視され、またそのような異人種間の触れ合いが、異人種間性交渉あるいは婚姻につながるのではないかと、例えばケープ植民地政府の委員会においても指摘されている[35]。これらの不安をエヴァンズも共有していた[36]。

しかし、エヴァンズの不安はこれだけに留まらない。彼は、アフリカ人が都市で生活し、最底辺の白人と接することによって白人に対する尊重を失うことも危惧していたのである。文明化の階梯の上位に位置する白人が遅れたアフリカ人を導くという「白人の責務」の前提は意外に脆く、必死に糊塗を重ねて守らなければならなかったのである[37]。

---

[33] BWSEA p.317.

[34] Colin Bundy, “Vagabond Hollanders and Runaway Englishman,” in *Putting a Plough to the Ground : Accumulation and Dispossession in Rural South Africa, 1850-1930*, ed. William Beinart, Peter Delius, and Stanley Trapido (Johannesburg: Ravan Press, 1986); Saul Dubow, *Scientific Racism in Modern South Africa* (Cambridge: Cambridge University Press, 1995). カーネギー財団の「貧困白人」に関する調査については、Zane Magbane “American Construction of Poor White Problem”及び、Tiffany Willioughby-Herard. *Waste of a White Skin: The Carnegie Corporation and the Racial Logic of White Vulnerability*. University of California Press, 2015.を参照。

[35] Bundy, “Vagabond Hollanders,” pp.117-122.公衆衛生に関しては、Maynard Swanson “The Sanitation Syndrome: Bubonic Plague and Urban Native Policy in the Cape Colony, 1900-1909,” *Journal of African History* Vol. 18, No. 3 (1977), pp. 387-410 を参照。

[36] BWSEA pp.219-225.

[37] BWSEA, pp168-169.エヴァンズが挙げる例は、酒場にたむろし前後不覚に陥った白人男女を、アフリカ人リキシャー引きが、車にぎゅうぎゅうに詰めて運ぶ光景である。植民地権力の装いと権力がいかにそれを維持しようとするのかに関する理論的視座は、James C. Scott. *Domination and the Art of Resistance: Hidden Transcripts.* Yale University Press, 1992.に追うところが大きい。

エヴァンズは、「貧困白人」が生じた原因を南アにおける鉱業を中心とした産業化や、羊毛・ワインあるいは都市への食糧供給を目的とした大規模商業的農業の発展という経済的要因に帰着させることをしない。彼は根底にあるのは白人と黒人の接触だと考える。すなわち単純労働は黒人がするものであるという南ア白人が持つ想定が労働の忌避を生み出し、安楽な状態に置かれることで、また劣等な人々が子孫を残すことで、フロンティアを開拓する際に移民たちが発揮していた「力強さ（virility）」を人種としての白人が失ってしまっているのではないかと彼は論じるのである[38]。それゆえに「すべてのふしだらで怠惰、無能力な白人が人種にとっての脅威となるのである(Every dissolute, lazy, incompetent white man is a danger to the race)」[39]。

そしてこの「退化する白人」の予備軍とされたのが、黒人少年に子守りをされた白人の子どもである。アン・ローラ・ストーラーは、オランダ領東インドにおける原住民の子守りが子どもに及ぼす悪影響を危険視する言説を取り上げることによって、フーコーが『性の歴史』第一巻で提示したブルジョワ階級の自己陶冶としての性言説という主題を植民地主義の歴史に接合し、拡張することによって、ブルジョワ的欲望が植民地主義との関わりの中で形成されてきたと論じた[40]。南アフリカでもまさに同様の事態が起きていたのである。エヴァンズはナタール植民地の教育長官であったバーネットという人物の見解を以下のように引用している。バーネットは「ナタールにおいて幼稚園教諭の代わりをカファー（Kaffir、アフリカ人を指す侮蔑語）の少年少女が務めているのは劣悪なことであり、おそらくは愚かなことである」と述べ、そのようにして育てられた子どもは「カファー語でしゃべり考えるようになり、敏感で影響を受けやすい時期をそのように過ごしてしまうと、残りの人生において非常に努力をすることによってのみこの影響から抜け出ることができるということになってしまう」と、アフリカ人に面倒を見てもらうことを危険視する[41]。

エヴァンズは、アフリカ人が身近にいることの危険性が南アフリカにおいては萌芽的であるとすれば、アメリカ南部はすでに何世紀もの間過去の奴隷制・再建期の政策によって人種間接触(racial contact)及び混交（miscegenation）を重ねているためもはや両人種を引き離そうとしても不可能であると指摘する。そして、彼は、南ア白人に時間を一刻も無駄にせず、完全な隔離に向け

---

[38] BWSEA, p206. フロンティアを切り開く中で保たれてきた力強さが、安楽な生活によって失われ、過酷な状況においては淘汰されていた弱い人間が生き残ることによって、種としての白人が退化するという不安は、19 世紀末のアメリカ合衆国にも存在した。マシュー・ジェイコブソンは、セオドア・ローズヴェルトの事例を指摘している。Matthew Frye Jacobson. *Barbarian Virtues: The United States Encounters Foreign Peoples at Home and Abroad, 1876-1917.* Hill and Wong, 2000. p.3.

[39] BWSEA p.325.

[40] Ann Laura Stoler. *Race and the Education of Desire: Foucault's History of Sexuality and the Colonial Order of Things.* Duke University Press, 1995. See esp. ch.5.またアン・ローラ・ストーラー「感情教育―帝国における境界線上の子供たち」『肉体の知識と帝国の権力』以文社、2010 年も参照。

[41] BWSEA p.229.　またエヴァンズはナタールにおいて「カファー少年」子守りの悪影響から子どもを守るための協会が作られたとも述べており、詳細は明らかにされていないが、今後調査する価値があるかもしれない。しかし、第 4 章で述べる教育行政官マルコムなどズールー語を話すことのできる白人官僚は、実際ズールー語が周りで話されている環境で育ったからこそ、その能力を植民地統治に生かすことができたのである。

て行動することを促すのである[42]。

「貧困白人」やアフリカ人に子守りされる幼子が内側から白人の境界をぼやかす存在だとすれば、教育を受けたアフリカ人は、外側からその境界を犯す脅威として考えられていた。そこで次に、エヴァンズが、バンバタの反乱後の統治改革の中でいかにアフリカ人エリート（「伝統的」エリートそして教育を受けた「近代的」エリートの両者を含めて）を位置付けていたのかを考察する。

第３節　リザーブへの押し込め：居留地（リザーブ）統治改革とアフリカ人エリート

第１節でエヴァンズがアフリカ人への課税がバンバタの反乱の引き金となったと理解していたことは既に指摘したが、彼の見解では、課税は植民地支配体制にとって別の由々しき事態を引き起こしていた。エヴァンズは、本来アフリカ人は首長を中心とした共同体の中に安住し、変化を受け付けない非歴史的存在であったと規定する一方で、白人によって直接・間接に影響を受けたアフリカ人は個人化（individual tendency）の度合いを強めていると述べる[43]。そしてこの傾向を促進したのが小屋税と人頭税である。人頭税を納めるためにアフリカ人の若者は、鉱山や農場、あるいは白人家庭において賃金労働に従事しなければならない。また小屋税を支払うために多くの家長が息子・娘を賃金労働者として白人経済の中へ送り出していた。しかし、労働力としてアフリカ人を活用させることは首長・家長という伝統的権威の相対化をもたらすのである。エヴァンズは、ナタール原住民問題調査委員会でのアフリカ人有力者の聞き取りから、若者が白人の影響の下で賃金労働者として働くことは伝統的権威とは別に白人権力の存在を意識させることにつながり、また自分で貨幣を持ち、税を支払っているという感覚は、伝統的権威からの独立心をもたらすのだと結論する[44]。もはや、アフリカ人の間で首長によって自身が代表されているという感覚は失われ首長を利用した間接統治という支配方法に亀裂が入っており、このままの政策を続ければその裂け目が広がっていくという現状を彼は確認するのである。

アフリカ人の個人化は別の経路からも生じていた。宣教師によるアフリカ人の教育である。20世紀前半までの南アフリカにおけるアフリカ人教育は、各植民地政府（1910 年の連邦成立以後は各州政府）自身が学校を設立せず、宣教師たちがアフリカ人に向けて開いた学校に資金援助をするという形を取っていた。この宣教教育は、ヨーロッパ人を模倣するアフリカ人教育を生み出すとエヴァンズは指摘する[45]。そして、このようなヨーロッパ人の生活を規範とする教育を受けた

---

[42] BWSEA, pp.325-6.エヴァンズは 1912 年にアメリカ合衆国を訪れ、その見聞記を『南部諸州における黒人と白人(Black and White in the Southern States)』(1915)を発表している。エヴァンズは『南東アフリカにおける黒人と白人』の第２版の序文で、アメリカ南部を視察した経験は、彼が南アフリカに対して行った提案への確信を強めたと述べ、アメリカ南部で得た「教訓」は彼の人種隔離主義政策の正当性を補強するものであったことが分かる(BWSEA 2nd ed. p.vii)。

[43] BWSEA, pp.65-74.

[44] BWSEA, pp.81-83.

[45] BWSEA,pp.113-5. 当時、宣教教育はアフリカ人の本来あるべき生活とはかけ離れた教育を行っているという批判が多く見られた。例えば、The Executive of the South African Native Congress “Question Affecting the Natives and Coloured People Resident in British South Africa,” (1903 ?) reprinted in From Protest

「原住民」から彼らの参政権を制限する体制への不満がもたらされているのだという見解を述べる。しかし、エヴァンズはアメリカ南部の再建期に見られるように白人と黒人（アフリカ人）に同等の権利を与えることは人種対立を激化させるだけであり、なんとしても避けなければならないと考えていたのである[46]。

アフリカ人首長を中心とした、植民地体制によって創造された、伝統的権威の低下とアフリカ人エリートによる法的平等を求める動きの２つに対応するために、エヴァンズはリザーブ内でアフリカ人によって運営される議会を開設することを提案する。そのモデルとなったのが、ケープ植民地東部地域トランスカイで行われていたブンガ（Bunga (Transkeian Territories General Council)）である[47]。実際には、植民地政府から派遣された行政官の管理の下で行われた議会であり、植民地政府の意向に添わない決定をすることはできなかったものの、エヴァンズは、この議会によりある程度個人化したアフリカ人が自身の不満を表明する機会を与えることによって、課税の正当性を確保できるのではないかと推定する[48]。すなわち、（もちろんエヴァンズはこのような言葉では語らないが）首長を利用した間接統治という支配方法が揺らいだとき、それを再建し保持しようとして提示されたのがアフリカ人議会という方法であったと考えることができるだろう。このようなリザーブ内のアフリカ人議会開設は、教育を受けたアフリカ人に対しても不満のはけ口を与える。すなわち、教育を受けヨーロッパ人と同等の権利を欲するアフリカ人の目をリザーブ内に向けさせ、その枠内で他のアフリカ人を指導することこそが、彼らの担うべき役割だと悟らせるのである[49]。このようにリザーブの統治方法を改良することによって領域的人種隔離を徹底させる、それがエヴァンズの狙いであった。そしてこのエヴァンズの議論は、彼のアメリカ合衆国南部の視察記によって補強されるのである。

第４節　失敗としてのアメリカ南部

アメリカ人比較史研究者のジョージ・フレデリクソン（George M. Frederickson）が、エヴァンズのアメリカ南部旅行記である『南部諸州における黒人と白人』 への序文で書いているように、アメリカ南部はエヴァンズにとって、「南アフリカにとっての実物教育（an object lesson）であり、

---

to Challenge: Documentary History of African Politics in South Africa Vol. 1 Protest and Hope 1882 – 1934. : 19 に引用されている、ケープ植民地の教育長官 Langham Dale の見解を参照。
南アフリカにおけるアフリカ人教育の制度面における概略は、R Hunt Davis Jr. “The Administration and Financing of African Education in South Africa, 1910-1953,” in Peter Kallaway ed. *Apartheid and Education: The Education of Black South Africans.* Ravan Press, 1984.を参照。

[46] BWSEA,pp.198-202.エヴァンズは、『南部諸州における黒人と白人』において、アメリカ南部の人種対立の激化を端的に表す例として人種暴動とリンチを挙げている(同書 Ch.19 “Blood Guiltiness”を参照)。

[47] BWSEA pp.256-7. トランスカイの制度が、当時の南アフリカにおいて「原住民」統治の模範例として考えられていたことに関しては、Saul Dubow. *Racial Segregation and the Origins of Apartheid in South Africa, 1919-36*. Macmilan, 1989. pp.99-103.を参照。実際、ナタール植民地も同制度を取り入れるために視察団を派遣している(BWSEA,p.257.)。

[48] BWSEA, p.258.

[49] BWSEA, pp.270-1

もし最大限の人種隔離（maximal segregation）がなされなかった場合何が起こるかを表したものであった」[50]。 エヴァンズのアメリカ南部の描写の前提には、社会ダーウィニズム的なドグマがあった。すなわちエヴァンズは、もし二つの人種が地理的・社会的な近接状況のもとに住んでいるとするならば、両人種の競合状態が生じ、対立につながるだろうと考え、そしてこのような対立の結果として両人種の社会的な規範が退化すると主張したのである。このようなエヴァンズの見解は、彼が『南部諸州における黒人と白人』で行ったアメリカ南部の歴史の簡潔な要約と、南北戦争後のアメリカ南部の社会状況の記述に現れている。

エヴァンズは、アメリカ南部の描写をその経済状況から始める。自身ナタール州で農園を営んでいたエヴァンズは、アメリカ南部の多くの耕作可能地が耕されることなく放置されていると指摘する。また彼はより適切な耕作方法を用いれば、同じ広さの土地でより多くの収穫量を得ることができるだろうとも主張する[51] エヴァンズによれば、このような経済的低開発状況をアメリカ南部にもたらしているのは、奴隷制という過去である。彼は、奴隷制は自由労働に比べれば非効率であり、さらに奴隷制は、黒人と白人の両者に労働は唾棄すべきものであるという考えを浸透させたのであると説明するのだ[52]。

エヴァンズは、南アフリカ戦争を経験した南アフリカ白人は、南北戦争を経験したアメリカ南部の状況を自身の土地と非常に類似したものとして捉える傾向があると述べる。しかし、エヴァンズは、このような表面的な類似性にもかかわらず、両者の間にはれっきとした相違が存在するという点を強調する。すなわち、それは南北戦争の結果として生じたアメリカ南部黒人の地位の劇的な変化であり、具体的にはアフリカ系アメリカ人に市民権を認め、また男性には参政権も保証する憲法修正であった[53]。そして、この憲法修正と再建期時代の政治に関して、エヴァンズは彼がアメリカ南部を訪れた当時に支配的だった歴史解釈を繰り返すのである。すなわち南部の状況に無知であった北部が押し付けた政策は失敗であり、再建期は汚職に満ちた時代であると。エヴァンズは次のようにこの時代を要約している。

> 北部は、自由民となった奴隷に参政権を与え、あとは自分でなんとかしろと言った。（中略）しかし、彼ら[北部人]は、二つのその強靭さの異なる人種が、名目的には平等な地位に置かれることによって南部で生じていること、そしてこれから生じるであろうことに関して無知であったのだ。現在、ほぼ 50 年が過ぎ、その経験に立った時、[黒人に参政権を与えるという]この計画が、[アメリカ南部の人種関係という]問題に関して永続的かつ満足のいく答えだったと考える北部人はほとんどいない[54]。

エヴァンズのこの単純化された再建期の歴史によれば、南部白人は腐敗した北部人と無知な元奴隷によって支配された政府に対して激怒し、徐々に投票所を、そしてそれによって政府を「物

[50] Fredrickson, “Introduction,” xiv in Evans, *Black and White in the Southern States*.
[51] Evans, *Black and White in the Southern States*, 38–42.
[52] Evans, 44–48.
[53] Evans, 49–54.
[54] Evans, 148. [ ]内は引用者による注

理的な力」によって取り戻したのである[55]。

エヴァンズは、政治権力を掌握するために暴力を用いることは南部社会に根付いている文化が原因であると主張し、黒人に対するリンチがこの暴力の文化を象徴していると述べる。エヴァンズはいくつかのリンチの事例を紹介した後で、次のように自身の見解を説明する。すなわち白人の南アフリカ人として彼は、白人女性を性的な攻撃から守るためにリンチが必要であると主張する南部白人に同情はするが、ほとんどのリンチ事件において殺されたアフリカ系アメリカ人は無実なのであり、リンチは実際には白人が支配する経済的・社会的な階層を維持するために行使されるのだと[56]。

しかし、リンチ事件においてエヴァンズが最も危惧するのはアフリカ系アメリカ人の生命ではない。彼は、南部白人にリンチが及ぼす影響をこそ問題視するのである。彼は、次のように書いてこの点を説明する。

> このような群衆によるリンチがもたらす黒人に対する罪は大きい。しかし、白人に対する罪はより大きい。なぜなら、黒人の罪人（black criminal）が一人、群衆の暴力によって殺される時に、千もの白人の罪人が生まれるからである[57]。

エヴァンズにとって、奴隷解放後のアメリカ南部の歴史は、黒人と白人の間に人種的な平和を醸成することに失敗した事例であった。そして、この人種間の協調こそ、いかに偽善的に感じられようともエヴァンズが、バンバタの反乱後にナタール州の領域的人種隔離政策によってもたらされるべきだと考えていた原住民政策の要諦であった。エヴァンズは、再建期後に頻発するアフリカ系アメリカ人のリンチ事件が象徴するように、アメリカ南部における白人と黒人の緊張関係は法的に平等な関係にある二つの異なる人種が、居住する地域を共有することはできないということを示しているだと、第一の読者として想定される南アフリカ白人に説明するのである。エヴァンズは、アメリカ南部の旅行記を以下のような言葉で締めくくっている。

> 合衆国は 50 年前に完全な参政権をアフリカ人に与えるという実験を行った。結果は完全なる失敗であった（disastrous）。南アフリカにおいて、同じ道をたどることはできない。南アフリカ人にとって最初の義務とは、より良い道を見つけることである[58]。

それでは、エヴァンズの考える「より良い道」とは何であったか。それは先に見た『南東アフリカにおける黒人と白人』の議論で明白に示されている。エヴァンズにとって人種問題の最良のそして唯一の解決策は「領域的人種隔離」であった。領域的人種隔離体制のもとで、白人と黒人は別々の場所に住み、一方は市民として政治に参加し、他方は狭矮な土地で首長の臣民として統治されるのである。そして、このような方針こそが、南アフリカ連邦全体で 1913 年土地法を嚆矢と

---

[55] Evans, 53. On the history of American Reconstruction see, Eric Foner, *Reconstruction : America's unfinished revolution, 1863-1877*, updated ed. (New York: Harper Perennial, 2014).

[56] Evans, *Black and White in the Southern States*, 166–82.　南アフリカとアメリカ南部の暴力の歴史的比較研究である次の文献も参照。 Ivan Evans, *Cultures of Violence: Racial Violence and the Origins of Segregation in South Africa and the American South* (Manchester: Manchester University Press, 2011).

[57] Evans, *Black and White in the Southern States*, 82.

[58] Evans, *Black and White in the Southern States*, 283.

する一連の原住民政策に係る法律によって推し進められていったのである。

アメリカ南部視察を経て 1915 年に出版された、『南東アフリカにおける黒人と白人』の第二版の序文においてエヴァンズは、アメリカ南部を旅したという経験が、彼がこのナタール州を念頭に議論した政策が正しいものであると確証を与えた主張する。エヴァンズは、アメリカの経験は「悲劇として記述できる」[59]のに対して、1913 年土地法を通過させた南アフリカ連邦に関しては、初版を書いていた当時の 1910 年に比べてより希望を持っていると述べるのである[60]。

次節では、原住民行政法（1927 年）・原住民信託土地法（1936 年）という原住民政策の核をなす法律をめぐる議論を中心に、エヴァンズと同郷であるナタール州出身の政治家の果たした役割を検討する。

第５節 ナタールから連邦レベルの「原住民」政策へ

デュボウやポゼルに代表される 1980 年代末アパルトヘイト体制の終わりが見え始めた時期に出版されたアパルトヘイト政策の形成及び実施に関わる研究は、人種隔離やアパルトヘイトを一貫した計画に基づいた政策ではなく、むしろいくつもの法の積み重なりの結果として、また様々な利害関係の折衝の結果として生じた体制であったことを明らかにしてきた[61]。綿密な史料調査に基づいた彼らの研究は、それまでともすれば少数の事例をマルクス主義など理論的な観点につなぐことで、人種隔離の起源を説明してきた研究状況[62]を乗り越え、現在に至るまで定説として参照されている。

しかし、運用上、各州、都市ごとに相違があったことは確かだとしても、人種隔離・アパルトヘイト政策の核となった法律を挙げることはできる。1910 年の連邦成立から、アパルトヘイト政権の成立を見る 1948 年に限れば、そのような法律は以下のようにまとめることができるだろう。第一にアフリカ人の取得することのできる土地を南アフリカ全土の 7.5%と大幅に制限した 1913 年の原住民土地法、第二にマムダニの述べるような分岐的な法制度を連邦レベルで確立した 1927 年の原住民行政法、第三に 1936 年に合わせて提出され、成立した次の二つの法律、すなわち 1913 年土地法の時点では未確定だった部分を確定した信託土地法とケープ州のみに残っていたアフリカ人の選挙権を剥奪した原住民代表法である。

1913 年土地法については既に多くの論者が書いており[63]、かつその成立の過程は、本章が扱っ

---

[59] Evans, *Black and White in South East Africa*, vii.
[60] Evans, *Black and White in South East Africa*, x.
[61] Dubow, *Racial Segregation and the Origins of Apartheid*; Posel, *The Making of Apartheid, 1948-1961*.
[62] このような傾向の代表例としては、次のウォルペの論文を挙げることができる。Wolpe, “Capitalism and Cheap Labour-Power in South Africa.”
[63] 1913 年法に関する史学史的な整理として、William Beinart and Peter Delius, “The Historical Context and Legacy of the Natives Land Act of 1913,” *Journal of Southern African Studies* 40, no. 4 (July 4, 2014): 667–88, https://doi.org/10.1080/03057070.2014.930623.を参照。日本語で読めるものとしては、松野妙子, “南アフリカ人種差別土地立法の起源―１９１３年の「土地法」についての一考察,” in 世紀転換期の世界：帝国主義支配の重層構造, ed. 油井大三郎 (未来社, 1989).が簡潔に成立の過程と法の内容をまとめている。

てきたナタール植民地・州における「原住民」政策よりも、連邦レベルでの「原住民」政策の原則のコンセンサスを確立するために 1903 年に設置され、1905 年まで続いた南アフリカ原住民問題委員会（South African Native Affairs Commission, SANAC）とより密接に関係している。そのため本節では 1913 年土地法の説明を割愛し、残りの二つの法の制定過程に着目することで、ナタール植民地の「原住民」政策のあり方が連邦レベルの政策に与えた影響を確認する。具体的には、エドガー・ブルッケスとヒートン・ニコルズという二人のナタール州出身の政治家に注目し、彼らの「原住民」政策論を検討する。両者ともに、「原住民」政策を論じるにあたっては、ナタール植民地初代原住民政策長官であったセオフィラス・シェップストンを重要視し、彼の政策に言及している。1927 年原住民行政法と 1936 年の二つの法にそれぞれが果たした役割を検討することで、「原住民」統治における「伝統」を築いた人物として言及されるシェップストンの政策像が、その像の変遷を伴いながら、連邦レベルでの人種隔離政策のモデルとして認識されていく過程を明らかにする。

5.1. ブルッケスと 1927 年原住民行政法：分岐体制の基礎

1927 年にヘルツォーク政権下で成立した原住民行政法は、連邦レベルでの原住民統治行政の一元化を図るとともに、原住民政策にかかわる法の立法過程を立法府から切り離し、行政府のみによって、具体的には南アフリカ総督（Governor-General）の宣言によって、法を制定することを可能にした。この点で 1927 年法は、政治学者マムダニの提示する入植者を中心とした市民社会の成員とアフリカ人首長の権力のもとにあるアフリカ人臣民を二分する分岐体制の祖型として捉えることができる[64]。

1927 年法は連邦レベルでの原住民政策の一元化を大きく促進した。それは以下の三点にまとめることができる。第一に、連邦レベルでの権力の集中という側面があった。最高首長（Supreme Chief）として位置付けられる総督（ただし、実質的には助言を行う原住民政策省長官）は、原住民行政官（Native Commissioner）、首長、及びヘッドマンを一存で任命することができると定められた。また立法においても、総督は議会の承認を得ることなく、自身の宣言によって立法及び法改定を行うことができるとされた[65]。実際にこのような形で法改定がなされた事例としては、ナタール植民地において「原住民」の慣習法を成文化した 1891 年の原住民法ナタール法典を、1932 年に宣言によって改定している事例を挙げることができる[66]。第二に、それまで州及び地域

[64] Mahmood Mamdani, *Citizen and Subject: Contemporary Africa and the Legacy of Late Colonialism* (Princeton: Princeton University Press, 1996), 71–72.
[65] T. R. H. Davenport and Christopher C. Saunders, *South Africa: A Modern History*, 5th ed (Hampshire [England] : New York: Macmillan Press ; St. Martin's Press, 2000), 71–72.
[66] Mamdani, *Citizen and Subject*, 71. 原住民法ナタール法典の内容については、"Natal Code of Native Law," *African Studies* 2, no. 1 (January 1943): 1–26, https://doi.org/10.1080/00020184308706600.を参照。この法改定に対する白人リベラルからの反論については、以下の 1936 年法に関する議論及び本博士論文第 6 章を参照。

ごとに分かれていた原住民政策[67]を一元化した。アフリカ人同士の係争は、原住民法廷において、そしてアフリカ人の慣習法によって裁定されることとされたのである[68]。第三に原住民法廷を管轄する省庁を法務省ではなく原住民政策省と定めることで、省庁間の役割を明確にした[69]。それまでは執務官（Magistrate）の所属がナタール州においては法務省、トランスカイ地域は原住民政策省と分かれていたように[70]、実施主体の統一が取れていなかった。1927 年法は「原住民」政策を実施する省庁を原住民政策省に一元化したのである。

1927 年の原住民行政法は、1924 年から 1939 年まで連立政党を変えながら長期に渡ったヘルツォーク政権が、一貫して推し進めた人種隔離政策の一部であった。そして、ヘルツォーク政権誕生当初、その「原住民」政策の学術的な支えてとして重用されたのが、当時トランスヴァール・ユニバーシティ・カレッジ（現プレトリア大学）で政治学の講師を務めていたエドガー・ブルッケスであった。ブルケッスの『南アフリカにおける原住民政策の歴史』は彼の博士論文を本にしたものであり、ブルーブックを中心的な資料として使いつつ、ケープ植民地、ナタール植民地、トランスカイ地域、オレンジ自由共和国、トランスヴァール共和国という各地の「原住民」政策及び 1910 年の連邦成立後の南アフリカ全般の政策を綿密にまとめている[71]。ブルッケスは、初版の出版に際して、ヘルォツークから助力を得ていた。具体的には、アフリカーンス語を中心としたナショナル出版社(Nasionale Pers)からヘルツォークの資金援助を得て出版されたのである。またヘルツォークは、この本を原住民政策省の役人に配布するなど、自身の推し進める政策の理論的な支えになると考えていたのである[72]。

このように高い評価を受けた『南アフリカにおける原住民政策の歴史』であるが、ブルッケスは、1977 年に出版した回顧録において、この博士論文を基にした本に対して、非常に入り混じった感情（very mixed feelings）を持っていると述べる。それは、「調査はかなりの量にのぼり、本自体は新しい知見を広げ、概ね信頼でき、正しい。にもかかわらず、そこから引き出された政治的な結論は擁護できるものではなく、今日では私自身支持することはできない」[73]からである。ヘルツォークとブルッケスは、人種隔離という大枠では一致していたものの、重点の置き方は異なっていた。ヘルツォーク自身、柔軟な政治家であり、彼の人種隔離政策は、様々な立場の人を糾合する力があったのである[74]。しかし、政権の主な支持者が、1922 年の鉱山ストライキ時の強権的な鎮圧など、資本家よりのスマッツ政権に反発心を抱いている白人労働者であったことから、その政策も、職業におけるカラーバーを設け、またアフリカ人の都市への流入を規制するという、

---

67 各州・地域ごとの「原住民」政策の歴史と相違点については、Edgar Harry Brookes, *The History of Native Policy in South Africa from 1830 to the Present Day*, 2nd rev ed (Pretoria: Van Schaik, 1927).を参照。
68 Martin Chanock, *The Making of South African Legal Culture 1902-1936: Fear, Favour and Prejudice* (Cambridge: Cambridge University Press, 2006), 328.
69 Dubow, *Racial Segregation and the Origins of Apartheid*, 91–92.
70 Brookes, *The History of Native Policy*, 154–55.
71 Brookes, *The History of Native Policy*.
72 Dubow, *Racial Segregation and the Origins of Apartheid*, 46 n.120.
73 Edgar Harry Brookes, *A South African Pilgrimage* (Johannesburg: Ravan Press, 1977), 20.
74 Dubow, *Racial Segregation and the Origins of Apartheid*, chap. 5.

アフリカ人及びカラードを犠牲にし、貧困白人層の経済状態を改善する方向性を持っていた[75]。ブルッケス自身もプレトリア大学時代に多数のアフリカーナーの知人を得、また貧困白人層への懸念を共有していたが、ヘルツォークの推し進める人種隔離政策に対しては、それが白人の要求のみを考慮し、アフリカ人に対し不利な条件を押しつけるトランスヴァール共和国的な伝統に立ったものだと批判する[76]。またデュボウは、ブルッケスが、アフリカ人プロレタリアートの形成を阻止することを目的としていたという観点から、ブルッケスがヘルツォーク政権の政策に反対するに至る論理を説明する。すなわち、白人の住む場所とは別に居留地を設け、居留地を伝統的首長によって統治され、ある程度の自律的な経済圏を保持する場とすることで、政治的な要求をする急進的なアフリカ人プロレタリアートの形成を防ぐことが、目的であった。しかしブルッケスにとっては、ヘルツォークの政策は、アフリカ人プロレタリアートを生み出していると考えられた。ヘルツォーク政権の白人労働者の要求のみを考慮した政策の結果として、白人から譲歩を引き出すことなく設定された居留地はあまりにも狭矮であり、アフリカ人は都市に出ざるをえないからである[77]。また戦間期の人種隔離政策の形成を労働政策の観点から検討したレイシーは、ブルッケスが 1927 年原住民行政法を、本当の意味でのシェップストンの伝統に立つものではないと批判していたことに言及している。レイシーの要約するところでは、ブルッケスは、立法を可能にし、行政による独裁を可能にする 1927 年法は、実際にはアフリカ人の段階的な文明化を認めていたシェップストンの政策とは異なると批判していたのである[78]。

上記のブルッケスによるヘルツォーク政権の人種隔離政策批判に関する分析は、ブルッケス自身の回顧録を含め、連邦レベルの観点に立ったものである。しかし、生まれてから大学時代までをナタール州の州都ピーターマリツバーグで過ごしたブルッケスのアフリカ人統治政策論をナタール州での経験に位置付けることで見えてくるのは、ブルッケスの政策論とナタール植民地における原住民政策、特にシェップストンとの繋がりである。以下では、『南アフリカにおける原住民政策の歴史』におけるシェップストン像を検討することで、ナタールの原住民統治行政と連邦レベルの原住民政策との繋がりを分析する。

序章で述べたように、ジェフ・ガイ（Jeff Guy）は、シェップストンの詳細な伝記的研究において、シェップストン自身はのちにシェップストン・システムと呼ばれる体系的な統治体制を敷いていたわけではないと指摘し、シェップストンをイギリス植民地支配における間接統治の源流とする考え方を後年の再解釈によって作られたものであると説明する[79]。そして、ガイは、シェッ

---

[75] William Beinart, *Twentieth-Century South Africa*, 2nd ed (Oxford ; New York: Oxford University Press, 2001), 115.
[76] Brookes, *A South African Pilgrimage*, 22–23.
[77]Dubow, *Racial Segregation and the Origins of Apartheid*, 70–71. 同様の主張は、ヴィッツ大学の歴史学教授ウィリアム・マクミランによってもなされている。マクミランの人種隔離政策批判については、堀内隆行『異郷のイギリス 南アフリカのブリティッシュ・アイデンティティ』 (丸善出版, 2018), chap. 4.を参照。
[78] Lacey, *Working for Boroko*, 94–101.
[79] Guy, *Theophilus Shepstone and the Forging of Natal*, 4.

プストンを間接統治の創始者、そして南アフリカにおいては人種隔離体制の最初の提示者として祭り上げたのが、エドガー・ブルッケスであったと主張するのである[80]。ただし、エヴァンズが領域的人種隔離政策を提示する際に、入植者の管轄からは切り離されたプロセスにおいて原住民政策は策定されるべきであると述べていたのと同様に、ブルッケスも一方で入植者をアフリカ人の抑圧者として非難し、また他方で宣教師をアフリカ人からヨーロッパ人を作り出すという夢想的な考えを持っている人物として批判する。ブルッケスにとって、シェップストンはアフリカ人の生活を知悉し、入植者と宣教師の中庸をいく、理想的な統治者であった[81]。それゆえに、ブルッケスは、シェップストンを、ナタール植民地だけでなく、南アフリカ全体における人種隔離統治を開始した人物として描く。具体的には、その元となった政策とは、居留地の設定と首長の任命と、そして植民地総督が名目上の最高首長として「原住民」政策を行政権力が一手に担う統治体制である。さらに、ブルッケスは、1877 年にトランスヴァールが一時的にイギリス植民地として併合された時に、シェップストンが、トランスヴァール植民地の長官（administrator）として就任したことで、トランスヴァールにもシェップストン流の統治政策が持ち込まれたと主張する[82]。

しかし、ブルッケスのシェップストン像は、その強権性に重きがあるのではなく、ズールー語を流暢に話し、アフリカ人の生活を知ることで彼らの文化にあった統治を行う能力にあった。そして、歴史的な事実とは異なっている[83]が、ブルッケスは、シェップストンのナタール植民地政策における貢献は、「白人と黒人を区別することが、必ずしも前者が後者を従属させることには繋がらないという理解であった」とするのである[84]。それゆえ、ブルッケスは、 シェップストンが原住民長官を退任した 1875 年以降の入植者が主導権を握ったナタール植民地政策に対しては批判的であり、執筆当時のナタールの政策をシェップストンの時代からの退化であると評価している[85]。

このようなブルッケスのシェップストン像は、しかし彼にのみ見られるものではなく、ナタール植民地において「原住民」政策の実務を担当していた官僚に連綿と受け継がれている考え方であった。例えば、ズールーランドの執務官（Magistrate）であったジェイムズ・スチュワートは、バンバタの反乱の歴史を執筆し、その中で「原住民」政策がアフリカ人の実際の要求を反映していないことの表れであり、シェップストン時代を見直す必要があると主張している[86]。バンバタ

---

[80] Guy, 503.
[81] Guy, 503.
[82] Brookes, *The History of Native Policy*, 51.
[83] この点については、Hlonipha Mokoena, “Zuluness on Trial: Re-Reading John W. Colenso’s 1874 Langalibalele and the AmaHlubi Tribe: Being Remarks upon the Official Record,” *The Journal of African History* 60, no. 01 (March 2019): 67–85, https://doi.org/10.1017/S0021853719000355.を参照。
[84] Brookes, *The History of Native Policy*, 62. “Probably the most important point in the whole Shepstone Policy, and what makes it so valuable, in spite of its defects in details and its laissez-fair, to the native Administrator of to-day, is the realization that differentiation between white and black does not necessarily mean the subordination of the latter.”
[85] Brookes, 148.
[86] James Stuart, *A History of the Zulu Rebellion, 1906: And of Dinuzulu’s Arrest, Trial, and Expatriation* (London : Macmillan, 1913), http://archive.org/details/historyofzulureb00stua.

の反乱に関する詳細な研究を為したシューラ・マークスは、この反乱後に設置された 1906 年から 1907 年にかけてのナタール原住民政策委員会の共通理解は、「寛大で同情的な父親」シェップストンの「古き良き時代」を見習うことであったと述べている[87]。

また、スチュワートの上司であったS. O. サミュエルソン（ S. O. Samuelson）もシェップストンの信奉者であった。責任政府のもとで入植者に押されて 1892 年に原住民長官に就任したフレデリック・ムーア（Frederick Robert Moor）のもとで次官に就任したサミュエルソンはシェップストンが構築した「部族システム」の維持に尽力し、入植者の主導で制定されたナタール原住民法典には批判的であった[88]。ブルッケスと異なり、サミュエルソン自身が積極的に政策論争に加わるということはなかったが、ブルッケスは、サミュエルソンが私的に保存していた文書にアクセスし、サミュエルソンが残したメモランダムを活用して、『原住民政策の歴史』を書いており、その影響は随所にあらわれている[89]。

このようなナタールにおける「原住民」政策の流れを踏まえれば、ブルッケスが、政権発足当初こそヘルツォークを支持したものの、20 年代後半から徐々に離れていき、明確な反対者となったのは驚くべきことではない。ナタールにおける領域的人種隔離の提唱者たち自身は、入植者中心の議会と、アフリカ人のヨーロッパ人化を目指す宣教師の中間を行く、最も現実的な政策提言者として自己を規定していたからである。アフリカーナーの利益を代弁しなければならないヘルツォーク政権とは遅かれ早かれ対立する宿命にあったのである。

しかし、ブルッケスや第 2 章で述べるロラムなどナタール出身の白人リベラルがヘルツォーク政権から離れていく中で、1936 年の原住民政策関連法の制定にあたって、強力な推進者となったのはナタール出身の上院議員ヒートン・ニコルズであった。

5.2. ニコルズと 1936 年信託土地法・原住民代表法：信託統治としての居留地

1936 年信託土地法と原住民代表法は、アパルトヘイト体制以前の人種隔離政策を完成させた法であると考えることができる。すなわち 1913 年土地法の時点では未確定だった部分を確定した信託土地法は、白人と黒人が住むべき土地を分けるという領域的人種隔離政策の前提となる土地制度の基盤を完遂し、ケープ州のみに残っていたアフリカ人の選挙権を剥奪した原住民代表法は、政治参加からアフリカ人を排除する体制を連邦全体で遂に確立したのである。

この二つの法案を、政権党であるナショナリスト党の議員C.F. スタラールト(C. F. Stallard)とともに執筆したのが、南アフリカ党議員のヒートン・ニコルズであった。ニコルズがこの法案通過に果たした役割は、すでに先行研究において述べられている。それらをまとめるならば、ニ

---

87 Marks, *Reluctant Rebellion*, 13.

88 Carolyn Hamilton, *Terrific Majesty: The Powers of Shaka Zulu and the Limits of Historical Invention* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1998), 131–32.

89 Brookes, *The History of Native Policy*. 例えば、バンバタの反乱について（79-81）、原住民法からの除外規定について、慣習法である原住民法の法典化（198）（codification）に関して（227）、それぞれサミュエルソンの資料を利用している。

コルズは、人種隔離政策を、国際連盟の規定する信託統治と同類の制度として規定することで、イギリス帝国内での南アフリカの地位を傷つけることなく、正当化することを可能にし、また居留地におけるアフリカ人としての文化的一体性、「共同性（Communalism）」を強調することで、アフリカ人プロレタリアート形成に抗する橋頭堡として居住地を捉える人種隔離政策を提示したということができるだろう[90]。

しかし、ニコルズがズールーランドにおけるサトウキビ農場の経営者であったことを考慮し、ナタール州での「原住民」政策に注目すると、特に首長の権限に関して違った側面が見えてくる。序章のズールー・ナショナリズムに関する先行研究でまとめたように 1920 年代はズールー王家、特に当時のズールー王ソロモン（Solomon kaDinuzulu）をズールー人全体の最高首長（Paramount Chief）として政府に認めるように請願する運動が高まりを見た。そしてこの運動は、ズールー人の伝統的エリートだけでなく、ジョン・デュベ（John Dube）のようなミッション・エリート、さらには白人実業家も含んでいたのである。白人実業家たち、特に 3 章の対象であるキリー・キャンベルの兄ウィリアムやニコルズなどのサトウキビ産業の経営者たちは、労働力としてのアフリカ人労働者の確保に苦労しており、そこで彼らが目をつけたのがソロモンであった。実際に、ソロモンは、政府の関心を買うために第一次大戦時の南アフリカ軍へのアフリカ人労働者募集に協力していた。ニコルズなど経営者たちは、ズールー王家のアフリカ人民衆に対する影響力に期待し、原住民政策省に掛け合ったのである[91]。ニコルズは、南アフリカのアフリカ人統治政策について講演あるいは回顧録で言及する際に[92]、シェップストンが偉大な伝統を築いたと述べているが、ブルーブックや原住民政策省の文書を大量に読み込んで記述するブルッケスとは異なり、その内容は一般的で、伝聞レベルに過ぎない。しかし、伝統的権威の糾合力の利用という点で、ニコルズは、シャカのイメージを自身の統治に利用したシェップストン[93]の継承者であったとも考えられるのだ。

そして、労働力調達及び、居留地の経済開発という観点は、ニコルズの「原住民」政策論の基礎となっていた。ニコルズの作成した、1936 年原住民法案は、フォートヘア大学教授の D.D.T. ジャバヴなどアフリカ人エリートからのみならず[94]、白人リベラルからも批判にさらされた。ヨハネスブルクに本拠を置く人種関係研究所の所長であるレイナルト・ジョーンズ（J. D. Rehinallt Jones）は妻であるエディス・ジョーンズとの共著で、同研究所が発効する『人種関係』に「信託統治の解釈」と題する論文を発表し、1936 年の信託土地法に関して詳細な批判を行っている[95]。ジョーンズにとっては、アフリカ人の共同性を理由に、矮小な居留地で生活することをア

---

[90] Dubow, *Racial Segregation and the Origins of Apartheid*, 144–46; Lacey, *Working for Boroko*, 273–308.
[91] Nicholas Cope, *To Bind the Nation: Solomon KaDinuzulu and Zulu Nationalism.* (Pietermaritzburg: University of Natal Press, 1993), 193–97.
[92] George Heaton Nicholls, *South Africa in My Time* (London: Allen & Unwin, 1961), 278–82.
[93] Hamilton, *Terrific Majesty: The Powers of Shaka Zulu and the Limits of Historical Invention*.
[94] ジャバヴによる批判は、Nicholls G. Heaton and Davidson D. T. Jabavu, *The Native Bills: And D.D.T. Jabavu and Others: Native Views on the Native Bills*, Colin Webb Natal and Zululand Series 8 (Durban: Killie Campbell Africana Library, 1995) を参照。
[95] J. D. Rheinallt Jones and Edith B. Jones, “Interpretations of Trusteeship,” *Race Relations Journal* 8, no. 3

フリカ人に強いる同法は、アフリカ人の貧困化をもたらす偽善でしかなかった。ジョーンズは、南アフリカは「自由と奴隷に分かれている（half free, half slave)」ことなどできないと結論する[96]。この批判に対し、ニコルズは、『人種関係』の編集部に抗議の手紙を送り、自身の立場を擁護している。彼は、居留地が開発不可能であるなどということは、アフリカ人の能力を低く見積もっているのであり、政府は居留地に多額の資金援助を行っていると述べる。農業技術の発達によって、白人農家の土地で小作農として働くアフリカ人は近々必要とされなくなり、居留地に追い返されることが想定されるのであるから、居留地を定めること自体を批判するのではなく、そこをいかに経済的に開発するかを議論すべきであると、自身が成立にかかわった 1936 年法を正当化するのである[97]。この点で、ニコルズの議論は、アパルトヘイト体制初期において、居留地が実際にアフリカ人の住むべき場所として経済的に機能することが可能であることを実証しようとした、トムリンソン委員会（1950-54）の議論につながるものだと考えることもできる[98]。

そして、居留地をアフリカ人の本来いるべき場所であり、独自の政治的体制として発展させるべきだという考え方は、アパルトヘイト体制下においてバンツースタン政策として実践されていくことになる。

おわりに

以上、本章は、ナタール州出身の「原住民」政策の専門家の議論を追ってきた。人種隔離政策の起源に関する古典となっているデュボウの『人種隔離政策の起源』は、アパルトヘイトヘイト体制の成立を、アフリカーナー・ナショナリズムに帰すか、あるいは資本主義の帰結であるかを論じた「ラディカル＝リベラル論争」を超えて、人種隔離というアイディアが、同床異夢ではあったが、様々な立場にある人々を糾合する効果も持ち、そのことが南アフリカにおいて人種隔離政策が実施されてきた要因であると説明する[99]。本章は、このデュボウの議論を引きつつも、ナタール出身の政治家たちに注目し、彼らの政策論と連邦レベルの隔離政策とのつながりを検討してきた。

結果として、シェップストンから続く連綿と続くナタールの隔離政策が連邦の人種隔離につながったという単純な影響関係は否定される。むしろバンバタの反乱という「原住民」政策の失敗と考えられる自体が政策の見直しを引き起こし、この見直しの過程で生じた領域的人種隔離という考え方や、シェップストン・システムというシェップストン退任後に形成されたシェップスト

(1941): 34–37.　ニコルズの手紙からは、ブルッケスも同様の批判を『人種関係』誌で行っていることがわかるが（ニコルズが編集部に反論の手紙を書いている)、こちらは現物を確認できなかった。Heaton Nicholls to the Editor of Forum, 26th Nov. 1950, KCM3373a, Heaton Nicholls Papers, File 5, Killie Campbell Africana Library.

96 Jones and Jones, 37.

97 Heaton Nicholls to the Editor of Forum, 11th Nov. 1941, KCM3372b, Heaton Nicholls Papers, File 5, Killie Campbell Africana Library.

98 Adam Ashforth, *The Politics of Official Discourse in Twentieth-Century South Africa* (Oxford : Clarendon Press, 1990), chap. 5.

99 Dubow, *Racial Segregation and the Origins of Apartheid*.

ン時代の政策の特定の解釈が、その後の連邦レベルでの政策においては重要であった。さらに、ナタール出身者の人種隔離に関する考え方も一様ではなく、時の政権にとって親和性の高い論者が政策決定にかかわっていくというあり方が明らかになった。

人種隔離を論じた白人リベラルたちは、ウェーバーの言葉を引くならば、転轍手であった。彼ら自身が人種隔離につながる動力となることはなかったが、彼らの提示した議論には、人種隔離政策を特定のあり方へ向けて形成する、そのような力があったのである。しかし、本章で取り上げたイギリス系の隔離論者たちは、もはや彼ら自身賛同できない人種隔離、そしてアパルトヘイトという巨大な列車が通過していくとき、それを阻止することも、引き戻すこともできずに、ただ不満気に見送ることしかできなかったのである。アパルトヘイトに抵抗する際の主要な役割はアフリカ人に委ねられた。しかし、抵抗運動へと話を向ける前に、本章で扱った政治家たちが基礎を築いたアフリカ人の「伝統」を利用する人種隔離体制はどのように人口に膾炙していったのかが検討されなければならないだろう。以下の第 2 章から第 5 章まで、この問題を扱っていく。

第２章　南アフリカにおけるアメリカ南部黒人教育の受容

はじめに

1994 年４月、南アフリカ共和国（以下、南ア）は全人種が参加する選挙を初めて実施した。南アにおける人種差別の長い歴史に終止符を打つ、その記念すべき投票の場所としてアフリカ民族会議(ANC)議長ネルソン・マンデラは、初代議長ジョン・デュベゆかりの地オシャングゲ学院を選んだ。デュベは 1912 年の南アフリカ原住民民族会議(South African Native National Congress, 現在のアフリカ民族会議（ANC）)設立に携わった人物であり、彼の墓所はオシャングゲ学院にあった。マンデラは、「82 年前に種をまかれた使命が今ついに実を結ぼうとしているわけだから、わたしがその墓所の近くで一票を投じることは、歴史の大きな環を完成させる行為であった」と回想している[1]。全人種参加選挙という解放のモメントに際して、オシャングゲ学院は ANC の使命が完了したことを象徴する場所として選ばれた。しかし、オシャングゲ学院は南アフリカの黒人史において様々な意義付けを持ってきた[2]。その一つとして、南アフリカのアフリカ人とアメリカ黒人との結びつきを示す場所としてのオシャングゲ学院を挙げることができる。創設者デュベは、同世代

---

[1] ネルソン・マンデラ(東江一紀訳)『自由への長い道』下巻、NHK 出版, 一九九六年, 四三四-五頁（Nelson Mandela, *Long Walk to Freedom*[Little, Brown and Company, 1994], 538)。アフリカ民族会議（African National Congress）は、アパルトヘイト体制への主要な抵抗団体であり、現在南アで与党を担っている。同組織は 1912 年に設立され、当初の名称は南アフリカ原住民会議（South African Native National Congress）であった。本章では、便宜上一貫して ANC という呼称を使用する。

[2] ここでは、「黒人」という言葉を南アフリカ解放運動史の文脈における用法として意識的に用いた。すなわち、黒人意識運動の指導者であるスティーブ・ビコが運動の綱領として発表した「黒人意識運動とは何か」の中で述べるような、白人支配体制に反抗する主体としての「黒人」である。ビコ スティーヴ・ビコ, 「黒人意識運動の定義」『俺は書きたいことを書く: 黒人意識運動の思想』峯陽一他訳(現代企画室, 1988 年), 96–105.この点において、オシャングゲ学院及び同学院が位置するイナンダ（Inanda）におけるアフリカ人とインド人の関係は重要である。イナンダと隣り合うフェニックス（Phenix）という町では、インドの独立指導者モハンダス・ガンディーが印刷所を開き、新聞を発行していた。デュベ自身ズールー語・英語併記の新聞 Ilanga lase Natal (ナタールの太陽)を発行していた。Isabel Hofmeyr, *Gandhi's Printing Press: Experiments in Slow Reading* (Cambridge, Mass. ; London, England: Harvard University Press, 2013), 55–59.また両者にはブッカー・T・ワシントンの自助論に強い影響を受けたという思想的な共通点も存在する。本章では、取り扱うことができないがインドの独立運動に対するワシントンの影響に関しては、Nico Slate, *Colored Cosmopolitanism: The Shared Struggle for Freedom in the United States and India* (Cambridge, Mass: Harvard University Press, 2012), chap. 1.を参照。

しかし、地理的近接と思想的類似性にもかかわらず、デュベとガンディーの両者には交流はなかった。むしろ、第 1 章で述べたバンバタの反乱においてガンディーはインド人の救援部隊を組織し、イギリス帝国への忠誠を積極的に示そうとしていた。Ashwin Desai and Goolam H. Vahed, *The South African Gandhi: Stretcher-Bearer of Empire*, South Asia in Motion (Stanford, California: Stanford University Press, 2016).南アフリカにおける帝国という存在は、世界中から多様な人々を呼び寄せ結びつけるとともに、社会的階層や人種に基づいて、異なる集団として切り離し対立させる役割を果たしたと考えることもできるだろう。現在では、しかし、イナンダは 20 世紀の解放運動指導者揺籃の地として、デュベとガンディー両者の写真が入ったのぼりを道に立てて観光客を呼び込もうとしている。

のアフリカ人エリートの多くと同様に教育の機会を国外に求め、アメリカ合衆国で学んだ。彼は留学中に黒人指導者ブッカー・T・ワシントンと彼が校長を務めるタスキーギ学院を訪れて感銘を受けた。同校をモデルとして 1901 年にナタール州ダーバン近郊イナンダに設立されたのがオシャンゲ学院である[3]。

しかし、タスキーギ学院は異なる政治的立場の人々からも注目されていた。ANC の設立と同年、タスキーギ学院は黒人教育に関する国際会議を開催した。当時ワシントンの秘書であり、後年シカゴ大学において著名な都市社会学者として活躍するロバート・パークは同会議の活動報告において、アメリカのみならず、アフリカ、ヨーロッパ及びカリブ海地域という多様な地域から宣教師や教育学者など植民地教育に関わる人々が出席していたと述べる[4]。そして、その出席者の中には南ア東部ナタール州議会議員のイギリス系白人モーリス・エヴァンズが含まれていた。前章で述べたように、エヴァンズは、南アにおけるアフリカ人統治、当時の言葉では「原住民」問題の専門家として認められており、自身が提唱する領域的人種隔離政策、すなわちアフリカ人を狭い土地に押し込め労働力として利用するという統治形態を維持するための方策として、職業訓練、特に農業を中心としたタスキーギ学院の教育実践に注目したのである[5]。

なぜ領域的人種隔離政策の推進者と、隔離政策への主要な抵抗団体の創始者という対照的人物たちに、アメリカ南部黒人教育への関心が共有されたのか。彼らのタスキーギ学院理解の共通点と相違点は何か。そして、タスキーギ学院から受けた影響や同校を訪問した経験が、南アでの政策や活動に反映されたことの南アフリカ史における意義は何か。本章はこれらの問いを考察することを通して、教育思想の伝播の複層性を明らかにし、伝播のあり方それ自体を俎上に載せる。

第１節　循環的なトランスナショナル・ヒストリーを目指して：先行研究のまとめと本章の視点

アフリカ人教育を通したアメリカ南部と植民地期アフリカとのつながりを論じた先行研究の数は多い。しかし、先行研究のほとんどは植民地期アフリカへのアメリカ南部黒人教育の影響を、支配者側である白人に関しては植民地統治に関する技法の移転の一環として、また被支配者であるアフリカ人に関してはパン＝アフリカニズムの一例として個別に論じてきた[6]。統治技法の一環

---

[3] Heather Hughes, *The First President: A Life of John Dub*e, *Founding President of the ANC*. (Jacana Media, 2011), 93.

[4] Robert Park, “Tuskegee International Conference on the Negro,” *The Journal of Race Development* 3, no. 1 (1912): 117, https://doi.org/10.2307/29737946.

[5] Maurice S. Evans, “Education among the Bantu of South East Africa,” *Southern Workman* 41 (1912): 363-68. 「領域的人種隔離」という用語は、アメリカ南部と対比し南アの人種隔離の特徴を示すために用いた。両地域の人種隔離の類似性と相違点について、峯陽一「アメリカの経験、南アフリカの経験」川島正樹編著『アメリカニズムと人種』（名古屋大学出版会、2005 年）が簡潔にまとめている。

[6] 白人側に関しては主に以下の文献を参照。Kenneth King, *Pan-Africanism and Education: A Study of Race Philanthropy and Education in the Southern States of America and East Africa* (Clarendon Press, 1971); Andrew Zimmerman, *Alabama in Africa: Booker T. Washington, the German empire, and the globalization of*

としてのアメリカ南部黒人教育の移転を論じた古典的な研究としては、教育学者ケネス・キングのイギリス領東アフリカを主な対象にしたモノグラフを挙げることができる。キングは、アメリカ南部黒人教育が従順なアフリカ人エリートを育成するためのいわばベスト・プラクティスとして参照されていたと論じた[7]。2000 年代に入ってグローバル・ヒストリーの興隆を受けて教育技法の移転を対象とした研究が多くなされたが、アメリカ南部黒人教育への国際的な関心は植民地統治に有益で協力的なアフリカ人を養成するという観点からのものであったという視点は共有されている[8]。南アフリカを地域的な主眼とした研究においては、アフリカ人教育の運営主体を宣教師から政府が奪い、教育内容を「部族」的なものにすることを定めた 1953 年のバンツー教育法に体現される教育思想の先駆けとして、ナタール州の教育学者チャールズ・ロラムが多くの研究の対象となっている。ロラムはコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジで博士号を取り、ナタール州の原住民教育視学官に就任した。これまでの研究は、ロラムをリベラルに位置付けるか、人種隔離主義者として描くかという相違はあるものの、アフリカ人教育をその政策に合うように改革することを推し進めた人物であるという評価は定まっている[9]。

---

the new South. (Princeton University Press, 2010); R Hunt Davis, "Charles T. Loram and the American Model for African Education in South Africa," *African Studies Review* 19(2) (Sep., 1976). 黒人側に関しては以下を参照。W. Manning Marable, "Booker T. Washington and African Nationalism," *Phylon* 35(Dec. 1974); Michael O. West "The Tuskegee Model of Development in Africa: Another Dimension of the African/African-American Connection" *Diplomatic History* 16(3) (July 1992). 例外的に James T. Campbell, "Models and Metaphors: Industrial Education in the United States and South Africa," in Ran Greenstein, ed., *Comparative Perspectives on South Africa.* (Routledge, 1998).は南ア白人・黒人双方の南部黒人教育の受容を扱っているが、両者の差異を指摘するに留まり、理解の相違の意味するところを提示してはいない。

[7] Kenneth King, *Pan-Africanism and Education: A Study of Race Philanthropy and Education in the Southern States of America and East Africa.* (Oxford: Clarendon Press, 1971).

[8] 詳細かつ理論的に洗練された研究として、ドイツ植民地トーゴを対象とした Andrew Zimmerman, *Alabama in Africa: Booker T. Washington, the German Empire, and the Globalization of the New South*, America in the World (Princeton, N.J.; Woodstock: Princeton University Press, 2012). を挙げることができる。また環大西洋における教育技法の移転という観点からはずれるが、行政官ジョルジ・アルディの論考を分析し、第一次大戦後、フランス植民地において「原住民の生活を保つ」ことを目的として教育改革が試みられていたとする平野の指摘は興味深い。平野千果子, アフリカを活用する : フランス植民地からみた第一次世界大戦 (人文書院, 2014); Georges Hardy, *Une conquête morale: L'enseignement en A.O.F.* (Paris: Editions L'Harmattan, 2005). この点は、間接統治のイギリス領と直接統治のフランス領というアフリカ植民地支配における短絡的な二類型への再考を促し、アフリカにおける市民と臣民という二分法を提示したマムダニの議論を補強する。Mahmood Mamdani, *Citizen and Subject: Contemporary Africa and the Legacy of Late Colonialism* (Princeton: Princeton University Press, 1996). フランス領アフリカ植民地の教育改革の事例としてはセネガルを対象とした Kelly M Duke Bryant, *Education as Politics: Colonial Schooling and Political Debate in Senegal, 1850s-1914* (Madison, WI.: University of Wisconsin Press, 2015).を参照。

[9] Richard D. Heyman, "C. T. Loram: A South African Liberal in Race Relations," *The International Journal of African Historical Studies* 5, no. 1 (1972): 41, https://doi.org/10.2307/216800; R. Hunt Davis, "Charles T. Loram and an American Model for African Education in South Africa," *African Studies Review* 19, no. 2 (September 1976): 87, https://doi.org/10.2307/523566. ただし、第 1 章で述べたように、リベラリズムを信奉し、かつ人種隔離主義者である事は、南アフリカにおいては矛盾ではなかった。この点については Saul Dubow, *Racial Segregation and the Origins of Apartheid in South Africa, 1919-36* (Houndmills:

黒人を主体とした研究においては、ブラック・ナショナリズムの環大西洋的な結びつきという観点から、アフリカ人エリートに与えたブッカー・T・ワシントンの影響が論じられてきた。古くは、アメリカ黒人史家であるマニング・マラブルが博士論文においてジョン・デュベを対象として、彼をアフリカ・ナショナリストとして描く過程で、デュベがワシントンを黒人の権利の守護者としてロールモデルとしていたことが述べられる[10]。その後も、南アフリカにおける権利運動においてワシントンがモデルとされてきたことは、20 世紀前半に活躍したアフリカ人運動家を対象とした多くの研究において触れられている[11]。

しかし、南アフリカにおけるタスキーギ及びワシントンに対する関心を白人と黒人それぞれに分けて論じることから抜け落ちてしまうのは、ロラムのような白人行政官とデュベに代表される黒人エリートの間に交流があったことであり、また彼らが論考を発表する媒体を共有していたことである。白人・黒人それぞれに分離した研究動向に対して、本章は、白人側・黒人側双方の受容を視野に入れて人種を超えてブッカー・T・ワシントン及びタスキーギ学院への関心が高まっていたのはなぜかという問いを検討することを通して、南アフリカにおけるアメリカ南部黒人教育の受容に向けた活動が、アフリカ人教育に関わる異なる人種の人々が関わり合う場となっていたことを示す。本章の第一の目的は、黒人教育思想の国際的連関をめぐって、その思想の形成と受容が、それぞれ地域に根ざした思惑を持ってなされていたからこそ、国際的な移転が促進されるという逆説的な事態を明らかにすることである。

本章の第二の目的は、アメリカ黒人教育を通したアメリカ合衆国と南アフリカのつながりというテーマに関して、循環的な視点を導入し、白人・黒人それぞれの政治家や教育学者がワシントン及びタスキーギ学院を南アフリカの教育言説に持ち込むことで、どのような教育改革の方向性を可能にしたのかを明らかにすることである。タスキーギ学院とアメリカ外部との結びつきを考察した既存の論考は、タスキーギ学院を中心として同校の教育方針やワシントン像が世界各地に

Macmillan, 1989), chap. 1.を参照。ロラムについての近年の研究としては、Joseph Daniel Reilly, *Teaching the "Native": Behind the Architecture of an Unequal Educational System* (Cape Town: HSRC Press, 2016).及び Richard Glotzer, "Charles Templeman Loram: Education and Race Relations in South Africa and North America," in *Empire and Education in Africa: The Shaping of a Comparative Perspective*, ed. Rebecca Swartz and Peter Kallaway (New York, NY: Peter Lang, 2016).を参照。

[10] W. Manning Marable, "Booker T. Washington and African Nationalism," *Phylon (1960-)* 35, no. 4 (1974): 398–406, https://doi.org/10.2307/274742; Manning Marable, "African nationalist: the life of John Langalibalele Dube" (Ph.D. Dissertation, University of Maryland, 1976). ただし、マラブルの議論ではズールー・ナショナリズムと南アフリカあるいはアフリカ大陸全体のブラック・ナショナリズムが持つ緊張関係が捨象されている。

[11] ANC を中心としたアフリカ人運動家を対象とした主な伝記研究として、以下の文献を参照。Heather Hughes, *First President: A Life of John Dube, Founding President of the ANC* (Auckland Park, South Africa: Jacana Media, 2011); Bongani Ngqulunga, *The Man Who Founded the ANC: Biography of Pixley Ka Isaka Seme* (Cape Town: Penguin Books, 2017); Steven Gish, *Alfred B. Xuma : African, American, South African* (London: Macmillan, 2000); Brian Willan, *Sol Plaatje: A Life of Solomon Tshekisho Plaatje, 1876-1932*, African Lives Series, no. 10 (Sunnyside, Auckland Park, South Africa: Jacana Media, 2018).

広がるという様相を描いてきた[12]。ワシントン自身、黒人の経済的有用性を証明することが、社会的な地位の上昇につながるという理念はアメリカ南部だけでなく、植民地やヨーロッパ本国でも通用すると説いた[13]。しかし、彼自身が植民地政策に積極的に関わるということはなかった。タスキーギ学院の理念を世界各地、とりわけアフリカ植民地に広めるという活動を行ったのは、宣教師や植民地官僚など実際の教育を担っていた人々であった[14]。アメリカ黒人教育をモデルとして南アフリカにおけるアフリカ人教育改革を試みた主体として、宣教師、白人行政官、そしてミッション教育を受けた黒人エリートに焦点を当てることは、彼らの南アフリカでの教育の課題、アメリカでの経験、そして帰国後の活動という循環を想定してアメリカ黒人教育の受容を検討することを要請する。明示的に主張されてこそいないが、このような視点を持った研究が全くなされていないという訳ではない。例えば、東ケープのエリート校ラブデール校の校長を務めたヘンダーソンを対象としたリッチの論文は、ヘンダーソンのタスキーギ学院への関心の背景として、入植者からのミッション教育への批判や、彼自身の人種観を指摘する[15]。またタスキーギ学院の活動を受容する際の認識枠組みに関してドイツ史研究者のアンドリュー・ジマーマンが、ポーランド人移民に対する労働政策がドイツ領トーゴにおいてタスキーギ学院卒業生を招いて農業指導を行う際の基礎となっていたことを明らかにした。さらにまた、現地社会の認識がアメリカ黒人教育の受容のあり方に影響を与えた事例として、東アジアの知識人とワシントン及びタスキーギ

---

[12] Louis R. Harlan, “Booker T. Washington and the White Man’s Burden,” *The American Historical Review* 71, no. 2 (January 1966): 441, https://doi.org/10.2307/1846341; Davis, “Charles T. Loram and an American Model for African Education in South Africa”; Michael O. West, “The Tuskegee Model of Development in Africa: Another Dimension of the African/African-American Connection,” *Diplomatic History* 16, no. 3 (1992): 371–87; James T. Campbell, “Models and Metaphors: Industrial Education in the United States and South Africa,” in *Comparative Perspective on South Africa*, ed. Ran Greenstein (London: Macmillan Press, 1998), 90–134; 荒木和華子「20 世紀転換期における米国南部ペン学校の教養教育から実業教育への転換 : 南アフリカにおけるアフリカ人の教育モデル移植の背景として」 *JISRD : Journal of International Studies and Regional Development*, no. 10 (2019): 21–34.

[13] Booker T. Washington, "Industrial Education in Africa," *Independent,* LX (Mar. I5, I906), 6I6-19. Reprinted in Booker T. Washington Papers, Vol. 9. (Urbana: University of Illinois Press, 1980). Booker T Washington and Robert Ezra Park, *The Man Farthest down: A Record of Observation and Study in Europe* (New Brunswick, N.J.: Transaction Books, 1984).

[14] フェルプス・ストークス財団やカーネギー財団といったアメリカの財団関係者はキングや山田が明らかにしたように、アメリカ人学者と植民地教育に関わる宣教師・官僚・学者とをつなぐ役割を果たした。King, *Pan-Africanism and Education*; Shoko Yamada, “Educational Borrowing as Negotiation: Re‐examining the Influence of the American Black Industrial Education Model on British Colonial Education in Africa,” *Comparative Education* 44, no. 1 (February 1, 2008): 21–37, https://doi.org/10.1080/03050060701809409.しかし、財団報告書の青写真に依ってつながりを記述するだけでなく、アフリカ人教育に実際に与えた影響を理解するためには、現地の教育の実際をになった人々の活動に着目し、彼らの役割を考察することから思想的連関性をたどっていく必要がある。

[15] Paul B. Rich, “The Appeals of Tuskegee: James Henderson, Lovedale, and the Fortunes of South African Liberalism, 1906-1930,” *The International Journal of African Historical Studies* 20, no. 2 (1987): 271–92, https://doi.org/10.2307/219843.

学院との関わりを含めることもできるだろう[16]。アメリカの外からタスキーギ学院を眺める際のその認識枠組みと、アメリカ黒人教育をモデルとした事業を実施する主体に注目する上記の研究動向を踏まえて、次のように言うことができる。すなわち、タスキーギ学院をそこから理念が広がる中心として捉えるのではなく、様々な回路が交差する結節点としてみるべきであると。そして南アフリカを対象とする意義は、重なり合う回路を持ちながら、異なった様相を見せるワシントン及びタスキーギ学院の受容を検討することができるという点にある。

以上の目的を達成するために以下ではまずアメリカ南部黒人教育におけるワシントンの位置を確認し（第２節）、その後白人、黒人それぞれのワシントン及びタスキーギ学院の受容を説明した後（第３節、第４節）、最後に、白人・黒人双方が南部黒人教育への関心を共有していたことの意味を論じる（第５節）。

第２節　南部黒人教育への植民地アフリカからの注目

まず、アメリカ南部における黒人教育の歴史と、その中でのタスキーギ学院の位置付けを確認しておきたい。南部の黒人教育は、南北戦争期に北軍の占領下で、北部宣教団体による解放奴隷への教育として始まった。当初の教育内容は、黒人に奴隷制下で労働を忌避する態度が身に付いていると考え、労働の尊さを強調するという一面はあったが、基本的には奴隷制廃止運動を担ってきた北部中産階級の価値観を反映していた。そのため解放民を責任ある自由人として育成することを主眼とし、南部における従属的な階級として再生産することを意図したものではなかった[17]。

---

[16] ワシントンの自伝『奴隷より身を起こして（Up from Slavery)』　の日本語への最初の翻訳は、東京高等師範学校教授の佐々木秀一によってなされた。佐々木は序文において明治末期に出版された『偉人の青春時代』という本にワシントンの略伝が含まれており、それを読んだことがワシントンに関心を持つきっかけであったと述べる。このことからワシントンが日本人青年の出世のモデルの一形態として受け入れられていたことがわかる。また朝鮮の知識人尹致昊（ユン・チホ）の人種・民族観を分析した論考において、シュは、日本の入植者からの朝鮮民族の経済的防衛と自立を説く上で、尹にとってタスキーギ学院は反植民地闘争の優れたモデルとして写り、そのことがアメリカ南部を実際に旅行した際に、ワシントンとタスキーギ学院を高く評価することにつながったと指摘する。Chris Suh, “What Yun Ch’i-Ho Knew: U.S.-Japan Relations and Imperial Race Making in Korea and the American South, 1904–1919,” *Journal of American History* 104, no. 1 (June 2017): 68–96, https://doi.org/10.1093/jahist/jax005.シュの論文は日本とアメリカ両国の帝国・人種観の間で活動する朝鮮知識人の思想を扱った優れたものである。しかし、母語・漢文・英文という東アジア知識人のリテラシーを論じた柳の議論を踏まえるならば、尹の最初の留学先が日本であり、世界的なベストセラーとなったスマイルズの『自助論（Self-Help)』の翻訳者中村正直から直接受けたことが、尹の自助論ひいてはタスキーギ学院理解に影響を与えたと考えられる。尹のタスキーギ学院への見解を論じる際には、東アジアとアメリカの自助論の接合として論じる必要があるだろう。柳忠熙『朝鮮の近代と尹致昊: 東アジアの知識人エトスの変容と啓蒙のエクリチュール』 (東京: 東京大学出版会, 2018), chap. 1,9.

[17] 荒木和華子「解放民教育『実験』と他者形成」『歴史評論』707 号（2009 年 3 月）; James D. Anderson, *The Education of Blacks in the South, 1860-1935*. (Chapel Hill, NC: University of North Carolina Press, 1988), 28.

しかし 1870 年代、各州において南部白人による政治支配が復活するにつれて、教育の重点は変化する。南部白人の「自治」の確立は、リンチや投票権の剥奪など黒人への抑圧が強まることを意味した。黒人教育に対しても、黒人を「傲慢にさせている」という批判が強まり、黒人が当時おかれていた社会的地位を再生産することを暗黙の了解とした実業教育[18]を黒人教育の中心とすることが既定路線となった。この流れの中で興隆したのが、アラバマ州のタスキーギ学院である。同校は、ヴァージニア州のハンプトン学院という実学を重視する黒人学校を卒業したワシントンが母校をモデルとして、1881 年に設立した学校である。ワシントンは、実際には隠れて黒人選挙権の剥奪に抗する法廷闘争を支援するという一面もあったが、表向きには南部黒人が状況を改善するためには、政治活動によって権利を主張するよりも、労働力として南部白人に黒人の重要性を認識させることが必要だと説いた。そのためタスキーギ学院の運営方針は、勤労意識を植え付けることを目的とした職業訓練を重視していた。ワシントンの穏健な立場は、南部白人の黙認と、北部白人から財政的支援を獲得することに成功した。実際にはハンプトン学院とタスキーギ学院においては教員養成課程を卒業する学生が多数を占め、卒業生自身が単純労働をするというよりも、教員として学生に勤労を重視する姿勢を行き渡らせるということが評価されたのであった[19]。

ワシントンは白人に融和的な政治的姿勢により、アメリカにおける黒人の立場を代表する人物として認められ、アメリカのみならずヨーロッパにおいても名声を得ていく。彼の自伝『奴隷より身を起こして（*Up from Slavery*）』はアフリカ諸語を含む様々な言語に翻訳され、教材として使用する宣教団体もあった[20]。このようなタスキーギ学院の穏健な教育方針が、アフリカ人の労働力としての活用と、権利を求めるアフリカ人の政治活動への対応という課題を抱えたアフリカ植民地からの注目を集めていく。タスキーギ学院は、ヨーロッパ列強のアフリカ植民地における「原住民」教育をめぐる議論において参照すべきモデルの一つとされた。タスキーギ学院やハンプトン学院は、アフリカ植民地関係者に視察され、職業訓練を重視したタスキーギ的教育理念に基づいた教育機関が現在のトーゴ、ケニア、リベリア、南アなどアフリカ各地で設立された。このような植民地における原住民教育に関わる人々からの視察要請が相次いだため、タスキーギ学院が開催したのが、冒頭で述べた黒人に関する国際会議である[21]。以下、ナタール植民地出身のイギリス系白人教育者チャールズ・ロラムを中心に、南ア白人が、いかに南部黒人教育を範としてアフリカ人教育改革を進めようとしていたかを検討したい。

---

[18] 原語は industrial education であり、農業・家事労働など単純労働の訓練とともに、労働倫理を植え付けることを重視する点に特徴がある。

[19] Anderson, *Education of Blacks*, chap. 4.

[20] Louis R. Harlan, "*Up from Slavery* as History and Biography," in Up from Slavery *100 Years Later*, ed. W. Fitzhugh Brundage (Gainesville: University Press of Florida, 2003), 25-6; Jonathan Zimmermann, *Innocent Abroad: American Teachers in the American Century*. (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2008), 56-8.

[21] West, "The Tuskegee Model"; Robert E. Park "The International Conference on the Negro: An Account of the Conference Held at Tuskegee Institute, April 17, 18, and 19, 1912," *Southern Workman* 41 (1912): 347-52.

第３節　白人側の受容

南アにおけるアフリカ人教育は、宣教団体によって始められ一 1953 年にバンツー教育法が制定されるまで、政府の関与は主に教育を行う宣教団体への補助金配分と教育内容の監督に限定されていた[22]。

ナタール植民地では、宣教師が 1840 年代に活動を開始する際にアフリカ人を対象とした学校教育が始まる。1877 年に 2,390 名だった学生数は、87 年に 2,943 名、97 年に 8,542 名、1907 年には 12,246 名となり、19 世紀最後の四半世紀に学生数の大幅な増加を見た[23]。この増加は、アフリカ人の自立的な社会が破壊されたことが大きい。政治的には 1879 年にズールー王国がイギリスに敗北し、植民地支配に組み込まれたこと、また経済的にはアフリカ人が、ダイヤモンド及び金鉱業で鉱山労働者として、あるいは鉱山への食糧供給のために農場労働者として駆り出されたことが背景としてあげられる。さらに白人農家の拡大により、アフリカ人農家は土地を奪われていった。入植者による経済的収奪に拍車をかけたのが、リンダーペストなどの家畜の疫病であった。特に 1896 年から 97 年にかけてのリンダーペストの流行はアフリカ人の持つ家畜数を大幅に減少させ、その経済的基盤を奪った[24]。アフリカ人向けエリート女子校であるイナンダ・セミナリーの歴史をたどったヘリー・クランシーの研究は、リンダーペスト発生後経済的負担を軽減しようと子どもをミッションスクールに預ける非キリスト教徒の親が増えたことが、女子学生増加の原因であると指摘する[25]。このような政治的・経済的自律性の喪失を背景として、いずれにせよ白人が支配する経済圏の中に組み込まれるのであれば、単純労働に従事するのではなくより上位の事務員として組み込まれることを望んだアフリカ人が子弟を学校に通わせるようになった[26]。

しかし、学校教育を受けたアフリカ人の増加は、宣教団体による教育への白人入植者からの批判を引き起こすことにもなる。入植者は、白人と同じような教育を受けることで、アフリカ人も白人と同じ地位につくことができると考える「不遜な精神（aggressive spirit）」を養成していると主張したのである。また教育内容があまりにもアカデミックであり、植民地政府と白人入植者

---

22 R. Hunt Davis, “Administration of African Education in South Africa,” in *Apartheid and Education: The Education of Black South Africans* ed. Peter Kallaway. (Ravan Press, 1984).

23 Province of Natal Report of the Superintendent of Education for the year 1919, 19.

24 John Lambert, *Betrayed Trust: Africans and the State in Colonial Natal.* (Scottsville: University of Natal Press, 1995).

25 Meghan Healy-Clancy, *A World of Their Own: A History of South African Women's Education* (Scottsville: University of Kwazulu-Natal Press, 2013), 58–62. ただし、女子生徒の側にも、 家畜数の減少を補うために結婚による婚資(Lobola)によって家畜を得ようと、結婚を強制する父親から逃れるという要因があったこともヘリー＝クランシーは指摘している。

26 Jeff Guy, *The Destruction of the Zulu Kingdom.* (University of Natal Press, 1994); John Lambert, *Betrayed Trust: Africans and the State in Colonial Natal* (University of Natal Press, 1995); Frank Molteno, “The Historical Foundations of the Schooling of Black South Africans,” in *Apartheid and Education* ed. Kallaway, 53.

がアフリカ人に期待する単純労働者という役割と乖離していることも問題視された。それゆえにアフリカ人には実業教育を中心とすることが前提とされたのである[27]。しかし、実業教育を中心に据えたからといって入植者からの批判を必ずしも回避できたわけではなかった。入植者たちは、アフリカ人が技術を身につけることで商業的農業あるいは手工業製品の競合相手となることを恐れていたのである。エヴァンズやロラムの人種隔離政策のもとでの教育は、アフリカ人を白人の競争相手とするのではなく、隔離された空間において「人種的特性」にあった発展を可能にするものとして正当化されたのである[28]。

このような批判を背景として、南アにおいてアフリカ人教育に関わる人々の間で、ハンプトン学院・タスキーギ学院を中心とした南部黒人教育への関心が広く共有されていく。タスキーギ学院を実際に訪れた人々の中には上述したエヴァンズや、植民地期からアフリカ人教育におけるエリート校であったケープ州のラブデール校校長ジェームズ・スチュアート[29]やジェームズ・ヘンダーソンらがいる[30]。以下では、南部黒人教育に影響を受けた人物の中でも特にアフリカ人教育に関わる行政官であり教育学者でもあったチャールズ・ロラムを取り挙げ、白人側の南部黒人教育受容を検討する。ロラムはナタール植民地・州で教育視学官として現場の一端を担い、また 1920 年にスマッツ政権下で設置された原住民問題委員会の委員として連邦レベルでのアフリカ人統治政策にもかかわる人物であった[31]。彼に注目することで原住民政策の中でアフリカ人教育が担うことを期待されていた役割を明らかにしたい。

ナタール植民地に生まれたイギリス系白人であるチャールズ・ロラムは、ナタール教育省の原住民教育視学官に就任し、アフリカ人教育に関わり始める。彼は 1914 年に政府奨学金を得て、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジに留学し、ハンプトン学院・タスキーギ学院など南部黒人教育機関を視察した経験も踏まえて博士論文を著し、1917 年に『南アフリカ原住民の教育』として出版する。同書の中でロラムは、アフリカ人教育のカリキュラムが白人用と同じか、簡略化したものであることを問題視し、「アフリカ人の生活に適合した教育」を目指して、農業など実業を中心に据えたカリキュラム改革を主張した[32]。ロラムのコロンビア大学留学時代のアメリカ

---

[27]. South Africa Native Affairs Commission, 1903-1905, 48-53; Charles T. Loram, *The Education of the South African Native* (Longmans, Green, and Co, 1917), 17-9

[28] C. T. Loram, *The Education of the South African Native* (London: Longmans, Green & Co, 1917), 19.

[29] ラブデール校初代校長であるスチュワート（James Stewart）は、本論文の第 3 章から 5 章にかけて登場するズールーランドの行政官ジェイムズ・スチュワート（James Stuart）とは別人であり、親戚ではない。

[30] Paul B. Rich, “The Appeals of Tuskegee: James Hnederson, Lovedale, and the Fortunes of South African Liberalism, 1906-1930,” *The International Journal of African Historical Studies*, 20(2)(1987), 59.

[31] Richard D. Heyman, “C. T. Loram: A South African Liberal in Race Relations,” *the International Journal of African Historical Studies* 5(1) (1972). 連邦形成後の南アにおいて、イギリス系白人が隔離政策のブレーンとして重用されていくがロラムもその一人であった。Saul Dubow. *Racial Segregation and the Origin of Apartheid in South Africa, 1919-36*. (Macmillan, 1989), chap.1.

[32] R. Hunt Davis, “Charles T. Loram and the American Model for African Education in South Africa,” *African*

体験を直接明らかにするための史料は残されていない。ティーチャーズ・カレッジと植民地教育の結びつきを検討したフライッシュも、出版された博士論文以外にこの時期のロラムに関する史料は存在しないと書いている[33]。しかし、『南アフリカ原住民の教育』からは、アメリカ南部黒人教育を実際に視察したことが、南アフリカのアフリカ人教育改革の構想を練る上で重要であったことがわかる。序文においてロラムが、「私が合衆国に滞在した 15 ヶ月の間、私はあらゆる機会をとらえて黒人教育に関する直接的な知識（first-hand knowledge）を得ようと試みた。ハンプトン、タスキーギ、ヴァージニア・ユニオン大学、ヴァージニア、アラバマ、メリーランド諸州の様々な種類の黒人学校に対する私の観察結果は本研究に組み込まれている」[34]と述べるように、彼の南アフリカにおけるアフリカ人教育に関する研究においてアメリカ南部黒人教育は重要な対瞰点としての役割を果たした。以下では、ロラムが教育視学官として、また原住民政策の専門家として抱えていた課題に対して、アメリカ南部黒人教育が処方箋として考えられていたことを説明する。

1918 年ナタール州主任原住民教育視学官に昇格したロラムは、著書で提起した改革を実行に移す。彼がまず着手したのが、教員養成課程のカリキュラムの変更であった。それは学生数の増加に伴い、教員養成が危急の課題となっていたことと同時に、教員を通して彼の考える理想的なアフリカ人像が初等教育の学生に至るまで浸透していくことを目論んでいたからでもある。彼は同書の中で、農業・手工業・園芸などの科目が教員養成課程において全く存在しないか、少ないことを問題視しており、それらの科目を新しく組み入れた[35]。彼は、小学校低学年においては、英語などのヨーロッパ言語ではなくアフリカ人の母語で教育することを主張し、そのための科目も設立した。また 1919 年にはアフリカ人教員向けの季刊誌『原住民教員雑誌(Native Teachers Journal)』を創刊し、教育省で発行を開始した。同誌は農業や園芸、衛生、アフリカ人の伝統文化などロラムが重視する科目の教授法や各校での取り組みを紹介する記事が紙面の多くを占め、彼の教育改革方針を反映していた。人種隔離政策を正当化するためには、実際には狭小かつ痩せた土地に押し込めているにもかかわらず、アフリカ人に割り当てられた土地が、彼らが暮らしていくのに十分であると主張しなくてはならなかった。そのため、農業を効率化し、生産を増やすことを目的とした農業教育が、非効率的なアフリカ人農業を改善する手段として重視されたのである。この点において、農業教育に力を入れ、農業指導員の派遣などコミュニティ支援も行ってい

Studies Review 19(2) (Sep., 1976): 87-99.

33 Brahm Fleisch, “The Teachers College Club: American Educational Discourse and the Origins of Bantu Education in South Africa, 1914-1951” (Ph.D. Dissertation, Columbia University, 1995), 100. ロラムが 1930 年から人種関係論の教授に就任したイェール大学には彼の個人文書が残されているが、1930 年以前の南アフリカ時代に関する書簡その他の文書は、残念ながら含まれていない。C.T. Loram Papers(MS10), Manuscripts and Archives, Yale University Library.

34 Loram, *The Education of the South African Native*, xi.

35 Loram, *The Education of the South African Native*, 137-139; Province of Natal Report of the Superintendent of Education for the year 1918, 46.

るタスキーギ学院[36]は、アフリカ人教育改革のモデルとされたのである。

ロラムのアフリカ人教育改革の前提には、農業・手工業を中心とした教育内容がアフリカ人の「人種的特性」に沿うという彼の主張が存在した。彼は、自身が実施した様々なテストから、白人やインド人の学生と比べて、アフリカ人学生の成績は学年が上がるにつれて低下することを指摘し、それはアフリカ人の生活がヨーロッパ人の文明化した生活と比して「遅れたもの」であるからだと推論する。それゆえに彼は、アフリカ人教育は彼らに最も適した農村での生活に合わせたものにすべきであると自説を展開する[37]。またロラムは、アメリカの財団フェルプス・ストークス財団から資金援助を受けて、アフリカ人教員をアメリカ南部に派遣し、黒人教育を視察させるという活動も行った。彼が派遣先として注目したのは、サウスカロライナ州のペン学校であり、彼は同校をアフリカ人が本来居住すべき農村社会での学校運営のモデルと考えていたのである[38]。

次にこのようなロラムの教育改革がアフリカ人統治政策の中でどのように位置づけられるのかという点を、彼が委員を務めていた原住民問題委員会を中心に検討したい。ロラムがナタールにおいてアフリカ人教育に関わり始めた時、アフリカ人統治政策の見直しが課題となっていた。前章で述べたように、ナタール植民地におけるアフリカ人統治政策は、初代原住民長官であるセオフィラス・シェップストンによって確立された。それはアフリカ人と入植者の居住地域を分け、首長を通してアフリカ人を統治するという点で、領域的な人種隔離政策の原型の一つといえるものであった[39]。この体制は、鉱山を中心とした経済がアフリカ人の都市化を引き起こし、また首長を通した課税への反発が 1906 年の首長バンバタの反乱を招くなど揺らぎを見せていた。その様な中、エヴァンズやロラムなどナタール州の原住民問題の専門家が、統治政策のモデルとして注目していたのが、ケープ植民地トランスカイ地方で実施されていたグレングレイ法であった。原住民政策の歴史をまとめたイギリス系白人の政治学者エドガー・ブルッケスのまとめによれば、それは個人土地所有制度を導入し、いくぶんかの自治権を加えたシェップストン・システムの改良版であった[40]。ロラムを含め当時のアフリカ人統治政策に関わる人々の多くは、同法に倣ってアフリカ人居住地の統治を、首長を通してのみ行うのではなく、アフリカ人有力者による評議会を設置し、その評議会に権限の一部を委譲することで支配の正当性を強化することを目指していたのである。実際、1920 年の連邦原住民統治法は同法をモデルとし、連邦レベルの統治政策の基

---

[36] ただし、実際の卒業生は教職に就く割合が多く、農家となった学生数は限られている。Campbell, “Models and Metaphors: Industrial Education in the United States and South Africa,” 96–97.

[37] Loram *Education*. chap.10, 11.

[38] R. Hunt Davis “Producing “Good African”: South Carolina’s Penn School as a Guide for African Education in South Africa,” in *Independence without Freedom: the Political Economy of Colonial Education in Southern Africa*, ed. Agrippah T. Mugomba and Mougo Nyaggah (Santa Barbara, Calif : ABC-Clio, 1980)

[39] David Welsh, *The Roots of Segregation: Native Policy in Colonial Natal, 1845-1910* (Cape Town: Oxford University Press, 1971).

[40] Edgar Harry Brookes, *The History of Native Policy in South Africa from 1830 to the Present Day*, 2nd rev ed (Pretoria: Van Schaik, 1927), 98.

礎となったのである。ロラムのアフリカ人教育論は、このような制度を前提としてアフリカ人エリートが白人と同様の権利を求めるのではなく、アフリカ人居住地域の中で政策に関わっていくことを期待していた[41]。

ロラムにとっていかにして白人に融和的なアフリカ人指導者を育成するかということも課題であった。1921 年の原住民問題委員会レポートは、「中途半端に教育を受けた(half educated)」アフリカ人が大衆を煽動する危険性を指摘し、教育を対応策の一つとして挙げている[42]。実際にロラムが同委員会委員を務めていた時期にも様々な形で、隔離政策への抵抗が起きていた。特に警戒されていたのは白人宣教師から袂を分かち、アフリカ人が独自に教会を組織する、独立教会あるいはエチオピア教会と呼ばれる動きであった。例えば、委員会設立当初、イズラエリートを名乗るアフリカ人宗教団体がケープ州ブルフークを聖地であるとして占拠し、南ア政府軍に強制的に排除、虐殺されるという事件が起きていた[43]。その際にロラムは、ラブデール校出身で同教団の中心的人物イーノック・ンギジマとの交渉に当たっている。また植民地アフリカ各地に広がりを見せたガーヴェイズムへの対策も同委員会の懸念の一つであった。黒人の自立的な経済圏を獲得することを主張するマーカス・ガーヴェイの影響を受けた活動は、南アでは特に産業商業労働者組合（Industrial and Commercial Workers' Union, ICU）を通して広がった。同組合は、都市部の労働者を対象に設立されたが、農村部においてはアメリカ黒人が飛行機に乗って飛来し白人を海に追い落とすという予言と結びつき拡大した[44]。ガーヴェイズムへの警戒心は、ロラムもその一員であったフェルプス＝ストークス財団のアフリカ人教育調査団の活動にも見ることができる。1920 年から 21 年にかけてアフリカ各地を回りアフリカ人教育の概況をまとめた同調査団は、実業を中心としたアメリカ南部黒人教育モデルの広報を各地で行うという側面もあった。調査団は各所でアフリカ人聴衆の前で講演会を開き、ゴールドコースト（現ガーナ）出身のアフリカ人ジェームズ・アグリーに、ガーヴェイズムを批判し白人との融和を説く演説を行わせていた。同調査団に加わった白人教育者たちがアグリーに期待したのは、アメリカ南部において白人との協調を説いたワシントンと同様の役割を植民地アフリカにおいて果たすことであった。アグリーは黒人と白人の関係をピアノの黒鍵と白鍵にたとえ、両方の鍵盤を使うことで美しいハーモニーを奏でることができるように、両人種が協力し良い社会を作っていくことが重要であると説教したのである[45]。

---

41 Loram, *Education*; Dubow, *Origin of Racial Segregation*, 44.

42 Native Affairs Commission Report 1921, iii-iv.

43 Robert Edgar, *Because They Chose the plan of God* (Pretoria: Unisa Press, 2010).

44 Robert Trent Vinson, *The Americans are Coming!: Dreams of African American Liberation in Segregationist South Africa* (Athens, Ohio: Ohio University Press, 2012). ICU に関しては、Helen Bradford, *A Taste of Freedom: The ICU in Rural South Africa, 1924-1930.* (New Haven: Yale University Press, 1987).も参照。

45 King, *Pan Africanism*, 136-7; Edwin W. Smith. *Aggrey of Africa: a study in Black and White.* (London: Student Christian Movement, 1929), 122-24.

ロラムを原住民問題委員会委員に任命したヤン・スマッツの講演に見られるように、当時の原住民政策は都市の白人入植者社会と農村のアフリカ人社会のはざまに置かれた、教育を受けたアフリカ人エリートに対して、白人と同じ政治権利を求めるのではなく、農村にいる他のアフリカ人大衆の指導者になるように促した。ロラムを中心に推進されたナタール州におけるアフリカ人教育改革は、当時の原住民政策の図式に基づいて教育を受けたアフリカ人を農村社会に再包摂する試みであったと考えることができる[46]。アメリカ南部黒人教育というモデルは、人種隔離政策のもとでのアフリカ人教育が直面していた課題―入植者からの批判、ミッション・エリートの懐柔、宗教的・階級的急進化への対応―全てへの万能薬として提示されたのである。

それではなぜ、ワシントン的な教育理念を導入することで白人への恭順を涵養させようというロラムの試みの対象であったアフリカ人エリートが、同じアメリカ南部黒人教育を積極的に受容していったのだろうか。次節ではこの点を検討する。

第４節　アフリカ人によるタスキーギ的理念の受容

1915 年に南アフリカ原住民カレッジ（現フォートヘア大学）が開設されるまで、南アにアフリカ人を受け入れる高等教育機関は存在せず、高等教育の機会を求める場合、海外に渡る以外の方法はなかった。学業のためにアメリカに渡った南アのアフリカ人は、第一次世界大戦に至るまでにもっとも多く見積もって 150 人に上ると言われる[47]。その中には、デュベ以後に ANC 議長を務めたピクスレー・セメ（Pixley ka Isaka Seme）、アルフレッド・クマ(Alfred Xuma)など南アにおける黒人の政治活動において重要な地位を担った人物が含まれている[48]。本節では、アメリカと関わりのある人物たちの中でも、特にタスキーギ学院を実際に訪れ、また南アにおいて同校をモデルとした活動を実施した人物としてデュベとジャバヴを取り上げ、黒人側のタスキーギ学院の受容を検討する。

ジョン・デュベは、ナタール植民地で活動していた宣教団体アメリカン・ズールー・ミッションの管理する土地で生まれた改宗第三世代であり、同団体が運営する学校で教育を受け、その後オハイオ州のオバーリン大学に留学する。帰国後、教員を務めた後、1897 年牧師の資格を取得するために再度渡米する。この時には既に、デュベは宣教団体から独立して自身の学校を設立することを決意しており、学校設立のために北部の諸都市で資金援助を呼びかけるとともに、ハンプ

---

[46] J.C. Smuts, *Africa and Some World Problems* (Oxford: Clarendon Press, 1930), 93.理論的な背景として Mahmood Mamdani, *Citizen and Subject: Contemporary Africa and the Legacy of Late Colonialism* (Princeton: Princeton University Press, 1996)を参照。

[47] この数字は James T. Campbell, *Songs of Zion: the African Methodist Episcopal Church in the United States and South Africa* (Chapel Hill, N.C.: University of North Carolina Press, 1998), 258 に依拠した。同書が述べるように、留学生数を正確に確定することのできる史料はなく、概算に留まらざるを得ない。

[48] 両者の伝記として、Ngqulunga, *Pixley KaSeme*; Gish, *Xuma*.を参照。特にクマはタスキーギ学院に在籍した経験を持つ政治家ではあるが、政治的な活動時期が 30 年代後半以降となるため本章では考察の対象とはしない。

トン学院やタスキーギ学院を訪れ、アフリカで活動することを学生に勧める講演を行った。ハンプトン学院での講演では、アメリカ南部黒人教育が、彼自身が属するズールー人社会を再興する基礎となることを説いた[49]。1901 年、彼はダーバン近郊の町イナンダにオシャングゲ学院を開校する。デュベのオシャングゲ学院は、植民地支配という逆境下で、アフリカ人が白人入植者から自立した空間を確保することを基本方針としていた。同学院は植民者への依存から脱却してアフリカ人が経済的に自立することを重視し、職業訓練、特に農業教育と家政教育に重きを置いていた。教員は全て黒人であり（タスキーギ学院出身の西インド諸島人レイノルド・スコットを含め）、設立当初は理事会も全てアフリカ人で構成されていた。学校運営面においてもアフリカ人の自立性が重視されていたのである[50]。また学費を払うことのできない学生は、農業労働、土地の整備や校舎の建築など自身の労働によって学費をまかなうことで受け入れられた。教師と学生の自助努力によって、学校自体が建設されるという、まさにブッカー・T・ワシントンの事業の模倣と言えるような形で、オシャングゲ学院は建設され、拡張したのである[51]。

一方、D・D・T・ジャバヴは、南アで初のアフリカ人が発行する新聞の創始者であったジョン・テンゴ・ジャバヴの長男としてケープ植民地に生まれた。彼は、エディンバラ大学留学中の 1913 年、イギリスにおけるワシントンの支持者であり、アメリカの反リンチ運動を支援していたキャサリン・インペイの勧めで、タスキーギ学院を視察した。ジャバヴは滞在時に、彼のタスキーギ学院滞在を知った南ア政府の要請で、同校のカリキュラムについてレポートを作成し、後に「ブッカー・T・ワシントンの方法の南アフリカへの応用」というパンフレットを公表している[52]。このパンフレットにおいてジャバヴは学校が全ての学生に労働することを義務付け、学業が生活と乖離しないようにカリキュラムが工夫されていることをロラムと同様に賞賛する一方で[53]、学校運営が黒人のみによってなされていることを、タスキーギ学院滞在中の経験の中で最も印象に残ったことの一つとして挙げている[54]。

ジャバヴは、南ア帰国後はフォートヘア大学でギリシャ語・ラテン語というヨーロッパ古典語・英文学・アフリカ諸語など人文学系科目の講師を務めた。専門から分かるように、彼自身がハンプトン校やタスキーギ学院で実施されていた農業技術やその他の実学教育を指導する能力があったというわけではなかった。しかし、ワシントン及びタスキーギ学院の影響は、彼の学外での

---

[49] John Dube, “Need of Industrial Education in Africa,” *Southern Workman* 27 (1897): 141-143.

[50] Hughes, *The First President*, 93-94.

[51] Hughes, *The First President*, 95-96. ワシントン自身の叙述によるタスキーギ学院の校舎建設については、彼の自伝を参照。Booker T. Washington, *Up from Slavery: An Authoritative Text, Contexts, and Composition History, Criticism*, 2nd ed., A Norton Critical Edition (New York: Norton, 1995), chap. 10.

[52] D.D.T. Javabu, “Booker T. Washington’s Methods applied to S. Arica,” in *The Black Problem: Papers and Addresses on Various Native Problems* (Lovedale: Lovedale Press, 1920), 25-69.

[53] Davidson D. T. Jabavu, *The Black Problem: Papers and Addresses on Various Native Problems* (Lovedale: Book Dept., Lovedale Institution Press, 1920), 53.

[54] Jabavu, 58.

活動において見ることができる。彼は各地の講演でアフリカ系アメリカ人の先進性を指摘し、ワシントンの自助努力の理想とタスキーギ学院の教育理念を南アのアフリカ人も見習うべきであると唱えた。また 1918 年に原住民農家組合（Native Farmers' Association）を組織し、アフリカ系アメリカ人宣教師ジェームズ・イーストを指導者として、アフリカ人農家への技術支援を中心とした活動も行った。またイーストは、フォートヘア大学で、農業技術指導をしていた[55]。これらの実践は、ジャバヴが視察したタスキーギ学院の農業指導の公開講座や、農業の授業を小規模ながら真似たものである[56]。ジャバヴは、タスキーギ学院の農業教育に注目するという点では前節で述べたロラムと同様ではあるが、アフリカ人を白人農家の安価な労働力としてではなく、自立した農民として育成したいという意図があった。このことは、アフリカ人の土地所有を制限する 1913 年土地法への態度の違いに明らかである。タスキーギ学院に注目した白人が、アフリカ人の農業の非効率さを非難し、農業を教えることに人種隔離政策を安定させる結果を期待したのに対して、ジャバヴはアフリカ人農家の育成を妨げるという観点から同法を厳しく批判するのである[57]。

類似した点も多いジャバヴとデュベの活動には方向性の違いも存在した。その相違は、1936 年のケープ州におけるアフリカ人男性選挙権をめぐる両者の立場として表れた。この問題においてジャバヴが選挙権を維持しようと務めていたのに対して、デュベは白人政権に対して宥和的な姿勢を示し、選挙権と引き換えにアフリカ人が所有可能な土地の拡大を目指した[58]。しかし、状況が悪化する中でアフリカ人の経済的自立性と政治的影響力を確保しようとし、そのためにワシントンあるいはタスキーギ学院をモデルにしたという両者の共通点を指摘することはできるだろう。

第５節　タスキーギに透かし見る、隠された主張[59]

---

[55] Catherine Higgs, *The Ghost of Equality: The Public Lives of D.D. T. Jabavu of South Africa, 1885-1959* (Athens, Ohio: Ohio University Press, 1997), 37-42. 東ケープ原住民農家組合の活動については、Farieda Khan, "Rewriting South Africa's Conservation History-The Role of the Native Farmers Association," *Journal of Southern African Studies* 20, no. 4 (1994): 499–516.も参照。

[56] ジャバヴのタスキーギ理解に関しては、Jabavu, "Booker T. Washington's Methods applied to S. Arica," "Natives and Agriculture" など *The Black Problem* に収録された講演とともに、1913 年タスキーギ学院滞在中の日記である「タスキーギ巡礼の日記（"A Diary of My Tuskegee Pilgrimage"）」Unisa Archive http://uir.unisa.ac.za/handle/10500/6452.を参照。最終アクセス日 2019 年 10 月 1 日。

[57] Loram. *Education*, 235; D.D.T. Jabavu, *Native Disabilities in South Africa.* (Lovedale: Lovedale Press, 1932), 8-9.

[58] Hughes, *The First President*, 242-48; Higgs, *The Ghost of Equality*, 110-17.

[59] 本節は理論的な背景として James C. Scott, *Domination and the Arts of Resistance: Hidden Transcripts* (New Haven: Yale University Press, 1990)を参照した。スコットは、権力関係が生じている場において、支配者・被支配者の両者が互いの意図を隠し、善政がなされていることを装うことに利益を見いだしていると捉え、それぞれ相手に見つからない場で本心「隠されたトランスクプリト」を述べると主張する。

前節までに、白人側・黒人側それぞれのアメリカ南部黒人教育の受容を検討してきた。それを踏まえれば、タスキーギ学院自体が持つ白人への恭順と黒人の自立的空間の確保という二面性を反映して、南アにおけるその受容は、従属的な地位に黒人を固定化しようとする面を強調する白人側の受容と、過酷な環境の中でたとえわずかなものであれ黒人の権限を保持し拡大を目指すという側面を捉えたアフリカ人エリートの受容に分かれていたと図式的にまとめることができるだろう。

この対比は、白人・黒人それぞれの教育関係者が同じ主題を扱った論考を比較することでより明確になる。そのような比較の事例として、ロラムが創刊したアフリカ人教育関係者向けの雑誌『原住民教育雑誌』に掲載されたアメリカ南部視察記を挙げることができる。白人側の視察記としては、前章でそのアメリカ南部論を分析した政治家のモーリス・エヴァンズが行った講演録がある。ロラムに依頼されてアフリカ人教員を対象とする原住民教員会議（Native Teachers Conference）で 1919 年に行った講演においてエヴァンズは、アメリカ南部黒人教育を南アフリカのアフリカ人教育に比して優れたものとして紹介している。エヴァンズは、ハンプトン学院の白人校長サミュエル・アームストロングの教えを受け継いだブッカー・T・ワシントンが白人との協調を説き、奴隷解放後にアメリカ黒人を南部経済にとって有用な人材として育成している点を高く評価する。そして居留地（Location）という形で、土地を割り当てられているという点で土地も資本も持たない状態から始めたアメリカ黒人に比べて優位な立場にありながら、そこでの農業生産性は低く、白人との接触後アフリカ人経済はむしろ退行した（retrogression）と述べる[60]。エヴァンズは、アフリカ人は居留地の経済を発展させるために農業を学び、その限られた領域でトランスカイのようにある程度の自治を行うことで教育を受けたアフリカ人にも活躍の場が開かれると主張する[61]。エヴァンズの講演は、植民地統治に関わる白人の典型的なタスキーギ理解を示したものと考えることができるだろう。

南部黒人教育を見習うべきモデルとして提示するエヴァンズに対して、イェール大学留学中の 1933 年にアフリカ人人類学者 Z.K. マシューズ[62]が発表した南部視察記はその趣きを異にする。マシューズの論考もロラムのイェール大での講義「人種関係と文化接触（Race Relations and Cultural Contacts）」の一環として行われた南部視察旅行に基づいており、ロラムが起点となっている点ではエヴァンズの講演と同様である。しかし、大恐慌という時代背景もあり、南部経済の見通しは暗い。経済的な自助努力を最優先の課題とするエヴァンズに対して、ロラムは黒人の経済的な成功こそが白人、特にプアホワイトと呼ばれる貧困層の反発を招いている事態を指摘す

---

60 Maurice S Evans, “Black Folk in America and in South Africa,” *Native Teachers’ Journal* 1, no. 3 (April 1920): 88.

61 Evans, 89.

62 マシューズの経歴については、本博士論文第 6 章を参照。

る[63]。またマシューズは、学校運営において、白人教職員を黒人教職員に置き換える必要性を唱え、アメリカ黒人はそのための教育をすでに受けてきたと述べる[64]。マシューズの記述は、白人との協力と職業訓練のみに重きをおく白人の見解に対して、政治的権利の必要性と教育におけるアフリカ人の自立性の要求を示唆していると考えることができる。

このような南部黒人教育の対照的な理解のあり方は、ブッカー・T・ワシントンの表象においても見ることができる。 ワシントンの自伝『奴隷より身を起こして(Up from Slavery)』の 1929 年縮約版は、ワシントンの植民地教育における理解のあり方の一端を示している。この本の編者は先述したロラムであり、彼はワシントンの自伝に自身の序文を付し、内容の約 4 割を削ることで、ワシントンの自伝の読み方を規定しようとしたのである[65]。序文においてロラムは、「実用的な教育と経済発展を投票権や黒人の平等を求めるその他の主張よりも重視したために」一部の批判者から「彼の人種への裏切り者（traitor to his race）」とされることもあったが、現在ではそのような批判はなりをひそめ、彼の偉大さは黒人全てに認められていると述べる[66]。さらにロラムは、ワシントンは白人からの同情と助言、実務的な助けを求める必要性を理解していたとし、白人への協調の姿勢を強調する[67]。ロラムのこの序文は、ワシントンを白人との融和を説いた穏健な指導者としての側面に光をあてるものだ。さらにロラムによって削除された部分を原著と詳細に比較したデイヴィスの論文に依拠して、この縮約版はワシントンと彼の妻オリビア・デヴィットソンの学校運営における主体性を見えなくし、白人からの助力を強調するものとなっていると言うこともできるだろう[68]。

ロラムによる縮約版と対称的なワシントン像が提示されているのが、ズールー語による教科書おけるワシントンの紹介の箇所である。ズールー語文学の小説家でもある R.R.R. ジョモ（Dhlomo）が執筆した、教科書『知識と発展させること（ukwazi kuyathuthukisa）』と題された教科書は対話形式で学生に生活の規範を教え込むという内容を持つ[69]。ワシントンに関する章は、

---

63 Z K Matthews, “Impressions of Negro Education in the Southern States,” *Native Teachers' Journal* 13, no. 4 (July 1934): 160.

64 Matthews, 162.

65 R. Hunt Davis, “*Up from Slavery* for South Africans: Booker T. Washington's Classic Autobiography Abridged,” in *Booker T. Washington and Black Progress: Up from Slavery 100 Years Later*, ed. W. Fitzhugh Brundage (Gainesville: University Press of Florida, 2003), 193–219; Booker T. Washington and C. T. Loram, *Up from Slavery: An Autobiography Abridged by C.T. Loram* (London: George G. Harrap & Co, 1929). この縮約版について原著との詳細な比較を行ったデイヴィスの論文は、しかし、1958 年のケープタウンでのファクシミリ版に依拠しており、この本の 1929 年時の出版地がロンドン、ボンベイ、シドニーと記載されていることが示す、イギリス帝国の植民地教育的な文脈を捨象している。

66 Washington and Loram, *Up from Slavery*, 6–7.

67 Washington and Loram, 7.

68 Davis, “*Up from Slavery* for South Africans: Booker T. Washington's Classic Autobiography Abridged.”

69 Reginald Rolfus Robert Dhlomo, *Ukwazi... Kuyathuthukisa.* (Pietermaritzburg: Shuter & Shooter, 1937). 本博士論文の第 4 章で説明するように、この教科書が使用されたズールー文学・歴史という科目はズー

部屋に掲げてあるワシントンの写真を見て孫がこの人物は誰かと祖母に問う場面から始まる。祖母の説明するワシントンの生涯は彼の決意と努力を強調するものであり、ハンプトン学院校長アームストロングを含め白人から受けた教えや助力は、アメリカ政府がワシントンの決意を賞賛し、彼を助けた[70]という一文以外全く言及されない。この架空の人物である祖母は、ワシントンが自身で決意し、文字を読むことを覚えたと述べ、このような決意の延長としてタスキーギ学院の建設があると話を続ける。さらに、ブッカー・T・ワシントンのアメリカ史的文脈においては意外なことではあるが、ワシントンが文字を読みたいと思い立った動機は聖書を読むためであったと説明される[71]。このように、ジョモによるワシントンの生涯の紹介は、彼が書いた別の教科書『今日の武器（Izikhali Zanamuhla）』で描かれた脱植民地闘争を継続する人物としてワシントンを提示しているのである[72]。

上記のワシントン及びタスキーギ学院理解の対比を踏まえれば南アフリカの行政官など植民地統治に関わる人々が、白人との協調と自助努力を説くワシントンの思想に、従順な被植民者を養成する上での有用性を見出したのに対して、植民地での権利獲得を目指す運動に携わる人々は黒人のみで運営されるタスキーギ学院の運営方針が、自身の経済的な自立性と機会拡大のモデルとなると考えたとまとめることができるだろう。しかし、事態はもう少し複雑である。なぜならば、南アにおいてワシントンあるいはタスキーギ学院が語られる場というのは、白人と黒人がかかわり合う場でもあったからである。つまり、図式的な理解にとどまるのではなく、このような重点の異なる受容のあり方が『原住民教員雑誌』やワシントンを扱った教科書や読本など同じ回路によって表明されていたことの意味を問う必要があるのである。

この点に関して社会経済的な観点からは、独立自営農という理想が、白人人種隔離主義者とミッション・エリートに共有されていたからであると簡潔に答えることができる。ロラムやエヴァンズなど「原住民」問題の専門家が居留地における農業生産の効率化のために個人による土地所

ルー人としての共同体の規範を教え込むということを目的とした科目であった。

70 “NoHulumeni waseMelika wamsiza kakhulu ngoba ebona ukuzimisela kwakhe ekwenzeni imisebenzi elungileyo.” Dhlomo, 8.「そしてアメリカ政府はワシントンを大いに助けた。なぜなら政府は事業をなすことに対する彼の決意を素晴らしいと考えたからである」

71 “Abafundisi babebafundela-nje iBaybeli bengabafundisi ukuba bazifundele: kodwa onke ama-*Negro* ekulangazela kakhulu ukuzifundela iBayibeli. //Kulaphoke u-*Booker* esezimisela impela ukuzifundisa yedwa.” 「牧師は彼ら（黒人）に聖書を読んで聞かせたが、彼らが自分で読めるように教えることはなかった。しかし、黒人は全員自身で聖書を読むことを熱望したのである。そういうわけで、ブッカー（T・ワシントン）は自分一人で独習しようと固く決意したのである」Dhlomo, 7.

72 “Lencwadi ngiyiqambe igama elithi “Izikhali Zanamuhla” ngoba iphethe izindaba zakwaZulu nezasesiLungwini ezinezifundo kithina. Impi yanamuhla ilwiwa ngezikahli ezintathu kuphela: imFundo, Imali neNkolo. Zontathu kuphela.” （「本書に私は、『今日の武器』というタイトルを与えた。それは、白人の（支配する）時代におけるズールー人の話と（その時代に）私たちが学ぶべき話が伝えられているからだ。今日の戦いは三つの武器のみによって争われる。それは、学ぶこと、お金、そして宗教。この三つで全てである」）R. R. R. Dhlomo, *Izikhali Zanamuhla* (Pietermaritzburg: Shuter & Shooter, 1935).

有とその場所での商業的農業を理想とした[73]のに対して、ANC 設立に集まったミッション・エリートは、宣教師から受け継いだ勤勉さによる経済的自立という信念を保持していたのである[74]。

しかし、より重要な観点として、非対称的な権力関係の中で要求を主張するあり方として南部黒人教育に関する言説を捉える視点を指摘することができるだろう。暴力によって確立された支配関係において従属的な立場におかれた者は、直接的な形では要求できない事柄を、公認された言説に包んで主張する。例えば、デュベはANC議長として1913年土地法を批判する際に、人種隔離という原則自体は受け入れた上で、この法律の目的がアフリカ人から経済的自立を奪い、労働を強制的に引き出すことであることは明らかだと指摘し、結果として隔離ではなく「もっとも危険な形での人種混交」が生じるだろうと警告した[75]。また、ジャバヴは一貫してイギリス帝国の臣民として、白人入植者と同等の権利を得ることを目指していた。彼は、アフリカ人の権利を制限する法律はトランスヴァールなど非イギリス的起源を持ち、故にイギリス植民地であったケープ州の政策にはふさわしくないと主張するのである[76]。

上述のデュベやジャバヴの主張のあり方を踏まえれば、白人側の支配的な言説に寄り掛った形で自分の主張を展開する型のひとつとして、タスキーギ学院に体現される南部黒人教育思想が利用されたと考えることができるのではないか。この点を確かめるために、前節で取り上げたデュベとジャバヴの活動を例に取って、タスキーギ学院から影響を受けたとして展開される活動において隠すべき意図が表面に出過ぎ、白人側から警戒される、あるいは叱責を受けるという場面に注目する。これらの事例は、南部黒人教育の受容を語ることで自身の活動を許容できるものとし

---

[73] エヴァンズについては本博士論文第 1 章を参照。ロラムについては以下を参照。Loram, *The Education of the South African Native*, 8.

[74] 1912 年の南アフリカ原住民民族会議（South African Native National Congress）は 1913 年土地法への抗議と撤回へ向けた運動を第一義とするものだった。しかし、初代 ANC 書記プラーイキの有名な著書『南アフリカにおける原住民の生活(Native Life in South Africa)』（初版は 1916 年刊）とは異なり、現在までの 1913 年土地法に関する研究は、土地の収奪は 1913 年土地法以前にほぼ完了しており、また 1913 年土地法が禁止する土地の利用法(Share clopping, cash-payment)は同法成立後も維持されていたことを明らかにしている。Sol T. Plaatje, *Native Life in South Africa, before and since the European War and Boer Rebellion* (Johannesburg: Ravan Press, 1982); William Beinart and Peter Delius, “The Historical Context and Legacy of the Natives Land Act of 1913,” *Journal of Southern African Studies* 40, no. 4 (July 4, 2014): 667–88, https://doi.org/10.1080/03057070.2014.930623.この点に関して、社会経済史家のブリケンリッジは、プラーイキの著作を読み解く中で、プラーイキに代表されるミッション・エリートの抗議を、自由土地保有の権利を守るための訴えとして捉えることができると主張している。Keith Breckenridge, “African Progressivism, Land, and Law: Rereading Native Life In South Africa,” in *Sol Plaatje's Native Life in South Africa : Past and Present*, ed. Brian Willan, Bhekizizwe Peterson, and Janet Remmington, (Johannesburg: Wits University Press, 2016), 175–95.

[75] “Petition to the prime minister, from the Rev. John L. Dube, President, South African Native National Congress, February 14, 1914,” in *From Protest to Challenge: Documents of African Politics in South Africa, 1882-1964,* ed. Thomas Karis and Gwendolen M. Carter. (Hoover Institute Press, 1972), 85. 人種隔離に対するデュベの立場の曖昧さは、Shula Marks, *The Ambiguities of Dependence in South Africa: Class, nationalism, and the State in Twentieth Century Natal.* (Johns Hopkins University Press, 1986)を参照。

[76] Jabavu, *Native Disabilities*, 8.

て提示するという戦略が成功している限り、表面に表れている公的な主張と、隠された意図との区別がつきにくい差異を垣間見せるものとして考えられるからである。

デュベが活躍した時代は、宣教団体の運営する教会・学校でのアフリカ人の地位の低さや、宣教師の人種的偏見をアフリカ人が嫌い、自身で運営する独立教会を設立する動きが広範に見られた。これらの宗教団体は、先に見たように政府から危険視され、活動を抑圧された。この状況は、アフリカ人が宣教師から独立した教育機関を運営するという植民地政府の不信を招きそうな活動を、さらに困難にしたことだろう。このような状況下でオシャンゲ学院をタスキーギ学院に影響を受けた学校として提示することは批判を緩和させ、アフリカ人教育に関わる白人に同校を承認させることに役立ったと推測される[77]。実際に、エヴァンズはデュベの活動を賞賛し、ナタール植民地総督マシュー・ネイサンが新校舎開設時に祝辞を述べるなど、この戦略が効果を持ったのは間違いない。デュベのオシャンゲ学院は、数々の独立教会が宗教面において成し遂げようとしたものを（南ア政府・植民者への批判は弱められているとしても）教育において達成しようとする試みであったといえる。

しかし、ロラムが公然と批判することはなかったものの、アフリカ人が白人の影響から離れて独自に学校を運営することに懸念を抱いていたことも事実である。ロラムは、フェルプス＝ストークス財団の調査日誌の中で、オシャンゲ学院が教員にアフリカ人のみを採用することに警戒感を示している[78]。また先に述べたようにロラムは、ワシントンの自伝『奴隷より身を起こして』の南アフリカでの出版にも関わっているが、その際にはワシントンを中心として黒人主導でタスキーギ学院を運営していることを描いた章を削除している[79]。

デュベは自身の学校を、南部黒人教育という白人と同じモデルに依拠したものと表明することで、少なくとも強権的な介入を防ぐことはできたものの、設立当初の自立性を保つことはできなかった。オシャンゲ学院の設立には、デュベが妻と一緒にアメリカで集めた資金が元手となっていた。大西洋を越えて頻繁に資金集めに渡航できるはずもなく、学院は徐々に資金不足に陥ったのである[80]。デュベは、アフリカ人教育に関わる白人に支援を訴え、彼らの仲介でナタール政府原住民教育省が教員の給与などを支援することが決まったが、理事会に白人メンバーが入ったことで、学校運営の最終的な決定権が主任原住民長官を長とする委員会に委ねられ、植民地政府と白人入植者から自立したアフリカ人の教育機関を創るという目標は大きく後退することとなったのである。

---

77 William Manning Marable, “African Nationalist: the Life of John Langalibalele Dube,” (PhD diss., University of Maryland, 1976), 131-5.

78 Phelps Stokes Fund African Education Commission Diary, p.220, 25 February 1921, Box 46 Folder 2, Phelps Stokes Fund Records, Schomburg Center for Research in Black Culture, the New York Public Library.

79 R. Hunt Davis, “*Up from Slavery* for South Africans: Booker T. Washington’s Classic Autobiography Abridged,” in *Up from Slavery* ed. Brundage.

80 Hughes, *The First President*, 204.

白人の財力を頼って活動を行っていたという点は、ジャバヴも同様である。彼は、前節で述べた自身が行う農業技術の研修会や、彼の妻フロレンスが行うアフリカ人女性に白人中産階級の様式に沿った家事の仕方を教える講座に、フェルプス＝ストークス財団から資金を得ていた。同財団の南アにおける顧問でもあったロラムにとって、ジャバヴは他のアフリカ人政治家・活動家に比して穏健な望ましい人物と考えられていたのである。しかし、白人から援助を受けるには、白人の暗黙裏の規則に従う必要があった。例えば、ジャバヴは、フェルプス＝ストークス財団の支援を得てアメリカ南部のペン学校に入学したものの、当地での教育が合わないと感じて辞めた二人の女子学生を擁護した廉でロラムなど同基金に関わる白人から批判されている。ロラムは、彼女たちが白人の監督を離れた独自の活動を起こそうとしたことを不満に思っていたのである。またジャバヴや彼の妻の活動も、白人篤志家の活動と競合するという理由で非難されている[81]。

またジャバヴが開始した原住民農家組合もその成果は両義的なものにとどまった。組合は 1930 年に原住民政策省の支援を得て、アフリカ人農業指導員を育成する学校であるフォートコックス（Fort Cox）の設立にこぎつける。同校は一方で多くの原住民政策省に雇用された指導員を輩出したものの、農業を生業とする卒業生は 41 年までに卒業した約 400 名のうちおよそ 1%にとどまった[82]。オレンジ自由州とトランスカイ・シスカイ（東ケープ）における農業教育の歴史を比較検討した、ティッシュラーは、自立したアフリカ人農家を養成するという白人行政官とアフリカ人エリートとの共有された希望にも関わらず、ジャバヴの活動する東ケープにおいては土地と資本の制約によって、その可能性は事業開始直後から非常に限られたものとなっていたと結論する[83]。

ロラムを含めリベラルと考えられていた白人と、黒人エリートの間の関係は対等ではなかった。前者が教育への援助や、政治家とのパイプ役としての自分の資源を後者に対して配分するパトロンしての役割を果たしたのに対して、従属的立場におかれた黒人は白人に対して敬意を払って接し、時には彼らの求める役割を演じなければならなかった[84]。タスキーギ学院に依拠したとして活動を行うことは、それを許容される範囲内の活動として提示する際の有力な戦略であったことは事実である。しかし、その活動はあまりにも狭く制限された範囲に留まらざるを得なかった。

おわりに

これまでの諸研究では、アメリカ南部黒人教育のアフリカへの移転の理由は南部黒人教育の理

---

[81] Charles Loram to Thomas Jesse Jones, 26 June 1932. Phelps Stokes Fund Records Box 42, Folder 9, Phelps Stokes Fund Records, Schomburg Center for Research in Black Culture, the New York Public Library.

[82] Julia Tischler, “Education and the Agrarian Question in South Africa, c. 1900-40,” *The Journal of African History* 57, no. 2 (July 2016): 254–61, https://doi.org/10.1017/S0021853716000062.

[83] Tischler, 269–70.ただし、アフリカーナー農民の支援を目的としたオレンジ自由州の農業教育においては、アフリカ人は排除され、受講することすらできなかった。

[84] ウィリアム・チェイフは、公民権運動以前の南部社会におけるこのような人種関係のあり方を指す用語として「行儀良さの政治(politics of civility)」を提示する。William H. Chafe, *Civilities and Civil Rights: Greensboro, North Carolina, and the Black Struggle for Freedom* (Oxford University Press, 1980).

念が持つとされた普遍的性格に帰されてきた。すなわち、タスキーギ学院に象徴される労働を強調した教育理念は、「黒人の人種としての引き上げ」や「生活環境に適合した教育」、あるいはパン＝アフリカニズムという言説に組み込まれることで、国境を越えて流通する力を持ったと理解されてきた[85]。このような理念の普遍性による説明は、人々が声を上げ、主張を明確にする事象については説得力を持つだろう[86]。しかし、本章が検討してきたアメリカ南部と南アという極端に批判の声を上げにくい地域間での黒人教育を通じた思想・制度の連関に注目し、その実践を理解しようとするならば、むしろローカルな場に着目することが重要である。タスキーギ学院の教育理念は、アメリカ南部の田舎アラバマ州タスキーギというローカルな場所でアメリカ黒人が過酷さを増す状況に適応していく、その過程の産物であった。だからこそ、南アという大西洋を越えた場所で黒人と白人の双方にとって魅力的と映り、取り入れられたのではないか。

ジャバヴのタスキーギ学院滞在中の日記には、黒人に対するリンチ事件など南部社会における日常的な暴力が驚きを込めて記されている。南ア帰国後の講演や発表された文章の中で彼がタスキーギ学院に言及する時に触れることはなかったが、ジャバヴがワシントンから受けたもっとも強い印象は周囲の白人が「少しの手違いで学院を放火し、彼をリンチしかねないという」過酷な状況下で、ワシントンがタスキーギ学院を運営する手腕であっただろう[87]。アメリカ南部社会という固有な文脈への適応の末に生み出されたタスキーギ学院という戦略は、南アにおいて白人教育者に公的な善意の装飾を毀つことなく植民地権力を補強しようとする際に利用できるものであったと同時に、植民地の従属的な立場に置かれた人々の自身の権限を少しでも拡大しようという目的と共鳴し、実際に行動する際に縋ることができるものとなったのである。

---

[85] Booker T. Washington “Industrial Education in Africa,” *Independent* 60 (Mar.15, 1906), 616-19. reprinted in *Booker T. Washington Papers Vol.8* ed. Louis R. Harlan, (University of Illinois Press, 1979); Marable “Booker T. Washington”; King, *Pan-Africanism*.

[86]例えば、アメリカ合衆国独立宣言の形式とそれが体現する理念の世界への広がりが挙げられる。デイヴィット・アーミテイジ（平田雅博 [ほか] 訳）『独立宣言の世界史』ミネルヴァ書房、2012 年 (David Armitage, *The Declaration of Independence* [Cambridge, MA: Harvard University Press, 2007])。

[87] Javabu, *Tuskegee Pilgrimage*, 29.

第 3 章　キリー・キャンベルの収集活動から見る歴史意識の変容

－南アフリカにおけるアーカイブズ構築の一事例－

はじめに

南アフリカ、クワズールー・ナタール州、インド洋に面する海岸都市ダーバンの高級住宅地ベリア。海からは見上げる形となる丘陵の、そのまた頂上に、ケープダッチスタイルで建てられた古い屋敷が聳えている。南アフリカ固有の植物が繁茂する庭を臨む屋敷の中には、初期入植者の調度品、アフリカ人の日用品やビーズ細工などの伝統的工芸品が保存されている。そして 1970 年代に建てられた別棟には、南アフリカの歴史、特にこの屋敷が位置するクワズールー・ナタールの歴史に関する大量の書物や手稿が収蔵され、研究者に開かれた図書館として機能している。

現在はクワズールー・ナタール大学が所有するこの屋敷は元々砂糖産業で財をなしたキャンベル家の住居であった。そして、内部に収められた歴史的史資料は、この屋敷に最期まで住んだキリー・キャンベル(Killie Campbell)という一人のイギリス系白人女性の尽力によって収集された。ナタール植民地の、そして南アフリカの歴史的発展と結びついた家族の歴史に釣り合うように住居を歴史的な品々で満たさなければならない、そのような強迫観念に取り憑かれたかのように、彼女は書物・手稿・工芸品から植物の種子に至るまで南アフリカに関わる史資料を精力的に集め、南アフリカに関わるモノで満ちた濃密な空間を作り上げたのである。

キリー・キャンベルの収集活動は、第一次世界大戦後に本格的に開始され、第二次世界大戦、国民党政権成立に伴うアパルトヘイト体制の開始、南アフリカの共和制への移行とコモンウェルス離脱という激動の時代を背景として展開された。生前すでに著名な収集家であったキャンベルは、彼女の収集活動とそのコレクションについて語ることを求められる機会も多かった。しかし、自身の収集した愛着のある書物やモノが余りにも多量で多岐に渡るためであろう、彼女がコレクションについて語るとき、それらを簡潔にまとめて説明することへのためらいが見られる[1]。そして、集めた本人のように愛着を持たない筆者にしても、多岐にわたるコレクションの南アフリカ史における意義を一つの章に要領よくまとめることは不可能な課題と感じられる。それゆえに本章は、その主眼を、既に収集されたモノの意義にではなく、集めるというプロセスそれ自体に置く。収集活動を「物質世界との関わり方を構成し、自己を造り上げる」行為であると述べる[2]、博

---

[1] 例えば、キャンベルは自身のコレクションについての講演を「南アフリカの本について総体として話すのは不可能な課題であるので、今日はパンフレット、抜粋、雑誌について話そうと思います」と断りを入れて始める。Killie Campbell, “No. II What’s in My Africana Collection,” n.d. KCM9583b, file 59a, Killie Campbell Papers, Killie Campbell Africana Library, Campbell Collections, University of KwaZulu-Natal. (以下、KCP, KCAL と省略)。また、アフリカナ収集家向けの雑誌で、自分のコレクションを紹介する際にも、私蔵されている南アフリカのアフリカナ・コレクションについて書くことは、素晴らしい考えだと思うが、「自分のものを書くとなるとと気後れする」との但し書から始めている。Killie Campbell, “My Africana Collection,” *Africana Notes and News*, v.2 1945, 119.

[2] Susan M. Pearce, *On Collecting: An Investigation into Collecting in the European Tradition* (London:

物館学者スーザン・ピアース(Susan Pearce)に倣って言えば、本章の目的は、書物や工芸品を収集し、整理するという行為を通して、キャンベルが、南アフリカの歴史を物語る秩序を構成し、入植者社会の発展を中心として自分自身を、そして南アフリカに住む人々を位置付ける、その様態を明らかにすることである。

収集することによって特定の歴史像を提示しようとするキャンベルの試みは、しかし、複雑な時代状況と絡まり、縺れる。まずはその縺れの存在を把握するために、新聞記事を二つ引用したい。どちらも、キャンベルが彼女に関係する新聞記事を集めたスクラップブックに収められていたものである。

一つ目の記事はナタールの有力紙『ナタール・マーキュリー』の編集者宛で書かれた意見広告である。キャンベルも提案者に名を列ね、「フォールトレッカーの日：連帯への呼びかけ」と題されたこの記事は、1949 年に完成したプレトリア郊外にある、巨大なアフリカーナー(Afrikaner)[3]の記念碑、フォールトレッカー・モニュメントの完成を記念した集会にイギリス系白人も参加することを呼びかける。

> 「スマッツ将軍の全ての南アフリカ人にフォールトレッカーの式典に参加し、フォールトレッカーの記憶を寿ぐことを一方の集団にのみ任せてはならないという声高な呼びかけは、私たちに強く訴えかけた。私たちは特に私たちイギリス系南アフリカ人(our English-speaking South Africans)に、国民の連帯のために、この呼びかけに応答することを求めたい」[4]。

この声明からはアフリカーナーとの協調を促し、南アフリカにおける白人の連帯を唱える政治姿勢をキャンベルが保持していたことが分かる。

しかし、一方で、キャンベルは、アフリカーナーを支持母体とする国民党政権の政策に強い反発を示すこともあった。もう一つの記事は、この方向での彼女の政治活動を伝えるものだ。

「ダーバン、金曜日。黒いたすきを掛けた、護憲女性同盟ナタール理事会のメンバーが、正午ダーバン郵便局の階段の頂上に立った。それは、連邦成立に導いた全国代表者会議の第一回会合が四七年前にこの建物で開かれたという事実を記念するプラークの掛かる円柱の前で一時間の無言の抗議表明をするためである」。記事は同時に、抗議を表明する二人の女性の写真を掲載している。左手に写るキリー・キャンは、九月のダーバンの夜の寒さに耐えるためであろう、長い厚手

Routledge, 1995), 4.

[3] アフリカーナーは、オランダ語のクレオールである、アフリカーンス語を母語とする「白人」の名称である。アフリカーナーの歴史、及び南アフリカ社会における「白人」の形成の歴史は複雑であるが、さしあたり、永原陽子「「白」と「茶色」の間」藤川隆男編『白人とは何か？』(刀水書房、2005年）を参照。またカラードについては、堀内隆行『異郷のイギリス 南アフリカのブリティッシュ・アイデンティティ』(丸善出版, 2018 年)、第 3 部を参照

[4] "Voortrekker's Day: Call for Unity," *Natal Mercury,* September 13, 1949, in File 8a newspaper clippings, KCP, KCAL. 以下、新聞記事からの参照・引用は全てキャンベル自身が作成したスクラップブックに保存された記事を利用している。

のコートを着て、革の手袋を身につけている。肩からかけた黒のたすきが、彼女の両親がその成立に尽力した 1910 年の南アフリカ憲法が失われることへの抗議と喪の姿勢を示している[5]。黒いたすきにちなみブラック・サッシュと呼ばれるこの団体は、カラードと呼ばれる混血の人々の選挙権を排除することを目的とした憲法改正を推し進める国民党への反対を目的として設立された。

二つの記事で描かれた事象を時系列上の二つの点として俯瞰的に眺める視点をもってすれば、これらの記事が同一の人物の行動を表していることは、奇妙なことと映るだろう。なぜ彼女は一方でアフリカ人を僅少な土地に押し込め労働力として活用することを基礎に置き、社会のあらゆる場面で人種の分離を強制するアパルトヘイト体制の支持基盤となっているアフリカーナーとの連帯を唱え、他方で、国民党政権の政策を非難し、アパルトヘイト体制下の南アフリカで白人の良心とも認識されているブラック・サッシュとしての活動に心血を注ぐのか。彼女のこのような政治姿勢の揺れはいかにして捉えることができるだろうか。まずは、この矛盾とも見える事象を本章が検討するべき問いとして提示したい。

この問いを考える手がかりは先の新聞記事の中にあるように思われる。上記のキリー・キャンベルに関わる二つの記事のどちらもが、記念碑をその背景としてなされた、彼女の政治活動を取り上げていることに注目しよう。一つは、プレトリアのはずれに建てられた、巨大なフォールトレッカー・モニュメントであり、もう一つは南アフリカ連邦の成立を記念するプラークである。これらの記念碑は、南アフリカの歴史を一つの物語として捉えることを支えるものだ。フォールトレッカー記念碑が支持するのは、圧政から逃れ、土地を切り拓くアフリカーナー開拓者の苦難の歩みとして南アフリカ史を捉える物語である。もう一つの憲法制定を記念するプラークは、南アフリカを、イギリス・ドミニオンを構成する一つの国家として定位する。

これらの物語は記憶の場として過去に関わるものであると同時に、ありうべき未来を指し示すものでもある。キリー・キャンベル自身、南アフリカの歴史的遺産を選定する政府の委員会、自然・歴史記念碑委員会（Natural and Historical Monuments Commission）の委員として 1940 年に女性として初めて任命され、同委員会で活動をする中で、記念碑が提示する現在の国家の有り様を説明する物語の一部としてのモニュメントの役割を意識してきたことだろう。しかし、現在を説明する物語は、巨大なものにのみまとわりついているのではない。本章は、キリー・キャンベルが集めたもの全てに---書物、手稿、手紙、あるいはビーズ細工、絵画、家具、工芸品に---物語は付随していると考えるべきであり、これらの収集物は、集合体として特定の秩序のもとに配置されることによって、より大きな物語を紡ぎ出すと主張する。先述の一見矛盾とも思えるキャンベルの政治姿勢に着目することは、キリー・キャンベルの収集活動の歴史をたどる際に、キリ

---

[5] “Black Sash Vigil in Durban,” *Natal Witness,* September 17, 1955, in File 8a newspaper clippings, KCP, KCAL. ダーバンの政治家であり、1910 年の連邦成立後は上議院議員を務めた父のマーシャルは、ナタール州において憲法の批准の説得に努めた。David Herd, *Killie's Africa: The Achievements of Dr. Killie Campbell* (Pietermaritzburg: Blue Crane Books,1982), 119.

ー・キャンベルという人物が、その収集活動の重点をずらし、収集物に対する語り方を変えていく様に注目することを要請する。一度構築された物語も、20 世紀南アフリカという激動の舞台を背景として、書き直さざるを得なくなったのだ。このことは、彼女の周りに付着する多様な修飾語[6]を彼女が収集活動を進める中で捉え直し、アフリカーナー・ナショナリズムの興隆に対峙していったのかを明らかにすることにつながるだろう。本章の目的は、キリー・キャンベル・アフリカナ図書館の形成の歴史を通して、個人のアイデンティティとアーカイヴとの間の、またコレクションの構築と歴史的ナラティブとの間の共振と共鳴のメカニズムを解き明かすことである[7]。

0.1. 先行研究及び本章の構成

アフリカナ収集を分析対象とする本章は、キリー・キャンベルの収集活動は個人のアイデンティティの反映であると同時に、そのコレクションは総体として彼女が属するイギリス系南アフリカ人の集合的アイデンティティの形成を促すという観点を提示する。20 世紀前半南アフリカの政治文化における歴史の利用を扱う本博士論文の中で、本章は、収集活動それ自体が歴史観を表すと主張する点において、イギリス系白人女性を対象とした事例研究として位置付けることができる。また、特にアフリカ人知識人及び学生の歴史叙述を検討する第 4 章及び第 5 章との関わりにおいて、キャンベルの収集活動及び残されたコレクションが、アフリカ人知識人が調べ、書く際のいわば「地」となっていたと考えることもできる。さらに、「収集活動＝歴史観の提示」を分析することは、南アフリカ史におけるイギリス系南アフリカ人のアイデンティティ形成史及び、美術館・博物館における歴史展示を対象とした文化史という二つの分野に対して、貢献することにつながる。以下では、この二つの分野を本章に直接関わる先行研究としてまとめた上で、本章の独自性を説明する。

まず、イギリス系南アフリカ人のアイデンティティ形成に関する歴史研究に対して、本章は個人の収集活動と入植者コロニアリズムの特定の形態との結び付きを示すことで、「イギリス系であること」と「南アフリカ人であること」の緊張関係を具体的な経験として描き出す。これまでのイギリス系南アフリカ人のアイデンティティ形成に関する研究の多くは、著名人の言説分析あ

---

[6] そのような修飾語としては、例えば、「南アフリカの/South African」、「ナタールの/Natal」、「イギリス系の/British, English Speaking」、「白人の/White、入植者の/Settler」、そして「女性の/Woman」が挙げられるだろう。

[7] 本章の主題は、キリー・キャンベルという個人を通してみたアーカイブズ構築の歴史にある。それゆえ、アパルトヘイト体制と国家機関としてのアーカイブズの関係という重要な点に触れることができなかった。この点に関しては、特に民主化後南アフリカにおけるアーカイブズの再構築という観点から、Verne Harris, *Archives and Justice: A South African Perspective* (Chicago: Society of American Archivists, 2007)、及びジャック・デリダを南アフリカに迎えたセミナーの記録であり、アーカイブズについての理論的な論考を収録する Carolyn Hamilton et al., *Refiguring the Archive* (Dordrecht : Springer Science+Business Media, 2002)が議論している。また南アフリカも含め、英語圏における近年のアーカイブズに関する研究動向の整理としては、Elizabeth Yale, “The History of Archives: The State of the Discipline,” *Book History*, 18(2015): 332-59.を参照した。

るいは社会史的な観点からなされてきた。それに対して、本章は入植者社会の発展や南アフリカ主義といった、イギリス系南アフリカ人と南アフリカ国家・社会の形成との関わりを論じる上で核となる、しかし多分に抽象的な概念が、個人の史資料の収集活動において具体化され、またコレクションの展示及び利用の過程において共有されていったかを描くことで、アフリカナ収集活動が、イギリス系南アフリカ人の集合的アイデンティティの形成を助長したことを示す。

1956 年に発表した著作において、ジャーナリストのジョン・ボンド（John Bond）は、アフリカーナーとアフリカ人のそれぞれのナショナリズムの狭間にあって、イギリス系南アフリカ人はその存在に焦点があてられることのない、「知られざる人々（unknown people）」であると述べる[8]。しかし、確かに 20 世紀後半においてアパルトヘイト政策の推進・維持、また同政策への抵抗運動を主導してきた両集団に比較すると、数は少ないものの、イギリス系南アフリカ人の歴史を対象とした著作・論文は、ボンドの著作以降細々とではあるが、発表され続けてきた。それらの研究は、 政治家や、歴史家、小説家の言説分析を中心とした思想史的研究、重要な政治的出来事へのイギリス系南アフリカ人の反応をまとめた社会史的研究の二つに大別することができる。このうち、著名人の言説を扱った研究から見えてくるのは、南アフリカ主義（South Africanism）の興隆と衰退という思想的潮流である。歴史家ソール・デュボウ（Saul Dubow）は南アフリカ戦争（ボーア戦争）後の南アフリカにおいて、イギリス帝国の内部で一つの国家としての確立した地位を築こうとする機運が高まり、イギリス系とアフリカーナーとの和解と協調を説く南アフリカ主義が主張されたと述べる[9]。そして、この南アフリカ主義は、イギリス系の政治家の多くと、スマッツなど少数ではあるが影響力の強い新イギリス派のアフリカーナー政治家によって唱導され、政治家[10]や歴史家[11]、教育学者[12]など幅広い人々に共有されていった。デュボウは、南アフリカ主義が、白人住民の中でアフリカーナーが 6 割を占めるという状況の中で、経済的に重要な南アフリカをイギリス帝国内に押しとどめておく必要から生じたものであると説明する[13]。しかし、イギリス帝国内の一つの国家としての南アフリカを前提とする南アフリカ主義は、大部分のアフリカーナーの支持を得ることはなく、1948 年の国民党の選挙での勝利とその後アパルトヘイト体制の成立へと向かう歴史的な流れの中で徐々に守勢に立たされていくこととなるのである[14]。また、南アフリカ主義にはアフリカーナーを取り込むことができなかったという点以外にも、ア

---

[8] John Bond, *They Were South Africans* (Oxford: Oxford University Press, 1956), 1.
[9] Saul Dubow, “Colonial Nationalism, The Milner Kindergarten and the Rise of ‘South Africanism’, 1902–10,” *History Workshop Journal* 1997, no. 43 (March 1, 1997): 53–86.
[10] ミルナーとその周辺の政治家については、Dubow, “Colonial Nationalism”を参照。
[11] Christopher C. Saunders, *The Making of the South African Past: Major Historians on Race and Class* (Cape Town: David Philip, 1988); 堀内隆行『異郷のイギリス 南アフリカのブリティッシュ・アイデンティティ』(丸善出版, 2018).
[12] Saul Dubow, “Scientism, Social Research and the Limits of ‘South Africanism’: The Case of Ernst Gideon Malherbe,” *South African Historical Journal* 44, no. 1 (May 1, 2001): 99–142.
[13] Dubow, “Colonial Nationalism.”
[14] John Lambert, “An Identity Threatened: White English-Speaking South Africans, Britishness and Dominion South Africanism, 1934–1939,” *Kleio* 37, no. 1 (January 1, 2005): 50–70.

フリカ人、インド人、カラードなど「有色の人々」をその埒外に置くという重大な限界があった[15]。むしろ、シールの歴史書に見られるように、イギリス系とアフリカーナーのヨーロッパ入植者としての共通の過去を強調することで植民地主義を正当化する側面を内包していたと考えることができるのである[16]。

もう一方の社会史的観点からのイギリス系南アフリカ人のアイデンティティ形成史においては、先に述べたジョン・ボンドの著作の他に、1820 年の入植者を記念する学術会議での報告を基にした、デ・ヴィリエーズ（André De Villiers）編著の論文集が出版時点までの英語系（English-Speaking South Africans）の歴史と現状をまとめており、またナタール植民地に限られてはいるが、ハッタスレーの大著がイギリス系入植者の同植民地での歴史を詳述している[17]。上記の著作が、アパルトヘイト体制という逆境下でアフリカーナー以外の白人であることを顕彰する試みであったとすれば、ポストアパルトヘイト期に書かれた論文は新体制下でのアイデンティティの模索の試みであると考えることができるだろう。この点において、それまでナタール植民地の社会経済史の専門家であったジョン・ランバート（John Lambert）が、2000 年代に入ってから、アフリカーナーという民族の歴史を描いたハーマン・ヒロミー(Herman Giliomee)の大著と並ぶような、イギリス系南アフリカの歴史を書くことを目指して、数多くの論文を発表している[18]。 ランバートの論述は、連邦形成期[19]、第一次大戦とその記憶[20]、30 年代のアフリカーナー・ナショナリズムの高まり[21]、第二次大戦[22]、と様々な時期をカバーし、また対象としても個人に着目したものや[23]、種々の社会福祉及び文化団体の盛衰[24]を扱ったものなど多岐にわたる。ランバート自身がこのような多くの論点からいかにして、イギリス系南アフリカ人のアイデンティティ形成の一貫

---

[15] Dubow, “Scientism, Social Research and the Limits of ‘South Africanism,’” 142.
[16] Saunders, *The Making of the South African Past*, 18–29.
[17] Bond, *They Were South Africans*; André De Villiers and 1820 Settlers National Monument Foundation, eds., *English-Speaking South Africa Today: Proceedings of the National Conference July 1974* (Cape Town ; Oxford: Oxford University Press for 1820 Settlers National Monument Foundation, 1976); Alan Frederick Hattersley, *The British Settlement of Natal: A Study in Imperial Migration* (Cambridge: Cambridge University Press, 1950).
[18] Hermann Giliomee, *The Afrikaners: Biography of a People* (Cape Town: Tafelberg, 2003).数多いランバートの論文の中で、本章に関係が深いのは以下の 3 本である。John Lambert, “South African British? Or Dominion South Africans? The Evolution of an Identity in the 1910s and 1920s,” *South African Historical Journal* 43, no. 1 (November 2000): 197–222; Lambert, “An Identity Threatened”; John Lambert, “‘An Unknown People’: Reconstructing British South African Identity,” *The Journal of Imperial and Commonwealth History* 37, no. 4 (December 1, 2009): 599–617.
[19] Lambert, “South African British?”
[20] John Lambert, “‘Tell England, Ye Who Pass This Monument’: English-Speaking South Africans, Memory and War Remembrance until the Eve of the Second World War,” *South African Historical Journal* 66, no. 4 (October 2, 2014): 677–98.
[21] Lambert, “An Identity Threatened.”
[22] John Lambert, “‘Their Finest Hour?” English-Speaking South Africans and World War II,’” *South African Historical Journal* 60, no. 1 (March 1, 2008): 60–84.
[23] John Lambert, “‘A United South African Nation and Not Merely a South Africa Peopled by Africanders and English’: The Earl of Athlone and the Attempt to Forge a Dominion South Africanism in the 1920s,” *Kleio* 34, no. 1 (January 1, 2002): 128–52.
[24] John Lambert, “Maintaining a British Way of Life: English-Speaking South Africa’s Patriotic, Cultural and Charitable Associations,” *Historia* 54, no. 2 (2009): 55–76.

したナラティブを生み出すのかについては、彼の単著を待つほかないが、しかし、現時点においても彼の論述の骨子は次のようにまとめることができるだろう。すなわち、南アフリカ戦争終結後（1902 年）から 1910 年の連邦成立を経て、第一次大戦後の 1920 年までには、南アフリカに住むイギリス人からイギリス系南アフリカ人として自己認識の転換が完了した。しかし、アフリカーナー・ナショナリズムの興隆と、1924 年以降のアフリカーナーを主体とするナショナリスト党[25]が政権を担うという政治状況下で、「イギリス系であること」と「南アフリカ人であること」が容易には両立しないものとして、問題視されるようになり、第二次大戦中の親英意識の高まりはあったものの、1948 年に国民党政権が誕生し、アパルトヘイト体制を推し進める中で、また 1950 年代後半からイギリスが入植者の多い植民地も含めてアフリカ諸国の独立を認めていくことが既定路線となる中で、イギリスとの結びつきは失われ、 人種隔離体制下での白人としての特権は享受しつつも、政治的には活発でない、英語系南アフリカ人（English Speaking South Africans）という、強烈な民族意識を保持する集団であるアフリカーナーの残余的カテゴリーとして経済活動にいそしむこととなったのである。

ランバートの社会史的観点とデュボウに代表される思想史的観点に共通しているのは、南アフリア主義という特定の形態の植民地ナショナリズムが連邦成立から 1948 年の国民党政権の誕生まで保持した影響力を重視している点である。しかし、両者をお互いに補完するものと考えるには、すなわち、政治家を中心とした言説と、市井の人々の認識とを直接つなぐにはまだ隙間が存在する[26]。新しく成立した連邦を一つの国民国家として造り上げる、その基盤となる南アフリカ主義がどのように広がっていったのか、その回路を把握することが必要なのだ。本章では、アフリカナ収集をそのような回路の一つとして捉え、収集家がコレクションを集め、並べ、そして見せるという具体的な行為の連なりから南アフリカ主義の広がりを描き出す。

本章は、イギリス系南アフリカ人と南アフリカ主義との関わりの他に、南アフリカにおける美術館・博物館を中心とした文化史をもう一つの先行研究分野として措定する。この分野においては、アパルトヘイト体制終焉後の記憶論への関心の高まりともあいまって、多くの研究がなされてきた。その内容も、個々の美術館・博物館の展示分析から、ポストアパルトヘイト期のモニュメントの表象文化論、またイギリス帝国内の白人入植者植民地における博物館の比較研究に至る

---

[25] 1948 年以降政権を担った国民党との区別をつけるためにナショナリスト党と表記する。原語はどちらも、Nasionale Party というアフリカーンス語であり、英語では Nationalist Party と表記される。「国民党」は、1935 年に「ナショナリスト党」が親英的な南アフリカ党（South African Party）と合同するにあたり、同党から離脱した「純ナショナリスト党(Gesuiwerde Nasionale Party)」を母体とする。

[26] ランバートは、第一次大戦でイギリス系南アフリカ人兵士が、アフリカーナーの兵士とともにイギリス軍の兵士としてヨーロッパ戦線で戦った経験が、逆説的に彼らに南アフリカ人としての自己認識をもたらしたと指摘する。Lambert, “‘Tell England, Ye Who Pass This Monument,’” 689. この点は、重要な指摘ではあるものの、エピソード的なものにとどまっている。

まで多岐にわたる[27]。本章では、ジェイムズ・クリフォードが民族誌批判論の古典『文化の窮状』で提示した美術館・博物館における収集と展示の理念型に依拠しつつ、この分野の先行研究を整理する。クリフォードは同書の収集に関する章で、「部族的なもの」と「近代的・モダンなもの」の分離、また美術・文化の体型における芸術作品と伝統文化の証拠としての工芸品の峻別と、その上での真贋の対比という４象限からなる「芸術=文化システム（The Art-Culture System）」という分類図式を提示した[28]。実際には、特定のモノは、その内在的な性質によって一つの象限にとどまるのではなく、そのモノがどのように認識されるのかによって移動する。

クリフォードの図式は、それ自体としては非常に抽象的であるので、ここでは南アフリカにおける美術館・博物館を対象とする議論と関連付けながら、収集されたモノの分類の具体的な展開を追ってみたい。南アフリカの文化史家アニトラ・ネトレトン（Anitra Nettleton）はヨハネスブルク美術館（Johannesburg Art Gallery）とアフリカナ博物館（Africana Museum，現 MuseumAfrica）というヨハネスブルクの二つの中心的な文化施設を比較した論文において、文化と芸術の空間的な分離を指摘する。すなわち、前者がその所蔵品を芸術的価値によって位置付けるのに対して、後者においては、所蔵品がその由来する社会について明らかにすると考えられることによって展示の様式が決定されるのである[29]。その分離は強固であり、アフリカ人の工芸品に芸術的価値を見出すという場合にも当てはまる。ネトレトンは３０年間アフリカナ博物館の倉庫に眠っていたアフリカ人の伝統的な枕（headrest）が、ヨハネスブルク美術館に移され、その美術的価値ゆえに展示されるという事例を紹介している[30]。

この二つの文化施設は、モノグラフの対象となっており、創設者の思想とそれぞれの施設の歴史が詳述されている。ヨハネスブルク美術館を対象とし、そのコレクション形成を創設者であるフロレンス・フィリップス（Florence Philips，金鉱業で財を成したライオネル・フィリップスの妻）と絵画の購入を任された美術商ヒュー・レーン（Hugh Lane）を中心として検討した、カーマンの研究は、この美術館の設立目的が、20 世紀初頭にヨハネスブルクという「文化的不毛地帯」において、そこに住むヨーロッパ系住民を洗練させ、教養を身につけさせることであったと主張し、そのためにイギリス絵画が中心的に購入されたのだと指摘する[31]。一方、アフリカナ博物館を対象とするバイアラの研究は、博物館を設立したイギリス系農夫ガビンズの思想と設立後の博物館の歴史をたどりながら、同博物館が、アフリカーナーとイギリス系との和解を促進することを目的として設立された後に、発展する白人入植者社会と、伝統を保持するアフリカ人社会との

---

[27] Annie E. Coombes, *History after Apartheid : Visual Culture and Public Memory in a Democratic South Africa* (Johannesburg : Wits University Press, 2004); John M. MacKenzie, *Museums and Empire: Natural History, Human Cultures and Colonial Identities*, 1 edition (Manchester: Manchester University Press, 2009).
[28] James Clifford, *The Predicament of Culture : Twentieth-Century Ethnography, Literature, and Art.* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1988), 222–26.
[29] Anitra Nettleton, “Arts and Africana: Hierarchies of Material Culture,” *South African Historical Journal* 29, no. 1 (November 1, 1993): 61–75.
[30] Nettleton, “Arts and Africana," 73–74.
[31] Jillian Carman, *Uplifting the Colonial Philistine: Florence Phillips and the Making of the Johannesburg Art Gallery* (Johannesburg: Wits University Press, 2006).

分離に基づく支配体制を体現する存在となっていく過程を後付けている[32]。

このように人種隔離体制下の南アフリカにおける美術館・博物館を対象とした研究は、コレクションを展示する文化施設が、そのコレクション形成と展示において、利用者すなわち教養を身につけさせるべき主体として白人市民を想定し、またその展示のあり方が入植者の子孫としての市民と「部族的」伝統を保持するアフリカ人との分離という支配体制のイデオロギーを反映してきたことを明らかにした。創設者の意図がいかに施設のその後の展示方針に反映されたかを問う先行研究に対して、本章では、キリー・キャンベルという個人に注目し、彼女の収集活動の移り変わり、それ自体を対象とすることで、彼女の収集方針は固定的なものではなく、彼女自身のアイデンティティの形成を反映していると主張する。すなわち、彼女は集めることを通して、自己を形成し、社会に対して意見を表明するのだ。また本章は、キャンベルのコレクションと国家の統治体制のイデオロギーとを直接につなげて考察するのではなく、キャンベルが収集活動を行うにあたっては彼女の家族の歴史が中間項として重要な位置を占めていたと主張する。家族の歴史をたどりながら集めるべきものを選別するという行為は、イギリス系入植者の歴史と結びつき、南アフリカに於ける白人マイノリティ支配のイデオロギーを反映するという面もあるが、同時にそのイデオロギーとは対抗する関係にもある。本章は、結論として、キャンベルが持った人種隔離体制との緊張関係ゆえに、彼女のコレクションがアパルトヘイト終焉後もその価値を失なうことなく新たな歴史叙述の可能性へと開かれたものとなっている点を提示する。

0.2. 本章の構成

本章の構成は以下の通りである。

第一節では、キリー・キャンベルの生涯とそのコレクションの概略を簡潔にまとめた。第二節では、キャンベルの収集活動をより大きな文脈に位置付けて理解するために、南アフリカ史におけるアフリカナ(Africana)の収集について説明する。アフリカナという言葉は何を指示し、その収集家は何を目的として、どのように収集していたのか。この節では、これらの問いに、主にシドニー・メンデルスゾーンとジョン・ガビンズという二人の著名なアフリカナ収集家の活動を検討し、彼らの収集活動が、南アフリカを、イギリス・ドミニオンの構成国と位置づけた上で、アフリカーナーとイギリス系との和解を重視する南アフリカ主義（South Africanism）という立場に基礎付けられていたと主張することによって答える。キャンベル以前に活躍した収集家を検討することで本節は、次節で彼女の収集活動を南アフリカの政治文化史に位置付けて検討することを可能にする。第三節では、キリー・キャンベルが自身のコレクションを意義付ける、その仕方が国民党政権の成立を境に変化する様を描く。キャンベルが収集活動を始めた当初においては、彼女の活動は、彼女の父親を含めイギリス系白人の間で高まった南アフリカ主義の観点に立つもの

[32] Sara Byala, *A Place That Matters Yet: John Gubbins's MuseumAfrica in the Postcolonial World* (Chicago: University of Chicago Press, 2013).

であった。すなわち、国民党政権成立以前のキャンベルの政治活動の力点は、両集団に共通の過去を認識させ、南アフリカ国民としての一体感を醸成することにあったのである。しかし、1948年にアフリカーナーを中心とした国民党政権が成立して以降、キャンベルは、力点をイギリス系入植者の歴史の発掘、及びそれを顕彰することに移す。本節では、彼女の政治的意識の変化に伴ってコレクションが持つ位置づけが変わっていく過程を、特に彼女のブラック・サッシュとしての政治活動とナタール州における入植百周年祭での彼女の尽力に焦点を合わせて叙述する。

0.2. 史料に関して

キリー・キャンベルは名誉心とは無縁の人であった。彼女は、他の著名な収集家、例えば収集活動における自身の哲学的基礎を公刊したガビンズや、収集した文献を目録として出版したメンデルスゾーンとは異なり、自著を出版することはなかった。また、彼女が心血を注いだアフリカナ収集においても、入植者の古い調度品を中心とした博物館を自宅に開いた際には、兄ウィリアムの名を冠したし、ナタール州植民百周年記念祭においては、資料の収集や歴史の一コマを描いた山車の検証などその成功に尽力したにもかかわらず、自分の名前を出すことはしなかった。さらには、自身の蔵書票にも、この書物のコレクションを父と叔父の思い出に捧ぐとしている。

しかし、確かにキャンベルは、著書こそ残していないが、長年にわたる彼女の活動の痕跡は多く残されている。歴史的に重要な場所や資料の保存を訴えた新聞への寄稿や投書、自身のコレクションについて語った講演原稿なども残している。また多年にわたる日々の収集活動において蓄積された数多くの手紙も見ることができる。本章は、これらを史料として利用することで、キャンベルが情熱を持って取り組んだアフリカナ収集活動と収集されたものが作り出す秩序を再構成することを目指す。

第 1 節「故国への情熱的な愛着」: キリー・キャンベルの生涯と収集活動

「おそらく、私の故国、南アフリカへの情熱的な愛着ゆえに、私はこの国の人々、彼らの歴史、この国のすべてについてもっと知りたいと切望することになったのだ」[33]。 キリー・キャンベルは、収集家としての自身の来歴を回顧する記事をこのように書き始める。彼女ほど南アフリカ戦争（ボーア戦争）後に、南アフリカが一つの国家として成立する過程を身近に感じていた人物、そして国家形成の歴史と家族の歴史が結びついていた人物はそういない。彼女は自身の収集家としての、また郷土史家としての活動を通して、南アフリカに住む白人に彼女の歴史観を共有することを求め、そうすることによって南アフリカの統合を実現しようとしていたのだ。

1.1. 愛書家から図書館の設立へ

[33] Killie Campbell, “A Collector of South Africana: Miss Killie Campbell and Her Hobby,” *South Africa: A Weekly Journal for all interested in South African Affairs*, May 27, 1939, 247.

キリー・キャンベルは、1881 年イギリス植民地であったナタールのマウント・エッジコム（Mount Edgecombe）という場所で入植者の三世代目として生まれた。

キリー・キャンベルが、自宅を図書館・博物館として開くという広い意味での慈善活動を行っていくに際しては、父親の影響があった。父親マーシャルは砂糖会社（Natal Central Sugar Company）の経営によって財を成した実業家であり、ナタール植民地議会議員を務めた政治家でもあった。1899 年から 1901 年にかけての南アフリカ戦争（ボーア戦争）がイギリス軍の勝利に終わり、それまで二つのイギリス植民地と二つのアフリカーナーの共和国に分かれていた南アフリカが統一され、一つの国家となる過程で、マーシャル・キャンベルは憲法の批准に尽力し、また 1910 年の南アフリカ連邦成立後は連邦議会上院議員を務めた[34]。マーシャルはケープタウンにある国会に出席するときには、しばしば娘のエレンとキリー、そして姪のエゼルを連れ立って行った。キリー・キャンベルは、議員や著名な歴史家たちとの出会いが、歴史への関心を起こす契機となったと回想する。著名な建築史家であるドロシア・フェアブリッジ（Dorothea Fairbridge）には、オランダ式の住宅やケープの古い家具を愛でることを、またケープ植民地の首相も務めた有力な政治家ジョン・メリマン（John X. Merriman）と父が南アフリカの歴史について語らうのを聞いて刺激を受けたりもした[35]。

しかし、キリー・キャンベルの収集熱をかきたてた人物はより身近にもいた。キリー・キャンベルは、マーシャルの砂糖会社の共同経営者であったディビッド・ドン（David Don）のアフリカナ・コレクションに影響を受け、十代後半から古書購入に熱を入れ始めたのである[36]。キリー・キャンベルの収集活動が、アフリカの植物や鳥などを扱った博物誌的書物の収集からはじまるのも、おそらくは、ドンの収集の影響を受けてのことである。

キリー・キャンベルが本格的に収集を始めるのは、第一次大戦が終わり、1917 年に父親が亡くなったことで手に入れた遺産を、古書購入に使うことができるようになった 20 年代からであり、当初は引き続き探検記・白人入植者の記録が対象の中心であったようである[37]。第二次大戦前の主な書籍や手稿の入手場所はロンドンであった。ロンドンには、イギリス軍人と結婚した妹グレディス(Gladys)が住んでおり、キリーは母と妹夫婦に会うために毎年当地を訪れていたのである。キリーは、ロンドンの古書店やオークションで収集家としての最初の訓練を受けたと回顧する[38]。またロンドンには、南アフリカで活動し、その後当地に居を構えた引退した行政官や宣教師が住んでおり、キリー・キャンベルは彼らを訪れ、交渉し、彼らの活動に関わる手稿を購入していっ

---

[34] Herd, *Killie's Africa*, 42.
[35] Campbell, "A Collector of South Africana," 247.
[36] Herd, *Killie's Africa*, 29-32. ドンのコレクションは、彼の死後、妻によってダーバン市立図書館に寄贈され、現在もドン記念図書館として保存されている。ドンの生涯と、彼のコレクションについては、Ester Roberts, "Don Memorial Library," *Lantern,* September, 1966, 28-39.を参照。
[37] Herd, *Killie's Africa*, 29-32.
[38] Campbell, "A Collector for South Africana," 247.

たのである[39]。

ナタールの郷土史家として自己を捉え、日々活動することは、愛書家として収集してきた書物を自己の所有物としてだけでなく、他の人々も利用すべき知識の宝庫としてみることをキャンベルに促したことだろう。1930 年には自宅を、所在地にちなみミュクレニック（Muckleneuk）図書館と名付け、研究者・郷土史家などに開放するようになる[40]。そしてまた蔵書を図書館として開放し、南アフリカ、特にナタール・ズールーランドの歴史に関心を持つ研究者や作家の利用に供したことは、キリー・キャンベルに自身を同地の歴史の守護者として捉え、史料の保存活動にさらに邁進させることともなったのだろう。彼女はことあるごとに、講演会や新聞の広告で、自宅などにある過去の史料を探し出すことを読者に促す。彼女自身が作成したスクラップブックから、いくつかの例を挙げよう。まずはダーバンのロータリー・クラブでの講演の例である。1935 年 10 月に百人近くのロータリー関係者が集まったダーバン市内の会合で、キャンベルは講演を行い、「歴史的遺物、古い手紙や写真、アフリカナ関係の書物やパンフレットを探し出すためのより徹底した探索」が為されるべきだと主張し、ナタール州の博物館や文書館が収集物を保存すべきであると述べたのである[41]。

このようなキャンベルの呼びかけの背景には、ナタールが資料の収集において他の地域に遅れをとっており、ヨハネスブルクやケープタウンなど他の地域の博物館に資料が流出しているという現状への危機感があった。ケープ州グラハムズタウンにあるローズ大学に、自宅に残っている初期入植者の記録を送って欲しいという投書を掲載した『ナタール・マーキュリー』紙に対して、キャンベルは抗議の投書を送っている。その投書によれば、同様の要請は第二節で取り上げる収集家ガビンズによってもなされており、キャンベルは、彼がヨハネスブルクにあるウィットワータースランド大学への資料の寄贈を呼びかけたために、貴重な資料がナタール州から失われたのだと嘆く[42]。

そして、この危機感ゆえに、キャンベルは、ナタール州の大学及び史料館にナタールの歴史に関する史料を寄贈することを強く促すのである。彼女は、「グラハムズタウンの人々と同様にナタールに住む私たちも、私たち自身の手紙、南アフリカに関する書物や手稿への愛情を涵養し、知

---

[39] Herd, *Killie's Africa*, 55; ""Fynn Papers" come back to Durban," *Natal Mercury,* October 10, 1946.及び本章第三節を参照。なおキャンベル図書館の主要所蔵史料に関しては、本章末尾の表 8ー1 を参照。

[40] Herd, *Killie's Africa,* 64.

[41] "Historic Relics of Natal: Miss K. Campbell's Plea," *Natal Advertiser*, October 29, 1935 in File 8 newspaper clippings, KCP, KCAL.. キリー・キャンベルが紙誌上で、史料収集と保存を訴えた例、あるいは彼女の講演が取り上げられた例は多い。例えば、Killie Campbell, "Forgotten Days. Work of S.A.N.S. Miss. Campbell's Appeal" Natal Advertiser, 1934 n.d.また特定の史料に関して、情報提供を呼びかけた記事もある。例えば、Killie Campbell, "Lost Bit of Old Durban," *Natal Mercury*, August 19, 1952 では、写真に写った場所の特定のための情報提供を呼びかけている。

[42] Killie Campbell, "Collection of Africana," *Natal Mercury* n.d. (1 冊目のスクラップブックの 42 ページ目に貼り付けられた本記事の発行日は不明だが、内容からおそらく、37 年初頭と推測される) File 8, Newspaper Clipping 43 KCP, KAL. キャンベルが言及しているボウルズのアピールは C.W. Bowles, "History Appeal," *Natal Mercury*, December 29, 1936.

識を持ち、保存していくという必要性を強く感じなくてはならないのだ」と主張するのである[43]。実際に、彼女の名前が収集家として知れ渡るようになると、彼女の呼びかけに応じ、キャンベルの元には、図書館に自分が保有する資料を所蔵してもらいたいという依頼が多く寄せられるようになる。そのほとんどは、入植者としての自分の先祖の記録を後世に残そうという人々からの品々である[44]。また時には、彼女に購入を持ちかける人々からの手紙が舞い込むこともある[45]。彼女は、その都度それらの収集品を、その書誌情報をカード目録に整理し、その後屋敷内の適切な場所に配置することを通して、南アフリカの歴史の中に位置付けていったのである。

そして彼女は自宅の図書館について、「南アフリカに関する貴重な記録の多くが無慈悲に破壊され、あるいはナタールから失われるということを強く認識しているので、私は南アフリカに関するコレクションをこれまで徐々に作り上げてきており、これらは将来的にナタール大学図書館に寄贈される」と述べる[46]。すなわち、収集活動を通じて、キリー・キャンベルが目指していたのは、貴重な資料を溜め込むことではなく、ナタールという場所に関わりを持つ人々が、キャンベルの収集品を通して過去を知り、歴史的出来事や場所への愛着を育み、白人入植者の子孫であれ、アフリカ人であれ自身の来歴への認識を深めることにあった。そして、知識を広げていくという点に関して、キャンベルはすべての人に対して協力的であった。キャンベルは、国内外の様々な研究者の問い合わせに対応し、時には自身で研究分野の文献目録を作成し、送ることまでしている[47]。また著名なアフリカ人劇作家ジョモ（H.I.E. Dhlomo）はキャンベルの図書館の利用者であり、彼はズールー人の歴史に関する自身のエッセイを執筆するにあたって、キャンベルが保有する図書や伝統工芸品のビーズ細工などを参照している[48]。 このように彼女の活動は、多くの人々の関心をとらえ、キャンベルの自宅兼図書館は、研究者やジャーナリストが集い、ナタールに関わりを持つ人々が想いを寄せる場所となっていったのである。

1930 年に蔵書を公開してから、キリー・キャンベルの収集活動は加速し、45 年にはその蔵書は二万冊を超えるに至った。あるいはそれは、キャンベルほどの財力を持つ人にとっても費用を費やしすぎたと感じられるほどであったかもしれないが[49]、彼女の活動はダーバンやナタールという範囲を超えて認められ賞賛されるようになるのである。1940 年には、歴史的な遺跡の認定に当たる自然歴史遺跡委員会の委員に女性として初めて選出され[50]、また 45 年にはアフリカナ収集

---

[43] Campbell, “Collection of Africana” File 8, Newspaper Clipping 43 KCP, KAL.
[44] 例えば、F.N. Broome to Killie Campbell. January 4, 1956. KCM6527, File 32, KCP, KCAL. を参照。彼は南アフリカ戦争中の祖父の日記をキャンベルに寄贈している。
[45] A. Wagner to Killie Campbell, May 2, 1948, KCM4841, file 16, KCP, KCAL.
[46] Campbell, “Collection of Africana” File 8, Newspaper Clipping 43 KCP, KAL.
[47] Killie Campbell to Reverend G. D. Schneider, October 4, 1955, KCM6420, File31, KCP, KCAL.
[48] Tim Couzens, *The New African: A Study of the Life and Work of H.I.E. Dhlomo* (Johannesburg: Raven Press, 1985), 296. ディロモのエッセイに関しては、H.I.E. Dhlomo, “Zulu History and Culture,” n.d. file 1 Dhlomo Papers, KCAL を参照。
[49] 書籍の購入を持ちかけてきた人に対してキャンベルは「宝物を得るためにお金を使いすぎたかもしれません」と書いている。Killie Campbell to Mrs. Burkes, February 28, 1949, KCM4946, KCP, KCAL.
[50] Herd, *Killie's Africa,* 87. 同委員会に関しては、Andrew Hall and Ashley Lillie, “The National Monuments

家ジョン・ガビンズのコレクションを核としたヨハネスブルグのアフリカナ博物館の機関紙 *Africana Notes and News* に著名な収集家として自身のコレクションを紹介する機会を得ている[51]。

1.2. 史跡保存と博物館設立

キリー・キャンベルの歴史との関わりは、書物や家具・工芸品の収集に留まらなかった。彼女はまた歴史的にゆかりのある場所の保存運動にも深く関わっていた。彼女は南アフリカ国内の史跡の保護を目的とする団体、南アフリカ・ナショナル・ソサエティ（South African National Society）のダーバン支部の会長を務め、また先に述べたように郷土史家、収集家としての功績が認められ、1940 年からは、女性として初めて南アフリカ自然・歴史記念碑委員会の委員を五年間勤めている。

彼女が史跡の保存に傾ける情熱の一端は、例えば、ナタール植民地への初期入植者に関わりの深い場所を認知し、記念することで保存を促すことを主張する新聞の投書からうかがい知ることができる。ナタール州内で保存すべき場所を様々に列挙した後、彼女は次のように投書を結ぶ。「地域の歴史はすぐに忘れ去られ、古い入植者はあまりにもすぐにこの世を去ってしまう。正確な情報が私たちの手の届かないところに行ってしまう前に、事実や土地を記録に録ることが不可欠なのである」[52]。このように彼女の保存活動は確かに彼女の入植者の子孫としての意識と不可分に結びついたものではあるが、ナタールという場所への愛着という点でイギリス系入植者に限定されるものではなく、アフリカーナーやアフリカ人に関わる史跡をも含むものであった。例えば彼女は、1942 年に、史跡の保存を目的としてズールー部族歴史コンテストを開催する。このコンテストにおいて、彼女はアフリカ人学生に対して、自身の属する民族の歴史にとって重要な場所を、老人への聞き取りを中心として明らかにするエッセイを執筆することを求めたのである。自身で賞金を提供してコンテストを開催する彼女の目的は、エッセイによって明らかにされた史跡を写真に収め、後世に伝えていくことにあった[53]。

そして、この歴史を後世に伝えていくという情熱が彼女の戦後の史料館・博物館の設立を目指す運動へと繋がっていく。その第一は彼女自身が集めた、またナタール歴史協会（Natal Historical Society）が収集した入植者の品々を展示し保存するための博物館を設立することであった。彼女の精力的な活動が実り、ナタール植民地の初代首相ジョージ・ロビンソン（George Robinson）の子孫チャールズ・コリンズ（Charles Collins）が、かつて先祖が住んでいた屋敷を提供し、1954 年にはオールド・ハウス博物館（Old House Museum）としてオープンする[54]。また同博物館オープ

Council and a Policy for Providing Protection for the Cultural and Environmental Heritage," *South African Historical Journal* 29(Nov. 1993):102-117 を参照。

[51] Campbell, "My Africana Collection"

[52] Killie Campbell, "Historical Places," *Natal Mercury,* December 3, 1936.

[53] "Bantu Historical Records: Prizes Offered for Essays," *Native Teachers' Journal* 21, no. 3 (1942) :151.

[54] Herd, *Killie's Africa*, 124-6.

ン後も彼女は入植者の品々を収集し、兄ウィリアムの名を冠した博物館ウィリアム・キャンベル博物館（William Campbell Museum）を自宅に開くとともに、彼女自身の蔵書についてもナタール大学への寄贈という形をとり、1965 年の彼女の死後も彼女が収集した史資料をナタールの歴史に関心を持つ人々の利用に供する体制を築いたのである[55]。

以上がキリー・キャンベルの簡単な生涯であるが、20 世紀南アフリカという激動の舞台にあって彼女の生はあまりに静かであり、歴史研究の対象としての重要性が感じられない、とあるいは思われるかもしれない。しかし、彼女の収集活動と収集物に込めた彼女の想いを検討することは、南アフリカにおいて人々が日常いかにして歴史を意識し、集団としてのアイデンティティを造っていくかを明瞭に捉えるための有力な視座を提供する。これが、本章がキリー・キャンベルに注目する理由である。しかし、彼女の活動を 20 世紀の南アフリカ政治に位置付けて理解するという目的を達成するためには、少々回り道をしてアフリカナ収集とはそもそも何であったのかを把握する必要があるだろう。これが次節の課題である。

第 2 節「メンデルスゾーンにも挙げられていない」：アフリカナとは何か

キリー・キャンベルはアフリカナの収集家として知られる。収集家のコレクションを説明する方法として、書き手の歴史観に基づいて集められたモノの価値を述べていくという手法がありうる。しかし、そのような説明の仕方から抜け落ちてしまうのは、選択されたモノを集めるという行為によって、そして収集されたモノを物理的な空間の中で、また目録という抽象的な形で、特定の位置に配置するという行為によって、特定の歴史の見方を作り出すという点である。本節ではキャンベルが活躍した 20 世紀南アフリカにおいてアフリカナとされたモノを集めるという行為にどのような意味が込められたいたのかを検討することを通して、実践としてのアフリカナ収集が作り出す集合体としてのモノと人々との関わりを説明したい。

まずは取っ掛かりとして、*Oxford English Dictionary* の定義を掲げておこう。

「アフリカナ(Africana)、名詞。もともとはアフリカに関する研究を意味した。その後、アフリカ、特に南部アフリカに関する本や、工芸品、その他収集家のアイテムを指す」[56]。

OED は、なぜこの言葉が特に南部アフリカに関わるモノを指すのかを説明していないが、アフリカナ収集家を対象とした書籍や雑誌を読むと、南部アフリカにおける入植者社会の形成がこの地域を非歴史的なエキゾチズムの対象として捉えるだけではなく、入植者社会の形成という歴史的視点からの関心を引き起こしたことが要因であることが分かる。

例えば、その後の多くのアフリカナ収集の解説書で、そのアフリカナの定義が頻繁に引かれる

---

[55] ウィリアム・キャンベル博物館設立のためのキリー・キャンベルによる家具収集の活動に関して、 Killie Campbell to Mrs. Clark, December 8, 1956, KCM6507; Killie Campbell to J.G. Allsopp, October 12, 1955, KCM6514 file 31, KCP, KCAL.

[56] “Africana, n. Originally: †African studies (obs.). Subsequently: books, artefacts, and other collectors' items connected with Africa, especially southern Africa.” オンライン版（アクセス日　2016 年 8 月 26 日）

こととなる、南アフリカ図書館（South African Library）の司書を務めていたヴァーレイ（D.H. Varley）の著作『アフリカナにおける冒険（*Adventures in Africana*）』(1949 年)を見てみよう。ヴァーレイが歴史愛好家を対象に行った講演を元にした同書において、彼は南アフリカの国家形成に関わった人々の活動を記録し、収集することの重要性を説く。アフリカナという言葉は白人入植者の歴史と結びついて語られるのだ。彼は冒頭でアフリカナを次のように規定する。

「私たちがアフリカナについて語るとき、私たちが言おうとしているのは、巨大であれ小さいものであれ、自然のものであれ人工物であれ、アフリカ、特に南部アフリカの歴史に関わる全てのモノです。それはテーブルマウンテン（と言っていいですよね）から、ケープの古い家具、ケープタウンで出版されたパンフレットからボウラーの絵に至るまでを含みます。より具体的に言えば、私たちはアフリカナをこの亜大陸における人間の定住という観点から、しかし常に歴史的な、そして現在に関係する過去という観点から考えるのです」[57]。

彼は、過去の人々の生活が残した痕跡としての物品から、往時の人々の生活を明らかにする社会史を描くことができるのであり、その様な歴史が現在望まれているのだと主張する。しかし、たどるべき過去を持つ人々と彼が（そして当時の南アフリカ国家が）想定していたのは、白人入植者とその子孫たちのみであり、「有色の人々」は、探検記の中の奇妙な種族、あるいは帳簿の中の数字など限られた場しか与えられなかった。

ヴァーレイの定義は、その後のアフリカナに関する文献において何度も引用される定義ではあるけれども、定義としては茫漠としており、収集家がいかにして自分の集める対象を決め、日々の収集を行っていたのかは見えてこない。そこで次にアフリカナの収集において最も有名な人物シドニー・メンデルスゾーン(Sideny Mendelssohn)を取り上げて、彼の出版した文献目録を中心に彼の収集活動をたどりたい。彼の目録の影響力を測ることは、アフリカナ収集家の日々の収集活動とそれを行う際の彼らの意識という領域に入っていくことを可能にするだろう。

2.1. シドニー・メンデルスゾーン：収集の秩序

メンデルスゾーンという名前とアフリカナの収集は非常に密接に結びついている。実際先に挙げた OED の Africana の項目の例文には、二度メンデルスゾーンの名前が見られる[58]。彼がこのような地位を確立したのは、OED の例文に見られるような彼の収集した膨大な蔵書によるものでもあるが、それ以上に、彼の出版した文献目録の影響が大きい。

ラビの息子であるシドニー・メンデルスゾーンは、1860 年にイングランドで生まれ、18 歳の時に両親とともに南アフリカ・キンバリーに移住する。そこで彼は、ダイヤモンド取引に従事し、

---

[57] D.H. Varley, *Adventures in Africana* (Cape Town: University of Cape Town and the Trustees of the South African Library, 1949), 5.

[58] 例文はそれぞれ、“1903　I. Bud-M'Belle *Kafir Scholar's Compan.* Pref. p. xxii,　Mr. Sidney Mendelssohn, a well-known collector of Africana”.及び“1949　L. G. Green *In Land of Afternoon* vi. 78　Greatest of all Africana collectors was Sidney Mendelssohn”.である。

それによって得た資金で、南アフリカに関する書籍を購入し始める。彼は、書籍を集めるだけでなく、それぞれの書籍に関して感想や注釈を書き溜めていった。これが、彼の目録の基礎となっていたのである。特に 1899 年ロンドンに居を構えて以降は蔵書のスケールが拡大し、秘書を雇って書籍の整理・内容の確認などをさせていた。そして、1904 年、第一回南アフリカ図書館司書全国大会で、南アフリカに関する文献の包括的な目録の作成を促す講演を聞き、自身でそのような目録を作成することを決意する。彼は、自身の蔵書を中心に、大英博物館図書館などに所蔵されているものを含めて、南アフリカに関する文献のほとんどを網羅し、かつ各文献に関して簡単な説明を付した、南アフリカ文献目録（*South African Bibliography*）を 1910 年に出版するのである[59]。

この目録は、出版後すぐにアフリカナ収集家に衝撃を与えた。その影響力を、アフリカナ収集に関するいくつかの案内書や記事からの引用で見てみよう。

「アフリカナの書物を真剣に、熱意を持って集めようと試みる者すべてにとって、メンデルスゾーンの目録を所有することは、必要不可欠な前提に等しい」[60] 。

「幸いなことに、収集家は現在いくつもの素晴らしい文献目録を利用することができる。その中で最も重要なのは 1910 年に二巻本で出版されたシドニー・メンデルスゾーンによる記念碑的作品『南アフリカ文献目録』である」[61]

「著名なメンデルスゾーンの文献目録は、（収集家にとって）最も価値のある資産である」[62]

このように引用文を列挙すると、洋書の裏表紙の宣伝文のようなものが出来上がる。しかし、同種の派手な広告文を備えた研究書の多くと異なり、収集家にとってメンデルスゾーンの目録は、実際に欠かせないものであった。それは、メンデルスゾーンの目録が、文献を探す際に参照するという用途だけにとどまらず、収集家が自身のコレクションの価値を測る物差しとしても機能していたからである。すなわち、メンデルスゾーンの目録はその内部に、収集家という集団において何が価値のあるものとされているのかを指し示す指標の集合、すなわち価値の体系を宿していたのである。

メンデルスゾーンの目録がアフリカナ収集における価値基準となっていたことを特徴的に指し示す言葉が、「メンデルスゾーンにも見られない（unknown to Mendelssohn）」や「メンデルスゾーンにもない（not in Mendelssohn）」といったフレーズである。この言葉は、メンデルスゾーンでさえ見つけることができなかった珍品として、自身の収集品を目録の中で誇示し、あるいはオークションで出品された書物の価格を釣り上げようと画策する時に使われる[63]。

---

[59] Frank R. Bradlow, “Sidney Mendelssohn and his Collection,” *Jewish Affairs*, May 1965, 12-13; Frank R. Bradlow, *African Books &Pictures; A Selection of Published Papers* (Cape Town: A. A. Balkema, 1975), 27; Evans Lewin, “the Mendelssohn Library and Bibliography,” *Africana Notes and News* 3 (1946): 101-102.
[60] Denis Godfrey, *The Enchanted Door: A Discourse on Africana Book-collecting, with Notes on Famous Collectors, Collections and Books* (Cape Town: Howard Timmins, 1963), 45.
[61] Bradlow, *Africana Books & Pictures*, 4.
[62] C. R. Sawyer, “Collecting Africana,” *African Affairs* 54, no. 217 (October 1955): 316.
[63] R. F. Kennedy, “Not in Mendelssohn,” *Africana Notes and News* 4 (1947): 1.

この成句の使用例を、いくつか見ていこう。ヨハネスブルクの著名な収集家で、現在はウィットワーターズランド大学図書館のコレクションにその名を残すハンフレー（J.C.N. Humphreys）は、自身のコレクションの目録で、自慢の本を次のように記述する。

「この本(Jakob Breyne 著 *Exoticarum aliarumque minus cognitarum plantarum centuria prima*)は、（息子）Johann Philipp Breyne の献本である。南アフリカに関する植物学的著作という分類で、メンデルスゾーンに記載された中で最も古い著作であり、メンデルスゾーンはこの本を所有しておらず、南アフリカ図書館所有のものを記述している。（中略）ここに示した Breyne の二つ目の著作は、PRODOMI FASCECULI RARIORUM PLANTARUM である。これは大英博物館、その他の世界の大図書館を探したメンデルスゾーンにも知られていなかった（unknown to Mendelssohn）」[64]

このようにメンデルスゾーンの目録は、コレクターに共有された評価の基準となっていたのである。

またアフリカナに関するオークションの歴史を記述した記事の著者は、次のように嘆息する。

「最後に議論するオークションは、クープマンス・デウィット夫人と娘によって 1913 年 5 月にケープタウンで開かれたものである。この時点においてメンデルスゾーンの影響は強く感じられる。彼を参照する注釈と言及がいくつもなされ、それはおそらく最も早い時点での常套句『メンデルスゾーンにも見られない（Not in Mendelssohn）』を含むものである。『メンデルスゾーンはこの著作に言及しなかった』、『メンデルスゾーンはこの本を見つけなかった』、『メンデルスゾーンはこの本を手に入れることができなかった』というような注釈がカタログを通して見られるのである。ああ、なんとメンデルスゾーンはこの国の書物収集と書籍価格に影響を与えたことか！」[65]。

このように収集家たちは、メンデルスゾーンの文献目録を参照することで、個々の文献の位置を確認し、また自身のコレクション全体の価値を評定する。あるいはむしろ、収集家がメンデルスゾーンの目録を、他者が求めているものを示す本として利用することによって、この目録は価値基準それ自体になっていったということができるだろう。読者の個々の実践が、メンデルスゾーンの価値基準を具現化するのだ。

それでは、収集家たちが依拠するメンデルスゾーンによって作られた価値の体系はどのような秩序を持つものなのだろうか[66]。それを明らかにするためには、この目録が実際にはどのように読まれたのかを検討しなくてはならない。メンデルスゾーンの目録において記載された文献は、

---

[64] J.C.N. Humphreys, “JACOB BREYNE,”n.d.　J.C.N. Humphreys Paper A2201, D.1.3. Index to the Blue Books, list of maps, notes on Botanical books kept by Mr. Humphreys, University of the Witwatersrand Department of Historical Papers. この他にもメンデルスゾーンへの言及は、ハンフレーが自身のコレクションを記述したノートや目録の多くに見られる。

[65] Stephan Weltz, “Africana at Auction,” *Bibliophilia Africana* 5(1986):192-193.

[66] 文献・書物の集合が価値体系を持つ秩序を形成するという観点に関しては、ロジェ・シャルチエ（長谷川輝夫訳）「幻想の図書館」『書物の秩序』（文化科学高等研究院出版局、1993 年）を参照。

著者名のアルファベット順に並んでいる。しかし、読者はこの巨大な二巻本の文献目録をアルファベット順に並んでいる文献を並べられた順序で読むということはしない。手元に調べたい文献を備えている利用者は著者名でこの目録を引くことだろう。またそれ以外でこの目録を利用する人、特に関心を持つ分野での文献を知りたいという目的で利用する人は、おそらく第二巻末尾の年代・地域別索引の項目に行き着くはずである[67]。この地域別索引において特徴的であるのは、文献が出版年順に並べられていることである。それゆえに先に引用したハンフレーは、所有する書物を「メンデルスゾーンに記載された中で最も古い著作」と述べることができたのである。そして、年代が下れば出版物が増えるという視覚的特徴それ自体が、入植者社会の発展という観念を支えもする。そしてこの出版年による文献の並べ方が、著者名順の本文よりもメンデルスゾーンの文献目録作成の意図を反映しているだろう。彼は、南アフリカがイギリス帝国の一部を担う国家として、南アフリカ連邦の形成に至るまでに辿ってきた波乱に満ちた歴史を研究しようとする者に、この大陸の記録を容易に利用できるようにしたいと考えていたのだ。

メンデルスゾーンは連邦成立の 7 年前の 1903 年にキンバリーで行った講演で、次のように述べている。

> 「何年かのちに、私たちが、自由で啓蒙された共同体の芯に私たちの結びつけられた伝統への愛を強く持つ、そのような統合された幸福な国民となることができた時には、私たちの間に芸術と文学への愛が興り、それは南アフリカが地上の諸国民の間に地歩を得ること、また私たち国民の土地から「暗黒の大陸」という叱責を一掃することを可能にするだろう」[68]。

この引用から明らかなように、メンデルスゾーンはイギリス植民地とアフリカーナーの共和国が連合し、イギリス帝国の一翼を担う国家を形成するという考え方に心酔していた。実際、彼はこの文献目録を 1910 年の連邦議会開設に合わせて出版したのである[69]。この点において、メンデルスゾーンと彼の文献目録は、歴史家ソール・デュボウ（Saul Dubow）が南アフリカ戦争後のイギリス系知識人の多くが唱えた南アフリカ主義、すなわち南アフリカ全体の利益を最優先し、イギリス系住民とアフリカーナーとの連帯を維持することに尽力するという政治姿勢の流れの中に位置付けることができるだろう[70]。

しかし、イギリス系とアフリカーナーとの連帯が図られる一方で、アフリカ人は南アフリカ連邦の国民とは認められていない。アフリカ人は歴史を持たず（目録においてもアフリカ人の歴史という項目はない）、ヨーロッパ人入植者以前アフリカは暗黒の大陸であった。暗黒大陸アフリカ

---

[67] このような読み方を示唆するものとして、Evans Lewin, “The Mendelssohn Library and Bibliography,” *Africana Notes and News* 3(1946):104.
[68] Sidney Mendelssohn, *South African Bibliography Volume One* (London: The Holland Press, 1957 org.1910), 1006.
[69] Mendelssohn, *Bibliography Volume One*, X.
[70] Saul Dubow, *A Commonwealth of Knowledge: Science, Sensibility, and White South Africa 1820-2000* (Oxford: Oxford University Press, 2006), 162-5.

に光をもたらすものとしての帝国主義という考え方は、メンデルスゾーンの蔵書票によく表れている。蔵書票の中央にはセシル・ローズの顔と彼の唱えるケープからカイロへを表すようにケープタウンからキンバリー、ブラワヨを通りカイロまでをつなぐ線が描かれたアフリカの地図が位置している。そしてローズの後ろからは光がさしており、暗黒の大陸としてのアフリカを照らしている。その下には書物が広げられて置かれており、その見開きのページにはレオ・アフリカヌス、バルトロメオ・ディアス、ヴァスコダ・ガマ、ファン・リーベック、ディビッド・リビングストンとアフリカへの探検家（あるいは侵略者）の名前が記されている。彼の書物に付されたこの蔵書票は、メンデルスゾーンの収集した書物が、白人入植者によってアフリカという闇の大陸が啓かれていく、その過程を後付けていることを意味する。それゆえに、メンデルスゾーンにとって南アフリカの歴史は白人入植者社会の発展の歴史であることは疑いを得ない。収集家たちは、メンデルスゾーンの目録を利用し、それに依拠して個々の書物やコレクション全体の価値を評価していくことを通して、植民地主義と結びついたその価値基準を実体化していったのである。

2.2. ジョン・ガビンズ：歴史観の広がり

収集家の間でのメンデルスゾーンの目録の利用の仕方に見られるように、収集家たちは他の収集家との関わりの中で、自身のコレクションを形成する。しかし、収集家同士の関わりはアフリカナ市場への参加という抽象的な形に限定されていたのではない。収集家たちはお互いのコレクションを見るために訪問し合い、手紙をやり取りし、また収集家向けの会合や雑誌を通して、情報を交換していた。実際キリー・キャンベルの手紙にも彼女と他のアフリカナ収集家との関わりが残されている[71]。

例えばキャンベルは自身のアフリカナ収集家としての経歴を回顧した記事の中で、ヨハネスブルクの著名な収集家ジョン・ガビンズの訪問を印象深く記している。

> 「亡くなる少し前に、ガビンズ氏が私のコレクションを見に来ました。彼は九時半に到着し、きっと 1、2 時間を過ごすつもりだったのでしょう。しかし、彼は私に昼食の時間もほとんど取らせてくれずに、結局 5 時に私は重要な予定が入っていると告げざるをえなかったのです。南アフリカは彼がアフリカナに大いなる関心を持ったことに恩義があると思います。その強烈な個性と知識によって彼は南アフリカについての研究と愛着への熱狂を引き起こしたのです。彼は生まれついての収集家（born collector）でした」[72]。

---

[71] 例えば、キャンベルは、著名な絵画収集家ウィリアム・ファー(William Fehr)とアフリカナについて手紙をやり取りしている。手紙の内容は、最近入手したもの、手に入れたいと長年考えていたもの、偶然見つけたがもしかしたら相手が欲しいと思うかもしれないものなど、多岐にわたる。Killie Campbell to William Fehr, May 11, 1956; William Fehr to Killie Campbell, June 28, 1956; William Fehr to Killie Campbell, July 31, 1956, KCM6627, KCP, KCAL.アフリカナ収集家向けの雑誌としては、Africana Museum(現 MuseumAfrica)が発行していた、*Africana Notes and News* を参照。また主に書物の収集家に限定されてはいるが、南アフリカ図書館主催の会合の記録、*Bibliophila Africana* も参照。

[72] Campbell, “A Collector of South Africana,” 247.

ガビンズが訪問の翌年に亡くなることを考えれば、二人の収集家の間での無言の申し送りのように読める一節である。ガビンズの長居はそれだけキャンベルのコレクションが興味深く、ガビンズのような著名な収集家からその価値が認められたことで間接的にキャンベルのコレクションの価値を示すものとなっている。それでは次にキャンベルが懐かしく思い出す収集家ガビンズについて述べよう。ガビンズについて触れることは収集家の日常の水準において、いかに南アフリカ主義とアフリカナ・コレクションの形成及びその収集物による歴史像の提示が結びついていたかを明確にするだろう。

ジョン・ガビンズの収集活動の道程は、自身の住む土地への私的な愛着によって始められた収集活動の成果が人々によって共有され、公的機関の支援を受けることで、入植者中心の歴史観を公的に支える装置となっていく過程を示している。ガビンズはアフリカナ収集を趣味とする古物愛好家ではあったものの、その職業は農家であるという市井の収集家という立場からその収集活動を始め、その収集品の拡大に伴い、蔵書がウィットワータースランド大学に、また物品がヨハネスブルク市図書館の専用に造られた博物館に所蔵されることになり、いわば公的な収集家という立場に移っていったのである。ガビンズと彼の収蔵品が収められたアフリカナ博物館(Africana Museum:現 MuseumAfrica)を対象としたサラ・バイアラ（Sara Byala）の研究書は、ガビンズの収集活動は、南アフリカ主義の影響を強く受け、白人入植者の間で共通の国民意識を醸成するという理念の実現を目指したものであったとまとめる。バイアラは、南アフリカ戦争後に南アフリカに移住したガビンズは、ヨハネスブルク郊外に居を構え、周囲をアフリカーナー農家に囲まれる中で、トランスヴァールで最初に死んだ白人女性（アメリカ人宣教師の妻）の墓碑やフォールトレッカーの記念碑や記録などを収集することで、白人入植者としての共通の過去をイギリス系住民とアフリカーナー住民の意識に上らせることを目指し、収集活動を通して両者の調和を達成しようと試みていたのだと指摘する[73]。

そして、この点がよく体現されているのが、ガビンズが自宅を図書館として開放し、イギリス系・アフリカーナーに関係なく、自身の蔵書や収集物を利用に供したことだろう。アフリカナ収集活動におけるガビンズの意図は、入植者の苦難を共通の過去として認識することを助けることであったのだ。

ガビンズの図書館を訪れた経験を回顧したある利用者の証言は、彼の意図が酌み取られていたことをよく表している。「40 年以上前のことではあるが、トランスヴァールの彼の農場にガビンズ氏を訪れたことをいまだに憶えている」とアーサー・ラボネ（Arthur Rabone）は書く。父と彼はコレクションを見に 12 マイルを歩き、自宅の農場からガビンズの農場を訪れたのだ。ラボネは、その当時でさえ彼が集めていた豊富な資料を見せられて、少年がどんなに影響を受けたかお分かりでしょうと嘆息するのだ[74]。

---

[73] Sara Byala, *A Place That Matters Yet: John Gubbins's MuseumAfrica in the Postcolonial World* (Chicago: University of Chicago Press, 2013), chaps 1 and 2.

[74] Denis Godfrey, "A Schoolboy's First Visit to Dr. Gubbins," S*unday Chronicle* May 2, 1965, John Gubbins

しかし、少年は感銘を受けただけではない。ガビンズのコレクションを見ることは、納められた記録を残した人々と現在の自分とをつなぐ行為でもあったのだ。「父から私の母がウィリアム・アンダソン師の子孫であると知らされて、ガビンズ氏は私たちに 1820 年代初めにアンダソン師がジョン・フィリップ氏に宛てて書いた手紙を私たちに見せてくれた。手紙にパカルスドロップ（Pacaltsdrop）で育てられた蚕によって紡がれた絹のもつれが同封されていた。アンダソン師はそれが南アフリカで初めて紡がれた絹であると書いていた」[75]。ガビンズの収集品を見ることで人々は現在に生きる自分を入植者の苦難の過去と結びつけるのだ。

そして、それは同時に、ヨーロッパ人によって南アフリカに「文明」がもたらされるという歴史観を体感する行為でもあった。ガビンズの収集活動は入植者の記録に留まらず、1920 年代後半からは急激な工業化で都市に押し寄せるアフリカ人の脱部族化という関心から、アフリカ人の歴史・文化も収集対象に含まれるようになる。ガビンズは、蔵書をウィットワータースランド大学に、物品をヨハネスブルク市図書館の専用に造られた博物館に寄贈した直後の 1935 年に亡くなった。しかし、ガビンズの死後、彼が残した収集品は入植者の歴史を展示する北翼とアフリカ人の伝統文化を対象とした南翼に分離され、南アフリカにおける二重の統治体制を空間的に表す構図を示すこととなった[76]。さらにはアフリカ人に関する収集品のみが、ヨハネスブルクのニュータウンの旧市場を改築した建物に移されるなど、人々の分離を徹底する方針は、収集品という文化の側面にも及んだのである。この点で、アフリカナという収集品は、アパルトヘイト政策に影響を受けつつ、一方でそのイデオロギーを裏書きする役割を担っていったのである。

ガビンズの自宅兼図書館及び彼の収集品を展示する図書館・博物館は、人々に見学されることによって、書物・物品を購入できない人にも彼の歴史観が広がっていく、そのような回路であった。そして、キリー・キャンベルにとっても彼女が収集活動を始めた当初からガビンズと同様に南アフリカ主義は大きな目標として意識されていたことだろう。そしてこの目標が、20 世紀中葉の南アフリカ政治の変容とともにいかに変わっていったのか、この点を捉えることが次節の目標である。

第 3 節　過去が意味するものの変容

Papers, A1479, Press Material, File 7, University of the Witwatersrand Department of Historical Papers.

[75] "Collector's notebook by Denis Godfrey. A Schoolboy's First Visit to Dr. Gubbins," *Sunday Chronicle* May 2ⁿ, 1965, John Gaspard Gubbins Papers, A1479 File 7, Press Material, University of the Witwatersrand Department of Historical Papers.

[76] さらに、アフリカ人に関する収集品はその後ニュータウンにある旧市場に移され、ガビンズのコレクションは分離して展示されることとなる。Byala, *Place that Matters Yet*, 119-120. ただし、イギリスからの入植者に起源を持つ国家においては、博物館が一方で入植者の歴史の進展を、他方で保存すべき消滅しかけた「原住民」の文化及び伝統的生活を、空間を分けて展示するという形態は広く見られる。この点に関しては、カナダ・南アフリカ・オーストラリア・ニュージーランドを対象にイギリス帝国内の博物館の比較史を展開した、John M. Mackenzie, *Museums and Empire: Natural History, Human Cultures and Colonial Identities* (Manchester: Manchester University Press, 2009)を参照。

1947 年キリー・キャンベルは知人から彼女の蔵書票の図柄の意味するところを尋ねられた。それは、後景に頂上から陽光がさす山並みを配し、山に向かって曲がりくねった道を牛車が進むところを描いており、道の右手にはアフリカ人の小屋と焚き火がある。「牛車は、理解と知識に続く長い道のりにおいて私たちが登らなくてはならない、ゆっくりと確実で根気のいる歩みを象徴している」。キャンベルは図柄をこのように説明する。しかし、山頂の象徴する知識の頂にたどり着けるのは偉大な詩人など少数の人だけであり、彼女自身は、そこで旅人が休息し、力を蓄える小屋のように、「収集家として本を広げ、参考資料を提示することで知の登山をする旅人を助け、励ます」のである[77]。 この記述からは、キリー・キャンベルの自分は知識の高みには達し得ないにしろ、そのような試みを助けていこうという気持ちを込めた蔵書票であることがわかる。しかし、南アフリカという文脈において牛車がフォールトレッカーを象徴することを考えれば、キャンベルが、この蔵書票の牛車をアフリカーナーと特定してないことには、この時点においてキャンベルがアフリカーナーとの協調という政治姿勢にためらいを抱いていることが見受けられるのである。

3.1.「共通の過去」

しかし、キャンベルがアフリカナ収集を始めた当初から少なくとも 1930 年代半ばまでは、彼女はアフリカーナーの歴史、特にフォールトレッカーの移住の過去を掘り起こすことに心酔している。彼女は先に述べた南アフリカ主義という時代的な背景から大いに影響を受けていたのである。キリー・キャンベルにとって南アフリカ主義は、父マーシャルの行動を通して日々感じることができるものであった。マーシャル・キャンベルの手紙からは、彼が南アフリカ国民としての一体感を創出しようという時代の中にあり、その流れに棹さす政治家であったことが分かる。例えば彼は、自身の蔵書をかつてアフリカーナーの共和国の一つであり、アフリカーナー住民の割合が高いオレンジフリーステート州所在の専門学校に提供している（この蔵書を基にした図書館は、Sir Marshall Campbell Collection と名付けられた）。また彼は、同州出身でダーバンを訪れた学生を対象として作文のコンテストを主催してもいる[78]。キリー・キャンベル自身も父とアフリカーナー農民が（父はアフリカーンス語が話せず、農夫は英語が話せなかったため）お互いの共通語であるズールー語で語らい合う微笑ましい場面を回顧している[79]。

アフリカーナーとイギリス系、両者の間に国民としての一体感の醸成を目指すというキャンベルが収集活動を始めるまでに浸っていた時代的な雰囲気は、彼女の収集態度に影響を与えることとなった。彼女はロータリー・クラブでの講演で過去の記録を収集し、保存するに際して、ナタールの記憶を「イギリス系のものとそうでないものという完全に分かれた、防水加工の容器に押

---

77 Killie Campbell to R. Gerard, November 14. ,1947. file 15, KCM4731, KCP, KCAL.
78 G. Macdonald to Marshall Campbell, March 24, 1917, KCM32407, Marshall Campbell Papers, file 1, KCAL; “Competition open to Scholars now Visiting Natal from O.F.S.,” n.d. Marshall Campbell Papers, file 2, KCAL.
79 Campbell, “A Collector of South Africana,” 247.

し込める」べきではないと述べる。「私たちが伝統というものを持つとすれば、それはオランダ系とイギリス系両方の人々が一緒にこの若い南アフリカという国民を創り上げたという偉業に対する相互理解と国民的な誇りの意識に基づいたものでなくてはならない」のだ[80]。イギリス系とアフリカーナーとの間に壁を設けないこと、両者の歴史を南アフリカという国家の形成の歴史という共通の土台の上で、人々に捉えさせること、これこそが、キャンベルが求めていることであった。

キリー・キャンベルの活動がアフリカーナーとの連帯という理念からどのように影響を受けていたか、例を挙げてみていこう。イギリス系とアフリカーナーに共通する過去を掘り起こしたいという彼女の意図を理解すれば、キリー・キャンベルが文筆家・音楽家のチャールズ・ボニフェイス（Charles Etienne Boniface）の手稿を手に入れ、ボニフェイスが作曲した曲の演奏会を実施した時の嬉々とした姿を当然のこととして受け取ることができるだろう[81]。ボニフェイスは 1787 年にフランスに生まれ、革命を逃れてケープ植民地に居住し、その後ケープ植民地におけるイギリス支配を忌避し北上したアフリカーナーに同行した人物であり、ナタール共和国が設立されるとそこで新聞出版人となった。ボニフェイスは、ナタールがイギリス植民地になった後も同地にとどまり、英語・フランス語・アフリカーンス語で劇を作成したのである。ボニフェイスの手稿を保存することは、彼女が愛着を持つナタールという植民地が設立されるその場の空気を感じることとともに、イギリス系とアフリカーナーの共通の歴史を保存することを体現する行為でもあった[82]。

また彼女のアフリカーナーへの関心は、自身のコレクションの収集に留まらなかった。新聞への投書において、彼女はアフリカーナー住民の少ないナタール州ではあるが、過去にこの場所がフォールトレッカーによって設立を宣言された最初の共和国であったことを読者に呼び起こすことを求める。そして、この州に残っているフォールトレッカーの遺物（relics）を掘り起こし、またオランダ風の建物をダーバンに建設し、南アフリカの歴史を提示する博物館として活用することを提案したりしている[83]。

さらにキャンベルの残した史料の中にはアフリカーナーの将軍プレトリアス(Andres Pretorius)を讃える講演の原稿も残されている。この原稿において、彼女は現在の行政首都プレトリアの名前の由来ともなっているアフリカーナーの将軍が、アフリカーナーの共和国トラスンヴァールの独立を達成した後、イギリスと友好的な関係を築いていたことを述べ、プレトリアスの生き方が、「新生の国民である私たちに、有効と、平和、そして理解に至る方法を示している」ことに注目することを促すのである[84]。

---

[80] “Historic Relics of Natal: Miss K. Campbell’s Plea,” Natal Advertiser, 29 Oct. 1935.
[81] 夜会でのスピーチ原稿である、Killie Campbell, “Charles Etienne Boniface” File59a, KCP, KCAL を参照。
[82] Herd, *Killie’s Africa*, 78.
[83] Killie Campbell, “Relics Being Lost to Durban,” *Natal Mercury,* n.d.
[84] Killie Campbell, “Two Incidents in Connection with the Life of Andries Pretorius,” n.d. KCM10113b, File

彼女のアフリカーナーへの共感は 1938 年のフォールトレッカー百周年記念祭への協力において最高潮に達する。彼女は記念祭のダーバン支部の委員となり、かつてのフォールトレッカーを模して、南アフリカ各地からプレトリアへ向けて、牛車で移動するというページェントに参加もした[85]。しかし、この記念祭は同時に、キャンベルがアフリカーナー・ナショナリズムにためらいを抱き始め、彼女の南アフリカ主義に亀裂が入り始める、そのような契機でもあった[86]。キリー・キャンベルはいとこのエゼルとともに記念祭に参加した。詩人でもあったエゼルは、記念祭に合わせて、アフリカーナーとイギリス系が対立と反目の歴史を超えて新たな国民が創生されるプロセスを詠った詩を作り、アフリカーナーの聴衆の前で朗読をした。以下に挙げる彼女の詩には、南アフリカ主義が直截な形で書き記されている。

> アフリカ！あなたの愛が、かつてはイギリスとボーアの二つであった人々から、一つの真正な国民を　創り上げた。
>
> かつて私たちは戦い、お互いを勇敢な敵だと認めた。そこからより誠実で、真正な仲間が育つのだ。今、苦難の年々に流された血と涙から、合一！、確かな心情を持った一つの国民が現れるのだ。
>
> 平和は見つけ難く、愛を築くのには時間がかかる。今、彼らの力が重なり合い、より確かなものになる。
>
> 神よ、私たちの産まれた土地に祝福を！同胞よ、立とうではないか。こころから信頼し、容易に解けないように手に手を取り合って。
>
> 二つの民族は、神の加護により、一つの力強い国民に合一した。溶接されて、私たちはさらに土地を得るのだ、これからも！[87]

しかし、この直截さは、また詩人の当時の南アフリカ政治に対するナイーブさを表すものでもあるのだろう。彼女は記念祭において、英語で朗読してしまったのだ。歴史家イザベル・ホフメイヤー(Isabel Hofmeyr)は、十九世紀最後の四半世紀からのアフリカーナー・ナショナリズムの

59a KCP, KCAL.

[85] Herd, *Killie's Africa*, 83-5

[86] ランバートは、作家アラン・ペイトン（Alan Paton）など著名なイギリス系南アフリカ人の回顧録を参照し、フォールトレッカー百周年祭へのイギリス系南アフリカ人の熱狂が、排他的なアフリカーナー・ナショナリズムに直面し急速に冷めていく様を記述している。John Lambert, “An Identity Threatened,” 64–66.

[87] Ethel Campbell, *“Die ou Pad”& Other Rhymes by Ethel Campbell*, (私家版)8-9. Die ou Pad は、アフリカーンス語で “The old road”の意味。原文は以下のとおりである。

Africa! Love of you/Builds up a nation true/Of Those Who Once were Two,/Briton and Boer. // In our wars, long ago/ Each knew a valiant foe. /From such do comrades grow/Stancher & Truer.//Now, from the blood & tears/ Shed Thro’ The Troubled Years/ Union! A Race Appears /With soul secure.// Peace which was hard to find,/Love which was slow to bind./Now in their strength entwined,/Making more sure.//God bless our native land!/Countrymen! May we stand/ Staunch in heart, hand in hand, /Strong to endure. // Two peoples, by God’s Grace,/ Merged in a Mighty Race./ Welded, We take Our Place,/ One Ever More !

高揚がアフリカーンス語という言語の創出と普及という形で見られ、それは一方で語彙などにおける「有色的」要素を削ぎ落とし言語として「純化」していくこと、また他方で特に南アフリカ戦争後イギリスが南アフリカにおける支配権を確立した状況下においてアフリカーナーの生活様式のイギリス化をくい止め、アフリカーナーの伝統を保持するための重要な媒体としてアフリカーンス語の雑誌などを通して古き良きアフリカーナーの暮らし方を普及することが目指されたと指摘する[88]。それゆえに、イギリスの支配から逃れて共和国を樹立した偉大な祖先たちフォールトレッカーを顕彰するアフリカーナー・ナショナリズムの発揚の場において英語で朗読することは、たとえその内容にフォールトレッカーを讃える部分を含んでいたにせよ、英語それ自体への反発を持つアフリカーナーへの想像力を欠いた、記念祭の趣旨から外れた行為であった。彼女の朗読を侮蔑と受け取り、ブーイングを浴びせる者すらいた。彼女の朗読はアフリカーナー・ナショナリズムがイギリスの支配に対抗して形成されてきたという、キリー・キャンベルを含む南アフリカ主義を信奉する人々が抑え込みたいと考えていた記憶の形を呼び起こしてしまったのである。エゼルは、この記念祭で受けたショックから立ち直ることができなかったという[89]。そしてキリー・キャンベル自身にとってもこの経験はアフリカーナーの記憶と関わることの危うさを認識させることともなったであろう。

その後、彼女は、プレトリアを中心とした強烈なアフリカーナー・ナショナリズムに対して距離をとるようになる。例えば、ある投書で、彼女はピーターマリツバーグの小さく素朴な博物館とプレトリアの巨大なフォールトレッカー・モニュメントを対比させ、前者こそが今後の南アフリカを二つの集団が統合された形で国家を保っていく上で重要だと指摘するのである。ダーバンの歴史について学習する高校生の課外活動に触れながら、キャンベルは細々とした過去の入植者の所持品こそが彼らの苦難を偲ぶことにつながると述べる。彼女は、「フォールトレッカーの真の精神は、プレトリア郊外の壮大なフォールトレッカー・モニュメントにのみあるのではない。むしろピーターマリツバーグの小さく古いフォールトレッカー博物館によく体現されている。そこでは、古い荷馬車や、マスケット銃と火薬、角笛が、彼らが行った危険な旅を、また女性の心にとってとても愛おしいものである日よけの帽子や家庭の日用品や小物をこしらえる母の愛を手に取るようにわかる形で思い起こすことができる」と主張するのだ[90]。

次に注目するのは、フォールトレッカーを単純に寿ぐことへのためらいがいかにして生じたのか、そして彼女の収集品を説明する際の語り方がいかに変化していったかである。1948 年に国民党政権が成立し、アパルトヘイトが中心的な政治理念となっていく中で、彼女のアフリカーナー・

---

[88] Isabel Hofmeyr, "Building a nation from words: Afrikaans language, literature and ethnic identity, 1902-1924," in *The Politics of Race, Class & Nationalism in Twentieth Century South Africa*, eds. Shula Marks and Stanley Trapido (London: Longman, 1987).

[89] Herd, *Killie's Africa*, 84-5. イギリス系白人が抱いていた、イギリス支配への対抗としてのアフリカーナーの歴史という表象への忌避感に関しては、Lesilie Witz, *Apartheid's Festival: Contesting South Africa's National Past* (Bloomington: Indiana University Press, 2003), 98 を参照。

[90] "Inspiring Show," *Natal Mercury,* 15 Dec, 1950.

ナショナリズムへの不安は拡大し、南アフリカ主義に基づいた彼女の収集活動もその目的を修正することを強いられていくのだ。

3.2.「彼らと同じくらい真正なのです」

ピエール・ノラは『記憶の場』の序論において、記憶の場の生成の背後にある忘却への恐れを指摘する。「記憶の場を生み出し、またその糧となっているものは自然な記憶はもう存在しないという意識である。（中略）記憶の場は、われわれがみずからを支える砦なのだ。もし護られているものが脅かされていないのであれば、記憶の場を作り上げる必要などなかったであろう」[91]。

1948 年にアフリカーナーを支持母体とする国民党が政権を握ったことは、キリー・キャンベルを含め多くのイギリス系南アフリカ人に不安を与えた。国民党は選挙において人種隔離政策の徹底化（アパルトヘイト）を唱えていただけでなく、アフリカーナーの社会的・経済的地位の向上も主要な目的の一つとしていた。国民党政権はこの目的を達成するために公務員に多くのアフリカーナーをつけ、またアフリカーナー農民への経済的支援を拡張する政策をとり、これらは都市住民の多いイギリス系から反発を買うことになった。また多くのイギリス系が予想し、またその後徐々に実現することとなったのであるが、国民党は南アフリカ国民であることとアフリカーナー・ナショナリズムに奉じることを同一視し、イギリスへの忠誠を問題視し、国歌や国旗としてイギリス本国と同じものを使用するという慣習は廃止されることとなったのである[92]。

南アフリカ国民の歴史を語る際の焦点がイギリス系とアフリカーナーの和解にではなく、アフリカーナーとされた人々だけが経験した苦難に絞られる中で、忘却に対する危機感をキリー・キャンベルが強く抱いていたことは疑いを得ない。アフリカーナー・ナショナリズムの興隆と国民党政権の成立という歴史の波にさらわれて、イギリス系入植者の歴史は忘却の淵へと運ばれてしまう。その様なキャンベルの焦燥感はこの時期の彼女の手紙によく表れている。彼女はあるアフリカーナーの知人への手紙の中で、次のように心中を告白する。「あなたは、南アフリカの歴史においてイギリス系南アフリカ人が果たした役割に関心を持つ、私の知る本当に数少ないアフリカーナーの南アフリカ人の一人です。私は、私たち（イギリス系）もあなたと同じくらい真正な南アフリカ人なのだということを心からアフリカーナーの南アフリカ人にわかってもらえないということを常に悲しく感じてきました」[93]。 またアフリカーナー・ナショナリズムの波は彼女が

---

[91] ピエール・ノラ（谷川稔訳）「序論」『記憶の場―フランス国民意識の文化=社会史〈第一巻〉対立』（岩波書店、2002 年）, 37。

[92] Hermann Giliomee, *The Afrikaners: Biography of A People* (University of Virginia Press, 2009), 492-4. イギリス系白人が感じた不安については、Lambert, John. "'An unknown People': Reconstructing British South African Identity," *Journal of Imperial and Commonwealth History,* 37 no.4(2009): 599-617.

[93] Killie Campbell to Mr. Groenewald June 8, 1950, KCM5142, file 19, KCP, KCAL. オメアラは、アフリカーナーの資本家団体の、アフリカーナーを民族として糾合する際の影響力の分析から、アフリカーナー・ナショナリズムが、南アフリカ主義ではなく、国民党政権成立によるアパルトヘイト体制の開始という排他的な現れ方をしたのかを、彼らの経済的利害から説明する。Dan O'Meara, *Volkskapitalisme: Class, Capital and Ideology in the Development of Afrikaner Nationalism, 1934-1948.*

高く評価していたピーターマリツバーグのフォールトレッカー博物館にも押し寄せる。キャンベルは、同館が最初期のイギリス系入植者の記録の展示を取りやめたことに対して、現在の風潮は南アフリカの歴史をアフリカーナーの歴史と同一視し、イギリス系入植者の歴史を排除していると批判を加える[94]。

しかし、キリー・キャンベルは、フォールトレッカーによる国家建設を中心とする歴史観に対抗的な歴史を提示する、あるいはそのために史資料を収集するという方向には向かわなかった。むしろ彼女はアフリカーナ・ナショナリズムと同じ土俵に立った上で、イギリス系入植者の国家建設への貢献を認知させるために尽力するようになったのである。その背景には何があったのだろうか。レズリー・ウィッツ（Lesilie Witz）は 1949 年のフォールトレッカーの創立記念祭においては、前年の選挙での国民党の勝利が薄氷を踏むものであっただけに、イギリス系白人も含め白人としての一体感を醸成するということにも重きが置かれていたと述べる。例えば、基調講演者の一人として呼ばれたイギリス系の裁判官トムソン（J.C. Newton Thompson）は、イギリス系とアフリカーナーという二つの民族は、本来ともにヨーロッパ文明の末裔であり、南アフリカ国民を白人共同体としてみなすことも可能であると論ずるのである[95]。

このような状況を背景に、キャンベルは国民党政権の成立を主要なきっかけとして、南アフリカの歴史に関わる活動を進める際に、入植者社会の形成という記憶を求めアフリカーナーとイギリス系との共有すべき過去を築くという観点から、入植者社会の形成にイギリス系入植者の果たした役割を顕彰することへと活動の重点を移す。そして、彼女のこの関心の移行がよく表れている事例が、1949 年 5 月に開催されたナタール植民百周年祭である。ナタール植民地の最初期の入植者であるバーン入植（Byrne Settlers）の顕彰を目的とした、この記念祭にキャンベルは組織委員会の一員として関わった。この記念祭のために、彼女は「すべての時間をナタール百周年記念祭のための素材を集め、入植者の多くの子孫に接触するために費やす」ほど尽力した[96]。キリー・キャンベルは、この記念祭においてイギリス系入植者の辛苦をフォールトレッカーに劣らぬものとして提示したいという意図を持っていた。例えば、記念祭準備のための会合で、キャンベルは、イギリス系入植者が果たした役割を記念する郵便切手を連邦政府が発行するように依頼することを検討しようと発言している[97]。ダーバンで開催された入植以来の発展の歴史を描くページェントには、キャンベル兄妹も参加し、初期入植者の衣装に身を包んだ二人の写真が残っている[98]。

(Johannesburg: Ravan Press, 1983).

94 Killie Campbell, “Honouring Settlers,” *Natal Mercury*, June 24, 1957.

95 Witz, *Apartheid’s Festival*, 97.

96 Killie Campbell to Dr. Cawston, November 28, 1948. KCM4901, file 17, KCP, KCAL.

97 Centenary of the First Organised Settlement of the Colony of Natal:1849-1949, “Report of a Meeting Held in the Office of the Administrator, Colonial Buildings, Pietermaritzburg, on Friday, 9th, April 2, 1948,” file 16 KCM4829, KCP, KCAL.

98 ダーバンのページェントは二八日に開催された。当日のプログラム及び山車については、Natal Centenary Committee, *Natal Settlers Centenary, 1849-1949: Official Souvenir Programme* (Pietermaritzburg : Natal Centenary Committee, 1949)を参照。ページェントに参加したキャンベル家及び知人、会社従業員の写真は、以下のアルバムを参照。“Record of Centenary Celebrations Natal Settlers, 1849-1949,”

イギリス系入植者を顕彰することがキャンベルの主要な関心となる中で、史料の語り方にも変化が見られる。フォールトレッカーの記念映画を作成したいと語る映画監督には、イギリス系入植者が果たした役割を強調する。彼女は、フォールトレッカーの功績を尊重するとしながらも、「イギリス系入植者が南アフリカという国を造り上げる中で果たした偉大な役割に関して、感謝されたり、理解を示されるということが未だかつてなかった」と不満を漏らす。そして、キャンベルは記憶に留められるべきイギリス系入植者の歴史を列挙する。例えば、「フォールトレッカーよりずっと以前に（フランシス・）フィンは商人たちとナタールに来ているし、1820 年の入植者や、私たちが来月その 100 周年を祝うことになるイギリスからの大量の入植がある。（中略）これらの入植者たちは、フォールトレッカー以上の辛苦を舐めてきたのである」[99]。

この手紙において、フォールトレッカーは、荒野を移動し、社会を一から造っていくという共感すべき存在としてではなく、比較の基準として挙げられる。フォールトレッカーが崇拝の対象となるのであれば、彼ら以前の白人冒険家・商人は当然その功績が認められるべきである。これが、キャンベルがその出版に尽力したナタール地誌の最も古い記録である、ヘンリー・フィン（Henry Francis Fynn）の日記の価値を主張する際の論拠である[100]。

イギリス系入植者とその子孫に関する史料収集それ自体は、キャンベルが収集活動を始めた当初から行っていたことである。しかし、国民党政権成立後にキャンベルが、イギリス系入植者の史料収集に尽力した際に特徴的であるのは、単に収集する史料の量が増えたということではなく、収集物がアフリカーナー・ナショナリズムと緊張関係を持つ、それまでとは異なる位相に位置付けられることになったという点である。南アフリカ戦争中の祖父の日記を寄贈したイギリス系の人物にキャンベルは日記の史料的意義に触れつつ、感謝の返事を書く。彼女は「イギリスがボーア戦争を始めたという点が強調されすぎていて、人々は最後通牒を突きつけたのはトランスヴァールだということに気が付かない」と嘆く。そして、彼女は、アフリカーナーの軍隊がナタールに侵攻した際の経験を記したこの日記の重要性を「後年より多くの歴史がボーア戦争について書かれる時に、あなたが送ってくれたこのような資料が研究調査において最も価値のあるものとなるでしょう」と指摘する[101]。エゼル・キャンベルは、戦争中に流された血と涙から一つの国民が現れると詠った。しかし、この時点のキャンベルにとって南アフリカ戦争は未だに南アフリカに住む人々を分かつものであり、そしてその記憶はアフリカーナーの苦難にのみ集約されてはならなかったのだ[102]。

B13/001-019, L9548, KCAL.

[99] Killie Campbell to Alexander Korda, April 21, 1949. KCM4969, file 18, KCP, KCAL.

[100] Killie Campbell to Alexander Korda, April 21, 1949. KCM4969, file 18, KCP, KCAL.

[101] Killie Campbell to F.N. Broome. January 9, 1956. KCM6527, File 32, KCP, KCAL

[102] ただし、南アフリカ戦争をイギリスとアフリカーナーという白人間の対立とのみ捉える認識には、この戦争に黒人（アフリカ人や、カラード、インド人）がどのように巻き込まれたのかという視点が欠けている。この点に関しては、井野瀬久美恵「アングロ・ボーア戦争勃発 100 周年記念国際会議に参加して」『歴史学研究』 741 号（2000 年 10 月）：57-60 を参照。

イギリス系入植者の顕彰を目指すキャンベルの活動は、百周年記念祭にとどまらなかった。イギリス系南アフリカ人ジャーナリスト、ジョン・ボンド（John Bond）が執筆した「南アフリカ建国を助けた人々：イギリス系の貢献（Men Who Helped to Make South Africa: the English-speaking Contribution）」というタイトルのパンフレットを広めようとする彼女の活動からは、その南アフリカ国家建設への貢献を顕彰することによってイギリス系を南アフリカの正当な市民として認識させるというキャンベルの意図が強く感じられる。イギリス系探検家や入植者、著名な宣教師や企業家を素描するこのパンフレットは、アフリカーナーに先行する入植者としてイギリス系を提示し、イギリス系の国家建設に果たした役割を強調する。同書を知人・友人に勧めることで、キャンベルは国民党政権の下でアフリカーナー・ナショナリズムを受け入れることと南アフリカ人であることが同一視される風潮の中で、イギリス系入植者の記憶を保とうと尽力したのである。

ボンドはパンフレットを次のように締めくくる。「イギリス系南アフリカ人にとって過去の教訓は明白である。ビジネスに引きこもるのではなく、この国の自由と秩序、名声を気にかける多くのアフリカーナーの同胞と連帯し、幅広く社会へ奉仕し、政治的に活動をすることで、この国の公的生活を現在脅かす危険な退行を止めることができるのである」[103]。

キリー・キャンベルもこの危機感を共有し、私生活に引きこもることなく政治的活動を開始する。キャンベルにとって、それは国民党による憲法改正への反対運動であった。「白人と有色人の完全な分離」を掲げる国民党にとって、ケープ州が連邦成立以前から維持しているカラードと呼ばれる混血の人々の投票権（ただし男性のみ）を剥奪することは長年の目標であり、国民党政権後この公約を実施するために法案を提出したのである。しかし、違憲であるとの理由で上院の反対投票が上回り、廃案の憂き目を見た同党は、戦略を変え上院の議員数を増やし憲法を改正することでこの目的を達成しようとした。国民党にとって 1910 年制定の憲法を変更することはカラードの投票権を奪うだけでなく、イギリス支配からの独立という象徴的意味を持つものであった。同党は、連邦成立時の憲法がイギリス議会の承認を得て発布されたことを問題視していたのである。それゆえに、この問題はイギリス系とアフリカーナーの間に楔を打ち込む争点だったのである[104]。

1955 年にケープ州におけるカラードの投票権を奪うことを目指す政府の動きへの反対を目的として、ヨハネスブルクで開始されたのが冒頭で見たブラック・サッシュという団体である。ブラック・サッシュはすぐに各都市へと広がりを見せ、キャンベルもダーバン支部の立ち上げに参加し、友人・知人にも参加・協力を呼びかけるなど積極的な活動を展開した。キャンベルは 55 年の手紙において彼女の時間の大半をブラック・サッシュの活動に割いていると述べている[105]。ブ

---

[103] John Bond, *Men Who Helped to Make South Africa: The English-speaking Contribution* (Johannesburg: n.d., ca.1955.), 21.
[104] Cherry Michelman, *The Black Sash of South Africa: A Case Study in Liberalism* (London: Oxford University Press, 1975), 39.
[105] ブラック・サッシュの活動に関しては、上窪一世「ブラック・サッシュの自己認識と外部からの認識 ― 認識と社会の関係 ―(一)」工学院大学共通課程研究論叢、2011 年 48(2): 21-34.を参照。

ラック・サッシュの活動それ自体は、イギリス系白人のリベラリズムの伝統を保持するものだ。しかし、ダーバンの位置するナタール州にはカラード系の住民はほとんど住んでおらず、実際には彼女の活動は理念的な動機、とりわけ彼女の両親がその成立に尽力した 1910 年連邦成立時の憲法が、アフリカーナーを中心とする国民党政権によって変更されることへの反対という側面が強い。

3.3. アフリカ人の伝統文化への関心

イギリス系入植者の南アフリカへの貢献の歴史を顕彰するジョン・ボンドのパンフレットには、同時に典型的な形で入植者コロニアリズムが見られる。すなわち、入植者がいなければ南アフリカという土地は停滞したままであり、入植者の尽力によって初めて発展するというのである。それでは、このような見方をキリー・キャンベルも共有していたのだろうか。以下では簡単にキャンベルとアフリカ人社会・歴史との関わりについて触れておきたい。

1945 年に *Africana Notes and News* に発表した自身のコレクションを紹介した記事において、彼女は自身が収集したアフリカ人に関する書物及び伝統工芸品を最終的にはナタール大学のバンツー研究科（Bantu Studies）に寄贈し、アフリカ人に関する研究を推進することを目的としていると述べている。しかし、アフリカ人に関する知を形成することは、単に学術的な目的にとどまるものではなく、統治と密接に結びついたものであった。様々な研究ですでに述べられているように、南アフリカにおいて人類学的知識は、白人入植者の社会とアフリカ人の社会を分離し、別々の法体系で統治する際の根拠として利用されていったのである[106]。そしてキリー・キャンベルの周囲に集った人々の多くもアフリカ人統治行政に携わった人々であった。その中には、キャンベルが主催したズールー歴史コンテストにおいて審査員を務めたナタール州原住民主任教育視学官ダニエル・マック・マルコム（Daniel Mck. Malcolm）や、キャンベルが収集したズールー語の頌歌を英語に翻訳した原住民弁務官ハリー・ラグ（Harry Lugg）など関わりの深い人物もいる。キリー・キャンベルの書物の収集も、ナタール大学のバンツー学科を立ち上げ、そこに寄贈する目的があったためであろう[107]、1955 年には書籍の三分の二はアフリカ人に関するものであると述べるまでに至っている。

また彼女のアフリカ人、特にズールー人に関わる資料を集め保存することは、彼女の家族の歴史をたどる行為でもあった。父マーシャルは、ズールー人政治家ジョン・デュベが設立したオシャンゲ学院を支援し、その理事を務め、また兄ウィリアムはズールー王家のソロモン・カ・ディ

---

[106] Saul Dubow, *Racial Segregation and the Origins of Apartheid in South Africa* (London: Macmillan, 1987), 29-39; Mahmood Mamdani, Citizen and Subject: Contemporary Africa and the Legacy of Late Colonialism (Princeton: Princeton University Press, 1996).

[107] 実際にはアフリカ研究科（Department of African Studies）という名称で 1946 年に設立され、キャンベルの友人マルコムが原住民教育主任視学官を退任後、講師として就任した。また、キャンベルは同研究科に多額の寄付をしている。E.H. Brookes, *A History of the University of Natal* (Pietermaritzburg: University of Natal Press, 1966), 148.

ニズールー（Solomon kaDinizulu）が最高首長（Supreme Chief）の地位を求めて運動をする際に、州政府との間に立って彼を支援している。またウィリアムは、カディ（Qadi）族[108]に対する非公式の助言者の地位にも付いていた[109]。

キリー・キャンベルはアフリカ人に関する資料収集の目的は、彼らにふさわしい来歴を与えることであると述べる[110]。アフリカ人にとってふさわしい来歴(rightful background)とは曖昧な物言いではあるが、それは同時にイギリス系白人、特に知識層のアフリカ人統治政策への紆余曲折した関わり方を仄見せるものでもある。デュボウは、白人リベラルの態度の変遷を、1920 年代末に、それまで理論的な面で政府の人種隔離政策を裏書してきたイギリス系知識人の間に、政府の政策に対する反発・幻滅が見られるようになったと指摘する。1924 年に労働者を支持層とするナショナリスト党が選挙に勝利し、ヘルツォーク内閣が成立した。南アフリカ戦争中にはアフリカーナーの軍人として戦ったヘルツォークに対して、イギリス系知識人の間では成立当初イギリス系が政権ブレインとして引き続き起用されたこともあり、支持が見られた。しかしデュボウが指摘するところでは、27 年ごろからヘルツォーク政権のアフリカ人統治政策に対して反対に回る人々が多くなっていった。この転換を象徴的に示すのがエドガー・ブルックス（Edgar Brookes）の存在だろう。1924 年には、人種隔離政策への支持を骨子とした原住民政策の歴史をまとめ出版したブルックスであるが、ヘルツォーク内閣のもとで提案されたアフリカ人統治に関する法案には反対の姿勢を見せるようになる[111]。そしてアパルトヘイト体制成立後は、アフリカ人の利益を代表する白人議員として立候補し、国民党の擁立した対立候補を破って当選し、政治家としての道を歩むことになるのである。

しかし、その反対を表明する際の論理は、彼らが人種隔離政策を唱えた際の論拠を引きずっている。すなわちナショナリスト政権下で提示された政策では黒人を「その人種的特性に沿った形で発展」させることができなくなってしまうと反論するのである。例えば、リベラル派が結集した政治団体ジョイント・コンセルズ（the Joint Councils）は 1927 年のアフリカ人統治行政法に基づいてナタール原住民法を改定する法案が提示された際に、原住民法はそもそも固定的なものではなく、それをその当時の政権の要求に沿う形で定めることはできないと反論している[112]。

そして、このような政府の原住民政策に対峙する際の跛行的な論理が持つ曖昧さをキリー・キ

---

[108] 「部族（tribe）」の植民地統治における形成と利用については次章を参照

[109] デュベの学院設立については、本博士論文第 2 章を参照。ウィリアムについては、Herd, *Killie's Africa*, 156–58. ウィリアムのソロモンの運動への支援に関して、コープは砂糖産業における労働力調達という経済的利益をその理由として指摘する。Nicholas Cope, *To Bind the Nation: Solomon KaDinuzulu and Zulu Nationalism.* (Pietermaritzburg: University of Natal Press, 1993),193-97.

[110] Killie Campbell to Kemack, February 8, 1955, KCM6212, file 29, KCP, KCAL

[111] Dubow, *Segregation*, 45-50.

[112] J. D. Rheinallt Jones, "Joint Council's Criticism of Native Law Draft," 27 June, 1932, J.D. Rheinallt Jones Papers A394, C9a, Natal Code of Native Law, University of the Witwatersrand Department of Historical Papers. ジョイント・コンセルズについては、Paul B. Rich, White Power and the Liberal Conscience: Racial Segregation and South African Liberalism, 1921-60. (Manchester: Manchester University Press), chap. 1 を参照。

ャンベルの収集活動も帯びていた。19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてアフリカ人統治に関わる行政職についていたジェームズ・スチュワート（James Stuart）の残した資料を集めることに傾けた情熱はこの点で示唆的である。1906 年のアフリカ人首長バンバタが起こした植民地政府への反乱の後、入植者経済の浸透によるアフリカ社会の伝統的な生活の崩壊を感じたスチュワートは、より良い統治に役立てようと、ズールー人を中心に聞き取りを行い、その記録を残した。キリー・キャンベルはこの記録をアフリカ人の伝統的な生活を知るための貴重な資料と考え、スチュアートの未亡人を説得して買い取り、ズールー語の資料は先述のマルコムに翻訳を依頼し、図書館の利用者が活用できるのようにした[113]。また先述のように彼女はズールー人学生を主な対象として作文コンテストを開催し、ズールー人にとって歴史的に重要な場所を調べて書くことを求めたのである。

このようなキリー・キャンベルのイギリス系入植者の伝統に結びつくリベラリズムに導かれた行動の極致がブラック・サッシュとしての活動である。ブラック・サッシュは、カラードの投票権を奪うことを目指す政府の動きに反対する運動として開始されたものの、メンバーには白人女性以外は含まず、当初は非白人のために運動をしてはいるが、非白人を変革の主体とは認めていなかったのである[114]。

最後に本章の最初に提示した問いに立ち返ろう。アフリカーナーとの協調とブラック・サッシュとしての活動がキリー・キャンベルという一人の女性の人生の中に見られること、それは 20 世紀前半の南アフリカを背景として彼女が歩んできた収集家としての道のりを端的に示すものである。彼女が収集活動を始めた当初はアフリカーナーとの協調の可能性が広く信じられていた時代であった。しかし国民党政権が成立し、アフリカーナー・ナショナリズムを信奉することと南アフリカ人であることを同一視する圧力が強まる中で、彼女はイギリス系入植者の歴史を顕彰し、その伝統を保持することに重点を置くことになる。その変化がよく表れているのが、1949 年のイギリス系入植者百年祭とブラック・サッシュとしての活動であったのだ。

確かにキリー・キャンベルの収集家としての生涯はこのようにまとめることができる。しかし、彼女の収集活動が政治的背景の揺れによって焦点を変化させてきたことは、総体としてのコレクションにどのような影響を与えたのだろうか。この点を最後に考えたい。

---

[113] ジェームズ・スチュワートの聞き取りと、その記録の刊行については、John Wright, “Making the James Stuart Archive,” *History in Africa* 23 (1996): 333-50、及び Carolyn Hamilton, “Backstory, Biography, and the Life of the James Stuart Archive,”History in Africa 38 (2011): 319-41 を参照。収集された記録は、以下の六巻に及ぶ資料集として刊行されている。Colin de B. Webb and John B. Wright, eds., *The James Stuart Archive of Recorded Oral Evidence Relating to the History of the Zulu and Neighbouring Peoples,* 6 vols. (Pietermaritzburg: University of Natal Press, 1976-2014).

[114] ただし、ブラック・サッシュ自体は、その後憲法に関する争点からパス法への反対など実際の統治に関わる活動を行い、黒人の運動団体との連帯を模索するようになっていく。Michelman, *The Black Sash,* 80-3.

おわりに

本章は過去を保存し、意味づけ、記憶することで、南アフリカが進むべき道を指し示そうとしてきた一人の女性の人生を語ってきた。彼女自身はブラック・サッシュとしての活動を除けば政治的な発言をすることもなく、穏やかに暮らしてきたと言える。彼女の生において特徴的であるのは、過去を通して自己を造形する、そのあり方である。収集家としての彼女の歩みはそれまで生きてきた死者たちの連なりに自分を位置づけ、そうすることによって特定の観点から過去を照らし、照射された過去を他者へ提示し、願わくば共有する、このような一連の過程で成り立っていた。

この点は、本章が依拠してきたキャンベルのスクラップブックから強く感じることができる。彼女が関心を持った記事と、彼女自身の投書や、彼女と親族を取り上げた記事を切り貼りしたスクラップブックには、彼女の過去を保存することに情熱をかけてきた人生がまとめられている[115]。このスクラップブックを繙いて感じるのは、過去を保存することそれ自体が彼女の目的となっていったのであり、守護者として生きていくという一貫した姿勢である。しかし、過去を保存することは、ただ過去に関わるモノや書物を集めるというだけで完結するわけではない。彼女が収集家としての人生を語る上でガビンズなど他の収集家からの影響と彼らから受けた評価を重視していること、また彼女が自身のコレクションを見てもらうために頻繁に人を招待していることからも分かるように、その活動は記憶する価値があると彼女が認めたものを他者が共有し、また彼女が集めたものを利用することを想定したものであった。キリー・キャンベルの書物収集が、溜め込むことではなく知識を広げていくことに重点を置いていたことは、彼女が文献を目録に整理することに力を入れていたことからも分かる[116]。

それゆえ、キャンベルの図書館を利用することは、彼女の構築した過去の秩序に分け入ることなのだ。そして、その秩序は、メンデルスゾーンの文献目録の秩序とは異なり、確固としたものではない。時代に翻弄された彼女の収集活動には対象の意味づけに揺れが見られる。それは彼女が収集家としての人生を歩む上で、他者を通して自己を表現せざるをえない、他者の事績を編むことによって自身を社会の中に位置付けざるを得ない立場にいたからでもある[117]。

しかし、それゆえにこそキリー・キャンベルの図書館は、体制の転換によって過去の悪しき遺

---

115 スクラップブックは二冊存在する（File 8 and 8a, KCP, KCAL）。スクラップブックを作成することが、同時に自己を作り上げるという観点に関しては、Ellen Gruber Garvey, *Writing with Scissors: American Scrapbooks from the Civil War to the Harlem Renaissance* (Oxford: Oxford University Press, 2013). 特に女性参政権運動家を扱った、第 5 章を参照。

116 キャンベルは研究者の問い合わせに応じて、自身の保有する資料を中心に文献目録を作成して返答していた。例えば、南アフリカにおけるアフリカ人の民話に関する文献を問い合わせた研究者に対する返答である Killie Campbell to Father Schneider, October 4, 1955, KCM6420, file 31, KCP, KCAL を参照。

117 この点で、彼女が支援した画家バーバラ・ティレル（Barbara Tyrrell）との関係は示唆的である。ティレルに関しては、Herd, *Killie's Africa*, 105-111.を参照。

産となることなく、現在においても新しい歴史叙述を生み出す可能性を秘めた場となる弾力性を備えることとなった[118]。キャンベルの図書館に入り、彼女の集めた資料を利用し過去を知ろうとすること、それは彼女が収集物に込めた意味をなぞるとともにそれに反発し、裏をかき、新たな可能性を引き出していく、その対話の舞台に立つことなのだろう[119]。第４章及び第５章では、彼女が収集したズールー人による歴史書や、彼女が主催したズールー部族歴史エッセイコンテストに応募された歴史エッセイを題材として、その可能性を追求する。

[118] 第二節で述べたガビンズ及びハンフレーの蔵書を保存する、ウィットワータースランド大学図書館司書ピーター・ダンカン（Peter Duncan）氏は、植民地主義と結びついたものとしてアフリカナ・コレクションが捉えられることによって、今後の政治情勢によっては今ある形でコレクションを維持することが難しくなるかもしれないと語る(2016 年 3 月 3 日聞き取り)。

[119] 本節の叙述の仕方は、Arlette Farge, *The Allure of the Archives,* trans. Thomas Scott-Railton (New Haven: Yale University Press, 2013[1989])を参照した。そのような可能性の模索として、人類学者キャロライン・ハミルトン（Carolyn Hamilton）や、ジェームズ・スチュワートが行った聞き取り史料のズールー語から英語への翻訳者の一人、ジョン・ライト（John Wright）の著作・論文を挙げることができるだろう。彼らは、スチュワートの聞き取り史料を利用し、語り手の間の事実の相違を、その照合から正確な歴史事実を取り出すのではなく、むしろズールー人内部の対立を表すものとして読み取るのである。Carolyn Hamilton, *Terrific Majesty: The Powers of Shaka Zulu and the Limits of Historical Invention* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1998), chap. 2; John Wright, “Thinking beyond ‘Tribal Traditions’: Reflections on the Precolonial Archive,” *South African Historical Journal* 62, no. 2 (June 1, 2010): 268–86; Carolyn Hamilton and John Wright, “Moving Beyond Ethnic Framing: Political Differentiation in the Chiefdoms of the KwaZulu-Natal Region before 1830,” *Journal of Southern African Studies* 43, no. 4 (July 4, 2017): 663–79.

第 4 章　創られた「伝統」の浸透：ズールー語教科書の出版と歴史意識

はじめに

0.1. 問題設定

本章は、1930 年代から 50 年代にかけてのナタール州のアフリカ人教育におけるズールー文学・歴史教育を分析することで、同期間のズールー・ナショナリズムの内容とその広がりを明らかにする。具体的には、学校教育で使用されたズールー語の教科書と、シラバス及び試験問題など教科書の読み方を規定したと考えられる史料を用いることで、主任原住民教育視学官であったダニエル・マック・マルコム(Daniel Mck. Malcolm)を中心としたナタール州教育行政と保守的なズールー知識人の協力のもとで生み出されたズールー語の歴史叙述が、人種隔離政策と親和性を持つようにズールー・ナショナリズムを特定の形態へと導こうとする試みであったと主張する。

20 世紀前半におけるズールー語の歴史叙述の果たした役割については大きく分けて二つの立場がある。一つは、ズールー・エスニシティを強調した保守的知識人とアフリカ人統治に関わった白人行政官の協力体制に焦点を当て、彼らが人種隔離政策を正当化したという側面を強調する立場である[1]。他方は、ズールー人の歴史叙述、特に歴史小説を分析対象として、植民地支配への抵抗の可能性を見出す立場である[2]。前者の観点を打ち出したシューラ・マークス（Shula Marks）の論文は、ナタール州のアフリカ人教員団体ズールー・ソサエティが、家父長的で植民地支配に融和的なズールー・エスニシティ観を提示したと主張する。しかし、その分析の射程は、アフリカ人統治行政とアフリカ人知識人の協力関係を対象とするにとどまっており、学校教育で使用された具体的なテキストを対象としているわけではない。一方で、文学研究者ビキ・ピーターソン(Bheki Peterson)に代表される後者の立場は、テキストの内容にのみ焦点を当て、それが学校教育で学生に特定の価値観を教えるために利用されたという側面を等閑視してきた。上記の研究動向に対して、本章では、学校教育を中心としたズールー人の歴史について読み・書くという行為が、その共同体のあるべき姿を議論する公共圏を形成してきたという観点から、ズールー語による歴史叙述を分析する。具体的には、ズールー・ソサエティの史料、特に同協会の事務局長を務めたチャールズ・ムパンザ（Charles Mpanza）とマルコムの間で交わされた書簡を検討することを通し

---

[1] Shula Marks, *The Ambiguities of Dependence in South Africa: Class, Nationalism, and the State in Twentieth-Century Natal* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1986); Shula Marks, “Patriotism, Patriarchy and Purity: Natal and the Politics of Zulu Ethnic Consciousness,” in *The Creation of Tribalism in Southern Africa*, ed. Leroy Vail (Berkeley: University of California Press, 1989).

[2] Bhekizizwe Peterson, *Monarchs, Missionaries & African Intellectuals* (Trenton, NJ: Africa World Press, Inc., 2000); Bhekizizwe Peterson, “Black Writers and the Historical Novel: 1907-1948,” in *The Cambridge History of South African Literature*, ed. David Attwell and Derek Attridge, African Edition (Cambridge: Cambridge University Press, 2012), 291–307; Carolyn Hamilton, Bernard Mbenga, and Robert Ross, “The Production of Preindustrial South African History,” in *The Cambridge History of South Africa Vol.1* (Cambridge: Cambridge University Press, 2010), 39.

て、教室において学生がズールー語で執筆された教科書を読むという行為に、特定の社会的規範を教え込む役割が期待されていたことを明らかにする[3]。

0.2. 先行研究のまとめと本章の視点

ズールー・ナショナリズムに関する研究に関しては、序章において本博士論文の全体の先行研究の一部としてすでに整理した。そのため、ここでは本章に関わる限りで、先行研究を整理する。第一に、1930 年代及び 40 年代のズールー・ナショナリズムを、20 年代までに形成されたズールー・ナショナリズムの特定の形態が人口に膾炙していく時代として捉えることができることを示すことによって、本章の視点を明確にしたい。第二に、ズールー・ナショナリズムの媒介過程における本章の貢献を明示する。

0.2.1　30 年代・40 年代のズールー・ナショナリズムをどう捉えるか

序章で述べたように、20 世紀前半のズールー・ナショナリズムを対象とした研究は主として、1900 年代から 20 年代を対象としてズールー王家の象徴的機能を分析してきた。例えば、1906 年のバンバタの反乱におけるズールー・エスニシティの糾合性に注目したマホニーの研究[4]や、1920 年代のナタール州及びズールーランドにおける労働組合、産業商業労働者組合（Industrial and Commercial Workers Union, ICU）の運動を分析したブラッドフォードの研究[5]を挙げることができるだろう。しかし、このようなズールー王の反植民地主義運動における象徴としての期待に反して、1920 年代にズールー王であったソロモン自身は、アフリカ人統治行政が割り当てた役割を積極的に担っていったのである[6]。そして、ズールー・エスニシティをめぐる議論においてズールー王家は、抵抗の象徴ともなり、また植民地統治のモデルともなるという、両義性を持ってきた。シューラ・マークスは、ズールー・ナショナリズムに関する非常に影響力の強い研究において、先述のソロモン、第 2 章で取り上げたジョン・デュベ、及び労働組合運動家であった A.W.G.チャンピオン（A.W.G. Champion）という伝統的権威、ミッション・エリート、そしてズールー人政治家の代表的な 3 人の著名人の生涯をたどることで、植民地主義のもとでアフリカ人エリートは彼らの望みを、支配者によって設定された言説によって表明すると指摘し、ズールー人であるという真正性をめぐって議論することが、彼らの希望を明確な植民地主義への反逆と思われない範囲内で要求する手段であったと主張する。マークスは、アフリカ人エリートのこのような性向を「依

---

[3] On the list of textbooks, see the excel file. 巻末の教科書リストを参照。

[4] Michael R. Mahoney, *The Other Zulus: The Spread of Zulu Ethnicity in Colonial South Africa* (Durham, NC: Duke University Press, 2012).

[5] Helen Bradford, *A Taste of Freedom: The ICU in Rural South Africa, 1924-1930.* (New Haven: Yale University Press, 1987).

[6] Nicholas Cope, *To Bind the Nation: Solomon KaDinuzulu and Zulu Nationalism.* (Pietermaritzburg: University of Natal Press, 1993).

存の曖昧さ（ambiguities of dependence）」と名付けた[7]。本章は、まず学校教育において教科書として使用された歴史書・歴史小説[8]を分析することで、この両義性を、教科書の歴史叙述も含んでいることを明らかにする。

しかし、マークスの議論には問題点も存在する。「曖昧さ」として括られる行為の範囲があまりにも広いため、植民地主義のもとのアフリカ人の行動のすべてが、「曖昧さ」という概念に含まれてしまうように見えるのである。この点を克服するためには、これまで研究がほとんどなされてこなかった 30 年代以降に注目する必要がある。30 年代初頭までに、それまでズールー人を糾合する象徴的存在として考えられてきたソロモン王は死去し、また ICU などの急進的な労働団体は政府の強権的な抑圧によって活力を失った。30 年代に入った時に勝利したのは、マホニーやブラッドフォードが描いた下からの急進的なズールー・ナショナリズム[9]ではなく、ズールー人の保守的エリートと白人行政官の協調によって上から生み出された官製ナショナリズムとしてのズールー・ナショナリズム[10]であった。そのため反アパルトヘイト運動の起源や、70 年代以降のズールー人保守的政治家ガッチャ・ブテレジの率いるインカタ運動に研究が集中したこともあり、少数の例外を除いてこの時期のズールー・ナショナリズムに関する研究は存在しない。しかし、本章が示すように、特に学校教育や文学においてはむしろ 30 年代以降にズールー・ナショナリズムをめぐる議論が活発化したことに注目するならば、30 年代及び 40 年代をズールー・ナショナリズムの教育を通じての浸透の時期として捉えることができるだろう。さらに、学校教育においてズールー・ナショナリズムが提示される過程においては、マークスが述べた「曖昧さ」がむしろ縮減された。それゆえに流通面においてだけでなく、その内容面においても 30 年代・40 年代はズールー・ナショナリズムを論じる上で重要な時期であると考えることができるのである。

0.2.2　ズールー・ナショナリズムの媒介過程

ズールー・ナショナリズムのあり方を議論する場に注目した研究は、数としては少ないが、それぞれ重要な論点を提示している。それらを列挙するならば、第一に、ヨハネスブルクでの鉱山労働で他民族と接触することによって、それまで自身の「部族」的アイデンティティしか持っていなかったズールー語話者の労働者がズールー人としてのアイデンティティを認識するようになり、彼らが帰郷することでズールーランド及びナタールに住む人々にもズールー人としての自覚が広がったとするマホニーの研究を上げることができる。第二に、ズールー語新聞がズールー

---

[7] Marks, *The Ambiguities of Dependence in South Africa*.

[8] 教科書として使用された本の一覧を別表として載せること。（Excel のファイルを修正すること）

[9] Mahoney, *The Other Zulus*; Bradford, *A Taste of Freedom*.

[10] Cope, *To Bind the Nation*; Nicholas Cope, “The Zulu Petit Bourgeoisie and Zulu Nationalism in the 1920s: Origins of Inkatha,” *Journal of Southern African Studies* 16, no. 3 (1990): 431–51.　官製ナショナリズムに関しては、ベネディクト・アンダーソン『定本 想像の共同体―ナショナリズムの起源と流行』白石隆 白石さや訳 (東京: 書籍工房早山, 2007), chaps. 5–6.を参照。

人の歴史を論じる公共圏として機能したとするショニパ・モコエナの議論[11]を、第三にズールー王の役割を強調した演説を行い、王と民衆をつなぐ役割を果たした媒介的知識人の活躍を詳細に描いたラ・オッセの研究をズールー・ナショナリズムの媒介過程に関する研究として挙げることができるだろう[12]。しかし、意外なことに上記の研究のいずれも学校教育に触れていない。確かにナタール州のアフリカ人教育史に関する史料状況を整理したカラウェイの綿密な論文が述べるように、ナタール教育省の原住民教育に関する史料はまとまったものとしては残されていないため[13]、アフリカ人教育の実際の状況を明らかにすることは非常に困難である。しかし、第２章で述べたようにアフリカ人教育がアフリカ人統治行政に関わる白人官僚とミッション・エリートの折衝の場であり、また本章第２節で述べるようにズールー人がズールー語で書いたほぼすべての書物が学校教育において使用されることを念頭に書かれたことを考えるならば、ズールー・ナショナリズムの媒介経路としてアフリカ人教育を無視することはできない。この点において、筆者が、ズールー・ソサエティ文書の中に事務局長をしていたチャールズ・ムパンザのソサエティとは直接の関係がない個人文書も含まれていることを発見したことは非常な幸運であった[14]。自身教員でもあったムパンザの文書からは、彼が主任教育視学官のマルコムとともにズールー語に関わる試験問題を作成し、またズールー語で書かれた教科書の原稿を選定する作業にも関わっていたことがわかった。それらの史料は、作成された年代が限られており、アフリカ人教育行政全体から見ればほんの一部であることは確かであるが、ズールー文学・歴史教育の実施という点においては非常に明瞭な視座を提供するものである。本章は、これまでの研究においては利用されていなかったムパンザとマルコムの史料を利用することでズールー・ナショナリズムの浸透の過程を跡付ける。

以上の目的を達成するために本章は、まずズールー人がズールー語を学校教育において学ぶとはどのような歴史的な問題系に位置付けられるのかを、本章で使用する史料の紹介も兼ねつつ説

---

[11] ズールー語新聞 Ilanga laseNatal における読者の投稿を分析した Hlonipha Mokoena, “An Assembly of Readers: Magema Fuze and His Ilanga Lase Natal Readers,” *Journal of Southern African Studies* 35, no. 3 (September 1, 2009): 595–607, https://doi.org/10.1080/03057070903101839.を参照。また、アフリカ言語の新聞とアフリカ人鉱山労働者の集会を分析した論文において、ブレッケンリッジは、1910 年代以降に南アフリカのアフリカ人の間でハバーマスの唱える公共圏が形成されたと主張する。Keith Breckenridge, “‘We Must Speak for Ourselves’: The Rise and Fall of a Public Sphere on the South African Gold Mines, 1920 to 1931,” *Comparative Studies in Society and History* 40, no. 01 (January 1998), https://doi.org/10.1017/S0010417598980033.

[12] Paul La Hausse de Lalouviere, *Restless Identities: Signatures of Nationalism, Zulu Ethnicity and History in the Lives of Petros Lamula(c. 1881-1948) and Lyomn Maling(1889-c.1936)* (Pietermaritzburg: University of Natal Press, 2000).

[13] Peter Kallaway, “Bibliography of Materials Relevant to the Study of Education in the Colony of Natal, the Province of Natal and KwaZulu—Natal, 1839–1994: Selected with Special Attention to ‘Native Education,’” *Journal of Natal and Zulu History* 30, no. 1 (January 1, 2012): 107–38, https://doi.org/10.1080/02590123.2012.11964181.

[14] Papers of the Zulu Society, VII Charles Mpanza Personal Papers, Pietermaritzburg Archives Repository of the National Archives, South Africa.

明する（第１節）。その上で、1930 年代以降のズールー文学・歴史という科目における教科書の出版経緯をたどることで、ズールー語で書かれた文学書及び歴史書への教育行政の介入とその帰結を明らかにする（第２節）。最後に、実際の教室において教科書がどのように読まれることを期待されていたかを試験問題から明らかにすることで、ズールー・ナショナリズムが持っていた「曖昧さ」が縮減される過程を論じる（第３節）。

第１節　ズールー語で書き・読むという経験

> 私の部族の秘密を暴露するために書くのだと思うと、私はすごく不安になり、骨の髄まで痛むのを感じる。幾度も私は私の部族の歴史について書こうとした。しかしその度に不安と恐れが私に取り付き、これはひどい仕事だと感じるのだ。しかし今日、ある考えが浮かび、政府は過去の出来事に不満を持っていないだろうと私に思い起こさせたので、いくらかの勇気を得たのである[15]。

1942 年に開催されたズールー歴史作文コンテストに応募された一つのエッセイの書き出しである。ズールー人の知られざる歴史を明らかにし、記録として残したいという主催者側の意図を汲んだ魅惑的な書き出しである。このエッセイの書き出しは、確かに飛び抜けて劇的ではあるけれど、審査官であるナタール州原住民教育主任視学官であったダニエル・マルコムの意図を汲んで執筆するという点では他のエッセイと比べて特別であるわけではない。

このエッセイの作者であるサベロは 1950 年に開催された作文コンテストにも応募している。彼は二つのエッセイを提出し、そのうちの一つは次のように始まる。“Ngishaywa uvalo kuqaqomba [sic. kuqaqamba] onke amathambo omzimba wami, lapho ngicabanga ukuthi namhla ngizoloba ngidalule obala isifuba sesizwe sakithi.” [16] この一文からサベロが先に挙げた 1942 年のエッセイを英語からズールー語に逐語訳的に訳して、新たなエッセイとして提出したことがわかる。サベロはこのエッセイに手紙を付して、エッセイの提出が遅れたことをマルコムに詫びているが、この手紙は、なぜエッセイの作者であるサベロが、８年の時を経て全く同じ内容のエッセイをズールー語で提出したのかは明らかにはしない[17]。しかし、サベロの英語からズールー語へ言語を変えて歴史を書くという行為は、1912 年、42 年、50 年とかなりの期間をおいてであるが、実施された歴史エッ

---

[15] “I feel rather nervous and my bones ache to the marrow when I start to write to disclose the secret of our clan. On several occasions I desired to write about the history of our clan, but nervousness and fear always overwhelm me and I felt it as bad job. But I have acquired some courage today, because a thought came into my mind and reminded me that the present government holds no grudges over past events.”　N.B.J. Sabelo, “Makanya Clan,” Zulu Tribal History Competition 1942 Papers. File 3, KCAL.

[16] N.B.J. Sabelo, “Umthambo wabukhosi kwakwa “makhanya” --- nezigigaba zombuso wakhona.” Zulu Tribal History Competition 1950 Papers. File 15, KCAL.

[17] From N. B. J. Sabelo to Daniel Mck. Malcolm, 30th August, 1950.　N.B.J. Sabelo, “Umthambo wabukhosi kwakwa “makhanya” --- nezigigaba zombuso wakhona.” Zulu Tribal History Competition 1950 Papers. File 15, KCAL.

セイ・コンテストにおいてズールー語による記述が大幅に増えるという傾向を反映している[18]。そして、エッセイの記述言語のズールー語への変更は、マルコムが主任視学官として関わってきた原住民教育改革における母語（ズールー語）の教授言語としての重視という方針が、実際に効果を及ぼしていたことを明らかにする。ここで問題となるのは、ズールー語を母語とするズールー人が、学校教育においてズールー語を学ぶことは、どのような点で植民地統治行政と結びついていたのかという点である。

私は、先に挙げたサベロのズールー語によるエッセイの書き出しを当然ながら、辞書を引きながらゆっくりと読んだ。ズールー部族歴史エッセイ・コンテストの審査官であるマルコムも編者に名を連ねる辞書でである[19]。ズールー語を読むこと、そして書くことも、マルコムのようなアフリカ人統治行政と深く関わり、その中でズールー語やズールー文学に関する仕事をしてきた人物の存在を抜きにしては語ることができない。本章は、ズールー語で歴史や文学を書き、読むという行為を、アフリカ人教育行政におけるズールー史・文学の役割という観点から考察することで、官製ナショナリズムとしてのズールー・ナショナリズムの浸透の過程を明らかにすることを意図している[20]。

まずはズールー人がズールー語を学校で学ぶという事実の持つ不思議さを確認したい。そのためには筆者自身のズールー語学習の経験を振り返ることが好都合である。

1.1 さまざまなズールー語：個人的経験から

南アフリカ、特に都市は英語が支配的な場所である。人類学者のフィールドワークで前提とされるような現地社会に入って子供のように対象となるコミュニティで話されている言葉を学ぶということは望むべきもない。しかし、教室で、あるいは自分の研究室に個人教師を招いてズールー語を学ぶ中で、少しはズールー語で話ができるようになってくる。特に良い機会が大学での行き帰りでのタクシー（ウーバー）の運転手との会話であった。運転手たちは（ほとんどの場合）喜んで、ズールー語で会話してくれた。運転手は、クワズールー・ナタール州から来た、あるいはヨハネスブルク生まれのズールー人であることもあったが、リンポポ州など他の州から働きに来た人や、ジンバブウェなど他国から移民としてきた人々も多かった。彼らのほとんどは（できればズールー語は話したくないというソト人の人もいたが）ズールー語を話した。ズールー語は

---

[18] ズールー部族歴史エッセイコンテストにおける、言語選択の状況については次章を参照。

[19] D. McK Malcolm et al., eds., *English-IsiZulu = IsiZulu-English Dictionary*, Fourth edition, with revised orthography (Johannesburg: Wits University Press, 2014).

[20] 白人ズールー語学習者の立場から、ズールー語学習の歴史を辿った研究書として、Mark Sanders, *Learning Zulu: A Secret History of Language in South Africa* (Princeton: Princeton University Press, 2016).がある。本書については、以下の書評も参照。上林朋広, “書評　Mark Sanders, Learning Zulu: A Secret History of Language in South Africa,” *Mwenge　アフリカ文学研究会会報* 44 (2018): 72–73.

アフリカ人の間での共通語として機能しているのだ[21]。そしてズールー語を話すことは、私のように「黒人」とは見なされない人物が、「黒人」としての会話に入っていく上で非常に有効な手段であった。以下ではそのような経験について述べたい。

いつものように夜の 10 時にその日の研究を終えて大学の門の内側でウーバーを待つ。ウーバーに乗り込んで運転手と挨拶を交わす。はじめは英語で。それからズールー語で。「Sawubona（こんばんは）」と言った後に、「Ayiko inkinga, sikhulume isiZulu na?（ズールー語で話してもらっても構いませんか？）」と訊くようにしていた。タクシーという閉じられた空間は、ズールー語の会話の練習をするには絶好の場所であった。英語とは違い、ズールー語を話せる人として認識してもらうのは容易だ。簡単な挨拶ができれば、話せるじゃないかと褒めてもらえる。そのため、「この大学でズールー語の個人授業を取っています。それで、Ngiyazama ukukhuluma isiZulu.(ズールー語を話そうと頑張っています)」と言った時の反応は、しばしば「Awuzami. Uyakhuluma(頑張っているんじゃないよ。しゃべっているじゃないか)」というものだった。 しかし、今振り返ると、ズールー語の練習に付き合ってくれる親切な運転手にさらに次のように問うこともできたのではないかとも思う。すなわち「Ngikhuluma isiZulu siphi?（私はどのズールー語を話しているのでしょうか）」と。実際に質問したとしてもはかばかしい答えが返ってくるとは思えなかったが、ヨハネスブルクに滞在しズールー語を学び始めると、実際には様々なズールー語があり、自分が習っているのはそのうちの一つであるということがわかった[22]。授業で習ったズールー語を使うとよく「Deep Zulu」や「isiZulu esindala（古いズールー語）」を話すねと言われた。所属していた研究所のズールー人知識人の歴史を専門とする Hlonipha Mokoena 教授からはトモヒロが話しているのは、Textbook Zulu だとも。このような複数のズールー語の存在は、ズールー語話者の地域的多様性だけでなく、「正しいズールー語」を定め、それをズールー語話者に押し付けようとしてきた学校教育にも由来する。

インド洋海岸都市ダーバン郊外にあるアフリカ人エリート女子校のイナンダ・セミナリーを訪れ、そのアーカイブを利用した時にアーキビストと話して分かったのは、この学校にある最も古い本は私が所属していたヴィッツ大の言語学者ドーク（C. M. Doke）が書いたズールー語文法の教科書（Textbook of Zulu Grammar）[23]であることということであった。ズールー人の学生は正しい

---

[21] アフリカの多民族的な都市において、旧宗主国の言語ではなく、特定のアフリカ言語が共通語となるという事態は南アフリカ以外の多くの場所でも見られる。たとえば、ザンビアの事例を取り上げた小倉充夫「多民族国家における言語・民族集団と国民形成」小倉充夫編『現代アフリカ社会と国際関係』（有信堂、2012 年）、205-226.を参照。

[22] ズールー語の多様性については、Mark Sanders, *Learning Zulu: A Secret History of Language in South Africa* (Princeton: Princeton University Press,2016) 及び Jacob Dlamini, “Isizulu Phaqa,” *Safundi* 18,no.1(2017)を参照。

[23] Clement M. Doke, *Textbook of Zulu Grammar*, 6th ed (Cape Town: Maskew Miller Longman, 1984). 筆者の利用したものは第 6 版であるが、イナンダ・セミナリーにあったのは、1943 年刊の第 3 版であった。

ズールー語を書くために、白人言語学者の定めた規則に従って話し、読み書きすることが求められていたのである。アフリカ言語で書くことが精神の脱植民地化につながるとするケニアの文学者グギ・ワ・ジオンゴの主張[24]とは反対に、ズールー人が自身の言語で書くことは、自分の文化を守り、植民地支配に抵抗の姿勢を示すことには単純にはつながらないのである。ズールー語で読み、また書くことは、自身の文化を保ちたいというズールー人知識人のナショナリズムが植民地主義に分かちがたく結びついていく過程であったのだ。

本章の以下の部分ではこのナショナリズムとコロニアリズムのもつれをズールー文学・歴史という科目を中心に考察する。

第 2 節　学校教育におけるズールー語文学とズールー語による歴史叙述

2. 1. ズールー語を中心とした教育改革：ロラムからマルコムへ

本節では、30 年代・40 年代にいかにしてズールー・ナショナリズムがズールー語文学というアフリカ人教育の一教科を通して、浸透していったのかを跡付ける。

そのために、本節ではまず、言語としてのズールー語、及びズールー文学・歴史がアフリカ人教育において、どのような意義を持つ科目として構想されたのかを確認した後、同教科で教科書として使用された歴史書及び小説を分析する。ズールー語を教えること、また他の科目においてズールー語を教授言語とすることは、1917 年からナタール州原住民教育主任視学官に就任したチャールズ・ロラムが提示した教育改革によって推進された[25]。教育学者としてのロラムは、南アフリカにおけるアフリカ人教育において、アメリカ南部の黒人教育のモデルを持ち込んだことで有名である。しかし、彼の教育改革はアメリカ南部黒人教育で重視されていた農業や工業など実業教育とともに、教授言語としての母語を重視するものであった。

ナタール州におけるアフリカ人教育改革は、ロラムがその著書『南アフリカにおける原住民教育』において提示した構図を基本として推し進められた。アフリカ人教育においてロラムが問題視したのは、アフリカ人学生のヨーロッパ人またインド人学生と比較した際の成績の低さであった。ロラムはこの事象を説明するにあたって、アフリカ人の知能が生物学的理由によってヨーロッパ人よりも低いとする優生学者の見解を否定し、学校教育で教えられる内容がアフリカ人の学生の生活からかけ離れたものになっていることが原因であると主張する[26]。そのため、ロラムの教育改革は、アフリカ人社会の現状に教育内容を適合させる（“adapted”）ことを主眼としていた。

---

[24] グギ・ワ・ジオンゴ『精神の非植民地化 : アフリカ文学における言語の政治学』宮本正興・楠瀬佳子訳、 増補新版 (第三書館, 2010).

[25] C. T. Loram, *The Education of the South African Native* (London: Longmans, Green & Co, 1917). 南アフリカ教育史におけるロラムの役割については以下の文献を参照。R. Hunt Davis, “Charles T. Loram and an American Model for African Education in South Africa,” *African Studies Review* 19, no. 2 (1976): 87–99, https://doi.org/10.2307/523566; Joseph Daniel Reilly, *Teaching the “Native”: Behind the Architecture of an Unequal Educational System* (Cape Town: HSRC Press, 2016), chap. 6.

[26] Loram, *The Education of the South African Native*, chap. 10.

ロラムは、大部分のアフリカ人は本来的には定められた居留地に居住すべきであるという前提から出発し、アフリカ人教育がより重点を置くべき科目として、農業、工芸とともにズールー語を含めたアフリカ人の母語を指摘した[27]。

しかし、ロラムは 1953 年のバンツー教育法につながる教育思想を提示した教育学者として多くの研究の対象となっているものの、1920 年にスマッツによって設立された連邦政府の諮問機関である原住民問題委員会（Native Affairs Commission）の委員に就任し、プレトリアに居を移したこともあり、教育官僚としての彼の役割はナタール州におけるアフリカ人教育改革の青写真を提示したという点に限られていた[28]。彼が描いた構図を実行に移す役割は、ロラムの次に主任原住民教育視学官に就任したマルコムに引き継がれたのである[29]。

しかし、マルコムは、ロラムの「社会に適合的な教育(adapted education)」や政府による教育の管理の拡大という主張を引き継いだだけではなかった[30]。ロラムが母語の重視を論じるとき、その重点はアフリカ人学生の母語を使用することで教育内容のより深い理解が可能になるという点にあった。それに対して、ロラムの後継者であるマルコムは、ズールー語の教授、及びズールー文学・歴史という科目が、「人種的な誇り（racial pride）」を保つという役割を担うべきであるという議論を持ち込んだのである[31]。この点において、マルコムは、のちにそのズールー語の資料を翻訳することになる、ズールーランドの行政官（Magistrate）ジェイムズ・スチュワートとその見解を共有していたということが言えるだろう[32]。

---

[27] Loram, chap. 11.

[28] ただし、プレトリアに移った後もロラムは、政府設置の各種委員会や、本博士論文第 2 章で述べた Joint Councils Movement を通して、アフリカ人教育全般における影響力を維持していた。

[29] マルコムの教育省退任時に、アフリカ人教員の一人ムティムクル(Mtimukulu)は、ナタール州のアフリカ人教育において「ロラムが建築家（architect）であったとすれば、マルコムは建造者（builder）であった」と述べる。NTJ のマルコム主任教育視学官退任時の特集号の記事を参照（ “Appreciations of D. Mck. Malcolm,” NTJ. Vol. 24 no.3, April 1945, p.66.）。ただし、Native Art and Craft 教育の実施においては、Jack Grossert の果たした役割が大きい。 Daniel R. Magaziner, *The Art of Life in South Africa* (Athens, Ohio: Ohio University Press, 2016).

[30]この二点をマルコムがロラムから継承したという点については、Andrew John Moore, “Natal’s ‘Native’ Education(1917-1953): Education for Segregation” (MA Thesis, University of Natal, Durban, 1990), 50.を参照。

[31] D. M. Malcolm and C. T. Loram, “Notes of a Lesson on the Study of Zulu,” *Native Teachers’ Journal* 1, no. 2 (January 1920): 43–44.

[32] スチュワートについては、Carolyn Hamilton, *Terrific Majesty: The Powers of Shaka Zulu and the Limits of Historical Invention* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1998), chap. 4.を参照。スチュワートが収集した資料をマルコムが訳したものとしては、James Stuart and Donald Mckinnon Malcolm, eds., *Zulu Proverbs And Popular Sayings, With Translations* (Durban: T.w. Griggs, 1949).がある。この点については、大学卒業後すぐに教育省に入ったロラムとは異なり、マルコムが法廷通訳者という原住民統治政策と直接関わる行政官として、そのキャリアをスタートさせたことが関わっているかもしれない。Daniel Mck. Malcolm “Curriculum Vitae,” Malcolm Papers, File11. KCLA. マルコムのキャリアについては次章を参照。

2. 2. ズールー語著作の不足：白人の著作と翻訳による対処

ズールー語での授業を円滑にするとともに、ズールー人の伝統を伝え、人種的誇りを保つことを目的として拡張されたズールー語・歴史・文学という科目がまず直面した課題は、教科書として使用することのできるズールー語で書かれた書物が不足していることであった。同じ、ングニ（Nguni）系の言語の中でも、19 世紀初頭以来のミッション教育の伝統を誇り、出版局を内部に抱えるラヴデール校など有力校を有するケープ植民地においては、コーサ語での読本の出版が積極的に行われていた[33]。たしかに、ナタール州のズールー語教材に関しては、各宣教団体において教材が作成され、使用されていたものの、1932 年の時点において、言語学者ドークが述べるように、ズールー人の歴史や伝統に関するズールー語著作は非常に限られていた。ドークはズールー語文学における主要な著作のジョン・デュベのシャカの想像上の従者を主人公とした歴史小説『ジャッケ：シャカの世話人（Jaqe: Insila kaShaka）』のみであると指摘する[34]。また各宣教団体において使用されていた教材も、内容面においてキリスト教的なもの、あるいは生活指導に重点を置いたものなど、ズールー人の伝統を教えたいと考えていた教育省の立場からは不十分なものであった。実際に、1932 年に開催された大学間アフリカ研究会議のアフリカ言語に関する部会において、ドークは、ズールー語による著作がほとんど見られない現状を嘆き、トマス・モフォロがソト語で執筆した歴史小説『シャカ（Chaka）』に関して、ズールー人自身によるズールー人の歴史を対象とした著作の執筆を促しことも必要であるが、まずはモフォロの『シャカ』を学校教育での利用に資するためにこのズールー語に訳してはどうかと提案している。同じ会合において、マルコムは、教科書用に「ズールー人の歴史」がズールー語で書かれるべきだと主張している[35]。

ズールー語教材利用の歴史において、1930 年代はヨーロッパ人がズールー語で書いた読本や、英語で書かれた本のズールー語への翻訳本が優勢を占めていた状況から、のちに述べるように教育行政の介入によってズールー人がズールー語で書いた本がそれらに置き換わっていった時期であると捉えることができる[36]。この変化を捉えるためにまず白人行政官がズールー語で書いた本及び翻訳本が優勢を占めていた 1930 年代初頭の状況を説明しておきたい。

コーサ語やソト語など南アフリカの他のアフリカ言語と比較して、ズールー語で書かれた著作が少ないという現状を反映して、30 年代前半までのズールー語・文学という教育科目においては、ジェイムズ・スチュワート（James Stuart）がズールー語で書いた読本や、英語からズールー語への翻訳本が多く利用されていた。スチュワートの読本は、彼がズールーランドの行政官（magistrate）

---

[33] C. M. Doke, “A Preliminary Investigation into the State of the Native Languages of South Africa with Suggestions as to Research and the Development of Literature,” *Bantu Studies* 7, no. 1 (January 1, 1933): 1–32, https://doi.org/10.1080/02561751.1933.9676297.

[34] Doke, 14. ただし、ドークはマゲマ・フゼ（Magema Fuze）の『黒い人々（Abantu Abamnyama）』には言及していない。

[35] Doke, 14.

[36] 学校で使用されたズールー語教材の変遷については、本博士論文巻末のリストを参照。

としてアフリカ人と関わる中で収集したインタビュー、回顧録に基づいている[37]。これらの読本は、学生をズールー語で読むことに慣れされるという目的で使用されたのみならず、19 世紀のズールー人の歴史を教えるための教材としても利用された。初等教育用のシラバスは、ズールー語の授業時に、スチュワートの読本に基づいて教員がズールー人の歴史を教えるように促している[38]。翻訳本の例としては、ライダー・ハガードの冒険小説 Nada the Lily がズールー語に翻訳され、教科書として使用されている。現在はイギリス帝国主義を称揚する扇情的な冒険小説として語られることが多いハガードの小説が利用されていたことは意外なことと思われるかもしれない[39]。しかし、20 世紀前半においては南アフリカのアフリカ知識人の間でハガードの小説の人気は高かった。特に想像上のズールー人ウンプロガース（Umplogaas）を主人公として、彼の妹でシャカの妻となるナダを題名にした歴史小説『ナダ、百合のような女性（Nada, the Lily）』 の影響力は強くアフリカ人知識人が自身の小説を書く際のモデルになったとも指摘される。例えば、文学史研究者であるコーンは、『ナダ』のズールー語翻訳へ序文を寄せたデュベ自身の小説『ジャッケ』も『ナダ』を念頭に置いて執筆されたと主張する[40]。

ハガードの『ナダ』が影響を与えたのはズールー人による著作だけではなかった。ブライアン・ウィランは、2018 年に出版したソト人である政治活動家ソロモン・プラーイキの新しい伝記の中で、プラーイキの英語で書かれた小説『ムーディ（Mhudi）』が、その文体においても、また物語の構成においても『ナダ』に類似するものであると指摘している[41]。

キャロライン・ハミルトンは、この小説についてハガードは、シャカを有能な指導者として描きながらも、その冷酷さを強調していることを指摘し、この描写が、彼がこの本の献辞を捧げたシェップストンの政策を裏書する役割を果たすものであったと述べる。すなわち、この小説は、シャカの冷酷な統治がイギリスによる介入を正当化する一方で、シェップストンのアフリカ人統

---

[37] 彼が収集したインタビューは現在 James Stuart Archives として 6 巻本にまとめられている。James Stuart, Colin de B. Webb, and John B. Wright, *The James Stuart Archive of Recorded Oral Evidence Relating to the History of the Zulu and Neighbouring Peoples*, vol. 1, 6 vols., Manuscript Series (Killie Campbell Africana Library), no. 1 (Pietermaritzburg: Natal University Press, 1976). この記録集の形成過程については以下の文献を参照。John Wright, “Making the James Stuart Archive,” *History in Africa* 23 (January 1996): 333–50, https://doi.org/10.2307/3171947; Carolyn Hamilton, “Backstory, Biography, and the Life of the James Stuart Archive,” *History in Africa* 38 (2011): 319–41, https://doi.org/10.1353/hia.2011.0015.

[38] Natal Education Department, “Primary Syllabus for Use in Government and Government-Aided Native Schools,” 1936, 44. “Formal History lessons are not prescribed for classes below Standard III, as so many of the teachers in charge of these classes are uncertificated and lacking in sound historical knowledge; but it is expected that the pupils in these classes will gain *some knowledge of Zulu traditions and the story of the Zulus* in an informal way in the Oral Zulu lessons, some of which (particularly in Standards I and II) should be based on the historical sections of the following books: uThulasizwe and uVusezakithi.”

[39] 例えば、ハガードの最も著名な小説『ソロモン王の鉱脈』を論じた、Anne McClintock, *Imperial Leather: Race, Gender and Sexuality in the Colonial Contest* (New York: Routledge, 1995), 1–4.を参照

[40] Stephen Coan, “Dube’s Only Novel Is a Modern Classic,” News24, April 8, 2009, https://www.news24.com/Archives/Witness/Dubes-only-novel-is-a-modern-classic-20150430.

[41] Brian Willan, *Sol Plaatje: A Life of Solomon Tshekisho Plaatje, 1876- 1932*, African Lives Series, no. 10 (Sunnyside, Auckland Park, South Africa: Jacana Media, 2018), 376–78.

治政策におけるシャカ像の利用を支持するものであったと主張するのだ[42]。

しかし、ハガードの小説が影響力を持っていたことから、アフリカ人エリートがイギリス帝国主義を無批判に受け入れていたと結論することはできない。アフリカ人エリートによるハガードの読解には、南アフリカにおけるミッション・エリートという立場からの小説の含意の読み替えが伴ったのである。実際に、法廷通訳者 F.L.ンツーリ（F.L. Ntuli）による『ナダ』のズールー語翻訳書における、デュベの前書き（Isishayelelo）は、ハガードの小説をズールー人の強靭さを表すものであるとして捉え直すことを試みている[43]。デュベは、この本によってハガードはズールー人である「私たちを本当に強靭であると、私たちの力強さを賞賛し、激賞している」と書いている[44]。

アフリカ人の登場人物の名前をより真正なものに置き換えるなど細かな変更はあるものの、ンツーリの翻訳は基本的には、原文に忠実に沿ったものである。内容に関わる唯一の大きな変更は、献辞の簡略化とイントロダクションの省略である。しかし、この変更は、小説の意味づけを大きく変更するものであった。ハミルトンが主張するように、シェプストンへの献辞が、シェップストンが築いたシャカのイメージを利用した統治体制の正当性を確認する役割を果たしていたとすれば、その献辞を取り除くことは、この翻訳の焦点をシャカの時代そのものへと向けることに役立つだろう[45]。一方、ハガードの原文におけるイントロダクションは、白人農夫にアフリカ人の呪術師が物語るという図式を提示するものであると同時に、語り手である呪術師のエグゾティシズムを強調するものであった[46]。それに対して、翻訳本ではこの語りの構造の紹介は、デュベの前書きの中の一文に圧縮されており、黒人の語り手が白人に物語るという構造を説明するにとどまっている[47]。このように原文の献辞とイントロダクションを取り除いた上で、デュベの前書きを備えた翻訳書は、ズールー人のためにズールー人が語る、ズールー人の勇敢さを讃えるための物語としてこの本 (『シャカの支配（Umbuso kaShaka）』として訳された) を読むことを可能にする

---

42 Hamilton, *Terrific Majesty: The Powers of Shaka Zulu and the Limits of Historical Invention*, 118–24. 本文の読解を支えるパラテキストに着目した研究として Corinne Sandwith, “History by Paratext: Thomas Mofolo’s Chaka,” *Journal of Southern African Studies* 44, no. 3 (May 4, 2018): 471–90, https://doi.org/10.1080/03057070.2018.1445355.

43 H. Rider Haggard, *Umbuso kaShaka*, trans. F. L Ntuli (Mariannhill, Pinetown: Mariannhill Mission Press, 1979).

44 「それゆえ、この本を読んで私はあなたに次のように言うことができる。ズールー人の土地に住む人々の感性を持った白人である故ライダー・ハガード卿によって書かれた『ナダ：百合の女』と呼ばれる本書はうまくズールー語に訳されており、彼は私たちを本当に強靭であると、私たちの力強さを賞賛し、激賞している」“Lokhu ngikusho emva kokufunda incwadi enhle ayihumushile ngesiZulu ebizwa ngokuthi “Nada The Lily” eyalotshwa umufi uSir Rider Haggard, umLungu owayenozwela ngesizwe sakwaZulu, esidumisa ebabaza namandla aso, ethi siqotho siqinile.” Dube “Isishayelelo” in Haggard, *Umbuso kaShaka*.

45 Hamilton, *Terrific Majesty: The Powers of Shaka Zulu and the Limits of Historical Invention*, 119–20.

46 H. Rider (Henry Rider) Haggard, *Nada the Lily*, 1998, http://www.gutenberg.org/ebooks/1207.

47 Dube “Isishayelelo” in Haggard, *Umbuso kaShaka*.

ものであった。『ナダ：百合の女（Nada, the Lily）』は翻訳という過程を経ることで、ヨーロッパ人読者に対しアフリカというエキゾチックな場所での冒険を物語る小説から、ズールー人読者にズールー人の勇敢さとその歴史を伝える教材へと変化したのである。

2.3 ズールー語教科書への教育行政の介入

ズールー語で書かれた教科書が不足しているという状況を改善するためにナタール教育省は、ズールー地域土着語委員会（Zulu Regional Vernacular Commission）を設立し、ズールー語で書かれた原稿を募集した[48]。委員会のメンバーは、マルコムの他に、宣教師で聖書のズールー語訳を『原住民教員雑誌』に連載していた宣教師のスーター（Rev. Suter）、ダーバン郊外のアフリカ人エリート校であるアダムズ校の教員であり、ズールー部族歴史エッセイ・コンテストの応募作品の英訳も行ったダール（Dahle）、マルコムの後任として原住民教育主任視学官となるチューニセン（Teunissen）、そして唯一のアフリカ人メンバーとしてヴィッツ大学でズールー語の講師であったシブシソ・ニャンベジ（Sibusiso Nyembezi）から構成されていた。この構成メンバーから分かるように、この委員会は当時のナタール州が誇るズールー語の権威を結集したものであった。ズールー語文学・歴史の教材においてズールー人作家の作品が白人の著作に取り替っていく背景には、州政府の介入があったのである[49]。

アフリカ人の間での識字率[50]の低さゆえに、ズールー語で書かれた書物の場合、出版して採算の取れる一定数の読者を確保することは極めて困難であった。それゆえ、1949 年の段階におけるズールー語文学の現状を整理したマルコムの論文が述べるように、教科書として採用される見込みがなければ、ズールー語で書かれた本を出版することは難しかったのである[51]。上記の理由により、ズールー語・ズールー文学及び歴史という科目において使用される教科書がいかにして選定され、その後実際に出版されたのかという過程を分析することは、アフリカ人教育に関する思想、特にその中でズールー語・文学・歴史の果たす役割に対する考え方が、出版される本の内容をいかに規定してきたのかを理解することにつながると考えることができる。アフリカ人作家の作品を出版史的な観点から検討してきた研究の多くは、アフリカ人の著者と宣教団の出版局との

---

[48] “Departmental Notes and Notices,” NTJ. Vol.16 no.4. (July 1936) 96. ただし、宣教師を中心としたアフリカ人教育関係者は少なくとも 1911 年からズールー語の原稿を募集している。*Izindaba zabantu* 1911 年 1 月 1 日号 p.4。

[49] ただし、教科書の入れ替えの背景としては、ズールー語の正書法の変化も重要な要因であった。この点に関しては、Hamilton, *Terrific Majesty: The Powers of Shaka Zulu and the Limits of Historical Invention*, 162.を参照。

[50] どの程度のリテラシーを表しているのかは不明だが、1911 年のセンサスでは連邦全体で、7 パーセントのアフリカ人が識字能力ありと判断され、1935 年の人種関係研究所の調査では 650 万のアフリカ人のうち 12 パーセントが識字能力ありとされている。Meghan Healy-Clancy, *A World of Their Own: A History of South African Women's Education* (Scottsville: University of Kwazulu-Natal Press, 2013), 89.

[51] D. Mck Malcolm, “Zulu Literature,” *Africa* 19, no. 1 (January 1949): 39, https://doi.org/10.2307/1156262.

関係を対象として、いかにして宣教団の意図が出版される本の内容に影響を与えてきたかを明らかにしてきた[52]。しかし 1930 年代までにアフリカ人教育政策の大枠を主導する存在が、宣教団から教育学者や人類学者、あるいは行政官など世俗の専門家に移ったという教育史家クリゲの主張が正しいとするならば[53]、いかにしてマルコムに代表される政府及び世俗の専門家がアフリカ言語の著作の出版に介入したのかを明らかにする必要があるだろう。この点においてナタール教育省が主導した教科書としてのズールー語著作の出版は、行政のアフリカ言語作品への具体的な事例として重要性を持つのである。

それでは、教育省がズールー語作品の出版を推進したことは、ズールー語作品の内容にどのような影響を与えたのだろうか。主任教育視学官であったマルコムは、集まった原稿の評価を、教員であり、ズールー・ソサエティの事務局長を務めていた C. J. ムパンザに依頼している。ムパンザがマルコムに当てて書いた評価書を検討し、さらに実際に教科書として採用された書物の傾向を加えることで、ズールー語及びズールー文学・歴史という科目を通して何が教えられるべき、と期待されていたのかがわかる。大別すればズールー語で書かれた教科書に求められていたのは、ズールー語としての純粋さ、保守的なジェンダー観、そしてズールー人の伝統という三点にまとめることができる。それではまず最初の二点をムパンザがマルコムに宛てた評価書から見ていこう。

ムパンザがマルコムに当てた評価書の対象作品である、W.W. ムセンガ（W. W. Msengana）によって書かれたノマーシュワ（UNomashwa）という物語はムパンザによって酷評されている[54]。

---

[52] 南アフリカにおいては、ケープ植民地におけるエリート校であったラブデール校の出版局を対象として研究がなされてきた。Jeffrey Peires, “The Lovedale Press: Literature for the Bantu Revisited,” *History in Africa* 6 (1979): 155–75, https://doi.org/10.2307/3171744; Tim Couzens and Stephen Gray, “Printers’ and Other Devils: The Texts of Sol T. Plaatje’s ‘Mhudi,’” *Research in African Literatures* 9, no. 2 (1978): 198–215. プラーイキの古典的小説『ムーディー』に対する宣教師たちのアフリカ人への布教の姿勢を反映して、編集段階で大幅な手直しがあったとするカズンズとグレイの論文に対しては、変更はプラーイキ自身の意図を反映していたとするウィランの反論がある。Brian Willan, “What ‘Other Devils’? The Texts of Sol T. Plaatje’s Mhudi Revisited,” *Journal of Southern African Studies* 41, no. 6 (December 2015): 1331–47, https://doi.org/10.1080/03057070.2015.1116234. 南アフリカにおけるアフリカ言語での出版の歴史的な概要は以下の文献が簡潔にまとめている。Nhlanhla Maake, “Publishing and Perishing : Books, People and Reading in African Languages in South Africa,” in *The Politics of Publishing in South Africa*, ed. Nicholas Evans and Monica Seeber (London: Holger Ehling, 2000), 127–59.

[53] Sue Krige, “Segregation, Science and Commissions of Enquiry: The Contestation over Native Education Policy in South Africa, 1930–36,” *Journal of Southern African Studies* 23, no. 3 (September 1997): 491–506, https://doi.org/10.1080/03057079708708552. ただし同論文においてクリゲは、ナタール教育省の原住民教育主任教育視学官であったマルコムについては、教育における「再部族化」に反対する見解の持ち主であったと指摘する。しかし、ナタール州におけるアフリカ人教育の歴史を政府文書から検討したムーアの修士論文が明らかにしたように、実際にはマルコムは、カリキュラムの内容面においても、またアフリカ人教育を政府の管轄下に置くことを主張したという点でも、クリゲ自身が人種隔離のためのアフリカ人教育の思想的な基礎を提供したと述べる前任の主任教育視学官ロラムの政策を受け継ぎ、それを具体化した人物として捉えられるのである。Moore, “Natal’s ‘Native’ Education(1917-1953): Education for Segregation,” chaps. 2–3.

[54] Mpanza to Malcolm, 2nd December, 1939, Box15, VII/2 Letters to Malcolm, Zulu Society Papers, PMB.

しかし、この否定的な評価書は、逆から見れば、教科書として用いられることを想定して書かれたズールー語作品が持つべきと考えられていた性格を具体的に明らかにする内容を持っているということができるだろう。

第１点目の「純粋な」ズールー語で書かれている原稿という観点に照らして、ムパンザは、この原稿に見られるズールー語以外の単語を事細かにリスト化している。例えばムパンザは、本文中に出てくる「彼らの子ども」は、”ulusha lwake”と記されているが、ズールー語では“abantwana bakhe”であり、また「話題」を意味するズールー語は “indaba”であるが、”ingxoxo”と記されていることを指摘する。ムパンザは、この原稿にはズールー語以外の単語（おそらくコーサ語と考えられるとムパンザは述べている）が含まれているため出版するに値しないと述べる。

コーサ語とズールー語の混合という問題は、この原稿以外にも見られる。ズールー語読本の出版を計画していたコーサ語地域の東ケープにあるラヴデール学院出版局は、ナタール州教育省のマルコムやチューニセンから、ズールー語読本で使用した単語について詳細なチェックを受けたことを、同校校長であるシェパードに伝えている[55]。

言語の「純粋さ」を保つことに関する危機感は、ムパンザのような保守的なズールー人教員だけでなく、マルコムのような官僚にも共有されており、教育省の基本方針となっていたことが分かる。しかし、アフリカ人教員にとって純粋なズールー語を保つことは、英語など他の言語や、ヨハネスブルクのような都市のスラングからズールー語を守るという側面だけではなく、ズールー人のネイションとしての発展を示すものとして考えられていたのである。ズールー・ソサエティは、その教育に関する要綱の中で、ズールー語による教育が初等レベルを超えて、中等・高等教育まで広がっていくことが、ズールー人が文明化の段階を登っていることを示す指標となっていると指摘する[56]。この点において、ズールー語は、ベネディクト・アンダソンの主張するモデュール（規格）としてのナショナリズムの一要素だと捉えることができるだろう[57]。しかし、モデュールとしてのナショナリズムを導入する際に、その主導者が、ロシアや日本のようなアンダソンが官製ナショナリズムの典型として持ち出した事例とは異なり、植民地主義下でズールー人エリートと、白人行政官、そしてエッセイ・コンテストを主催したキリー・キャンベルの兄ウィリア

---

[55] W. B. Benuce to Rev. Shepard. 11th Sep. 1939 MS16343(h), Lovedale Papers, Cory Library, Rhodes University. ラヴデール学院出版局の史料を貸していただいたイサベル・ホフメイヤー教授に感謝。

[56] Zulu Society “Memorandum for the Provincial Education Commission on Native Education,” Zulu Society Papers, Box 8 IV/2/3 Papers re Chief Inspector of Native Education. ズールー・ソサエティのアフリカ人教育に関する要項を記したこの文書は第 12 条において次のように指摘する。 “Africans are being changed into educated and progressive Africans. It is therefore time that they should have education in their own Mother tongue up to University stage. Difficulties entailed can be solved by African professors of European linguists of whom the country has quite a number, and by the Education Department spending money in establishing bodies to standardize terminologies required to make Zulu capable of becoming a language medium in various subjects.”

[57] Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Rev. ed (London ; New York: Verso, 2006), chap. 6.

ムを含む資本家（砂糖プランター）との協力によって推進された[58]。このような協力関係は、ズールー語の授業の教材としての作品を、ズールー・ナショナリズムの発露としてのみ読み取らせることをためらわすに十分な複雑さをもたらした。この点については具体的な作品を分析する際に述べたい。

第二点目として、ズールー人の「伝統的な」ジェンダーに関する倫理（モラル）を教え込むことがこの教科には期待されていた。送られてきた原稿で描かれた主人公である架空の女生徒の行動とその母親の教師に対する態度を非難するムパンザの文面からは、ズールー人女性の「不品行 “immorality” 」を批判し、彼らの行動を規制しようとするズールー人エリートと行政官の思惑を読み取ることができる[59]。ムパンザは、登場人物の行動の問題点を次のように要約する。

> ノマーシュワは学校で教師と口論し、彼女の母親は学校で教員を名前で呼び[Sir, Miss などの敬称ではなく、ということ]、学校の規律を乱す。ノマーシュワは恋愛沙汰に巻き込まれ、婚姻外の妊娠をし、子どもを産む。彼女がその後恋に落ちる少年は、もし責任ある大人（a responsible man）であるジェイムズ・マヴァ（James Mava）が彼を動揺させるということがなかったら、彼女と結婚していたであろう[60]。

アフリカ人エリート女子校であるイナンダ・セミナリーの歴史をたどったヘーリー・クレンシーの研究が述べるように、1920 年代から 40 年代にかけて増加する未婚の女子学生の妊娠に対して保護者と教員は懸念を抱き、この事態は伝統的ズールー社会の規律の低下と、学校が女子学生に新たに規律を与える組織として取って代わることに失敗している証拠とされた[61]。ムパンザの懸念は、当時のジェンダー規範をめぐる議論を反映していたのである。学校におけるズールー文学・歴史教育は、行政官とアフリカ人エリートに共有されたこの保守的なジェンダー観が広がっていく回路であったと考えることができるだろう。

ムパンザの手紙から読み取れる上記二点に加えて、ズールー文学・歴史教育に期待された役割の三点目として、スチュワートの読本に関するシラバスの記述を牽いて先に述べたようにズールー人の歴史と伝統を教えることが挙げられる。

---

[58] Cope, *To Bind the Nation*; Cope, “The Zulu Petit Bourgeoisie and Zulu Nationalism in the 1920s.”

[59] 保守的なズールー人エリートと白人行政官のジェンダー規制をめぐる強調の事例としてマークスは、ズールー人女子学生の伝統的ダンス禁止を挙げている。Marks, “Patriotism, Patriarchy and Purity: Natal and the Politics of Zulu Ethnic Consciousness,” 225–30. しかし、このようなジェンダー観はズールー人伝統主義者に限られたものではなく、ナターシャ・イーランクが述べるように、ANC 活動家を含めた 20 世紀前半のアフリカ人エリートの多くに見られるものである。Natasha Erlank, “Gender and Masculinity in South African Nationalist Discourse, 1912-1950,” *Feminist Studies* 29, no. 3 (2003): 653–71.

[60] Mpanza to Malcolm, 2nd December, 1939, Box15, VII/2 Letters to Malcolm, Zulu Society Papers, PMB.

[61] Healy-Clancy, *A World of Their Own*, 107. 1930 年代の女子学生に対するジェンダー規律の強化に関しては、Lynn M. Thomas, “The Modern Girl and Racial Respectability in 1930s South Africa,” in *The Modern Girl Around the World: Consumption, Modernity, and Globalization*, ed. The Modern Girl around the World Research Group et al. (Durham: Duke University Press Books, 2008), 96–119.も参照。

2.4. 教科書作家としての R.R.R.ジョモ

以上のような期待に最もよく応え、30 年代半ばから指定図書としてその著作が広く学校教育で用いられた作家が R.R.R.ジョモ（R.R.R. Dhlomo）であった。ジョモの著作は、ズールー王家を題材とした三部作、『シャカ（UShaka）』、『ディンガネ（UDingane）』、『ムパンデ（ UMpande）』だけでなく、第 2 章で述べたように生活指導を中心としたズールー語の読本『今日の武器（Isikhali zanamuhla）』及び『知識は人を発展させる（Ukwazi … kuyathuthukisa）』も教科書として採用された[62]。彼自身が『シャカ』の序文で述べるように、ジョモの歴史小説はズールー人の過去の精神を読者に伝えることを目的として書かれたものだ[63]。そしてまた彼の英語での小説『アフリカの悲劇（An African Tragedy）』が都市に移住したアフリカ人女性の堕落を描いていることから分かるように、ジョモ自身家父長的な権力を重視する保守的なジェンダー観の持ち主であった[64]。

ジョモの歴史小説三部作は、ズールー人の過去を学生に伝えることを意図しているという点で、ズールー人自身によってズールー人の過去が描かれることを待ち望んでいた、ドークやマルコムなど白人の学者や行政官の期待に応えるものであった。ヴィッツ大学の言語学教授として、アフリカ言語の出版物の促進に尽力したドークは『シャカ』への緒言（Isibingelelo[直訳としては「紹介」の意味がある]）において、スチュワートやソト人のモフォロなど、ズールー人以外の書き手によって描かれてきたシャカの時代がようやくズールー人によって書かれたことの重要性を指摘する[65]。

文学におけるシャカ像の系譜をたどったゴランは、このようにジョモの作品が多く学校で教科書として使用されていたことを踏まえて、ジョモの作品が指定教科書としてスチュワートの読本に置き換わっただけでなく、ズールー人の歴史的知識の源泉としても取って代わったのだと指摘する[66]。しかし、スチュワートの読本がズールー人の書き手によって置き換えられたことは、彼の読本が影響力を失ったことを意味する訳ではなかった。教科書が白人行政官の著作からアフリカ人の著作に変わったことは、アフリカ人の視点から見た歴史が教えられるようになったのだと単純に結論することはできない。この事態はむしろ白人と黒人双方の歴史観のもつれとして捉える必要があるのである。

ジョモの『シャカ』は、この本以前に教材として使われたデュベの『ジャッケ：シャカの従者』やハガードの翻訳本『ナダ/シャカの支配 (Nada, the Lily/Umbuso kaShaka)』とは異なり、想像上の人物を主人公として彼らの人生を物語るのではなく、実在の人物シャカを主人公として彼の生涯

---

62 採用された年度と学年については、本論文末の教科書リストを参照。

63 Dhlomo, “Amazwana Omlobi Walamaxoxo” R.R.R. Dhlomo, *UShaka* (Pietermaritzburg: Shuter and Shooter, 1937).

64 R.R.R. Dhlomo, *An African Tragedy* (Allice: Lovedale Press, 1928).

65 Doke, “Isibingelelo,” Dhlomo, *UShaka*.

66 Dafnah Golan, *Inventing Shaka: Using History in the Construction of Zulu Nationalism* (Boulder, Colo: L. Rienne, 1994), 78.

を描くという構成を取っている。それゆえにジョモは、彼が歴史上の人物を物語るにあたって、彼らに想像上のセリフを語らせるのは、その時代の精神（慣習）を伝えるためであると弁明しなくてはならなかったのである[67]。そして、ジョモが、彼が描いた歴史が事実に基づいていると主張するときの根拠となっているのが、「白人・黒人の両者によって書かれた書物」であった。それらの書物の中でも、ハミルトンとライトは、『シャカ』の各章を詳細に分析することで、ジョモが参照した書物の中でもスチュワートの読本に最も依拠していたことを明らかにしている[68]。またズールー人教員ポール・ラムラ（Paul Lamula）もズールー人の伝統を扱った『ズールー人の遺産（Isabelo sikaZulu(The inheritance of the Zulu)）』の末尾の謝辞において、スチュワートに言及し、ズールー人は、ズールー人の過去に関する話を収集したスチュワートに感謝すべきであると述べる。また彼の謝辞は、首長の頌詩（praise poem(izibongo)）も含めたスチュワートの読本の内容が学校教育を通じてズールー語話者の間に膾炙していたことを裏付けている[69]。ヴィラカジが述べるようにスチュワートの読本自体にズールー人自身が歴史を書くことを促す効果があったのであり、ジョモやラムラの著作はその代表的な実例として考えることができるだろう[70]。

ジョモやラムラが、スチュワートの読本に依拠して、自身の歴史書を書いていたことは、ハミルトンとライトが述べるようにズールー王国に関する歴史叙述の集まりとしてのアーカイブが、この流れは白人の系譜とこの流れは黒人の系譜であるというように明確に分けることのなどできない混交した状況にある、ということを裏付けるものだ[71]。ただし、ドークが、『シャカ』への序文においてジョモがスチュワートやあるいはイギリス人冒険家ナサニエル・アイザック(Nathaniel Isaacs)の旅行記を参照して書いていたことは、この小説をより事実に寄り添うものにするという意図があってのことだろうと述べていることから分かるように、白人の著作を引用する

---

67 Dhlomo, “Amazwana Omlobi Walamaxoxo” UShaka

68 John Wright and Carolyn Hamilton, “‘Black’ Histories, ‘White’ Histories, ‘Mixed’ Histories? Perspectives from Zulu Historiography” (July 5, 2001). Paper presented at the Conference “‘The Burden of Race: “Whiteness” and “Blackness” in Modern South Africa’” at Wits University.

69 Petros Lamula, *Isabelo sikaZulu* (Pietermaritzburg: Lincroft Books, 1967), 214.原文は以下の通りである。「私は、ズールー人は J.スチュワート氏の尽力によく感謝すべきであると考える。彼は、私たちの物語を収集し、また首長の頌詩（イジボンゴ）を整理し、それらを本にまとめることに尽力した。私自身、彼の集めた頌詩と彼の本が築いた道から出てきたとも考えられ、そのため私は彼に十分に感謝することなどできない。なぜなら、他の学生と同様に彼の本にすっかり馴染んでしまっているのだから。実際、従わなかった少数の例外こそあるが、私は[この本で]彼の集めた頌詩に従った（“Ngithi kuhle isizwe sibonge imizamo ka-Mnu. J. Stuart, ozame ukubhala izincwadi eziphethe izindaba zakithi, wahlela nezibongo zamakhosi. Kangithandana nami ukuba ngiphume emkhondweni wezibongo ezisezincwadini zakhe, ngoba sezijwayeleke kakhulu nasezinganeni zezikole. Ngempele-ke khona ezibongweni ngilandele yena nje, noma kukhona kancane lapho ngiyeke khona”.)」なお頌詩（イジボンゴ）には口承伝統の常であるように、いくつもの型が存在する。イジボンゴについては、A. T. Cope, *Izibongo: Zulu Praise-Poems* (Oxford: Clarendon, 1968)を参照。

70 B. W. Vilakazi, “Some Aspects of Zulu Literature,” *African Studies* 1, no. 4 (1942): 274.

71 Wright and Hamilton, “‘Black’ Histories, ‘White’ Histories, ‘Mixed’ Histories? Perspectives from Zulu Historiography,” 22.

ことは、歴史叙述をより「客観的」に見せるための工夫でもあったと考えられるだろう[72]。また白人の著作を参考文献として用いることは同時に、原住民教育主任視学官のマルコムに体現されるようなズールー史や文学の権威に寄り添い、また教育省におもねるという姿勢を示すという意図も感じられる。ラムラの『ズールー人の遺産（Isabelo sikaZulu）』は、スチュワートへの感謝を末尾で述べるとともに、その序文でこの本をマルコムに捧げるとしている[73]。

教科書としての採用を念頭に置いて、政府の権威とその方針に寄り添うことを強いられたのは、ラムラだけではなかった。R.R.R.ジョモの弟であり、自身も小説家であった H.I.E. ジョモは（ただし彼の執筆言語は英語である）、ズールー戦争時のズールー王を主題とした兄の歴史小説の原稿『チェツワヨ UCetshwayo』が教科書を選定する委員会で「人種的かつ宗教的」理由（on racial and religious ones）によって教科書としての採用を否定されたと指摘している。ジョモのそれ以前の三部作が全て教科書として採用されていることを考えれば、この決定は意外なものであり、H.I.E.の委員会の決定が大騒ぎ（sensation）を起こしたという主張もあながち、誇張ではないかもしれない[74]。教科書としての執筆ということで、制約が生じたのは政府への批判だけではなかった。ムパンザは、ハガードの『ナダ（Nada）』をより低学年向けに翻案した原稿について、相続の問題で揺れるズールー王家の意向で採用が難しいと指摘する[75]。それは、ハガードのこの小説が、自分の妻たちが男子を生んだ場合はその赤子を殺すように命じてきたシャカには実は生き延びた息子がいたと仮定して話を進めるという構図を持っていたからであろう。30 年代半ばからズールー語教科書の著者は、ほぼズールー人に占められるようになったが、ズールー王家を焦点とする歴史叙述のスタイルは保持された。以下では、この時期にズールー王家を中心とした歴史叙述がどのように変化したかを考察する。

---

72 Doke, “Isibingelelo,” Dhlomo, *UShaka*.

73 Lamura Isabelo sikaZulu. p.214. マルコム自身ははラムラの前著『マランデラの息子ズールー（UZulu kaMalandela)』に対して、内容が植民地支配に反発するものであったことから、否定的な書評を書いている。NTJ Vol.5 no.2. pp.41-2. 『マランデラの息子ズールー（UZulu kaMalandela)』の受容に関しては, La Hausse de Lalouviere, *Restless Identities*, 103–7.を参照。

74 H. I. E. Dhlomo, “Three Famous African Authors I Knew : R. R. R. Dhlomo,” *English in Africa* 2, no. 1 (1975): 11. ティム・カズンズは、H.I.E. ジョモの戯曲チェスワヨが、ナタール州及び連邦全体における人種隔離政策の基礎を築いたシェップストンを否定的に描くことによって、執筆当時のヘルツォーク政権の隔離政策への批判になっていると指摘した。Tim Couzens, *The New African: A Study of the Life and Work of H.I.E. Dhlomo* (Johannesburg: Ravan Press, 1985), 142–55. この R.R.R.ジョモの教科書としての採用を否定された小説が、彼の弟の戯曲と内容面で関係しているのかについては今後の調査課題である。ただし R.R.R. ジョモのチェツワヨは 1953 年からズールー史・文学の教科書として採用されている。巻末の一覧表を参照。

75 Mpanza to Malcolm 6 Oct. 1941, Letters to Chief Inspector of Native Education, III/4 Zulu Society Papers, PMB Archives Depot, National Archives, South Africa.ズールー王家の継承問題と、この問題へのズールー・ソサエティの関わりについては以下の文献を参照。Marks, “Patriotism, Patriarchy and Purity: Natal and the Politics of Zulu Ethnic Consciousness”; Antony Costa, “Custom and Common Sense,” *African Studies* 56, no. 1 (January 1, 1997): 19–42, https://doi.org/10.1080/00020189708707858.

2.5. 日付のついた歴史：南アフリカ連邦形成史の中のズールー人の歴史

1930 年代半ばから原住民教育省（Department of Native Education）が ズールー語での教科書の出版に積極的に介入し、出版プロセスをその管轄下に置いたことは、ズールー王家を中心とした歴史叙述の内容にどのような影響を与えたのだろうか。この問いを考えるにあたって、教育省、特に主任教育視学官であるマルコムの働きかけによって出版が促される 1930 年代半ば以前と、それ以後の二つの時期に出版された本の内容の相違に着目することで、ズールー語著作への教育行政の影響を考えたい。具体的には、南アフリカのアフリカ人の歴史全般を扱った歴史書という観点から、1922 年に出版されたマゲマ・フゼ（Magema Fuze）の『黒い人々：彼らはどこから来たのか Abantu Abanmyama, Lapa Bavela Ngakona（Black People and whence they come）』[76]と、1938 年の A. I. モレフェ(A. I. Molefe)と T. Z. マソンド(T. Z. Masondo)の共著『褐色の民族の起源と白人の到来について Ezomdabu wezizwe zabansundu nezokufika nokubusa kwabelungu (The origins of the brown nations and the arrival of whites) 』[77]を比較する。原住民教育省の積極的な介入以前・以後という二つの時期をまたいで発表され、かつ同様の主題を扱ったこの二つの著作を比較することで、ズールー史にもたらされた内容の差異が明らかになるだろう。

実際に、ズールー語話者の間では、これらの二つの本は同じ主題を扱っていると考えられていた。例えば、後に言及する現代小説『ハリスデールの相続人（Indlelifa yaseHarrisdale）』の著者である E.H.A. マデ（E.H.A. Made）は、後者が前者の「歩んだ道をたどる(kuhamba ezinyathelweni zikaFuze)」ものであると述べる[78]。しかし両者の間には、ナタール州及び南アフリカ全体におけるアフリカ人統治政策への見解において、また、その見解の違いに結びついた形でいかに歴史を語るのかという叙述の方向性において、相違が存在する。以下ではこの点を明らかにするために特に政府に対する見解、及び叙述の仕方を中心に両者を比較する。

2.5.1. フゼ『黒い人々』

ズールー人によってズールー語で書かれた初めての本の著者として知られるマゲマ・フゼ（Magema Fuze）は、アフリカ人の権利の擁護者として入植者の間で悪名高いイギリス人宣教師

---

[76] 原著は、M. Fuze, *Abantu Abamnyama: Lapa Bavela Ngakona*, Ise ng'eyokuqala (Pietermaritsburg: City printing works, Limited, 1922).である。編者によって構成を変更されているが、英語での翻訳 Magema M. Fuze, *The Black People and Whence They Came*, trans. Harry C. Lugg (Pietermaritzburg: University of Natal Press, 1979).も出版されている。

[77] A. I Molefe and T. Z Masondo, *Ezomdabu wezizwe zabansundu nezokufika nokubusa kwabelungu* (Pietermaritzburg: Shuter & Shooter, 1938).

[78] "*Ezomdabu Walelizwe* yizindaba ngezizwe eziNsundu, kuthathela ekufikeni kwazo kuleli elisezansi, kuze kufike izizwe zangaphesheya komfula, abelungu namaNdiya. OMolefe noMasondo bazamile ukwenelisa iSyllabus yomlando kuStandard 5. Ukulanda kwabo kuhamba ezinyathelweni zikaFuze ku*Abantu Abamnyama Lapha Bavela Ngakhona.*" Emman H. A Made, *Ubuwula Bexoxo* (Pietermaritzburg: Shuter & Shooter, 1945), 155.

ジョン・コレンゾ（John Colenso）がズールー人を対象として開いた学校で学んだ。エクカンエニ（Ekukhanyeni）、光のある場所（あるいは、啓蒙の場所）と名付けられた学校で学び、また同校で印刷工として働いたフゼの歴史叙述には、ミッション・エリートとしての、そしてコレンゾの弟子としての意識が色濃く反映されている。フゼの詳細な伝記研究を発表したショニパ・モコエナ（Hlonipha Mokoena）は、そのタイトルを『マゲマ・フゼ：コルワ知識人の形成』とした[79]。コルワ（Kholwa）とは、「信じること（ukukholwa）」という動詞に由来し、キリスト教に改宗したアフリカ人を指す言葉として 20 世紀半ばまで用いられた。モコエナは、識字という植民地化と宣教によって新しくもたらされた能力ゆえに、フゼや他のコルワたちは、19 世紀から 20 世紀初頭にかけてアフリカ人の観点に立った知的伝統を作り出すことを目指す集団として、自分たちを意識していたと主張する[80]。

フゼのこの著作は、フゼが序文で述べるように宣教団や政府の助成に頼ることなくアフリカ人の友人からの資金的援助で出版された[81]。この点は、フゼの叙述が政府からの干渉から比較的自由であったことを示すとともに、コルワたちの共通の関心を示している。フゼは『黒い人々』の序文で、「この本を学校に通う子どもたちに読んでもらい、彼らの知らない自分自身の由来を知ってもらいたいと思う人は多いはずだ」[82]と書き、この本がアフリカ人の過去を保存し、広めるという目的があることを明確にする。しかし、次章で述べるズールー部族歴史エッセイ・コンテストが「部族」の歴史を保存することを求めていたのに対して、フゼの歴史書はズールー王家を中心としつつも、奴隷制によって散らばったブラック・ディアスポラをも射程に含むものになっている。さらにズールー王家の歴史を描く際も、歴代の王のみを語るのではなく、彼らと白人政府との交渉・戦闘の過程を白人政府への批判を含めながら書いている。このような対象の広がりと批判的な観点は、首長ランガリバレレや、ズールー王チェツワヨ、デヌズールーなど反逆罪に問われてきたアフリカ人指導者を擁護してきたコレンゾ家と深く関わり[83]、バンバタの反乱に乗じて植民地政府の転覆を図ったという罪でセントヘレナ島に幽閉されていたズールー王デヌズールーに伴なって、同島に渡り、王の二人の息子の家庭教師を務めたという経験が関係しているのだろう[84]。

---

[79] Hlonipha Mokoena, *Magema Fuze : The Making of a Kholwa Intellectual* (Scottsville South Africa: University of KwaZulu-Natal Press, 2011).

[80] Mokoena, 17–24.

[81] Mokoena, 201–2.

[82] Fuze, *The Black People and Whence They Came*, v.

[83] コレンゾ家とこれらアフリカ人指導者をめぐる論争については、Jeff Guy, *The Heretic: A Study of the Life of John William Colenso 1814-1883* (Johannesburg: Ravan, 1983); Jeff Guy, *The View across the River: Harriette Colenso and the Zulu Struggle against Imperialism* (Charlottesville, Va: University of Virginia Press, 2002). を参照。

[84] フゼの伝記的事実については、Mokoena, *Magema Fuze*.を参照。

フゼの『黒い人々』は、セントヘレナ島での元奴隷との交流[85]や、アフリカ人を南下したユダヤ人として捉える聖書の字義的解釈[86]など興味深い論点を多く含む。しかし、本章の観点から重要だと考えられるのは、ズールー王家の描き方である。原住民政策の文脈では、シャカに代表されるズールー王は強権的な独裁者として捉えられるのに対して、フゼは征服した「部族」の首長を殺すように求めたのはシャカ自身ではなく取り巻きであったと述べ[87]、またディンガネの北上してきたアフリカーナーの殺害についても、彼自身を罠に嵌める計画を見破ったためだ[88]として、様々な紛争・殺害の原因を、ズールー王自身の残虐性ではなく、その他の要因に求めている。さらに、1879 年のズールー戦争時の王チェツワヨについても、戦争を正当化する目的でチェツワヨを暴虐的君主と描く植民地政府のプロパガンダに対して、「個人的に知っている限りでは、チェツワヨは、臣民を愛す良い君主であり、えこひいきと不公平を嫌い、間違いを犯したものを公然と批判し、一貫した行動をとる人物であった」とその性格を賞賛している[89]。

そして、フゼの歴史叙述には、このような個人的経験やズールー人の間での口承伝統を、白人によって書かれた書物よりも有力な資料として提示する工夫がなされている。フゼは、ナサニエル・アイザックス（Nathaniel Isaacs）、ヘンリー・フィン（Henry Fynn）のような冒険家の著述や、彼自身の教師コレンゾがズールー語で書いた『ナタールの出来事』（Izindaba ZaseNatal）などの書物を引きながら、それぞれのズールー王の統治の下で起こった出来事を記述していく。しかしそれらの資料の見解は、白人から見た歴史としてくくっている。例えば、フゼのズールー語原著の第 37 章は、「白人によって語られたシャカの出来事（zindaba zika'Tshaka (ngokutsho kwabelungu paras. 12a-23)）」と題され、叙述の視点が白人側にあることが明確にされる。そして、その後に自身の経験やアフリカ人の間での言い伝えをより権威のあるものとして提示するのである。例えば、シャカが、実の母親がシャカの息子を隠した際、怒りで母親を殺したというズールー人の間での言い伝えを取り上げることができる。この伝承に対しフィンは、母親は病気で死んだと言っているが、ズールー人はこのように大切な秘密を白人に伝えるだろうか、と疑問を呈し、フゼ自身は、シャカが母ナンディを刺したのだと考えていると述べている[90]。このようにフゼは、アフリカ人の主体的経験に立った叙述を行い、さらにその叙述が白人の著作より優れていることを主張するのである。

---

85 Mokoena, 140–61.

86 Hlonipha Mokoena, "'The Black House', or How the Zulus Became Jews," *Journal of Southern African Studies* 44, no. 3 (May 4, 2018): 401–11, https://doi.org/10.1080/03057070.2018.1461457.

87 Fuze, *The Black People and Whence They Came*, 105.

88 Fuze, 170.

89 Fuze, 105.

90 Fuze, *Abantu Abamnyama*, 79."Kepa uMbuyazwe weTeku (Mr. Fynn) uyakupika loko, uyaqinisa ngempela, uti, inkosikazi yabe igula iruda igazi. Asazi-ke lapo ukuti yikupi okuy'isiminya. Kodwa umuntu angangabaza, mhlaumbe, ati, "Konje umlungu Iona abakwa'Zulu babengahle bamtshele isifuba sakubo kona kwakwenzekile loko na ?" Mina ngibona ukuti wamgwaza ngempela."

このように、内容的にも、叙述スタイルという点においても植民地政府やその立場に寄り添った歴史書に批判的なフゼの本が、アフリカ人教育の教科書として指定されていたこと自体が不思議であると思えるかもしれない[91]。おそらくは、ズールー語による歴史書の不足が原因であると考えられるが、フゼの『黒い人々』は実際に 1934 年の教員資格第 4 級の科目であるズールー文学・歴史の教科書として指定されていた[92]。しかし、フゼの『黒い人々』は資料から分かる限りでは、この一年のみの指定で終わっている。次にこのフゼの著作と対比させる形で、同じくズールー人の通史を対象とするモレフェとマソンドの『褐色の民族の起源と白人の到来について』の叙述を検討することで、ズールー語による歴史叙述への教育省介入の影響を明らかにしたい。

2.5.2. 「主任教育視学官に大いに感謝いたします（Siyabonga kakhulu…uMhloli OMkhulu）」: 教育省介入のズールー語歴史教科書内容への影響

モレフェとマソンドはその序文においてマルコムへの感謝を示す。「私たちは、助言をくれた友人、特に主任教育視学官である D.マック・マルコム氏—彼の助力のおかげで私たちの仕事は出版されることになったのです—に感謝いたします」[93]と。ただし、1930 年代から 40 年代にかけてズールー語で書かれた教科書を読むとき、その謝辞においてマルコムへの感謝の言葉に必ずと言って良いほど出会うため、この謝辞は、モレフェとマソンドに特有のものではない。しかし、フゼの著作と比較するとき、彼らの著作は原住民教育行政の影響を明らかに示している。

モレフェとマソンドの著作『褐色の民族の起源と白人の到来について』は、ズールー王を中心とする叙述を行っている点では、フゼの著作と同様であるが、植民地支配や間接統治に時に批判的な言及を行うフゼに対して、モレフェとマソンドは白人支配によってもたらされた変化を肯定的に捉える結論を提示している。例えば、彼らは、『黒人の進展（Inqubekela phambili yabasundu）』と題する章において、白人による植民地化後の黒人の進展を、宣教師によるキリスト教の到来から、政府による病院の建設まで様々な事例を列挙しているが、フゼに見られたような白人政府に対する批判的な姿勢は見られない[94]。さらに本の結論部分においてモレフェとマソンドは、白人政府は連邦に、発展（intuthuko）をもたらしたとしてその存在を肯定するのである[95]。

モレフェとマソンドの著作の目的は、南アフリカ連邦という国家の形成の歴史の中に、同国に

---

[91] 実際、先に言及したショニパ・モコエナは『原住民教員雑誌』の教育省公示の欄に、フゼの『黒い人々』が指定教科書として書かれているのを筆者が見せるまで、フゼの本は学校の教科書として使用されてはいなかったと考えていた。

[92] “Department Notice,” NTJ Oct. 1933 Vol.13 no.1, p.37. 指定教科書の年度別一覧については、本博士論文巻末を参照。

[93] “Siyababonga kakhulu abahlobo bethu abasilulekayo, ikakhulu uMhloli Omkhulu wezikole uMnu. D. McK. Malcolm okunguyena ophumelise umsebenzi wethu.” Molefe and Masondo, *Ezomdabu wezizwe zabansundu nezokufika nokubusa kwabelungu*, sec. Amazwi Okuqala.

[94] Molefe and Masondo, 152–58.

[95] Molefe and Masondo, 176–80.

住むアフリカ人の歴史を位置付けることにあり、この点は、本書の構成によく表れている。彼らは、アフリカ人の南下を説明した後、ズールー人の歴史をシャカからソロモンまで続く、ズールー王を中心としたナラティヴとして叙述する。その後に続くのは、ソト人、ツワナ人、コーサ人など各民族の簡略な歴史と、南アフリカ戦争（ボーア戦争）など南アフリカ全体の通史である。これらの歴史的叙述を終えた後、かれらは、ミッション・リザーブやロケーションなど政府によって定められた土地の形態を説明する。

そして、このような内容面での相違は、叙述の仕方の相違としても表れている。一方で、フゼの著作は、記述される出来事の、それが起こった年、日付が記されていないことに対して読者に驚かないように注意を促しているのに対して[96]、モレフェとマソンドの著作は、日付の付いた歴史（年譜的歴史）—それはフゼによるならばヨーロッパ人の到来によってもたらされた歴史に対する認識のあり方なのであるが—として南アフリカのアフリカ人の歴史を語ろうと試みる。この点が明確に表れているのが、彼らが巻末に付した付録であり、ここでは、ズールー人の歴史、その他のアフリカ人民族の歴史に加え、連邦形成の歴史における重要な出来事が、年表形式でまとめられるのである[97]。このような歴史語り方の相違は、モレフェとマソンドの著作が、植民地社会の形成というメタナラティブを背後に持つ南アフリカ連邦の成立と発展の歴史の一部としてズールー人の、またアフリカ人の歴史を語ろうという試みであることを示している。

そして、ズールー史・文学という科目において、モレフェとマソンドの共著が教科書として使われたという事実は、この歴史観を支持する読み方が促されたことを想定させる。それは、この教科書に対する試験問題からも明らかである。例えば 1943 年の教員資格試験の問題では、1879 年のズールー戦争について、この戦争がもたらした利点と弊害をそれぞれあげることを要求するのである[98]。この問題の作成者であったチャールズ・ムパンザ（Charles Mpanza）は、解答として、弊害としては戦争後、ズールーランドの主権が失われたこと[99]を、利点としては同地に白人の「文明化/啓蒙された生活(enlightened life-style)」が入ってきたことを第一に挙げるように求める[100]。それゆえに、この本の読者である教員候補者たちは、白人支配の南アフリカという現実を肯定する視線を持ち込む形でズールー人の歴史を語ることを余儀なくされたということができるだろう。

---

96 Fuze, *The Black People and Whence They Came*, vii.

97 Molefe and Masondo, *Ezomdabu wezizwe zabansundu nezokufika nokubusa kwabelungu*, 181–88.

98 “Izimpi zinhle zimbi. Yabanhle ngani kwelaseSouth Africa impi yasOndini (4 July, 1879)? Yabambi ngani?” Education Department, Natal. Native Teachers’ Fourth Class Certificate (T.4) Examination 1943.

99 “Ngokuwa kwobukhosi bakwaZulu, ubuzwe bukaZulu baphela, nanamuhla uZulu kabumbene.” Outlines of Answers and Scheme of Marking, Native Teachers’ Fourth Class Certificate (T.4) Examination, 1943. Zulu History and Literature.

100 “Inhlalo yokukhanya, nokungenqeni, nokuzisebenzela, nokwenza okuthandwa yinlizyio, leyafika nezizwe ezimhlophe, yathola ithuba lokungena phakati kweNdlwemnyama e-South Africa, seluphelile uvalo lokuvinjezelwa vimpi yoSuthu olumpondonde.” Outlines of Answers and Scheme of Marking, Native Teachers’ Fourth Class Certificate (T.4) Examination, 1943. Zulu History and Literature. Hlonipha suggests the phrase “inhlalo yokukhanya” to be translated as “enlightened lifestyle.” (personal communication. 5. June. 2019).

ショニパ・モコエナは、ズールー人の著述家フゼのズールー語新聞『ナタールの太陽（Ilanga laseNatal）』での記事と『黒い人』 の受容の過程を検討して、フゼの歴史叙述がズールー語話者である黒人が彼らの歴史を議論する言論の場をひらいたとする主張する[101]。しかし、1930 年代以降の教育省の介入の強化によって、ズールー語で歴史を書き・読むという、その行為自体が、その書き手と読み手の歴史意識をともに、「伝統」を利用した原住民統治行政の意図に絡み取られていくというプロセスの一部に変容したのである。

第 3 節　ズールー文学・歴史科目における試験問題による読み方の規定

3.1. ズールー語教科書における解釈の幅とその縮減

しかし、教科書として採用されることを想定して書かれたということが、すなわち、ズールー人作家が書いた著作が白人政府の意向に寄り添ったものであるということを意味するわけではない。教科書として使用された作品のいくつかは、まさにマークスが述べるような抵抗と恭順がないまぜとなった「曖昧さ（ambiguities）」[102]や、ピーターソンの指摘するナラティヴにおいて対立項を象徴的に両立させる役割を果たす「アレゴリー(allegory)」[103]の存在を示している。

ジョモの歴史小説は、ズールー人の過去を伝えるという点で、まさにマルコムやドークなど専門家の期待にまさに応える本となっている。しかし一方で、弟の H.I.E.ジョモは、歴代のズールー王を主題とした兄 R. R. R.ジョモの歴史小説は、ズールー人の歴史における過去の偉大な人物を描くことで「民族解放(National Liberation)」に貢献すると論じている[104]。またピーターソンも、R. R. R.ジョモの歴史小説の中でズールー王が、独裁者ー殉教者（tyrant-martyr）という両義性を持った存在として描かれていると指摘する。すなわち、ズールー王は、強権的な統治を敷く独裁者でありながら、白人との接触後は、アフリカ人の独立と尊厳を守るために犠牲的な勇敢さを示す人物として提示されているのである[105]。

このような解釈における両義性は、マデの現代小説『ハリスデールの相続人(Indlalifa yaseHarrisdale)』に明確に表れている[106]。この小説は、白人家庭で働いて得た資金で自身の農場を持ち成功した父親と、父親の資産で良い教育を受けたものの働くことを嫌がり都市で放蕩する息子を対比的に描いた後、最終的な息子の改心と親子の和解を描いている。『バンツー研究』の書評において、ズールー人詩人・小説家のヴィラカジはこの小説を、白人のアフリカ社会への影響という現代の課題に取り組んだものとして高く評価する。ヴィラカジにとってこの小説が明らか

---

101 Mokoena, “An Assembly of Readers.”

102 Marks, *The Ambiguities of Dependence in South Africa*, 2.

103 Peterson, *Monarchs, Missionaries & African Intellectuals*.

104 Dhlomo, “Three Famous African Authors I Knew,” 12.

105 Peterson, “Black Writers and the Historical Novel: 1907-1948,” 302.

106 Emman H. A Made, *Indlalifa Yase Harrisdale*, Rev. ed (Pietermaritzburg: Shuter and Shooter, 1974).

にするのは、南アフリカの黒人差別の現実であり、それに捉われた「教育を受けたアフリカ人（educated Africans）」の苦境である[107]。それに対して、教育視学官のマルコムはこの小説を、白人と黒人との協力、リザーブの経済的発展、そして出稼ぎのために一時的に滞在していたとしても、最終的には都市を離れて農村に帰ることの重要さを説いた物語として説明する[108]。この大きく解釈が異なる二つの要約に示されるように、父親と息子との間の「文化の衝突」[109]を描いたマデのこの小説は、様々な読解の可能性に開かれた物語として捉えることができる。

しかし、この本を学校教育おける教科書として読むという状況を考えるとその解釈の可能性は狭まる。この本を対象として実施されたズールー史・文学の試験問題から、この本がいかに読まれるべきだと考えられていたかを検討しよう。1941 年の原住民教員資格第 4 級試験（Fourth Class Certification Examination）では、『ハリスデールの相続人』に関する問題[110]の最初のものは次のように始まる。

> 物語は、ムントゥカジ[父親]が小規模の土地を買ってもらうことから始まる。これは誰のアイディアであったか、またこの土地を買ってもらった事はどのような展開をもたらしたか？この物語全体が私たちに教えようとしているのは何か？“Isisusa sendaba yokuba UMuntukaziwa athengelwe isiqintshana sezwe saqala kubani, sahamba kanjani? Yonke lendaba iqonde ukusifundisani?” (The origin of the story is that Muntukaziwa was bought for a small plot of land. Whose idea is this? How does it proceed? What does the whole story intend to teach us?)

この問題の想定される答えはムントゥカジの白人の隣人ハリスが、今まで彼の農場で働いてきたムントゥカジをねぎらうために、ムントゥカジに土地を買い与えた。そして、その土地を農地にすることでムントゥカジは成功した（息子を全寮制の学校に送るまでに）というものであろう。

あるいは 1944 年のこの小説に関する問題[111]は、次のように学生に問う。

> 5. 次の文にあげた文から一文を選び、そこから始まる物語について述べなさい。
>
> （a）俺が牛追いをするだって？そんな仕事俺らには向いてないよ、つまり教育を受けたや

---

[107] B. W. Vilakazi, “BOOK REVIEWS,” *Bantu Studies* 14, no. 1 (January 1940): 201–3, https://doi.org/10.1080/02561751.1940.9676114.

[108] Malcolm, “Zulu Literature,” 38–39.

[109] Peterson, “Black Writers and the Historical Novel: 1907-1948,” 209.

[110] Education Department, Natal. Native Teachers’ Fourth Class Certificate (T, 4) Examination, 1941. Zulu History and Literature. Personal Correspondence of Charles Mpanza, VII/5 Letters Dispatched to the Chief Inspector of Native Education, 1939-1945, Zulu Society Papers, Pietermaritzburg Archives Depot, National Archives of South Africa. 以下試験問題の、翻訳は南アフリカ留学中にズールー語教師ムバリ・マナタ（Mbali Manatha）の助力を得た。最初英語に訳し、ムバリの確認を受けるという手順で作業を進めたため、英語の訳文も記載する。

[111] Education Department, Natal. Native Teachers’ Fourth Class Certificate (T, 4) Examination, 1944. Zulu History and Literature. Zulu History and Literature. Personal Correspondence of Charles Mpanza, VII/5 Letters Dispatched to the Chief Inspector of Native Education, 1939-1945, Zulu Society Papers, Pietermaritzburg Archives Depot, National Archives of South Africa.

つってことだけど。

（b）以下省略

“5. Xoxa indaba eqondene nelilodwa kulamazwi: ----

(a)“Ngiqhube izinkomo mina? Qha, awusifanele lowomsebenzi thina zifundiswa….”” (Tell the story which is related to one of these sentences. “Must I drive the cattle? No, that work doesn’t suit us, the educated.”

(b)…

アフリカ人の少年が伝統的にやるべき仕事と考えられている牛追いを拒否するような傲慢さが、息子であるテンギスウェ（Thengiswe）が無職にとどまっている理由であることが示唆されている問題である。

そして、最後の問題は、次の引用への例証を、学生が挙げることを要求する。

すべての白人が黒人を軽蔑しているわけではない。ハリス氏のこの言葉の証明となる出来事をあなたが読んだこの本『相続人』から取り出して、説明しなさい。

“7. Kukusibo [sic. Kakusibo] bonke abeLungu abenyanya abaNtu.” Fakaza lelizwi lika Mn. Harris ngendaba oyifunde kwezeNdlafa.[112]”(“Not all the whites despise black people.” Show the evidence to the saying of Mr. Harris in the story that you have read in the book.)

これらの問題とそれに対する答えは、この小説を一定の立場から読むことを促すものだ。それは、白人との協調であり、勤労の大切さであった。学生たちは決して、この小説から、「偏った南アフリカ(biased South Africa)」[113]への批判を読み取ることを期待されてはいなかったのである。

このように教科書として採用された著作が特定の読み方を期待されていたということは、ピーターソンが指摘するような文化的抵抗としての小説のあり方を否定するものではない[114]。しかし、試験のために本を読むことは問題の作成に関わったマルコムやムパンザのような保守的な政治的見解を持つ人々の暗黙の要請に応えることでもあったのである[115]。1944 年のズールー史・文学の試験官であった、ムパンザは『相続人 Indlalifa』に関する問題において、学生たちの回答は満足のいくものであったとマルコムに報告している[116]。試験でうまくいくこと(going well)は、その試

---

112 ショニパ・モコエナは Ndlafa は間違いであり、Ndlalifa とすべきだと述べるが、ここでは indlafa、indlalifa ともに相続人を表すというムバリの見解に従って sic はつけない。ただし、本のタイトルを指していることを考えると、文法上間違いではないが、Ndlalifa とすべきだというショニパの指摘は正しい。

113 Vilakazi, “BOOK REVIEWS,” 202.

114 Peterson, *Monarchs, Missionaries & African Intellectuals*, 17.

115 試験問題の作成は、科目ごとに任命された教員が作成し、その後主任視学官であるマルコムの承認を得るという形式で進められた。Malcolm to Mpanza (DSC00848)。

116 Examinar’s Report Zulu History and Literature, Native Teachers’ Fourth Certificate, 1945. Charles Mpanza Personal Papers, VII:6:3 Mpanza Examiner's report, Zulu Society Papers, PMB Archives Depot, National

験中だけであれ保守的な志向を持った人々（”Hamba kahle”）に同調することであった。この点において、ズールー史・文学という科目は、ズールー人の文化と歴史を題材として保守的な立場が浸透していく回路であったということができる。

試験問題が、特定の読み方を学生に課すという事態は小説だけでなく、歴史書においても当てはまる。A. I. モレフェ(A. I. Molefe)と T. Z. マソンド(T. Z. Masondo)の共著『褐色の民族の起源と白人の到来について』に関する問題は、ズールー人の歴史を南アフリカ連邦の歴史の一部としてみる見方を補強する。それは白人支配を、アフリカ人の発展をもたらすものとして捉える見方である。例えば、先に述べたように 1943 年の教員資格問題の一つは、1879 年のズールー戦争がズールーランドに居住する人々にもたらした変化の良い点と悪い点を述べるように学生に要求する[117]。この問題を作成したチャールズ・ムパンザは、マルコムに宛てた報告書において、この問題の正解として、次のように記している。悪い点としては、主権が失われたこと、そして未だに取り戻していないこと[118]を挙げ、良い点としては、「文明化された生活」がもたらされたこと、そして政府によってズールー人同士の内戦が止められたことを挙げるべきであると指摘する[119]。この問題に十分に応えることは、教員になろうとするズールー人の学生に、ズールー人の歴史を蒙昧な状態から白人の影響がズールー王国に及ぼされるにつれて人々の生活が進歩するという大きな物語を肯定することを要求するのだ。

次年度の問題は、より直裁的に白人政府の貢献を述べるように要求する[120]。

「彼らのお金が政府に取られているが、このお金は何に役立っているのかと言う人々がいる。このような人々への回答として、10 の例を挙げて並べなさい」

“Kukhona Abantu abathi imali lena ethelwa eMbusweni ithelelwani. Hlela izihlko zibe yishumi

---

Archives of South Africa.

117 “Izimpi zinhle zimbi. Yabanhle ngani kwelaseSouth Africa impi yasOndini (4 July, 1879)? Yabambi ngani?” Education Department, Natal. Native Teachers’ Fourth Class Certificate (T.4) Examination 1943. Zulu History and Literature. Personal Correspondence of Charles Mpanza, VII/5 Letters Dispatched to the Chief Inspector of Native Education, 1939-1945, Zulu Society Papers, Pietermaritzburg Archives Depot, National Archives of South Africa.

118 “Ngokuwa kwobukhosi bakwaZulu, ubuzwe bukaZulu baphela, nanamuhla uZulu kabumbene.” Outlines of Answers and Scheme of Marking, Native Teachers’ Fourth Class Certificate (T.4) Examination, 1943. Zulu History and Literature.

119 “Inhlalo yokukhanya, nokungenqeni, nokuzisebenzela, nokwenza okuthandwa yinlizyio, leyafika nezizwe ezimhlophe, yathola ithuba lokungena phakati kweNdlwemnyama e-South Africa, seluphelile uvalo lokuvinjezelwa yimpi yoSuthu olumpondonde.” Outlines of Answers and Scheme of Marking, Native Teachers’ Fourth Class Certificate (T.4) Examination, 1943. Zulu History and Literature. ショニパ・モコエナは “inhlalo yokukhanya” を啓蒙化された生活（”enlightened lifestyle”）と訳すべきであると指摘する。それは、小文字で enlightened であれば、啓蒙主義との結びつきは弱まるため、学校教育、医療など近代的な生活の趣が出るとためである。しかし、ukukhanya(字義的には光を照らす)に該当する日本語が、「啓蒙」以外ないため、ここでは「文明化された」と訳した。Hlonipha suggested the phrase “inhlalo yokukhanya” should be translated as “enlightened lifestyle.” (personal communication. 5. June. 2019).

120 Education Department, Natal. Native Teachers’ Fourth Class Certificate (T.4) Examination 1944. Zulu History and Literature.

zokuphendula lababantu.”

南アフリカ連邦の歴史の中でズールー人の歴史を教えることは、すなわち白人政府の慈善を強調することであった[121]。

おわりに

本章は、ズールー語で歴史を書きこと、そして書かれた書物を読むことという二つの行為の持つ意味をナタール州におけるアフリカ人教育との関連において検討してきた。第 1 節で述べたようにズールー・ナショナリズムに関する研究においてはシューラ・マークスの「従属関係における曖昧さ（Ambiguities of dependence）」の議論が、大きな影響力を及ぼしてきた。アフリカ人エリート（伝統的あるいはミッション教育を受けた）と白人行政官・実業家・政治家といったアフリカ人統治行政に関わる人々との従属関係を対象とするマークスの概念は、人種隔離政策の計画とその実施を分析する際の重要な視角として、多くの研究が言及してきた。

ズールー人知識人に関するこれまでの研究は、個人の思想に注目して、彼らのズールー史に関する議論とそこに見られる彼らの政治姿勢を綿密に精査してきた。しかし、本章は、ズールー王家を中心とした歴史叙述に見られるズールー・ナショナリズムが浸透する場であった、ズールー文学・歴史という科目に注目することで、歴史的な議論を支える制度とそこでの集合的な行為としての読解を検討してきた。その結果として、次のように言うことができるだろう。第一に、ズールー文学・歴史という科目は、ズールー・ナショナリズムが保守的なズールー人と白人行政官の協力のもとに人種隔離政策に親和的な形に組み替えられた上で浸透する回路であった。第二に、そのようなズールー・ナショナリズムの浸透の回路は、原住民教育を担う行政によって介入されることで、マークスの主張するような「曖昧さ」を縮減したのである。

本章では、ズールー史・文学という科目において、教科書がいかに書かれ、また読まれるべきだと考えられていたかという点を検討することで、教科書として採用されたズールー語の歴史書・文学書を読むことと、保守的な政治的立場とのつながりを明らかにした。次章では、キリー・キャンベルが主催したズールー部族歴史エッセイ・コンテストにおいて、学生・教員を中心とした教育を受けたズールー人たちが、どのように歴史を書き、また彼らが書いたエッセイを審査官であったマルコムがいかに読んだかを検討することを通して、部族の歴史を書くことが、人種隔離体制に親和的な「伝統」の浸透の過程であったことを明らかにする。

---

[121] ムパンザは次の 10 項目を回答すべきであると記している。「学校教育と本、道路、警察、法廷、病院、農家、橋、病気（人）、家畜の病気、水、注射、家畜の検疫(Imfundo nezincwadi zayo, imigwaqo, amaphoyisa, izinkantolo, izibedlela, abalimi, amabuloho, izifo, imfuyo, amanzi, imijovo, amadiphu ezinkomo.) 」Outline of answers of scheme of marking. Native Teacher’s Fourth Class Certificate (T.4) Examination, Zulu History and Literature. Charles Mpanza Personal Papers. Examination Questions and Answers. VII/6/1. Zulu Society Papers.

第５章「部族」の歴史を書く：
アフリカ人学生・教員の歴史エッセイと白人審査官

はじめに

前章の冒頭で触れた、サベロのエッセイに戻り、彼の書き出しをもう一度検討しよう。「私の部族[1]の秘密を暴露するために書くのだと思うと、私はすごく不安になり、骨の髄まで痛むのを感じる。幾度も私は私の部族の歴史について書こうとした。しかしその度に不安と恐れが私に取り付き、これはひどい仕事だと感じるのだ。(I feel rather nervous and my bones ache to the marrow when I start to write to disclose the secret of our clan. On several occasions I desired to write about the history of our clan, but nervousness and fear always overwhelm me and I felt it as bad job.)」[2]

彼の書き出しは、自身が属する「部族」の歴史を書いた結果として、自分が周囲の人々にどのように見られるようになるかという恐れを示すものである。しかし、書くということが自己を提示する方法の一部であるということを考え合わせるならば[3]、この書き出しは、このエッセイを読むであろう白人の審査官に対する演技であるとも考えられるのではないか。サベロが纏う密告者という装いは、彼がエッセイで明らかにする秘密はこれまで彼の属する「部族」の外部には漏れでていなかったと暗示する。そしてそれゆえにサベロは自分のエッセイに記されている情報は価値の高いものであると、言外に伝えているのである。この書き出しは、言葉によって読み手を動かそうとする行為であった。

1912 年、42 年、50 年と 3 回にわたって開催されたズールー部族歴史エッセイ・コンテストに応募されたエッセイの合計数は 300 を超える。サベロのような劇的な始まりを持つものはないにしても、その多くが時間をかけて丁寧に書かれている。なぜコンテストの応募者たちは、エッセイを書いたのか。それもほとんどのエッセイが審査官であるマルコムが指示した情報を盛り込み彼の期待に応えようとする、そのような書き方で。その理由は様々であり、応募者の数だけあると言うこともできるかもしれない。それは、ある場合には金銭的な目的から出た行為であった。あるいはズールー人への歴史への関心をマルコムなど白人行政官と共有し、その知見を広げると

---

[1] ここでは Clan を、「氏族」ではなく「部族」と訳した。これはエッセイの対象がマカンヤという通常は「部族」として括られる集団を扱っていること、のちに述べるように宣教師ブライアントが『ズールーランドとナタールの過ぎ去りし時（Olden Times in Zululand and Natal)』の全編にわたって、通常「部族（Tribe)」で呼ばれる単位を表すために"Clan"を使っているからである。またサベロのズールー語でのエッセイが Clan を、通常英語では tribe, nation あるいは people と訳される isizwe と書いていることも、clan を「部族」と訳す理由となるだろう。N.B.J. Sabelo, "Umthambo wabukhosi kwakwa "makhanya" --- nezigigaba zombuso wakhona." File 15, Zulu Tribal History Competition 1950 Papers. KCAL.

[2] N.B.J. Sabelo, "Makanya Clan," File 3, Zulu Tribal History Competition 1942 Papers. KCAL.

[3] この点は、アフリカ系アメリカ人にとってのリテラシーの意味を検討した、Christopher Hager, *Word by Word: Emancipation and the Act of Writing* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2013).を参照。

いう知的関心から出たということがエッセイに記されている。あるいはまた自分のエッセイを優れたものとして認識させたいという、サベロのような文章の書き手としての欲求の表れであるのかもしれない。

本章では、集められた数多くのエッセイを単にズールー人の特定の部族に関する情報が書かれた史料としてのみ認識する見方を離れて、歴史エッセイを集め、利用すること、そしてエッセイを書くという行為自体にどのような意味が込められていたのかを検討する。エッセイ・コンテストは、ズールー人の歴史と言語の専門家であるダニエル・マック・マルコムとキリー・キャンベルの二人がズールー人の歴史に関するエッセイの応募を呼びかけ、ズールー人の学生や教師が彼らに書き送り、そしてマルコムが読むという一連のプロセスから成り立っていた。本章はこのプロセスを白人行政官による情報収集としてのみ捉えるのではなく、植民地支配という制約を受けながら成立した白人行政官と教育を受けたアフリカ人との間の交渉の場としてみる。この見方によって明らかになるのは、部族を単位とする統治という創られた伝統の浸透の過程であり、その過程を自分たちに利するようにと行動することを試みるアフリカ人の姿、そしてその試みに対する制約である。

0.1. 交渉の場としての伝統の創造

しかし、植民地行政官・宣教師・人類学者と現地アフリカ人との接触を前者が後者を支配するに至る過程あるいは植民地統治に利用する過程というだけではなく、相互に影響を与え合う交渉の過程として捉えようとする研究はすでに多く存在する。本章の目的は、このエッセイ・コンテストが交渉の場であったことを示すこと自体にあるのではなく、どのような交渉が行われたのか、その交渉過程への制約は何であったのかを具体的な時代的・地域的な背景に基づいて明らかにすることにある。

すでに多くの人類学者や歴史家が述べてきたように、調査対象となっている社会におけるインフォーマント（情報提供者）と調査者の関係は前者が後者にただ情報を伝えるという、一方的で学術的な側面に限定された行為なのではない。植民地状況での調査における調査者とインフォーマントの関係について分析した論考は、現地協力者とひとくくりにされてきた人々が実際には、それぞれの関心から調査に関わり、人類学者—あるいは宣教師、行政官、歴史家などそれぞれの関心を持って情報を引き出そうとする人々—が調査を実施するその過程において大きな役割を果たし、知識形成のあり方に影響を与えてきたことを指摘している[4]。アフリカ研究の分野、特に南

[4] この分野の人類学的な古典としては、ジェイムズ・クリフォード『文化の窮状: 二十世紀の民族誌、文学、芸術』太田好信他訳 (人文書院, 2003). 特に第 1 章「民族誌的権威について」を参照。また文学研究・文化研究の分野では、メアリー・ルイーズ・プラットの『帝国の眼差し』が重要な研究である。彼女は、ヨーロッパ人によるラテンアメリカとアフリカの旅行記を対象に、植民者と被植民者との関係を、前者が一方的に後者に影響を与える関係としてではなく、「異なる文化が出会い、衝突し、取っ組み合う社会空間」としてみるべきであるとし、コンタクト・ゾーンという概念を提示し

部アフリカにおいて具体的事例を対象とした研究としては、北ローデシア（現ザンビア）に所在した、ローズ・リビングストン研究所を中心にそこで生み出された学術知をフィールドワークの観点から検討したリン・シューメイカーの『人類学のアフリカ化』を挙げることができる。彼女は、人類学者と白人入植者を含めた現地社会との関係、アフリカ人インフォーマントや調査協力者がフィールドワークにおいて人類学者に与えた影響、そして調査協力者であったアフリカ人自身が人類学者になっていく過程を詳述することで、ローズ・リビングストン研究所の活動の歴史において現地社会における人類学的眼差しの浸透（「人類学化（anthropologization）」）と人類学のアフリカ社会による領有（「アフリカ化（Africanization）」）が生じたと主張する[5]。

また行政官・宣教師・人類学者という植民地権力側の人々と現地アフリカ人との関係を一方通行的なものとしてではなく、交渉として描こうとする試みは、「創られた伝統」論を再検討する過程において大きな成果を挙げている。すなわちアフリカ人は伝統を一方的に押し付けられたのではなく、創造のプロセスに参加し、また植民地権力による伝統の利用に制約をかけていたのだとする立場である。「創られた伝統」論に対する批判としては、その創造と施行の過程における制約を指摘するものがある。トマス・スピア（Thomas Spear）は、アフリカ史における「創られた伝統」論を批判した史学史的論文において、イギリス領アフリカ植民地研究を渉猟し、植民地統治において、首長制、原住民法、及び部族が、支配の道具として新しく「伝統」として用いられたとする議論を「創られた伝統」論として措定する。その上で、スピアはそれぞれについて主に二つの観点から、反論を行う。第一に植民地統治において「伝統」が用いられたのは確かだとしても、その「伝統」は何もないところから新しく造られたのではなく、過去の特定の制度に基づくものであるというのだ。第二に、植民地統治の形式としての伝統は過去の再解釈によって成立したものであり、過去の再解釈という行為自体は、植民地化以前から行われていたものであると指摘する。スピアは、植民地統治の新しさを否定するのではなく、「伝統」を利用した統治における過去との連続性とアフリカ人自身が持っていた交渉力に注目することで、植民地権力が持つとされた「伝統」を創造するにあたっての恣意性と、「伝統」を被植民者であるアフリカ人に強制する能力とを疑問視する。すなわち、「伝統」を用いた統治における歴史的制約性を重視するである[6]。

スピアの主張は、イギリス領アフリカ植民地の研究に基づくものであり、1910 年以降の南アフリカに当てはまるかどうかについては議論の余地があるだろう。例えば、慣習法（原住民法）の制定と施行において、スピアは、法が首長によって（通して）一方向的に人々に押し付けられた

ている。Mary Louise Pratt, *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*, 2nd ed. (London : New York: Routledge, 2007), 7.

5 Lyn Schumaker, *Africanizing Anthropology: Fieldwork, Networks, and the Making of Cultural Knowledge in Central Africa* (Durham [N.C.]: Duke University Press, 2001).

6 Thomas Spear, “Neo-Traditionalism and the Limits of Invention in British Colonial Africa,” *The Journal of African History* 44, no. 1 (2003): 3–27.

のではなく、法を実施する段階において、統治される人々に交渉の余地を与えるものであったと指摘する[7]。しかし、南アフリカにおいては、チャノックが指摘するように、慣習法を用いた統治は、ヨーロッパからの入植者とアフリカ人を別々の法体系において統治する機能を主に果たしており、その分離は特に 1927 年に連邦全体で伝統的権威を通した統治が制度化されることによって強化された[8]。南アフリカにおける人種隔離体制は、法の施行における統治される人々の交渉の余地を少なくしたという点で、アフリカ植民地全体の最も深刻な遺制としてマムダニが提起する脱集権化された独裁制がよく適合する[9]。

しかし、エスニシティ・「部族」の形成という点においては、スピアの指摘するような伝統の創造における制約という視点からの研究が説得的になされている。 序章及び前章で述べたようにハミルトンは、ズールー王シャカのイメージの変遷と植民地・人種隔離統治との結びつきを分析した研究において、ズールーランドの執政官（Magistrate）であったジェイズム・スチュワート（James Stuart）のズールー人に対する聞き取り調査において、インフォーマントの話す内容が彼らの政治的立場によって大きく変わってくることを明らかにし、シャカのイメージ形成はアフリカ人と統治行政との協働作業であったと主張した[10]。また、ノーザン・ンデベレ（Northern Ndebele）という民族の形成過程において、統治行政遂行を目的とした「植民地的専門知識（Colonial Expert Knowledge）」がいかに利用されたかを分析したレクゴアチは、この知の形成において主導的立場を果たしたのはアフリカ人インフォーマントであったと主張する。彼は、原住民政策省（Native Affairs Department）において、慣習法や首長の継承権また統治領域に関わる情報の収集など、統治に関わる人類学的調査を行う部局であった民族学局に所属する人類学者 N. J. ファン・ヴァルメロ（N. J. Van Warmelo）とアフリカ人教員をその中心的な構成員とするインフォーマントとの関係を分析し、後者の情報提供が、ファン・ヴァルメロのンデベレ人の歴史と伝統社会に関する認識枠組みを作っただけでなく、さらにファン・ヴァルメロの論文・著作を通してアパルトヘイト期のアフリカ人統治政策の基礎の形成に影響を与えたと主張する[11]。この点でレクゴアチの研究は、特定の「部族」が居住すべきリザーブとそこにおける伝統的権威による統治を定めたバンツー権威法（Bantu Authorities Act）においてエスニック集団の境界とその土地を決定するにあたって大いに利用された、原住民政策省民族学部局（Native Affairs Department Ethnological Division）の研究

---

[7] Spear, 13–16.この点で、スピアが依拠するのは、ガーナを事例としたサラ・ベリーの研究である。Berry Sara, *No condition is permanent: the social dynamics of agrarian change in sub-Saharan Africa* (Madison, Wisconsin: University of Wisconsin Press, 1993).

[8] Martin Chanock, *The Making of South African Legal Culture 1902-1936: Fear, Favour and Prejudice* (Cambridge: Cambridge University Press, 2006), 328.

[9] Mahmood Mamdani, *Citizen and Subject: Contemporary Africa and the Legacy of Late Colonialism* (Princeton: Princeton University Press, 1996).

[10] Carolyn Hamilton, *Terrific Majesty: The Powers of Shaka Zulu and the Limits of Historical Invention* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1998), chap. 2.

[11] Sekibakiba Peter Lekgoathi, "'Colonial' Experts, Local Interlocutors, Informants and the Making of an Archive on the 'Transvaal Ndebele', 1930-1989," *The Journal of African History* 50, no. 1 (2009): 61–80.

が、実際にはアフリカ人インフォーマントの政府とは利害を異にする個別の関心によって影響を受けていた側面があることを「トランスヴァール・ンデベレ人」の事例を通して明らかにしたものと考えることができる[12]。

ズールー知識人と学生の歴史叙述を対象とする本章は、政治単位としての「部族」意識は植民地化以前からある民族意識への植民地化の影響によって形成されるとするスピアの見解と、認識を共有している。エッセイの書き手自身が聞き取り調査を行い、彼らが時に原住民政策省とは異なる見解をエッセイで書いていることは、過去像の構築におけるズールー人自身の主体性と、植民地行政との間で異なった過去の政治的利用の仕方が存在していたことを示している。しかし、伝統の再解釈という行為は植民地化以前から行われていたのだとしても、ズールー語でズールー人の歴史を書くという行為において想定されていた解釈共同体[13]は植民地化以後に形成された。前章で詳述したように、ズールー語で書かれた出版物の想定される読者は、ズールー人だけではなく、マルコムのような白人専門家を、 その重要な構成員として含んでいた。本章は、応募された特定の「部族」に関する歴史エッセイがその解釈共同体においてどのような意味を持っていたのかを検討することで、人種隔離政策のもとでズールー人の歴史を書くことに対する制約性を明らかにする。

0.2. エッセイ＝史料とその利用について：先行研究批判と本章の方法論的独自性

次節以降では、上記の問題設定に基づいて、「部族」の歴史を書くことの系譜を、歴史エッセイを中心に考察する。本格的な検討に入る前に本節の最後で、エッセイの読解を支える本章の二つの視点を提示することで、本章のアフリカ史研究における方法論的貢献を説明する。前章で述べたようにズールー・ナショナリズムに関する研究史は、序章で整理しているため割愛する。

第一に、応募されたエッセイを植民地化以前のクワズールー・ナタールの歴史を明らかにするための史料として用いてきた既存の研究に対して、本章は、このエッセイ・コンテストそれ自体の意義を検討することで、人種隔離体制のもとでズールー人自身がズールー語で書くことの意味を明らかにする。

ズールー部族歴史エッセイ・コンテストに応募されたエッセイを史料として用いた研究として

---

[12] Lekgoathi.レクゴアチが依拠する人類学における現地協力者の知識生成への貢献という視点に関しては、Schumaker, *Africanizing Anthropology*.を参照。

[13] ここで使った「解釈共同体」という用語は、テキストの読み方とその価値を規定する価値観を共有するとするスタンリー・フィッシュの提起を踏まえている。Stanley Eugene Fish, *Is There A Text In This Class?: The Authority Of Interpretive Communities* (Cambridge, Mass: Harvard University Press, 1980).しかしズールー語で書き、読むという制約上、そのテキスト・作文の読者は具体的に顔の見える存在でもあっただろう。本章では、ズールー語を読む解釈共同体を顔の見える存在であるという点で具体的ではあるが、その読み方は特定の規範に基づいているという点で抽象的でもある存在として捉えている。ズールー語の新聞『ナタールの太陽（Ilanga laseNatal）』の読者を扱った以下の論文も参照。Hlonipha Mokoena, *Magema Fuze: The Making of a Kholwa Intellecual* (Scottsville: University of KwaZulu-Natal Press, 2011).

は、ズールー王国の歴史とシャカの統治時代の社会変容を対象としたハミルトンの修士論文がある[14]。ハミルトンは、依拠した重要な史料のうちの一つして、ジェイムズ・スチュワートが行った聞き取りの記録とともに、1942 年及び 1950 年のコンテストに応募された歴史エッセイを挙げている。ハミルトンは、使用史料を説明する際に、スチュワートの収集した聞き取りがズールー王家を中心としたズールー社会全体に主に関わるものであるのに対して、1942 年の特定の場所に関するエッセイ及び 1950 年の特定の「部族」に関するエッセイというテーマのもとに募集されたエッセイ・コンテストのエッセイは、特定の地域及び「部族」に強調点が置かれていると指摘する。ハミルトンは、スチュワートの聞き取りと歴史エッセイを相互に補完し合う史料として活用したのである[15]。ハミルトンが植民地化以前のズールー社会における個々の地域の変化を明らかにするための史料としてエッセイを用いたのに対して、エッセイの書き手である個人に注目した研究も存在する。カディ首長制(Qadi Chiefdom)の歴史をたどった、ヒューズとツェレの共著論文は、カディの人々に関する様々な歴史叙述を検討する中で、唯一の女性の書き手として 1950 年エッセイ・コンテストに応募したビクトリア・ンギディ（Victoria Ngidi）の「ある民族：カディ人（Isizwe: AmaQadi）」を取り上げている[16]。

エッセイ執筆以前の歴史を明らかにするための史料としてエッセイを用いてきた既存の研究に対して、本章では、1942 年あるいは 1950 年という時代状況において、ズールー語で歴史を書くことの意味を検討する。その意義は、アフリカにおけるアーカイブに関する（あるいは史料論に関する）議論における以下の二つの立場と本章の視点を対照させることで明確にすることができるだろう。第一に、アフリカ史研究におけるアーカイブ論における聞き取り史料においてその事実性ではなく、社会内の対立に着目する立場が存在する。後に説明するように、聞き取り調査を含めた過去に関する史料を扱うアーカイブ論に関する議論においては、史料間の相違を校合し、正確な事実を取り出すべき齟齬として捉えるのではなく、話し手・書き手の立場を反映し、聞き取りが実施された、あるいはその歴史叙述が生み出された社会内部の対立状況を明らかにするものとして認識すべきであるという立場が強くなっている[17]。この見解に対して本研究では、エッセ

---

[14] Carolyn Hamilton, “Ideology, Oral Traditions and the Struggle for Power in the Early Zulu Kingdom” (Master Dissertation, University of the Witwatersrand, 1985), http://wiredspace.wits.ac.za/handle/10539/16715. 植民地化以前のズールー社会に関する重要な歴史的研究としては、他に John Wright, “The Dynamics of Power and Conflict in Theukela-Mzimkhulu Region in the Late 18th and Early 19th Centuries: A Critical Reconstruction” (Ph.D. Dissertation, University of Witwatersrand, 1989).がある。

[15] Carolyn Hamilton, “Ideology, Oral Traditions and the Struggle for Power in the Early Zulu Kingdom” (Master Dissertation, University of the Witwatersrand, 1985), 29–30, http://wiredspace.wits.ac.za/handle/10539/16715.

[16] Heather Hughes and Mwelela Cele, “‘We of the White Men’s Country’: The Remaking of the Qadi Cheifdom, 1830s to 1910,” in *Tribing and Untribing the Archive: Identity and the Material Record in Southern KwaZulu-Natal in the Late Independent and Colonial Periods*, ed. Carolyn Hamilton and Nessa Leibhammer, vol. 1 (Pietermaritzburg, South Africa: University of KwaZulu-Natal Press, 2016), 316.

[17] Carolyn Hamilton, “‘Living by Fluidity’: Oral Histories, Material Custodies and the Politics of Archiving,” in *Refiguring the Archive*, ed. Carolyn Hamilton (Cape Town, South Africa : Dordrecht, Netherlands: David Philip ;

イ・コンテストの審査官であったマルコムがいかにエッセイを読んだかに着目する。具体的には、マルコムが、1980 年代に入るまでズールー史における権威的著作として認められていたブライアントの著作『ズールーランドとナタールの過ぎ去りし時』とエッセイの内容を照合させて評価していたことに注目することで、エッセイが書かれた当時における校合という行為が持ったズールー人社会の歴史像の形成における意味を明らかにする。

本章が念頭に置くもう一つの立場は、「部族社会」像の形成におけるアフリカ人インフォーマント・調査協力者の役割をめぐるものである。「創られた伝統」論を批判的に検討する中でハミルトンは、植民地化以前のズールー人社会及びシャカ像の形成に関して、アフリカ人自身が果たした役割を、スチュワートの聞き取り調査におけるアフリカ人インフォーマントの見解の相違に注目して明らかにした。また、アパルトヘイト政策の一部として制定されたバンツー権威法（Bantu Authority Act）における首長制の区分けの基礎となった調査を行った原住民局の人類学者フォン・ヴァルメロの調査と、彼の協力者であったトランスヴァール・ンデベレ人教員に注目した、レクゴアチの論文は協力者の役割を強調し、彼らがヴァルメロに送ったレポートがヴァルメロの最終報告書の内容を規定していたと主張した[18]。これらのアフリカ人インフォーマントの役割を強調する議論は、一見すると本研究と親和的なものと思われるかもしれない。しかし、本研究は、コンテストに応募されたほぼすべてのエッセイがマルコムの指定する項目に従って書かれていたことの意味を分析し、「部族」の歴史という、歴史叙述の形式が持った制約性を明らかにする。

マルコムの指示、実際のエッセイの執筆、マルコムによるエッセイの読解と評価、という一連の流れを検討することで、本章ではアフリカ人教育の専門家が課した歴史叙述における制約性と、伝統を利用したアフリカ人統治との関係を明らかにする。

0.3. 校合[19]という方法（On collating）

序節の最後に、アフリカ史における史料論における聞き取り記録の比較対象をめぐる議論を紹介し、その研究動向に対する本章の立場を簡単に説明したい。

ハミルトンは、聞き取り史料から歴史を書くことについての方法論的な論文において、様々な語りを対照（collate）させることで、歴史的に正確な事実を取り出すことができるとするヤン・ヴァンシナ（Jan Vansina）の議論を批判している。ハミルトンは、聞き取り調査から歴史を書く際の方法論の確立を目指したヴァンシナの著書『歴史としての口承伝統』が、文字史料における史料批判の観点を聞き取り記録に持ち込むことで、無文字社会とされるアフリカを歴史研究の対象と

Kluwer Academic Publishers, 2002), 209–27.

[18] Lekgoathi, "'Colonial' Experts, Local Interlocutors, Informants and the Making of an Archive on the 'Transvaal Ndebele', 1930-1989."

[19] 聞き取り記録同士を比較検討する場合は、「対照」、書かれた史料同士を比較検討する場合は、「校合」という語を用いたが、聞き取りが書かれることによって記録されることを考慮すると両者の区別はそれほど明確であるわけではない。

することを可能にしたことを評価する。しかし、ハミルトンは、複数の語りを照合し、正確な事実を取り出そうとするヴァンシナの姿勢が、インタビューの対象となった人々の社会が抱える対立と、その社会が置かれた政治状況を捨象することにつながると指摘するのだ[20]。それゆえに、ハミルトンは、複数の語りの相違を事実性の観点からではなく、インフォーマントの政治的見解の相違を表すものとして捉えなくてはならないと主張する。先に述べたように、ハミルトンは、ズールー王シャカのイメージの変遷に関する著作において、20 世紀初頭にズールーランドの行政官ジェイムズ・スチュワートが収集した歴史伝承の記録の分析に基づいて、スチュワートのインフォーマントの語りの間の相違が、1879 年のアングロ＝ズールー戦争後のズールーランドの内戦における立場の違い（ズールー王家派と反対派）を反映していると指摘しており、ヴァンシナへの批判は彼女自身の研究を基礎としてなされていると考えることができる[21]。

しかし、史料を対照させることを、歴史的事実を取り出すための方法として主張していたのは、ヴァンシナやハミルトンなど脱植民地化時代に活躍しはじめた歴史家が初めてではなかった。むしろ聞き取り史料を対照させることは、植民地化の過程で、正確な部族の歴史を書くことと密接に結びついていたのである。『ズールーランドとナタールの過ぎ去りし時』の序論で、A.T. ブライアントは読者に向けて、次のような注意を与える。

> 読者が次のように思わないようにとあらかじめ注意を与えることができるかもしれない。すなわち、彼の手に入った特定の「別の説明（different version）」がすなわち正しいものであり、著者は知ることのないものだと考えることにである。むしろ一般的に言って、読者は、私もその話を、他の多くの別の説明とともに聞いており、本書での提示においては、別の説明の方がより重要な証拠（少なくとも同等の重要性を持つもの）と想定されると考えたほうが無難であろう[22]。

---

[20] Hamilton, "'Living by Fluidity': Oral Histories, Material Custodies and the Politics of Archiving." また、この語りの相違に着目し、そこに政治的見解の違いを見出すという方向性において重要になってくるのが、語り手のライフヒストリーを掘り起こすという作業である。この点においては、ジェームズ・スチュワートの記録の英訳者の一人でもある、ジョンライトが、語り手のライフヒストリーに着目し、いかにして語りの内容となる情報得たのか、あるいはスチュワートとの関わりはいかなるものであったのかなど、詳述した論文を明らかにしている。John Wright, "Ndukwana KaMbengwana as an Interlocutor on the History of the Zulu Kingdom, 1897–1903," *History in Africa* 38 (2011): 343–68, https://doi.org/10.1353/hia.2011.0018; John Wright, "Socwatsha KaPhaphu, James Stuart, and Their Conversations on the Past, 1897-1922," *Kronos* 41, no. 1 (November 2015): 142–65.

[21] Carolyn Hamilton, *Terrific Majesty: The Powers of Shaka Zulu and the Limits of Historical Invention* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1998), chap. 2.ズールーランドにおける内戦については、Jeff Guy, *The Destruction of the Zulu Kingdom : The Civil War in Zululand, 1879-1884.* (Pietermaritzburg: University of Natal Press, 1979).を参照。また、スチュワートの収集した記録は、James Stuart Archives としてズールー語から英訳され（もともと英語で書かれていた部分を除いて）6 巻本として刊行されている。James Stuart, Colin de B. Webb, and John B. Wright, *The James Stuart Archive of Recorded Oral Evidence Relating to the History of the Zulu and Neighbouring Peoples*, 6 vols. (Pietermaritzburg: Natal University Press, 1976-2014).

[22] A.T. Bryant, *Olden Times in Zululand and Natal* (London: Longmans, Green and Co., 1929), x.

ブライアントは、読者に対し自分は様々な語りを照合した上で、最も正確な歴史を描いたと主張するのである。そしてマルコムも応募されてきたエッセイを読むにあたって、このブライアントの主張を引き継いでいると考えることができる。第３節で述べるように、マルコムはブライアントの著作とエッセイの内容を比較することで、エッセイに対する評価を定めていたのである。アフリカ人が書いた、あるいは語った歴史に白人行政官が言及することそれ自体をもって、アフリカ人の白人の歴史観に影響を与えたのだと結論することはできない。

以上を踏まえて、本章では、まずエッセイ・コンテストの課題でもあった「部族」の歴史を書くことの意義が、ナタール植民地においてどのような変遷をたどったのかを整理する（第１節）。その後、エッセイ・コンテストの審査官であったマルコム自身のズールー人の文化・歴史に関する見解を簡単にまとめた後（第２節）、エッセイ・コンテスト自体の分析に入る（第３節）。

第１節　「部族」の歴史を書くこと

「部族の歴史(tribal history)」を書くことは、植民地統治において、またアフリカ人自身のアイデンティティ形成においてどのような意味を持つ行為であったのか。本節では、ナタール植民地の開始からエッセイ・コンテストが実施された 20 世紀半ばまでの期間に、「部族」の歴史を書くことの意味がいかに変遷したのかを確認する。

現在のクワズールー・ナタール州を舞台とした「部族史」が初めて書かれたのは、1850 年代初頭に設置された「ナタール地域におけるカファーの過去と現在の状態を調査する」ための委員会において、アメリカ人宣教師ルイス・グラウト（Lewis Grout）とケープ植民地出身の商人ヘンリー・フィン（Henry Fynn）が提出した部族のリストにおいてであるとされる。グラウトとフィンは、アフリカ人に対する聞き取り調査を行い、のちにムフェカネと呼ばれるズールー人の支配地域拡大のための遠征が開始される以前にナタールに住んでいた「部族」を明らかにし、それぞれの部族を治めている首長を確定することを試みた[23]。アフリカ人の住んでいた土地を定めるということは、取りも直さず、白人入植者が獲得できる土地の境界を定めることであった。「部族の歴史」を書くという行為は最初から植民地統治と密接に関係していたのである。

「部族」の歴史を書くことは、フィンとグラウトの最初の試み以降、ナタール植民地のあり方

---

[23] John Wright, “The Dynamics of Power and Conflict in Theukela-Mzimkhulu Region in the Late 18th and Early 19th Centuries: A Critical Reconstruction” (1989), 2-3. もちろん、「部族史」として描かれる以前にも首長 chief の系譜を中心として、それぞれの首長の活躍を辿った、口承詩（izibongo, praise poem）は存在した。ズールー語でイジボンゴ（Izibongo）と呼ばれる口承詩については、以下の文献を参照。Elizabeth Gunner and Mafika Pascal Gwala, *Musho: Zulu popular praises* (Johannesburg, South Africa: Witwatersrand University Press, 1994); Mbongiseni Buthelezi, “Praise, Politics, Performance: From Zulu Izibongo to the Zionists,” in *The Cambridge History of South African Literature*, ed. David Attwell and Derek Attridge (Cape Town: Cambridge University Press, 2012), 77–94. ただし、イジボンゴに関しては、コーサ語による研究の方が、量も多く、議論が活発になされている。以下の文献を参照。Jeff Opland, *Xhosa Poets and Poetry* (Cape Town: David Philip, 1998); Ashlee Neser, *Stranger at Home: The Praise Poet in Apartheid South Africa* (Johannesburg: Witwatersrand University Press, 2011).

をめぐる政治的対立の中に組み込まれていく。その対立の一方は、白人入植者たちである。入植者たちは、ボーア人の北上以前のナタールがもともと定住者のいない「無主の土地」であり、入植し農地を整備する用意のある彼ら自身が土地を所有する権利を持つと主張した。対立の他方は、初代原住民政策長官シェップストンに代表される、アフリカ人の伝統的権威を利用して統治を行うとする立場に立つ政治家・行政官である。

この対立においてボーア人の北上以前のナタールにアフリカ人が定住していたかどうかは、大きな争点であった。入植者たちが、ナタールにもともとアフリカ人は居住しておらず、現在住んでいるアフリカ人はズールー王シャカの独裁を逃れてきた「難民(refugee)」であると主張した。現在ナタールに居住するアフリカ人には帰るべき場所があるという含意を持つカテゴリーにアフリカ人をくくることで、白人による土地の収奪を正当化しようとしたのである。それに対して、シェップストンはアフリカ人を、もともとナタールに住んでいた「部族」、シャカの独裁からの難民である「部族」と二分し、それぞれの部族の歴史を書くことで、首長を通じた統治という彼の政策に歴史的裏付けを与えることを試みたのである[24]。

以下では、シェップストンの報告書『ナタール植民地（として現在確立された土地）とズールーランドに以前から居住する部族に関する歴史的素描』[25]をナタール及びズールーランドにおいて「部族」の歴史を書く際の祖型として捉え、この報告書の内容と後世に与えた影響を説明する。

1.1. シェップストンの描く「部族」の歴史

シェップストンの『ナタール植民地（として現在確立された土地）とズールーランドに以前から居住する部族に関する歴史的素描』（以下、『歴史的素描』） は、次のパラグラフではじまる。

> 1. 前世紀[18 世紀]の終わりにかけて、現在ナタール植民地とズールーランドとして知られる二つの土地には、非常に数多くの原住民部族が住んでおり、彼らはお互いの近くに住み、通婚しあい、多くの場合平和と友好的な関係のもとに生活していた。彼らは牛、羊、そして小さめの種類のヤギを所有し、土地を耕し、そこから生計の大部分を得ていた[26]。

---

[24] Jeff Guy, *Theophilus Shepstone and the Forging of Natal: African Autonomy and Settler Colonialism in the Making of Traditional Authority* (Scottsville: University of KwaZulu-Natal Press, 2013), 312-315; Jeff Guy, "The Tribal History Project, 1862-4," in *Tribing and Untribing the Archive: Identity and the Material Record in Southern KwaZulu-Natal in the Late Independent and Colonial Periods*, ed. Carolyn Hamilton and Nessa Leibhammer (Pietermaritzburg, South Africa: University of KwaZulu-Natal Press, 2016), 216–37.

[25] T. Shepstone, 'Historic sketch of the tribes anciently inhabiting the Colony of Natal - as at present bounded - and Zululand.' この報告書はもともとナタール植民地議会の 1862 年から 64 年にかけて開かれた土地所有制度に関する委員会に提出された。しかし、最初に出版されたのは、1883 年のケープ植民地原住民法及び慣習に関する委員会報告書の付録としてである。本章の記述は、この出版されたケープ植民地の報告書によっている。Commission on Native Laws and Customs and Cape, *Report and Proceedings, with Appendices, of the Government Commission on Native Laws and Customs* (Cape Town: W.A. Richards, 1883), Appendix I "Natal and Zululand Tribes", 415–26.

[26] Commission on Native Laws and Customs and Cape, *Report and Proceedings, with Appendices, of the Government Commission on Native Laws and Customs* (Cape Town: W.A. Richards, 1883), 415.

18 世紀末のナタール及びズールーランドに住むアフリカ人の生活を簡明に記述した一文である。植民地化以前のアフリカ人の牧歌的な生活を何気なく記した一文に思える。しかし、ボーア人北上以前にナタールには数多くの「部族」が元から住んでおり（thickly inhabited by numerous Native Tribes）、彼らは土地を耕していた（cultivated the soil）という事実の提示は、入植者の歴史観を明白に否定するものであった。そして、この文に続くパラグラフは当時のアフリカ人首長の権限について次のように述べる。

> 2. すべての部族がそれぞれの首長を抱き、首長は一種の家父長として支配しながらも生殺与奪の権力を握り、行使したのである。当時においては、部族間よりも部族内部の紛争が頻発し、それらはほとんど首長の家族の成員による継承をめぐる争いから生じたのであった[27]。

両パラグラフともに、事実を述べた何気ない記述に見える。しかし、この二つのパラグラフは、それぞれ白人入植者とアフリカ人に対するシェップストンの姿勢を反映している。それゆえに、この書き出しは、シェップストンの築いたナタール植民地におけるアフリカ人統治政策の本質を簡潔に表すものであると捉えることができるだろう。シェップストンは、一方でアフリカ人の土地を奪い、彼らを労働力として利用することに血道をあげる白人入植者に対してはアフリカ人の生活の維持を訴える保護者として行動し、他方でアフリカ人に対しては生殺与奪の権利までをも持つ強権的な家父長として振る舞った。そして、シェップストンは、この『歴史的素描』を、 シェップストンの政策がアフリカ人の文明化を妨げているとして、シェップストンの持つ権限を縮小しようと攻勢を強める植民地議会への反論として書いた[28]。入植者の利益を代弁する植民地議会は、1852 年から 53 年にかけて組織された労働委員会において、ボーア人の北上の時にはナタールにはアフリカ人は居住していなかったのであるから、原住民政策の一貫としてアフリカ人居留地として割り当てられた土地（Location）を縮小し、労働供給を促すべきであると主張していた[29]。それゆえに、シェップストンの叙述は、彼自身がのちにシャカのいわば代理としてチェツワヨをズールー王に任命するという政治劇を取り仕切ったことを考えれば意外なことであるが、その焦点をシャカの偉業に置くのではなく、シャカによる侵攻以前に現在のナタールにおいて「部族」が生活していたことを示すことにあったのである[30]。

しかし、シェップストンが、彼自身の政策を正当化することを目的として『歴史的素描』を書くにあたって、各「部族」を構成単位とする歴史としてアフリカ人の歴史を描いたことは、この

---

[27] Commission on Native Laws and Customs and Cape, 415.

[28] Guy, “The Tribal History Project, 1862-4,” 217.

[29] Jeff Guy, “The Tribal History Project, 1862-4,” in *Tribing and Untribing the Archive: Identity and the Material Record in Southern KwaZulu-Natal in the Late Independent and Colonial Periods*, ed. Carolyn Hamilton and Nessa Leibhammer (Pietermaritzburg, South Africa: University of KwaZulu-Natal Press, 2016), 217–18.

[30] Guy, “The Tribal History Project, 1862-4,” 225.

報告書が書かれた直接的な背景を離れて、以後のナタール及びズールーランドにおける歴史叙述に大きな影響を与えた。

ナタール州におけるアフリカ人統治において、初代原住民政策長官であったセオフィラス・シェップストンは、度重なる入植者からの圧力を受けながらも、特定の領域における「部族」ごとに首長をそのトップに据えるという形式を持った間接統治の基礎を築いた[31]。そして、このシェップストン体制の確立においては、シェップストンの歴史観が重要な役割を果たしたのである。その歴史観は、それぞれの部族は割り当てられた特定の領域に歴史的に居住し[32]、またズールー人は初代ズールー王シャカに体現されるように強権的な最高権力者によって最もよく統治されうるという考え方である[33]。シェップストンの「部族」観は、首長と臣民の結びつきを強調するとともに、「部族」を特定の土地に縛るものであった。首長と臣民の忠誠関係(ukukhonza)の歴史を検討したジル・ケリー（Jill E. Kelly）は、植民地主義のもとで、首長は、彼に忠誠を誓う臣下によってその地位を得る存在から、特定の土地を支配する権力者として政府に認められることで地位を獲得する存在へと変容したと主張する[34]。このように考えれば、シェップストンが、そしてシェップストンの見解を引き継ぐ形でブライアントが、部族の歴史を叙述する上で、地図上に点を打つ形で特定の「部族」の居留地を示すことを重視していた理由がわかる。シェップストンは、植民地化以前のナタールに様々な「部族」が居住していたことを明らかにしただけではなく、彼の推し進める間接統治に適合する形へと「部族」という概念を作り替えたのである[35]。

第１章で示したように、その後のナタール州ならびに連邦レベルにおけるアフリカ人統治政策にシェップストンが影響を与える、その仕方は非常に入り組んだものであった。しかし、シェップストン自身が築いた制度、またシェップストンに由来するとして提示された政策論は、人種隔離政策の一つの基礎であったことは疑い得ない。

ただし、19 世紀末に成立を見る南アフリカにおける歴史学において、支配的になったのは、シェップストンの部族的な歴史観ではなく、入植者の「無主の土地」という見方であった。この見解においては、ケープ植民地を離れ北上したフォールトレッカーが現在のナタールに着いた時には、この土地はズールー王シャカの引き起こした戦乱に巻き込まれており、ほとんど人は住んで

---

31 David John Welsh, *The Roots of Segregation; Native Policy in Colonial Natal, 1845-1910* (Cape Town, New York: Oxford University Press, 1971); Guy, *Theophilus Shepstone and the Forging of Natal*.

32 Guy, “The Tribal History Project, 1862-4.”

33 Hamilton, *Terrific Majesty: The Powers of Shaka Zulu and the Limits of Historical Invention*.

34 Jill E. Kelly, *To Swim with Crocodiles: Land, Violence, and Belonging in South Africa, 1800-1996* (East Lansing, Michigan: Michigan State University Press, 2018), xxxiv–xl.

35 Guy, “The Tribal History Project, 1862-4”; Norman Etherington, “A.T. Bryant’s Map of the ‘Native Clans in Pre-Shakan Times,’” in *Tribing and Untribing the Archive*, ed. Carolyn Hamilton and Nessa Leibhammer, vol. 1 (Scotsville, South Africa: University of KwaZulu-Natal Press, 2016), 238–61. 「部族」という概念と人種隔離及びアパルトヘイト体制との結びつきを詳述する準備はまだないが、とりあえず Peter Skalnik, “Tribe as Colonial Category,” in *South African Keywords: The Uses & Abuses of Political Concepts*, ed. Emile Boonzaier and John Sharp (Cape Town: D. Philip, 1988), 68–78. を参照。

おらず、わずかにいた人々も元からの住民ではなく、戦乱を逃れてきた難民だったというのである。ムフェカネ（Mfecane）として知られるこの現象を人口に膾炙させたのが、ケープ植民地の歴史家ジョージ・M・シール（George M. Theal）であった。南アフリカにおける最初の職業的歴史家であったシールは、南アフリカ戦争（ボーア戦争）後の南アフリカ主義に影響を受け、アフリカーナーとイギリス系との和解を歴史叙述によって達成しようとしたのである[36]。それゆえにシールは、ボーア人の北上と共和国の設立というナラティブを引き継ぐ形で、ケープ植民地を離れたボーア人がナタールにたどり着き共和国を設立した時、その土地はシャカの引き起こした内戦によって無主の土地となっていたと述べるのである[37]。

南アフリカ戦争以後、シールの歴史叙述は様々な回路を通って白人入植者の歴史観に影響力を及ぼした。シールが執筆した論説はケープ州の代表的な雑誌ケープ・マンスリー（Cape Monthly）に連載され広く読まれ、またシールの著作及び史料集での見解は中等教育までの歴史教育の基礎として組み込まれた[38]。さらにシールは、1917 年の南アフリカ史学会の設立時には初代会長に選ばれている。このようにシールの歴史叙述は、マスメディア・教育・アカデミズムなど白人入植者が歴史を語る様々な場で公式見解として受け入れられて行ったのである。

シールの著作群が南アフリカ連邦全体における白人入植者の正史となったのに対して、ブライアントの 700 ページを超える大著『ズールーランドとナタールの過ぎ去りし時』（Olden Times in Zululand and Natal）は、1929 年の出版直後から 1980 年代に入るまでの長きにわたり植民地化以前のナタール及びズールーランドに居住するアフリカ人に関する歴史書の決定版としてみなされてきた。同様の期間を扱うシールとブライアントの著作の間には、しかし、ムフェカネの論じ方において相違が存在する。シールが、アフリカーナーとの和解を目指すという観点から、ボーア人がナタールに北上した時にはアフリカ人はその場所にはいなかったと記述し、ズールー人をボーア人入植者の引き立て役としているのに対して、ブライアントは、 シャカによって引き起こされ

---

[36] Christopher C. Saunders, *The Making of the South African Past: Major Historians on Race and Class* (Cape Town: David Philip, 1988), pt. 1.

[37] Mfecane におけるシールの役割を論じた論文を入れること。Saunders, The making of South African history, 及び Saunders, in Mfecane Aftermath. ムフェカネという概念については、ジュリアン・コビング（Julian Cobbing）の問題提起的論文の出版以降、様々な歴史家が盛んにその有用性と歴史的含意をめぐって論じている。しかし、ムフェカネの歴史用語としての確立においてシールが最も重要な役割を果たしたという点は、歴史家間の共通の理解となっている。ただし、ムフェカネという用語が南アフリカの歴史家だけでなく、アフリカ研究者全体に膾炙したきっかけとなったのは、ジョン・オーマー・クーパー（John Omer-Cooper）の『ズールーの余波』（The Zulu Aftermath）による。Christopher Saunders, “John D. Omer-Cooper, Historian of South Africa (1931–1998),” *South African Historical Journal* 39, no. 1 (November 1, 1998): 159–66, https://doi.org/10.1080/02582479808671336. オーマー・クーパーについては、堀内隆行『異郷のイギリス 南アフリカのブリティッシュ・アイデンティティ』 (丸善出版, 2018), 136–40.も参照。

[38] Cape Monthly におけるシールの連載については、Saul Dubow, *A Commonwealth of Knowledge : Science, Sensibility, and White South Africa, 1820-2000* (Oxford: Oxford University Press, 2006), chap. 2; Christopher C. Saunders, *The Making of the South African Past: Major Historians on Race and Class* (Cape Town: David Philip, 1988), pt. I.

た混乱によって土地を離れた「部族」やあるいはシャカによって送られた「部族」が、ナタールにいる他の「部族」を攻撃し、ズールー人同士の土地をめぐる争いが生じていた混乱を４つの波状的な動乱としてズールー人社会に与えた影響を中心に叙述する[39]。この大著においてブライアントは個々の「部族」の歴史を事細かに叙述している。しかし彼の関心の中心には、祖先を同じくするズールー人がいかにして様々な「部族」に分かれていったのか、またいかにしてシャカのもとでズールー人は統一されていったのかという問いが前提として存在していた。

そして、この点においてブライアントの著作は、シールなどの同時代の歴史書とではなく、むしろ先に述べたシェップストンの報告書と結びつくのである。ジョン・ライトは、ブライアントが『過ぎ去りし時』の序論において 40 年にわたる聞き取りに基づいてこの本を書いたと述べていることから、読者はアフリカ人への聞き取りが同書の主要な資料となっているのだと考えてしまいがちであるが、ズールー王シャカの引き起こした 4 つの波状的な戦乱というムフェカネについてのブライアントの大きな枠組み自体は、シェップストンの報告書に依拠している可能性が高いと指摘する[40]。ブライアントがシェップストンの枠組みをそのまま利用したことは、両者が白人入植者到来以前のアフリカ人社会を再構成するという関心を共有していたことを示唆するだろう。しかし、シェップストンが、少なくとも報告書を書いていた 1860 年代前半においては、特定の部族の存在と彼らが住んでいた土地の境界を示すことを目的としていたのに対して、ブライアントはいかにして個々の部族が、ズールー王シャカのもとに回収され、ズールー人となっていったのかを物語るのである[41]。報告書提出後にシェップストンが自らズールー王シャカの代理として振る舞い、チェツワヨをズールー王に任命し、ズールー王の強権性という作られた伝統を利用した統治体制の象徴的な確立を目指したことを考えれば、ブライアントの歴史叙述は、シェップストン以上にシェップストン的であったということもできるだろう[42]。またブライアントは連邦レベルでの統治政策に関する議論にも影響を与えた。本論文第 1 章で論じたように、連邦レベルでのアフリカ人統治政策においては、伝統的首長を媒介者として利用し、白人の行政官が上位の権力者として強権を振るうという体制が 1920 年代半ば以降確立した。この体制においてブライアントの著作は、ズールー人首長の伝統的正統性に歴史的基礎を与え、また首長間で居留地の範囲関して紛

---

[39] John Wright, “Political Mythology and the Making of Natal’s Mfecane,” *Canadian Journal of African Studies / Revue Canadienne Des Études Africaines* 23, no. 2 (1989): 278–80, https://doi.org/10.2307/485525.

[40] Wright, “A. T. Bryant and ‘The Wars of Shaka.’”

[41] Guy, “The Tribal History Project, 1862-4”; Etherington, “A.T. Bryant’s Map of the ‘Native Clans in Pre-Shakan Times.’”

[42] シェップストンのチェツワヨの任命の経緯、及び原住民統治のモデルとしてのシャカという観点に関しては、Hamilton, *Terrific Majesty: The Powers of Shaka Zulu and the Limits of Historical Invention*, 72–129.を参照。シェップストンの強権的な振る舞いの一例として、銃の保持を理由に法廷への召喚を命じられたアフリカ人首長ランガリバレレ（Langalibalele）に対する扱いを挙げることができる。Hlonipha Mokoena, “Zuluness on Trial: Re-Reading John W. Colenso’s 1874 Langalibalele and the AmaHlubi Tribe: Being Remarks upon the Official Record,” *The Journal of African History* 60, no. 01 (March 2019): 67–85, https://doi.org/10.1017/S0021853719000355.

争が生じた場合には政府による仲裁の基礎資料となるものであった[43]。

しかし、ブライアントの影響力はナタール州におけるアフリカ人教育において最も明確な形で表れている。前章で、ズールー文学・歴史という教育科目において、ナタール州教育省行政官としてのマルコムがズールー人の伝統を、学校教育を通していかに浸透させようとしてきたかを見た。ブライアントの議論は、マルコムなど教育官僚の試みに学術的な基礎を与えるものであったとも考えられる。ブライアントはヴィットワータースランド大学に設立されたばかりのバンツー研究科の講師を務めるとともに、ズールー人教員の研修会においてもズールー人の歴史と文化に関して講義を行っていた[44]。マルコムなどナタール州の教育官僚が 20 年代以降制度化していくズールー人の伝統の浸透を図る教育の内容は、ブライアントの学術的著作をズールー文学・歴史という教育科目として具体化していくという側面を持っていたのである。

この点は、マルコム自身のズールー人の伝統に関する見解を検討することで明らかになる。

第２節 マルコムの「部族」に関する見解

前章で述べたように、原住民教育主任視学官としてナタール州のアフリカ人教育全体を監督する地位にあったマルコムは、ズールー語を教授言語とする教育を推し進めるとともに、ズールー文学及び歴史という科目をズールー人の伝統を広く浸透させる回路として捉え、教科書出版及び試験問題の作成など、この科目の運営に深く関わった。1942 年及び 50 年のズールー部族歴史エッセイ・コンテストの審査員を務めたのも、ズールー人の歴史に関する専門知識を評価されてのことであった。しかし、マルコム自身の執筆した著作・論文の対象はズールー語文学、語学としてのズールー語という方面に偏っており、ズールー人の歴史それ自体を扱った論考はほとんど見られない[45]。ただし、マルコムはラジオ講演を多数行っており、ここでも主題はズールー語文学が多く、また時事解説的な話題もあるが、ズールー人の文化と歴史に関する講演も少数ながら存在する。以下では、特に「部族」概念に関わるラジオ講演の原稿を中心に、マルコムのズールー人の歴史及び文化に関する見解と、その見解がいかに「原住民」政策と結びついていたかを説明する。

---

[43] 首長の絶対的権力の正当化という点に関しては、Martin Chanock, *The Making of South African Legal Culture 1902-1936: Fear, Favour and Prejudice* (Cambridge: Cambridge University Press, 2006), 71. 居留地の確定という点に関しては、Etherington, “A.T. Bryant’s Map of the ‘Native Clans in Pre-Shakan Times.’”を参照。

[44] A.T. Bryant, “The Speaing and Writing of Zulu,” *Native Teachers’ Journal*, July 1920.

[45] 文学については、D. Mck Malcolm, “Zulu Literature,” *Africa* 19, no. 1 (January 1949): 33–39, https://doi.org/10.2307/1156262. 語学に関しては、D. M. Malcolm and C. T. Loram, “Notes of a Lesson on the Study of Zulu,” *Native Teachers’ Journal* 1, no. 2 (January 1920): 43–44; Daniel McKinnon Malcolm, *A Zulu Manual for Beginners* (London: Longmans, 1949). 及び編者として関わった辞書である D. McK Malcolm et al., eds., *English-IsiZulu = IsiZulu-English Dictionary*, Fourth edition, with revised orthography (Johannesburg: Wits University Press, 2014).を代表的な著作として挙げることができる。

マルコムは、1949 年に「バンツー民族（The Bantu People ）」と題する 17 回連続のラジオ講演を行った[46]。南アフリカに居住するアフリカ人の歴史と文化に関するこの講演は、学生を中心とした一般聴衆に向けたものであったためか、マルコム自身の見解を表明した箇所は少なく、概説にとどまっている。内容としては、彼の専門とするズールー語文学に関して 3 回、シャカのほかツワナ人の王であったカーマ（Sekgoma Khama）、ソト人の王であったモシェシェ（Moshoeshoe）と 3 回を歴史的なアフリカ人権力者の伝記に当てているほか、「部族」について 2 回に分けて論じていることが目につく[47]。そして、この 2 回の講演はマルコムの「部族」観を要約して示していると捉えることができる。マルコムは最初の講演を「部族組織（Tribal Organisation）」と題して、植民地化以前のアフリカ人の統治形態を論じており、二回目の「部族の結束（Tribal Cohesion）」は、「部族」を一つの集団として成り立たせるための慣習について説明している。

「部族組織」の講演のはじめにマルコムは「部族」を「氏族（Clan）」の集合体であると定義する。そして「氏族」は、共通の祖先を持つ人々の集団であり、一定の境界を持つ土地に住み、外部者を集団内の構成員として認めることはないと説明する。マルコムは、「氏族」はその支配者として一人の首長を抱き、首長は絶対的な君主として、「氏族」の成員の生殺与奪の権利を握り、成員間の紛争を仲裁するという役割があると述べる。氏族の集合体が部族であるため、「部族」の首長は、「氏族」の首長の中から最高首長（Paramount Chief）として選ばれることによって決定するのである。「部族」の首長は、「氏族」の首長が氏族の成員に持っているのと同じ権限を、部族の成員に対して持つ。すなわち「部族」の首長の権力は絶対的なものであり、例えば首長が必要と認めれば部族の成員に強制的に労働させることが可能であるとマルコムは主張するのである[48]。

ただし、マルコムは、「部族」首長の命令は絶対的なものであるが、不満が高じた場合は「氏族」を単位として離脱し、新たな「部族」を造ることも可能であると指摘する。しかし、このような離脱を部族の凝集力を高めることで阻むシステムが、「部族」の慣習の中に含まれており、そのような慣習こそが次の講演「部族の結集」の主題であった。マルコムは、首長を中心とする初収穫の祭礼（The Ceremony of the First Fruits）の儀式と祖先崇拝の儀式という二つが「部族」を結集させる主な慣習であるとし、この二つの儀式について細部にわたって説明している。初収穫の祭礼においては、首長自身が潜在的な敵を倒す劇的な儀式を演じることによって彼の権力の正統性を確保する[49]。一方で、祖先崇拝においては、祭祀でもある頌詩を暗唱する役割を持つインボン

---

[46] 講演原稿は、Malcolm Papers, File 13, KCAL. にマルコムが行った他のラジオ講演とともに製本された形で保存されている。以下、マルコムの講演原稿を参照する際に挙げるページ数は、この製本された版に手書きで付されたページ数に依拠している。

[47] 製本版の初めに付された目次を参照。Malcolm The Bantu, Part. III National Council for School Broadcasting: The Bantu People, Malcolm Papers, File 13. KCLA.

[48] Malcom, “The Bantu People: 7. Tribal Organization,” 196-197, Malcolm Papers, File 13. KCLA.

[49] Malcolm, “The Bantu People: 8. Tribal Cohesion,” 210-215, Malcolm Papers, File 13. KCLA.

ギ(imbongi, 複数形が izimbongi)が、現在の首長にまで続く系譜を唱え、それぞれの首長の活躍を口承詩として物語る[50]。このような祭礼と頌詩は、ともに首長を「部族」結合の象徴として崇め、首長の地位と部族の凝集性を高めるという役割が期待されているのである。

上記のマルコムの「部族」に関する説明は、ナタール植民地時代からの原住民政策において形成された「部族」観を踏襲するものであった。第 1 章で対象とした「原住民」政策をめぐる議論と、前節までの「部族」の歴史を書くという行為の変遷を踏まえるならば、「原住民」統治における「部族」概念は、絶対的な権力を持つ首長によって統治される共通の祖先を持った人々の集合としてまとめることができるだろう。マルコムの「部族」観は、第一に首長は臣民に対して絶対的な権力を持つとしている点で、第二に「部族」を特定の領域に結びつけることによって、そして第三に共通の祖先を持つ系譜をたどることができる人々として括ることによって、ナタール州の「原住民」統治を起点とする人種隔離政策に寄り添うものであったと考えることができるであろう。

マルコムが、このような「部族」観を持つに至ったことは、彼の経歴を考えれば不思議なものではない。1884 年にナタールの農家に生まれたマルコムは、スタンダード 6（現在の 8 年生程度）を終えた 1902 年に、執務官（Magistrate）の法廷通訳として職を得る。1904 年には第 1 級通訳の資格を取得しており、ズールー語に非常に堪能だったことがわかる。その後、1906 年には原住民政策省に入省し、バンバタの反乱の制圧に加わった後、1910 年原住民教育の視学官に就任する。マルコムは 1946 年の原住民教育主任視学官退任後、ナタール大学でズールー語の講師を務め、ズールー語詩人 B.W. ヴィラカジの詩集を英訳し、文学・語学関係の論文も多いことから、ズールー語文学の研究者というイメージも強い。しかし、その職業的背景には、「原住民」政策の直接的な担い手としての過去があったのである[51]。

原住民政策における「部族」統治の考え方は、次章で述べるように Z.K.マシューズ（Z.K. Matthews）のような隔離政策に批判的人類学者によって反論され、またシェップストン自身の「部族」観とも首長の権限という点で異なっているということができるかもしれない[52]。しかし、統治される臣民の同意ではなく、政府による任命に基づいた「伝統的」首長の強権性は、人種隔離政策及びそ

---

[50] Malcolm, “The Bantu People: 8. Tribal Cohesion,” 216-217, Malcolm Papers, File 13. KCLA.

[51] Daniel Mck. Malcolm, “Curriculum Vitae,” Malcolm Papers, File 11, KCAL.

[52] シェップストン自身が首長の権限をどのように捉えていたのかについては、論者によって異なる。人類学者のエイリーン・クリゲは、アフリカ人首長の権力は、臣民の同意に基づいており、一方的に法を定めることはできなかったと、シェップストンの 1883 年の原住民慣習法に関する政府委員会の発言を引いて論じている。Eileen Jensen Krige, *The Social System of the Zulus* (Pietermaritsburg: Shuter & Shooter, 1950), 218–19. 一方、ショニパ・モコエナは、シュビ（amaHlubi）の首長であったランガリバレレの法廷への召喚命令と、その後の反乱の鎮圧におけるシェップストンの強権的な政策を、宣教師ジョン・コレンゾ（John Colenso）のパンフレットを引きながら明らかにしている。Hlonipha Mokoena, “Zuluness on Trial: Re-Reading John W. Colenso’s 1874 Langalibalele and the AmaHlubi Tribe: Being Remarks upon the Official Record,” *The Journal of African History* 60, no. 01 (March 2019): 67–85, https://doi.org/10.1017/S0021853719000355.

の後のアパルトヘイト体制の地方支配の中核となっていくのである[53]。そして次節の対象であるズールー部族歴史エッセイ・コンテストは、「原住民」政策と親和的な「部族」像が、マルコムのラジオ講演の対象であった南ア白人だけでなく、アフリカ人の間で浸透していく過程を垣間見せるまたとないレンズであると考えることができるだろう。

第３節「部族」の歴史を書く：ズールー部族歴史エッセイ・コンテスト

本節は、第３章の対象であったアフリカナ収集家キリー・キャンベルによって開催されたズールー部族歴史エッセイ・コンテストに焦点を当て、アフリカ人学生及び教員が「部族」の歴史を書くことが持った意味を検討する。コンテストは、1912 年、42 年、50 年の三回開催されており、各回の概要は以下のようになっている。1912 年は、キリー・キャンベルと彼女の父親マーシャル・キャンベルによって開催され、広くアフリカ人の歴史について書くことがテーマであった。全体で、25 編のエッセイが応募された。そのうち、９編はズールー人の歴史に関するものであり、その全てが英語で書かれている。残りの 16 編は、ソト人の歴史に関するものであり、そのうちの 2 編はソト語で執筆されており、英語には訳されていない。ソト人の歴史に関するエッセイの残りは全て英語で執筆されている。審査員が誰であったかは明らかではないが、キリー・キャンベルの手紙からおそらくブライアントが務めていたのではないかと想像される。内容的な特徴としては、ズールー人に関するエッセイの全てが特定の部族についてではなく、シャカを中心としたズールー王家について書かれていることが挙げられる[54]。

1942 年のエッセイ・コンテスト、ズールー人にとって歴史上重要な土地に関するエッセイを募集した。キリー・キャンベル自身が広告文を書き、彼女は、応募者に、これまでにあまり知られていないが、重要である土地について、その歴史を取り上げて詳述することを求めた。審査員は原住民教育主任視学官であったマルコムが務めた。キリー・キャンベル・アフリカナ図書館が保存する 1942 年のエッセイ・コンテストのファイルを全て調べたところ現存するエッセイの数は全部で 110 編にのぼることが分かった。キリー・キャンベル自身は手紙において 101 名の応募があったと述べているが、複数編送った応募者もいるため、このような数字になったと考えられる。ズールー人にとって重要な土地と対象を絞ったためか、全てのエッセイがズールー人の歴史に関するものであった。15 編のみが英語で書かれており、そのうちの 55 編が英語に訳されている[55]。

1950 年に開催されたエッセイ・コンテストは、「部族」の歴史を主題とし、応募者には特定の「部族」の歴史を調べ上げ、エッセイにまとめることが求められた。キリー・キャンベルとダニエル・マック・マルコムの連名で執筆された広告文は、コンテスト開催の主旨を脱部族化が進む

---

[53] この点に関しては、マムダニの周辺化された独裁制（de-centralized despotism）論を参照。Mahmood Mamdani, *Citizen and Subject: Contemporary Africa and the Legacy of Late Colonialism* (Princeton: Princeton University Press, 1996).

[54] File 1 and File 2 of the Zulu Tribal History Competition 1912. Killie Campbell Africana Library.

[55] File 1 through File 17 of the Zulu Tribal History Competition 1942. Killie Campbell Africana Library.

ズールー人の「部族」の歴史を保存するためであると説明する[56]。 審査員は 1942 年時と同様にマルコムが務めた。1950 年のコンテストのファイルに現存するエッセイの数は 180 編である[57]。英語で書かれているエッセイは 4 編のみであり、他のエッセイは全てズールー語で書かれている。そのうち 94 編のエッセイがズールー語から英語に翻訳されている。英語に翻訳されなかったエッセイのほぼ全てにマルコムは、「完全に価値がないというわけではない(not entirely worthless)」あるいは「無価値（worthless）」という評価を下しており、マルコムの評価が英訳されるかどうかの判断基準となっていたことがわかる。

マルコムはエッセイ募集の広告において、「部族」の歴史について書く際にどのような情報を求めているかを列挙している。それらは、「(i) 起源; (ii) 現在の居住地; (iii) 部族史; (iv)首長の系譜; (v) 首長及びその他有力人物の頌詩、そして (vi) その他の興味深い出来事 ((i) its origin; (ii) present locality; (iii) tribal history; (iv) the genealogy of its Chief; (v) the izibongo (prize poems) of its chiefs and other prominent men of the tribe, and (vi) any incidents of special interest.")」であった。またマルコムは、応募者に対してすでに出版された本からの引き写しではなく、特定の「部族」の老人たちからの聞き取りによって事実を見つけ出すことを求めた[58]。これらの要件は、マルコムがエッセイについて評価を下す際の判断基準となっている。さらにまたこれらの項目は、「部族」の歴史を書くという行為を、「原住民」政策に結びつける要素でもあったが、この点については後ほど述べる。

本章に関わる先行研究の整理で述べたように、アフリカにおけるアーカイブに関しては、二つの立場がある。一つは、聞き取り調査や「部族」の歴史として書かれた史料を比較考証することによって、唯一の真実を引き出そうとする立場であり、ヤン・ヴァンシナに代表される[59]。もう一つは、ハミルトンとライトが主張するように、史料間の齟齬に、その史料を生み出した人々の間における 政治的立場の対立を見出そうとする立場である[60]。以上の研究動向に対して、本節では、比較考証するという作業自体に着目する。すなわちマルコムが応募されたエッセイの内容をブライアントの『過ぎ去りし時』と引き比べ、「校合」していたことの意味について考察する。結論を先取りして述べるならば、この「校合」という行為は、ズールー語による歴史叙述の可能性を統治に親和的な形で狭めるものであったと考えることができるだろう。

---

56 Native Teachers' Journal, vol. 29, no.2, Jan. 1950, p.47

57 キリー・キャンベルは 190 編にのぼるエッセイの応募があったと述べているが、2017 年 11 月の調査時に筆者が見つけることができたのは、180 編のみである。

58 I used the term "tribe" with some hesitation. However, since what I am planning to delineate in this research project is the process through which the idea of the "tribe" as the natural governing unit for Africans in South Africa was accepted, I will use "tribe" as a historically value-laden term.

59 Jan Vansina, *Oral Tradition : A Study in Historical Methodology* (London: Routledge & K. Paul, 1965).

60 Hamilton, "'Living by Fluidity': Oral Histories, Material Custodies and the Politics of Archiving"; John Wright, "Thinking beyond 'Tribal Traditions': Reflections on the Precolonial Archive," *South African Historical Journal* 62, no. 2 (June 1, 2010): 268–86, https://doi.org/10.1080/02582473.2010.493003.

そして、それゆえにこのコンテストは、ハミルトンやレクゴアチの述べるような「伝統」の創造過程におけるアフリカ人の主体性発揮の場[61]としてではなく、アフリカ人の自身の「部族」の歴史を書くという行為による「伝統」創造のプロセスに制約を課すものであったのだ。この点を明らかにするためにまず、特に 1950 年のズールー部族歴史エッセイ・コンテスト全体の評価を試みる。その後、個別のエッセイに対する分析に移る。

3.1　1950 年ズールー部族歴史コンテスト全体の評価[62]

1950 年に応募されたエッセイの数が少なくとも 180 にものぼったことは、特定の「部族」の歴史をすぐに保存しなければ都市化などの要因によって、その歴史はすぐに失われてしまうというマルコムが広告文で表明した懸念[63]が、ズールー人の間においても共有されていたこと[64]を示している。マルコムから主任視学官の地位を引き継いだ G.R. デント（George Robinson Dent）は、コンテストの結果を伝えるキリー・キャンベルからの手紙に対して、「これほどの広範にかつ熱意のこもった（so wide-spread and enthusiastic response）」反応がズールー人から得られたことは喜ばしいことであると、キャンベルの試みを褒め称える返信を送っている[65]。エッセイ募集の広告は『原住民教育雑誌』や、ズールー語新聞『ナタールの太陽（Ilanga laseNatal）』に掲載され、またエッセイ応募者のうちラジオでこのコンテストの存在を知ったとエッセイに付した手紙で書いているものがいることからラジオでも宣伝されたことが分かる。また現役の視学官を通して各地の学校に対しても直接このコンテストの存在が知らされていたようである(キリー・キャンベルの手紙より)。

以下では応募されたエッセイの概況をダーバン郊外にあるアフリカ人エリート校であるアダムズ学院の教師であった E.A. ダール（E. A. Dahle）[66]によって英訳されたエッセイを中心にまとめる。また著者名、応募時の所属、エッセイ・タイトル、エッセイ内容の概要、執筆言語、及び述べられている場合は依拠した資料についてはエクセル・ファイルに整理し、脚注のリンクから利用

---

61 Hamilton, *Terrific Majesty: The Powers of Shaka Zulu and the Limits of Historical Invention*, chap. 2; Lekgoathi, "'Colonial' Experts, Local Interlocutors, Informants and the Making of an Archive on the 'Transvaal Ndebele', 1930-1989."

62 以下では考察の対象を、1950 年のエッセイ・コンテストに絞る。

63 Native Teachers' Journal, vol. 29, no.2, Jan. 1950, p.47

64 例えば、このコンテストに応募したズールー人聖職者のムテンブは、今の子供たちがヨーロッパの歴史と、ズールー人の王の知識しかなく、個別の「部族」の首長の名前など覚えていないことを嘆いている。Rev. T.W.S. Mthembu "The Thembus of Cetshwayo," Zulu Tribal History Competition, File 20. KCAL.

65 Dent to Campbell, 3rd Oct. 1950. Zulu Tribal History Competition 1950, File1, KCAL.

66 ノルウェー人宣教師の息子であったダールは、周囲をズールー人に囲まれ英語よりもズールー語の方が堪能という子供時代を過ごした。ダールは前章で述べたように、ズールー語地域土着語委員会の委員も務めており、ダールの生涯は、キリー・キャンベル図書館職員によるオーラル・ヒストリー・プロジェクトの一環として行われたインタビューによって記録されている。Mr. and Mrs. E. Dahle Interviewed by A. Manson and D. Collins 17/2/1979 KCAV110. KCAL.

できるようにした[67]。本項の以下の部分の記述は主にこのファイルの情報に基づいている。

まず大部分の応募者が自身の所属する「部族」について書いていることがわかる。これは、応募者の苗字（isibongo）とエッセイのタイトルを比較することで分かる。シャカについて、あるいはディンガネについてなどズールー王について書かれたエッセイも存在するが、マルコムは厳しい評価を下している。

ほぼ全てのエッセイが、マルコムが広告において与えた指示に従って書かれている。すなわち、「(i) 起源; (ii) 現在の居住地; (iii) 部族史; (iv)首長の系譜; (v) 首長及びその他有力人物の頌詩、そして (vi) その他の興味深い出来事」という形で項目を立て、それぞれについて詳述する形をとっている。使用した資料を挙げているエッセイのほぼ全てが聞き取り調査を行ったと述べている。ただし、どのような資料に基づいて書かれたのか述べていないエッセイの方が多く、またインタビューに基づいていることがわかるエッセイにおいても、「部族」の老人から聞き取りを行ったと述べるだけで、具体的には誰であるのかを述べていないものが過半数を超えている。

さらに、応募者とマルコムの間で交わされた手紙は、「部族」の歴史を書くことに対する関心がいかに広がっていったのかを明らかにする。1950 年のコンテストで一位となった A. P. ムエニ（A. P. Myeni）はマルコムへの手紙において、『原住民教員雑誌』でズールー歴史エッセイ・コンテストの広告を見たことが、彼の「部族」の歴史に対する関心を刺激したと書き送っている。ズールー知識人の歴史を研究したラ・オッセは、『原住民教育雑誌』がズールー人の歴史、慣習、及び言語に関する議論の場として機能したと述べている[68]。ムエニの手紙は、ロラムやブライアントなどの白人専門家や、アフリカ人ミッション・エリートによる論考がこの雑誌だけで完結していたのではなく、この雑誌の読者である教員を中心にズールー人の歴史や慣習に関する調査を自分自身で行うように誘う効果があったことを明らかにしている。ズールー語新聞『ナタールの太陽（Ilanga laseNatal）』、ラヴデール学院の発行するアフリカ人向け英語新聞『アウトルック（South African Outlook）』の広告を見て応募したと記している応募者もいることから、キリー・キャンベルとマルコムの広報に向けた努力がこの応募数に結びついたのだと考えることもできるだろう[69]。

マルコムがどのようにエッセイを審査したのかについての詳細はのちに述べるが、このコンテストの結果が広く周知されたことに触れておきたい。南アフリカ放送協会（South African Broadcasting Corporation, SABC）が運営するラジオ放送のズールー語部局において結果が読み上げられただけでなく、一位をとったエッセイは読み上げられ、その内容が公開された[70]。またマルコ

---

[67] リンクは以下の通りである。
https://drive.google.com/drive/folders/1jNQ_JwXL9FwO0i96Hh4eudcw7GvT0lOc

[68] Paul La Hausse de Lalouviere, *Restless Identities: Sigatures of Nationalism, Zulu Ethnicity and History in the Lives of Petros Lamula(c. 1881-1948) and Lyomn Maling(1889-c.1936)* (Pietermaritzburg: University of Natal Press, 2000), 99.

[69] Lionel J. D. Mkwanazi, “History of the Mkwanazi Tribe in the Mpukunyoni District,” ZTHC1950, File 19, KCAL. ; Albert Nyokwana, “amaBaca,” Zulu Tribal History Competition, 1950, File 18. KCAL.

[70] A.P. Myeni to Killie Campbell, 27th September 1950. File 3, Zulu Tribal History Competition 1950, KCAL.

ムが評価したエッセイは、『原住民教員雑誌』に部族の歴史を書く際のモデルとして掲載された[71]。コンテストへの応募が、出版物を中心としたメディアによるズールー人の歴史をめぐる議論の広がりを前提としていたとするならば、このコンテスト自体が、ズールー人の歴史への関心をさらに高める効果があったと考えることができるだろう。

なお賞金としては、当初は５位入賞までに賞金が渡される予定であった。しかし、応募エッセイ多数のため、主催者キリー・キャンベルの判断により、マルコムに優等として認められたエッセイには 3 ポンドから２シリング 6 ペンスまでの幅で賞金が与えられている。

以上のコンテストの全般的な評価を踏まえて、次に個別のエッセイの検討に進もう。

3.2. 個別のエッセイの分析

ズールー部族歴史エッセイ・コンテストに応募された個別のエッセイに焦点を当て分析することは、「部族」の歴史を書くという行為の含意また別の光をあてることにつながる。以下ではバタニア中等学校の教員であった A.P. ムエニ（A. P. Myeni）と、マシャバティニ（Mahlabathini）地区の原住民行政官（Native Commissioner）であったサイモン・ムキゼ（Simon S. Mkize）及びダンディーの鉱山で働くビダウェル・シコサナ（Bidewell Q. Sikosana）[72]という三人のエッセイに特に注目する。この三人のエッセイを検討することを通して、エッセイの書き手の地位及び政治的立場が、どのように「部族」の歴史を書く際の叙述のスタイルと内容に影響を与えたのかを明らかにする。

3.2.1. A.P.ムエニ「マテンジュワ部族(The Mathenjwa Tribe)」[73]

ムエニとマルコムが交わした書簡から、このコンテストで一位となったムエニとマルコムの間に「部族」の歴史を保存することへの情熱が共有されていたことがわかる。「部族」の歴史を書くことに非常に高い関心を持っていたムエニは、エッセイ執筆以前にマルコムに手紙を送り、どのような情報をエッセイに組み込むべきか、マルコムにアドヴァイスを求めている。マルコムは、それに対して、一つの部族に関してできるだけ詳細な情報を盛り込んだエッセイが高く評価されると返答している。結果としてムエニは、歴代の首長の偉業に焦点を当てたムテンジュワ部族の歴史を、A4 の大きさの紙にタイプされた 37 ページに及ぶ長大なエッセイとして書き上げた[74]。

この長大なエッセイが第一位となったことから、ムエニがマルコムの求めていた要件にぴったりと沿うような情報を提供していたことがわかる。それはすなわち、各首長の支配の時代に起き

---

[71] Bidewell O. Sikosana, “A History of the Tembu Tribe,” NTJ vol.31 n.1 1951: 244-247.

[72] シコサナは職業を記していないが、高度な識字能力を有していることから、事務員であったと想像される。

[73] A.P. Myeni, “The Mathenjwa Tribe,” ZTHC 1950, File7, KCLA. 以下のページ数はこの英訳されたエッセイによっている。

[74] Myeni to Malcolm, 31st March 1950. Zulu Tribal History Competition 1950, File3. KCLA.

た出来事を詳細にまとめること、そしてそれぞれの首長のイジボンゴ（Izibongo, 頌詩）[75]を整理することである。

そしてムエニの叙述のスタイルには、彼がマルコムというズールーの歴史に関する権威が読者であるということを意識してこのエッセイを書き進めていたことが表れている。全部で 10 章からなるこのエッセイは、ムテンジュワ部族が、ルコボ（Lukobo）という人物に率いられて他の部族から独立し、現在の居住地[76]にたどり着くまでに 1 章を割いた後、残りの章で、首長が幼い場合に叔父が首長職を務める摂政時代も含めて、各首長に 1 章ずつ割いて記述している。またムエニは、マテンジュワ部族の歴史を、ズールー王家の歴史と絡めて記述することによって、この部族をズールー人の歴史の中に位置付ける作業をしている[77]。このことは、 前章で述べたようにスチュワートやジョモのズールー王家を扱ったズールー語の書物が学校教育において教科書として指定され、読まれていたことを踏まえならば、この部族の歴史を理解しやすい形で語ったのだと考えることができるだろう。

また首長である兄が、民衆の支持を得て首長の地位を脅していると思われた弟を暗殺した事件を語った第 9 章においては、暗殺者を捕まえたのが警察であることが述べられる[78]。ムエニの記述は全般的に白人政府、入植者、そして宣教師に宥和的なものであるということが言えるだろう。

3.2.2. サイモン・ムキゼ「ビエラ部族」

サイモン・ムキゼは、ムキゼ部族とビエラ部族、その他数多くの「部族」について書いている。ムキゼは自身が属するムキゼ部族の歴史の方をより詳細に書いているが、興味深いのは、ビエラに関する歴史叙述の方である。ムキゼは、ビエラは、実際にはズールー部族から分離し、現在の土地にやってきたのであるが、白人政府によって「部族」に認定されたと説明する。そのため、ビエラの首長には詳細な頌詩がないのだと説明する[79]。ムキゼのこの簡略な批判はマルコムが広告文を書いた時に想定していた「部族」の自然性を問題視し、現在「部族」として認定されている集団が実際には白人政府の意図によって決まっていることを端的に指摘するものであるだろう。

自身も原住民行政官として、白人政府の支配に組み込まれていたムキゼが、なぜこのような白人政府による首長の任命による間接統治という制度を批判するような言説をエッセイに組み入れたのかは分からない。しかし、ムキゼのエッセイが、人類学者や政府が「部族」の歴史を調査す

---

[75] イジボンゴについては前章の説明を参照。

[76] ムエニは、uSuthu 川を越えた場所、Low Veld などと説明しているが、現在の具体的な地名は不明である。1985 年にズールーランド大学に提出された報告書では、マテンジュワ「部族」は、イングワヴマ（Ingwavuma）という土地に居住することになっている。J. L. W De Clercq, Isaac Sibiya, and Mandla Victor Sikhosana, *Report on the Indigenous Law of the Mathenjwa Tribe of the Ingwavuma District in KwaZulu* (Kwa-Dlangezwa: University of Zululand, 1985).

[77] Myeni, “The Mathenjwa Tribe,” chaps. 5 and 7.

[78] Myeni, “The Mathenjwa Tribe,” 35.

[79] Simon Mkize, “Origins of the Mkhize Tribe(THE BUTHELEZIS)” ZTHC, File14, KCLA.

る際にアフリカ人協力者は、過去を特定の仕方で解釈することによって自己の利益を増大させようとするというレクゴアチの指摘[80]に適合するものであることは確かであろう。

そして、白人政府に対してより明確な批判を行っているエッセイもあるもののそれらがマルコムに高く評価されていないのに比べて[81]、このエッセイが優等なエッセイとみなされ、賞金 3 ポンドが送られていることからも明らかなように、ムキゼの戦略はこのコンテストに限ればうまくいったと考えることができる。

3.2.3. ビドウェル・シコサナ「テンブ部族の歴史」

シコサナのエッセイはもともと英語で書かれた数少ないエッセイの中の一つである。マルコムはこのエッセイに、「短いエッセイの中で最も優れている（the best of short histories ）」[82]と手書きで感想を記している。エッセイの内容は、テンブ部族のズールー部族との抗争を、テンブ部族の首長であったンゴザ（Ngoza）の活躍を中心に描くものとなっている。

しかし、一見するとスチュワートの教科書やブライアントの歴史書でも取り上げれられている有名な「部族」に関する情報が、このようにマルコムに高く評価され、『原住民教員雑誌』に掲載されたこと[83]は、不思議に思える。この点を明らかにするためには、マルコムの書き込み「ブライアント、241 ページ以下を参照（see Bryant 241-）」という書き込みに注目する必要がある。

マルコムのこの書き込みは、ブライアントの大著『ズールーランドとナタールの過ぎ去りし時』を参照するようにというコメントである。実際に、ブライアントは同書で約 20 ページにわたってテンブ部族について、その首長の系譜も含めて書いている[84]。しかし、ブライアントの叙述と、シコサナが提供した情報は重なっておらず、両者は補完しあうものであったと評価されていることがわかる。シコサナが明らかにしたブライアントが言及していない事実とは、第一に、ズールー王シャカの急襲をいかにして当時の首長であったンゴザが事前に知り、準備することができたかという点であり[85]、第二に、シャカから逃れ、ポンドランド（ケープ州）、ナタール、及びズールーランドに散ったテンブ部族が、いかにしてまたシャカに謝罪し、受け入れられたかという点で

---

[80] Sekibakiba Peter Lekgoathi, "'Colonial' Experts, Local Interlocutors, Informants and the Making of an Archive on the 'Transvaal Ndebele', 1930-1989," *The Journal of African History* 50, no. 1 (2009): 61–80.

[81] 白人政府に明確な批判を行ったエッセイとしては、Magwaza ka Mbovula Mbata, "The Mbatha Tribe at Inhlazatshe," ZTHC 1950, File 20. KCAL を挙げることできる。ムバタは、自身の「部族」の歴史をたどったこのエッセイにおいて、白人政府が、首長が治める領域をめぐるブテレジ部族との紛争において白人政府がムバタ部族に不利な裁定を不当に下したと批判している。

[82] Sikosana, "History of the Tembu Tribe," ZTHC 1950, File 19, KCAL.

[83] Sikosana "A History of the Tembu Tribe," Native Teachers Journal Vol. 31 no.4(1951): 244-7.

[84] A.T. Bryant, *Olden Times in Zululand and Natal* (London: Longmans, Green and Co., 1929), 241–61.

[85] シコサナは、シャカの言動から、攻撃を予測した使者が通常は 3 日かかる道中を 2 日でテンブ首長のもとに帰ってきたことを挙げている。Sikosana, "History of the Tembu Tribe," ZTHC 1950, File 19, KCAL.

ある。マルコムは、書籍に書かれすでに知られている情報ではなく、聞き取り調査による新しい情報を求めると広告文に書いているが、彼に評価されるためには、ただ新しいだけではなくこれまでの白人の歴史家たちが築いてきたズールー史に則って、その流れの中で新しい情報を付け加える必要があったのである。

さらにまた、シコサナが、首長の継承を巡って起きた紛争を原住民法廷において原住民行政官が、テンブ部族の大部分が満足するような形で解決したと、白人政府に対して恭順の姿勢を示していることが評価されたのだと考えることができるだろう。

以下ではこのシコサナのエッセイに見られるようなマルコムの特定の読み方という観点から、ズールー部族歴史エッセイ・コンテストにおいて「部族」の歴史を書くことが持った意味を考察したい。

3.3. マルコムはいかにエッセイを読んだか

先に述べたようにマルコムとキャンベルは、ズールー部族歴史エッセイ・コンテストの広告文において、このコンテストの目的は、失われつつある「部族」の歴史を保存することにあると説明した。しかし、「部族」の歴史を保存することは、アフリカ人統治政策と密接に関係していたのである。このことはマルコムが、エッセイに含めるべきとして提示した項目が、「原住民」行政において必要とされた情報と非常に近接していることからも明らかである。

第 4 章で述べたズールー・ソサエティの顧問でもあった原住民行政官のカール・ファイエ（Carl Faye）は『通訳者と学習者のためのズールー参考書(Zulu References for Interpreters and Students)』[86]と題する本を出版した。一見すると学習書のようなタイトルであるが、実際には原住民法廷の通訳者の利用に特化した本であり、内容としては、法廷における通訳者の役割が説明され、ズールー語に関して述べている場合でも法廷で使用されるズールー語や、執務官（magistrate）の氏名のズールー語での呼び名など、非常に特殊な事例を扱っている。この本の中で、ファイエは法廷で必要になる場合に備えて、首長など重要人物の系譜を記録する際に、注意すべき点を列挙している。ファイエは、ケープタウン大学の人類学者 A.R. ラドクリフ・ブラウン（A. R. Radcliffe=Brown）の提案に依拠して項目を定めたとしている。そしてズールー部族歴史エッセイ・コンテストが、「部族」を、ファイエの系譜記録のためのルールーの提案が家計（Household）を対象としているという違いはあるものの、ファイエが提案する規則とマルコムが含めるべきだと考えていた項目は重なっている部分も多い[87]。この事実から、原住民行政が創ってきた「伝統」に合わせて情報を

---

[86] Carl. Faye, *Zulu references for interpreters and students* (Pietermaritzburg: City printing works, Limited, 1923).

[87] ファイエは、系譜を書くにあたって、個々人に対して次の情報を記録すべきであると書いている。すなわち「(1) .名前、(2)部族の尊称（Isitakazelo）(3)氏族名（Isibongo）(4) クラール（ズールー人の伝統的な住居を表す）の所有者の名前と氏族名 (5)クラールの居住地:すなわち国有地、宣教団保有地、あるいは原住民居留地、 (6)ヘッドマンの名前と氏族名 (7) 首長の名前と氏族名(8)どの執務官の管轄下にあるか（ (1) Name. (2) Isitakazelo. (3) Isibongo. (4) Name and isibongo of owner of kraal in which he lives.

記録することが広く行われていたことがわかる。

このようにエッセイの応募を呼びかける段階においてこのコンテストは原住民行政とのつながりが明らかであるが、さらにまた集められたエッセイも原住民統治のための活用が考慮されていたのである。彼女のアフリカ人の歴史と文化への関心と父・兄の原住民統治行政との関わりを考えれば当然のことであるが、キリー・キャンベルは多くの行政官・執政官の知人を持っていた。それゆえ彼女は知人である原住民政策省の役人に、コンテスト開催前に、その周知を依頼し、エッセイの原住民政策における活用の可能性について手紙を送っているのである[88]。

しかし、より重要であると考えられるのは、シコサナのエッセイに関する箇所で述べたようにマルコムが応募されたエッセイをブライアントの『過ぎ去りし時』と対照させて読んでいたことである。このようにブライアントの著作と合わせて読むことで、「部族」の歴史を書くという時の前提が、アフリカ人は重なりなく個々の「部族」に分けることができ、それぞれの「部族」は個別の文化と歴史を持つということであったことがわかる。そして、それゆえにどのような小さな「部族」であってもその伝統が保存されなくてはならないのであるという広告文の主張につながるのである。

そして、本章のはじめに述べたように、ブライアントの著作の権威が、聞き取り調査で得た様々な歴史の語りを校合し、真実を引き出すという行為にあるのだとすれば、マルコムはブライアントの事業を引き継ぎ、応募されたエッセイを一つのサンプルとして用いてブライアントが行った校合作業を継承したのだと考えることができるだろう。

応募者であるアフリカ人自身が聞き取り調査を行い、そしてエッセイとして歴史に書くという事実からは、白人の著述家あるいは調査者とアフリカ人（あるいは原住民＝ネイティヴ Native）インフォーマントというハイアラーキカルな二分法を壊す役割をこのズールー部族歴史コンテストは持ったのだと結論付けたくなる。しかし、マルコムの実際のエッセイの読み取りという行為からはこの可能性を捨てなければならないだろう。エッセイは、すでに白人の専門家によって作られたズールー人の歴史像、特にブライアントの『過ぎ去りし時』を補完するために利用されたのである[89]。マルコムは応募されたエッセイの評価を、すでに白人の著述家によって書かれた情報と比較対照した時にどれだけ新しい情報を加えているかという観点から行っているのだ。マルコムは、当時最も権威があるとされたブライアントの『過ぎ去りし時』とエッセイの内容を校合し、大部分のエッセイの冒頭に手書きで簡単なコメントを付している。そのほとんど全てに、エッセ

---

(5) Locality of kraal, i.e. whether on: Crown land, Mission Reserve, Native Location, Reserve, or Private land. (6) Headman's name and isibongo. (7) Chief's name and isibongo. (8) Magisterial district.）である。Faye, 104.

88 Killie Campbell to E. R. Cilmes (the Magistrate at Ixopo), Nov. 15th, 1949.

89 ズールー史におけるブライアントの著作の一般的な影響については、John Wright, “A. T. Bryant and ‘The Wars of Shaka,’” *History in Africa* 18 (1991): 409–25 を参照。ブライアントの著作が、「部族」的アイデンティティの形成に果たした役割について、 Wright, “A.T. Bryant and the ‘Lala.’はララ部族を事例に、Etherington, “A.T. Bryant’s Map of the ‘Native Clans in Pre-Shakan Times”はブライアントが巻頭に付した特定の部族の領域を説明する地図を対象として考察している。

イ執筆者が対象とした「部族」に関する記述が『過ぎ去りし時』のどこに記載されているかを示すページ数を記している。

それゆえに、マルコムが、エッセイのコメントとして、「優れた記述（good account）」なり、あるいは「ほとんど価値がない（very little value）」「無価値（ worthless）」と書き込み[90]、エッセイを評価する時、それはエッセイが既存の書籍、特にブライアントの『過ぎ去りし時』と比較して新しい情報を付け加えているかを第一の基準としていることは明らかだろう。

そしてこのようなエッセイの読み方は、歴史的知識の形成におけるアフリカ人の役割を制限するものであった。確かにハミルトンが述べるようにシャカ像の形成にスチュワートに聞き取り調査をされたアフリカ人は貢献したであろうし[91]、また政府お抱えの民族学者ファン・ヴァルメロに「部族」の情報を提供したアフリカ人教員はレクゴアチが述べるように自身に有利な首長の系譜、「部族」の領域に関する説明を提供したかもしれない[92]。しかし、1950 年のズールー部族歴史エッセイ・コンテストにマルコムに指示された様式で「部族」の歴史を書き、マルコムが応募されたエッセイを評価するというプロセスは、行政単位としての「部族」を内面化し、また原住民行政において創られた特定の「部族」概念を正当化するものであった。コンテスト応募者は、もしマルコムに評価されたいと考えるならば、マルコムの指示に従って、行政単位としの「部族」を受け入れ、「部族」を人工的な構築物としてではなく歴史的に根拠のある自然な存在としての歴史を書くほかなかった。しかし、その「部族」の歴史は、シェップストンによって開始され、ブライアントが体系化した「部族」、特定の領域に居住し、正当な系譜を持つ首長によって統治され、そして最終的にはズールー王家につながる、そのような「部族」の一事例としての歴史であった。それゆえに「部族」史は、ブライアントが「別の説明（different version）」[93]と呼ぶような、校合可能な歴史叙述へと制約されたのである。

それでは、上記のような「部族」史が、1940 年代から 50 年代はじめという時期、1951 年のバンツー権威法──それは、首長の権限が強化され、居留地に自治政府のような見かけを与える法であった──制定の直前の時期において持った意味を考察することで、本章を終えたい。

---

[90] マルコムの書き込みの例として、本章の末尾に 3 つの写真を載せた。第一に冒頭で言及した N. J. Sabelo の 1950 年のエッセイ 「ニャオ部族の歴史（History of the Nyawo Tribe)」、次に個別エッセイの分析で取り上げた Simon Mkize, 「ムキゼ部族の起源(Origins of the Mkhize Tribe(THE BUTHELEZIS)) 」、それらに加え低評価の事例として、Kate Gcabashe, 「シャカとディンガネ（Shaka and Dingane)」を加えた。マルコムに「無価値（Worthless)」と書かれたエッセイの写真は載せなかったが、Zulu Tribal History Competition, 1950, File28 に大量に保存されている。

[91] Hamilton, *Terrific Majesty: The Powers of Shaka Zulu and the Limits of Historical Invention*.

[92] Lekgoathi, "'Colonial' Experts, Local Interlocutors, Informants and the Making of an Archive on the 'Transvaal Ndebele', 1930-1989."

[93] A.T. Bryant, *Olden Times in Zululand and Natal* (London: Longmans, Green and Co., 1929), x.

おわりに

シューラ・マークスは、実態はともかくとして、ズールー王家が植民地体制への抵抗の象徴として見なされていく、そのメカニズムを、人類学者グラックマン（Max Gluckman）が 1940 年に発表したズールーランドでのフィールド調査の報告をひきながら以下のように説明する[94]。

> 経済的搾取が強化され、下位の首長がますます白人支配に従属していると見なされていく状況下で、王に保護を求めるということほど人々にとって自然なことはあるだろうか。それは、前産業社会における抗議の形態として非常にありふれた現象であった。実際、マックス・グラックマンは、30 年代の状況を次のように見ている。下位の首長が権力の濫用によってますます不人気になっている時に、彼[グラックマン]は、王には「濫用すべき権力がなかった」と主張する。それゆえに、王は、 民族的な感情を表明することができたのである。政府が強情にも彼を王と認めないというまさにその事実によって、人々はズールー王家に忠誠を誓うことによって白人支配への反発を表明することができたのである。

この言明は、シャカから続くズールー王家がズールー人全体の最高首長（supreme chief）として認められることを求めながらも、政府に許可されていないという状況を踏まえている[95]。そして、その事実によって、ズールー王家はズールー人民衆の不満を代弁する存在となったというのである。マークスの議論は、ズールー人民衆の抵抗運動においてズールー王家が反植民地の象徴的な存在として考えられていたとするいくつもの研究によって支持されている[96]。また、ズールー王家の系譜は、ズールー語及び英語で書かれた歴史小説や詩集の主題としていく度も取り上げられ、これらの歴史物語が支配と抵抗という両義的な価値を帯びていたことは前章で述べた通りである。

ズールー部族歴史エッセイ・コンテストにおいて、審査員を務めたマルコムのエッセイの書き方への指示と、彼が応募されたエッセイをどのように読んだかを検討した際に、「部族」の歴史が領域と系譜に重きを置くという書かれ方、ブライアントの著作と対照されるという読まれ方を

---

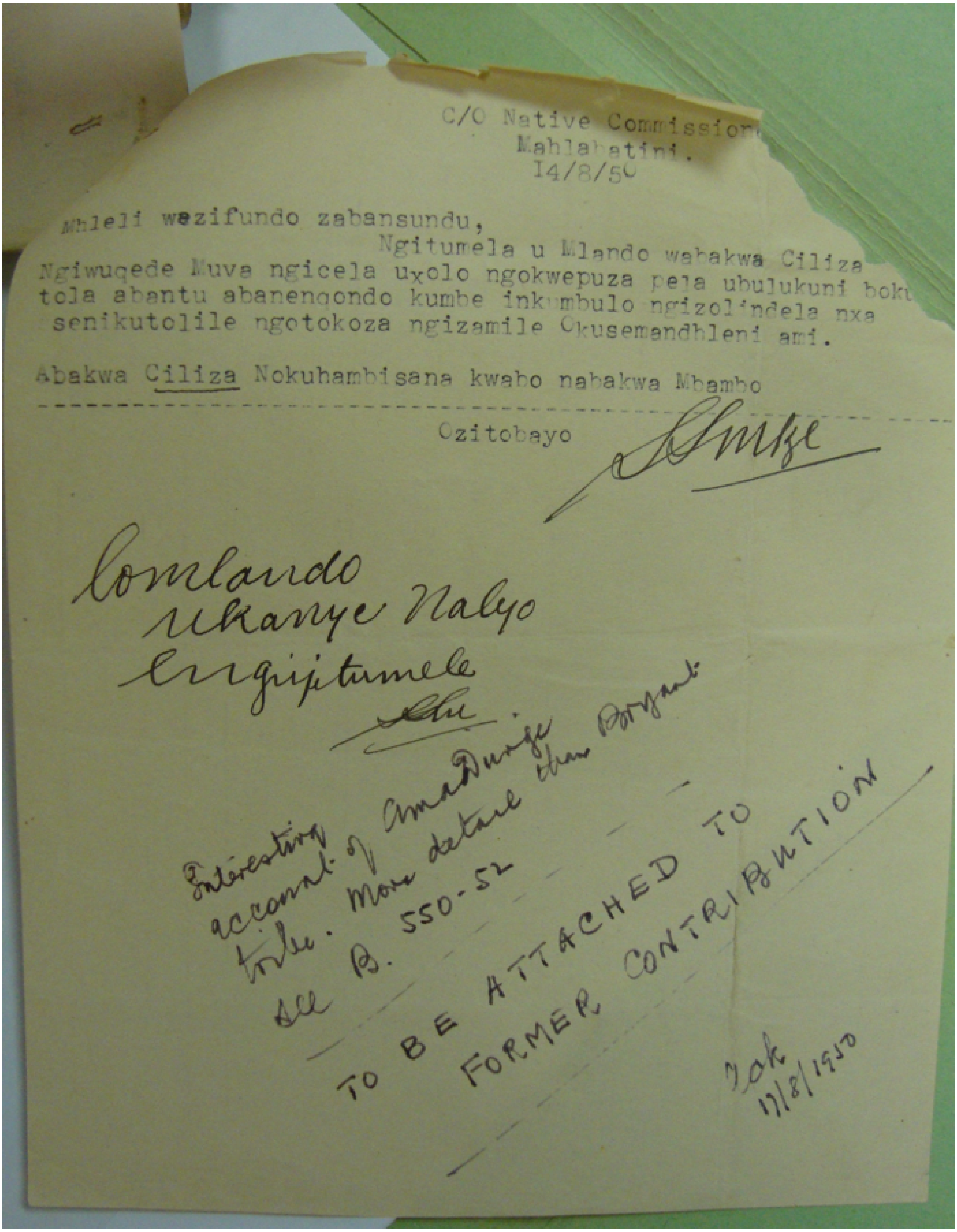
[94] Shula Marks, *The Ambiguities of Dependence in South Africa: Class, Nationalism, and the State in Twentieth-Century Natal* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1986), 111.　マークスが言及するグラックマンの論文は、Max Gluckman, “Analysis of a Social Situation in Modern Zululand,” *Bantu Studies* 14, no. 1 (January 1, 1940): 1–30, https://doi.org/10.1080/02561751.1940.9676107.及び Max Gluckman, “Analysis of a Social Situation in Modern Zululand (Continued),” *Bantu Studies* 14, no. 1 (January 1, 1940): 147–74, https://doi.org/10.1080/02561751.1940.9676112.である。

[95] ズールー王家、特にソロモン（Solomon kaDinuzulu）の最高首長を求める運動については、Shula Marks, *The Ambiguities of Dependence in South Africa: Class, Nationalism, and the State in Twentieth-Century Natal* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1986).の他に、Nicholas Cope, *To Bind the Nation: Solomon KaDinuzulu and Zulu Nationalism.* (Pietermaritzburg: University of Natal Press, 1993).を参照。

[96] Helen Bradford, *A Taste of Freedom: The ICU in Rural South Africa, 1924-1930.* (New Haven: Yale University Press, 1987); Michael R. Mahoney, *The Other Zulus: The Spread of Zulu Ethnicity in Colonial South Africa* (Durham, NC: Duke University Press, 2012); Paul La Hausse de Lalouviere, *Restless Identities: Signatures of Nationalism, Zulu Ethnicity and History in the Lives of Petros Lamula(c. 1881-1948) and Lyomn Maling(1889-c.1936)* (Pietermaritzburg: University of Natal Press, 2000).

されてきたことを明らかにした。そして、このような「部族」の歴史の特定の書き方・読まれ方は、ズールー語での歴史叙述が持つ両義性を、統治と親和性を持つように制限する効果があったのだろう。すなわちこのコンテストは、ズールー王を抵抗の象徴として捉え、民衆と王とを直接的につなぐことで反植民地主義の基盤ともなりうる歴史叙述の可能性の芽をつみ、王と民衆の間に首長を置き、「部族」としての過去を強調することで、植民地化以前の過去と現在の人種隔離体制の連続性を強調する。それは、特定の方向へと叙述のあり方を導く行為であったのだ。「部族」の歴史を書く/書かせる、そして白人の著作と合わせて読むという一連のプロセスは、ズールー王と民衆を直接つなぐことで生じる可能性がある抵抗のモメントを摘み取り、人種隔離政策に適合するような形へと歴史観を鋳直す効果があったのだ。

それでは、アフリカ人の歴史に関わりつつ、人種隔離政策に抵抗する、その可能性を見つけ出していく、そのような契機はどこにあるのだろうか。次章では、アフリカ人人類学者 Z.K.マシューズに着目して、「部族」の歴史を検討することと抵抗運動の方針の形成との関わりを論じる。



C/O Native Commission
Mahlabatini.
14/8/50

Mhleli wezifundo zabansundu,

Ngitumela u Mlando wabakwa Ciliza Ngiwuqede Muva ngicela uxolo ngokwepuza pela ubulukuni bokutola abantu abanengqondo kumbe inkumbulo ngizolindela nxa senikutolile ngotokoza ngizamile Okusemandhleni ami.

Abakwa Ciliza Nokuhambisana kwabo nabakwa Mbambo

Ozitobayo
S Mkize

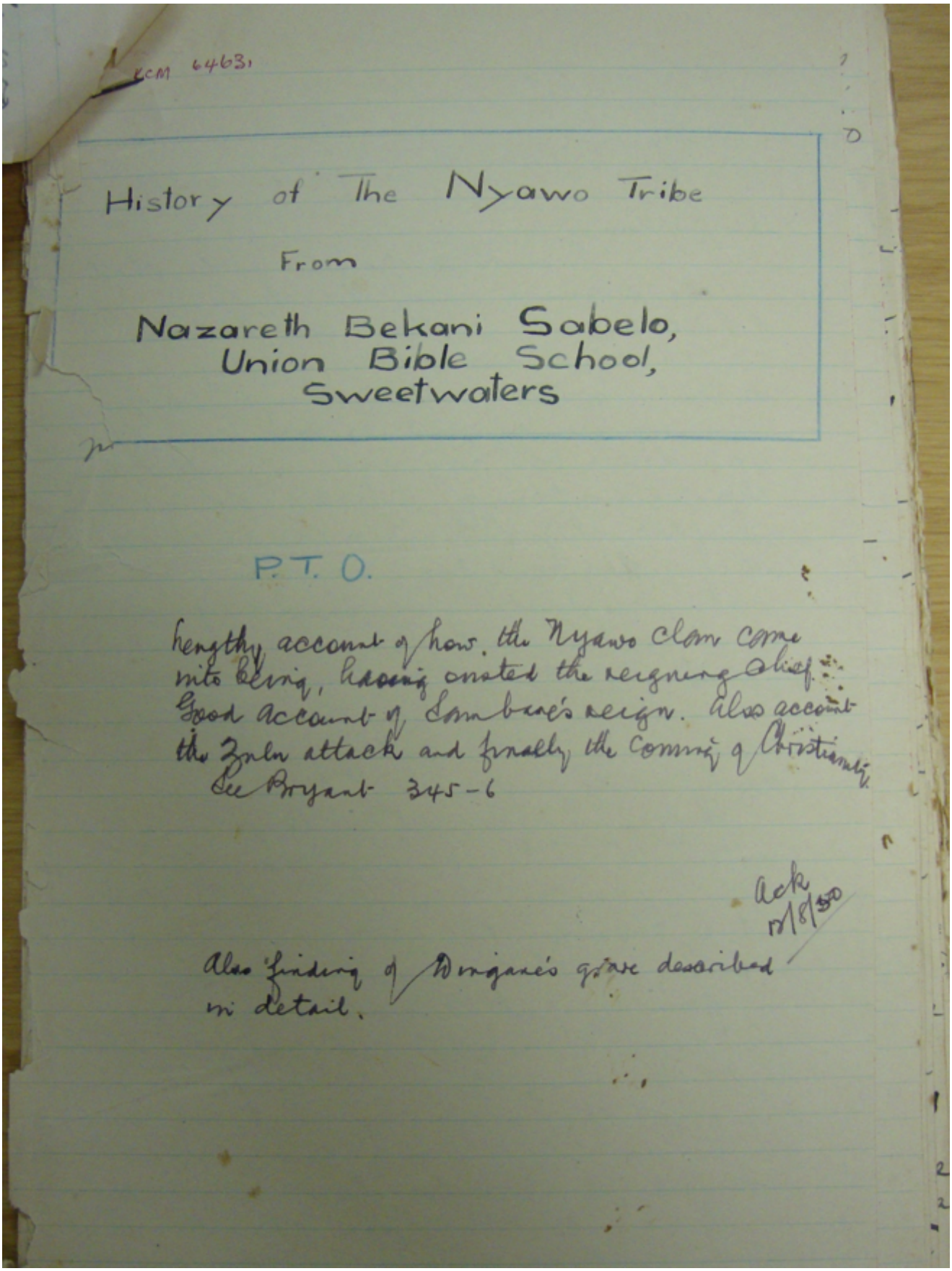
Lomlando
Ukanye Nalyo
Engijitumele

Interesting account of AmaDunge tribe. More detail than Bryant. See B. 550-52

TO BE ATTACHED TO FORMER CONTRIBUTION

17/8/1950

Simon Mkize, "Origins of the Mkhize Tribe.," Zulu Tribal History Competition, 1950, File 14, KCAL.



KCM 6463

History of The Nyawo Tribe

From

Nazareth Bekani Sabelo,
Union Bible School,
Sweetwaters

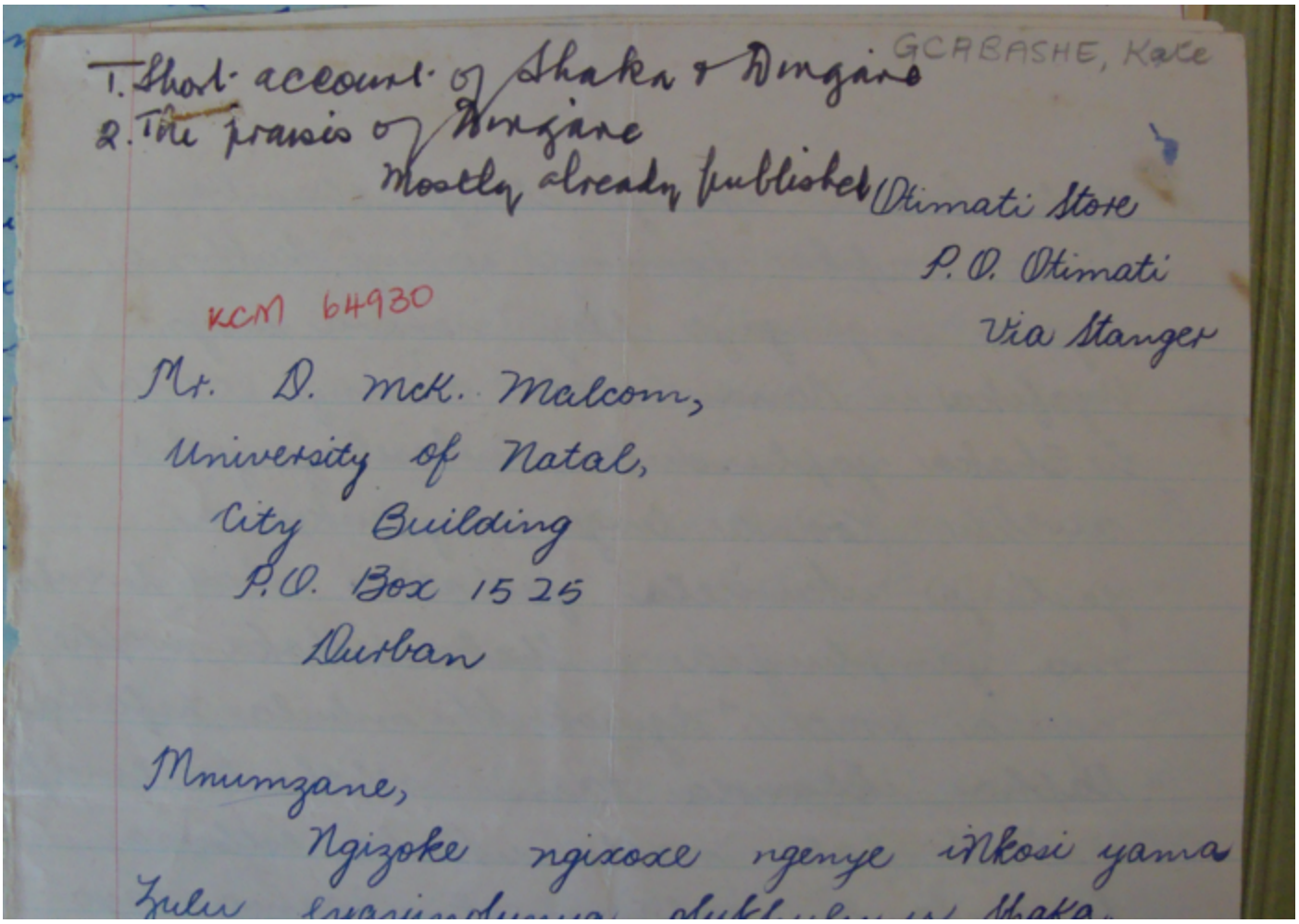
P.T.O.

lengthy account of how the Nyawo clan came into being, having created the reigning chief. Good account of Sombane's reign. Also account the Zulu attack and finally the coming of Christianity
See Bryant 345-6

ack 11/8/50

Also finding of Dingane's grave described in detail.

Nazareth B.J. Sabelo, "History of the Nyawo Tribe," ZTHC, 1950, File 15, KCAL.



1. Short account of Shaka & Dingane
2. The praxis of Dingane
Mostly already published

GCABASHE, Kate

Otimati Store
P.O. Otimati
Via Stanger

KCM 64930

Mr. D. McK. Malcom,
University of Natal,
City Building
P.O. Box 1525
Durban

Mnumzane,

Ngizoke ngixoxe ngenye inkosi yama
Zulu [illegible] Shaka

Kate Gcabashe, Shaka and Dingane. ZTHC, 1950, File 28, KCAL.

第６章　部族と普遍の間：Z. K. マシューズの人類学・原住民法研究から見る市民権要求の論理

はじめに

0.1. 南アフリカ人とは誰か

死後に出版された自伝の中で、南アフリカの政治家・知識人であった Z.K.マシューズ（Z. K. Matthews）は、彼が南アフリカ黒人としては初となる国内での学士号の取得を目指して学んでいた当時のフォートヘア大学のダイニングホールで繰り広げられた、 白熱した議論を思い起こす。時は 1919 年であり、話題は民族（nation）という言葉についてであった。「ウィルソン大統領が 14 ヵ条を公表した時に、小規模民族の自決権（self-determination for small nations）というフレーズがアフリカ人の耳に留まったのだ。彼の言う『民族（nation）』の中に私たちは含まれているのだろうか。この言葉は、私たち、すなわちアフリカの黒人のことも意味しているのだろうか。フォートヘアで私たちはこれ以外のことはほとんど話さなかった」[1]。

歴史家エレツ・マネラが示したように、ウィルソンが提示した民族自決の原則は、彼が当初想定していたヨーロッパという地域を超えて、植民地支配下にある世界中の人々の行動を喚起することとなった[2]。マシューズの回想に見られるように、南アフリカのアフリカ人も例外ではなく、1912 年に設立されたばかりの南アフリカ原住民議会（South African Native National Congress 現アフリカ民族会議(ANC)）もアフリカ人の権利を直接訴えるために、宗主国の首都ロンドン、そして講和会議開催中のパリに代表団を派遣している。ジョージ５世に宛てた請願においては、第一次大戦時にアフリカ人が示した忠誠と払った犠牲を強調しつつ、連合国の戦争目的が、大小すべての民族に主権の行使と、 所属する政府を選択する自由を与えることではなかったかと指摘する。ANC の請願は、しかし、マネラの描いた他の地域の独立運動家たちの要求と同様、聞き入れられることはなかったのである[3]。

マシューズは請願が失敗に終わった理由を、アフリカ人を特定の部族に結び付ける植民地統治政策に帰する。「私たちは南アフリカに住んでいるが、南アフリカ国民として認められることはない。実際に白人の指導者が、南アフリカ『国民(nation)』について語るとき、彼らが想定しているのは白人のみである。国民の人口が挙げられるとき、その数字は白人だけである。[それに対して]我々は部族的な存在として自身を認識することを求められるのである。すなわち、我々はコー

---

[1] Z. K. Matthews and Monica Wilson, *Freedom for My People: The Autobiography of Z.K. Matthews: South Africa, 1901-1968* (Cape Town: David Philip, 1981), 62.

[2] Erez Manela, *The Wilsonian Moment: Self-Determination and the International Origins of Anticolonial Nationalism* (Oxford: Oxford University Press, 2007).

[3] Walshe Peter, *The Rise of African Nationalism in South Africa: the African National Congress, 1912-1952* (Berkeley: University of California Press, 1971), 61–66; Karis Thomas and Carter Gwendolen M., eds., *Protest and hope, 1882-1934. From protest to challeng : a documentary history of African politics in South Africa, 1882-1964. Vol.1* (Stanford, Calif.: Hoover Institution Press, 1972), 137–42.

サ族である、あるいはツワナ族である、あるいはズールー族であるなどと。これらの部族のどれも進むべき道を自身で決めることのできる民族の名簿に登録されてはいないのだ」[4]。マシューズの回顧するフォートヘア大学での民族自決の原則をめぐる議論は、南アフリカ史における中心的な問いである「南アフリカ人とは誰か」に正面から向き合うものであったのだ[5]。

政治学者のマムダニは、アフリカ国家論における古典的著作『市民と臣民』において、アフリカ植民地統治は、都市の文明社会に住むヨーロッパ人と農村の部族社会に住むアフリカ人という境界を設定し、それぞれを別個の法体系の下に置く二重化された統治体制を作り上げたと主張した[6]。本章はこの分岐国家へのマシューズの批判を検討し、解放闘争において彼がいかにして包括的であり、かつ平等な社会を構想しようとしていたかを明らかにする。マシューズの政治思想の発展を、彼の人類学的研究（「原住民法」及びロロン人に関する歴史民族誌的研究）と合わせて分析することで、本章は、マシューズが人類学的研究によって得た知見が、ヨーロッパ人とアフリカ人を分けて統治する植民地体制への批判的視点をもたらし、彼が南アフリカにおける自由主義の改革を担い、その後の解放運動における思想的基盤を築くことにつながったと主張する。

一般的なマシューズ像は、ケープ植民地のリベラリズムの思想的伝統を受け継ぎ、かつ国際的な視野を持った政治家というものである[7]。マシューズが人種隔離体制への反対運動において果たした役割については、特に運動への思想的影響という側面で広く認知されている。例えば、南アフリカにおける人権思想の歴史をたどったデュボウは、「アフリカ人の主張（Africans' Claims in South Africa）」や「自由憲章(Freedom Charter)」という解放運動の思想的要綱を規定した文書の策定におけるマシューズの影響を指摘する[8]。大西洋憲章や世界人権宣言を想定しつつ書かれた、こ

---

[4] Matthews and Wilson, *Freedom for My People*, 68.

[5] この問いをめぐる主要な議論としては、ベネディクト・アンダソンの「想像の共同体」論を引きつつ解放闘争の下で国民像が形成されたとするチプキンの著作が挙げられる。Ivor Chipkin, *Do South Africans Exist? Nationalism, Democracy, and the Identity of the People* (Johannesburg: Wits University Press, 2007).またポストアパルトヘイト後の外国人排斥暴動を受けて、国籍・市民権に関する多くの研究がなされた。代表的なものとしては以下の３冊がある。Sally Peberdy, *Selecting Immigrants: National Identity and South Africa's Immigration Policies, 1910-2008* (Johannesburg: Wits University Press, 2009); Audie Klotz, *Migration and National Identity in South Africa, 1860-2010* (Cambridge: Cambridge University Press, 2013); Jonathan Klaaren, *From Prohibited Immigrants to Citizens: The Origin of Citizenship and Nationality in South Africa* (Cape Town: University of Cape Town Press, 2017).

[6] Mahmood Mamdani, *Citizen and Subject: Contemporary Africa and the Legacy of Late Colonialism* (Princeton: Princeton University Press, 1996).マムダニはその後の著作において、この間接統治のモデルが、イギリス領インドの統治実践と、ヘンリー・メイン（Henry Maine）の比較法学研究から派生したものであると論じている。Mahmood Mamdani, *Define and Rule: Native as Political Identity* (Cambridge, Mass: Harvard University Press, 2012).

[7] このマシューズ像は、彼の自伝を編纂し、またそこに自身の回顧録を挿入した人類学者モニカ・ウィルソンと、マシューズより若い世代の政治家の回顧録の影響によるところが大きい。Matthews and Wilson, *Freedom for My People*; Nelson Mandela, *Long Walk to Freedom: The Autobiography of Nelson Mandela.* (Randburg: Macdonald Purnell, 1994).

[8] Saul Dubow, *South Africa's Struggle for Human Rights*, Jacana Pocket Series (Auckland Park, SA: Jacana, 2012), 55–63, 70–74.

れらの文書は南アフリカにおけるアフリカ人の権利主張が、国際的な言説を利用しつつ行われたことを示すものである。また、イェール大学、及びロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（LSE）への留学、ニューヨークのユニオン神学校での客員教授、ボツワナ国連大使という彼の経歴も、事実、国際的視野を持つ政治家としてのマシューズ像を支えるものである。しかし、この像からは、マシューズが人類学、特に原住民法や「部族」の歴史調査というアフリカ人統治行政と密接に関わる分野の研究と教育を行っていた点が抜け落ちてしまう。しかし、この専門性こそが（またボツワナ大統領カーマとの「部族的な」つながりが）、マシューズが人種隔離政策・アパルトヘイト体制のもとにあった南アフリカを超えて国際的に活躍することを可能にしていたのである。本研究は、マシューズの人類学的研究の展開をたどることで、アフリカ人統治行政との密接な関係を持っていた彼の人類学的研究こそが、マムダニの述べるような「市民」と「臣民」の分離統治体制[9]自体への批判へと彼を向かわせ、南アフリカに居住するすべての人々が南アフリカに住むというその事実によって平等の権利を持つという主張へと繋がっていく過程を描く。

0.2. 本章の視点

本章はマシューズの政治思想の展開を、1. 国際的な権利言説、2. 人類学と統治行政の結び付き、3. 解放運動における歴史の利用という三つの視点から分析する。第一に、1930 年代から 50 年代にかけての南アフリカにおける黒人抵抗運動を国際的な政治状況の中に位置づけて論じる。この点に関しては既に多くの二次文献が存在する。一方で、グローバル・ガバナンス論の観点から植民地主義と国際統治機構の理念的なつながりが、特に南アの政治家ヤン・スマッツを中心に近年盛んに論じられている。白人には「国民」としての一体感の醸成を求め、アフリカ人は「部族」に押し込めるという南アフリカの人種隔離政策の祖型を作った人物を一人挙げるとすれば、20 世紀前半の南アフリカにおいて最も重要な政治家ヤン・スマッツであり、国際連盟・国際連合の設立を中心に国際関係・政治思想史の分野におけるスマッツへの関心が、彼の国際統治論をその明白な人種差別意識を捨象することなくいかに論じるかという観点を中心に、高まっているのだ[10]。 他方で、反植民地主義・独立運動史においては、国際的な権利言説の利用が分析されてきた。それらの研究は、ウィルソンの 14 か条や大西洋憲章などの、国際的な政治潮流、委任統治制

---

[9] Mamdani, *Citizen and Subject*.

[10] Mark Mazower, *No Enchanted Palace: The End of Empire and the Ideological Origins of the United Nations* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 2013), chap. 1; Saul Dubow, "Smuts, the United Nations and the Rhetoric of Race and Rights," *Journal of Contemporary History* 43, no. 1 (January 2008): 45–74, https://doi.org/10.1177/0022009407084557; Jonathan Hyslop, "Segregation Has Fallen on Evil Days : Smuts' South Africa, Global War, and Transnational Politics, 1939–46," *Journal of Global History* 7, no. 3 (November 2012): 438–60; Shula Marks, "White Masculinity: Jan Smuts, Race and the South African War," *Proceedings of the British Academy* 111 (2001): 199–223; Noel Garson, "Smuts and the Idea of Race," *South African Historical Journal* 57, no. 1 (January 1, 2007): 153–78, https://doi.org/10.1080/02582470709464714; 五十嵐元道「ヤン・スマッツの委任統治論──平和構築の思想的起源」遠藤乾『グローバル・ガバナンスの歴史と思想』(有斐閣, 2010).

度などの国際統治機構の形成という文脈の中で、反植民地闘争がどのように展開してきたのかを特にパンアフリカニズムとの関係において描いてきた[11]。そして、タンボ（Oliver Tambo）やマンデラ（Nelson Mandela）、あるいはガンジーといったより著名な政治家ほど注目されることはないが、南アフリカ国内の人種隔離政策への抵抗を国際的な権利言説に接合する上で中心的な役割を果たしたのが、マシューズであった。本章は、マシューズの政治活動家としてのキャリアを、特に彼が国際的な権利言説をどのように活用しようとしたかに注目して、たどる。アメリカ黒人史と外交史をつなごうという潮流[12]、及び外交史における国家以外の主体を対象とした研究の発展[13]によって、国連を中心とした国際的なアリーナにおける反アパルトヘイト運動は様々な角度から分析されてきた[14]。それに対して、本章は、マシューズの人類学研究及び原住民統治行政への教育者・政治家としての関わりという、国際的な視野を持った政治家の、非常に土着的な活動を検討することを通して、国際的なアリーナと南ア国内の隔離と抵抗運動との間の人と思想の往還を描く。そしてこの往還の過程で、反アパルトヘイト運動で用いられる国民、主権、自治、人権、市民権といった理念が鋳直されていく、その様態を明らかにする。

次に、マシューズの思想的な背景を人類学、及び原住民統治行政との関わりから明らかにする。マシューズの原住民統治行政との関わりは、マシューズと同時代の ANC の活動家であるアルバート・ルツーリ(Albert Luthuli)やマンデラと違い、主に思想的・教育的側面に限られている[15]。また、南アフリカにおける人類学と人種隔離体制との結びつきは、すでに数多くの研究によって指

---

[11] Manela, *The Wilsonian Moment*; Elizabeth Borgwardt, *A New Deal for the World : America's Vision for Human Rights* (Cambridge, MA: Belknap Press of Harvard University Press, 2005); Penny M. Von Eschen, *Race against Empire: Black Americans and Anticolonialism, 1937–1957* (Ithaca, NY: Cornell University Press, 1997); Ryan M. Irwin, *Gordian Knot: Apartheid and the Unmaking of the Liberal World Order* (Oxford: Oxford University Press, 2012); Steven Gish, *Alfred B. Xuma : African, American, South African* (London: Macmillan, 2000); Dubow, *South Africa's Struggle for Human Rights*.

[12] Brenda Gayle Plummer, *Rising Wind: Black Americans and U.S. Foreign Affairs, 1935-1960* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1996); James Hunter Meriwether, *Proudly We Can Be Africans: Black Americans and Africa, 1935-1961* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2002); Von Eschen, *Race against Empire*.

[13] Akira Iriye, "Internationalizing International History," in *Rethinking American History in a Global Age*, ed. Thomas Bender (University of California Press, 2002), 47–62.

[14] Newell M. Stultz, "Evolution of the United Nations Anti-Apartheid Regime," *Human Rights Quarterly* 13, no. 1 (1991): 1–23, https://doi.org/10.2307/762456; Dubow, "Smuts, the United Nations and the Rhetoric of Race and Rights"; Irwin, *Gordian Knot*.

[15] アフリカ民族会議の議長であり、ノーベル平和賞の受賞者であるルツーリは、1951 年に制定されたバンツー権限法（Bantu Authority Act）に基づいて南アフリカ政府によって解任させられるまで、ナタール州のキリスト教徒コミュニュティの伝統的首長を務めていた。A. J. Luthuli, *Let My People Go: An Autobiography* (London: Fontana, 1963); Scott Couper, *Albert Luthuli: Bound by Faith* (Scottsville, South Africa: University of KwaZulu-Natal Press, 2010). 一方、マンデラは、伝統的首長への助言役の家系の生まれであり、いとこのマタンジマ（Kaiser Daliwonga Matanzima）は南ア政府によって独立させられたトランスカイの元首であった。Timothy Gibbs, *Mandela's Kinsmen: Nationalist Elites & Apartheid's First Bantustan* (Auckland Park, South Africa: Jacana Media, 2014).

摘されてきた[16]。しかし、本章は、統治行政と深い関わりを持つ研究に携わることこそが、人種隔離体制の基礎である、民族と部族（nation-tribe）あるいは、市民と臣民(citizen-subject) という権利を持つことのできる人々の境界を定める二分法それ自体への根本的な批判を展開することを可能にしたと主張する。具体的には、1927 年原住民行政法を背景として執筆された原住民法に関する修士論文、30 年代後半のロロン人に関する人類学的調査、及び 1936 年原住民信託土地法によって設立された原住民代表審議会（Native Representative Council, NRC）の議員としての活動に注目し、そこに現れたマシューズのアフリカ人統治への批判的視点を分析する。

最後に、マシューズの思想の特徴を、運動における歴史の利用という観点から他のアフリカ人活動家の言説と比較することを通して、明らかにする。マシューズに対する評価は、彼より古い世代から見るのか、あるいはより若い世代から見るのかによって大きく異なる。一方で、フォートヘア大学時代の恩師で、のちに同僚となった D.D.T. ジャバヴ（Davidson Don Tengo Jabavu）のエリート主義と比較すれば、マシューズは 40 年代における ANC の大衆化を促した人物の一人として積極的に評価されうるだろう[17]。他方、彼の教え子を含む若い世代にとってはマシューズの政治姿勢は妥協的なものと感じられただろう。ANC 青年同盟（ANC Youth League）を結成し、ANC の急進化を促したこの世代にとっては、政府への請願を活動の中心とし、政府が組織した原住民代表審議会の議員でもあったマシューズの、国家内部において段階的に変革を求めるという政治的姿勢は、乗り越えられるべきものであった[18]。彼の原住民行政の講義は時代遅れと感じられたし、また政府は交渉すべきものではなく必要があれば武力によって転覆させるべきものと考えられた。しかし、思想的に見るならば、青年同盟のアフリカニズムは、アフリカ人のみが、原住民/native であるというその事実によって南アフリカに居住する権利を持つとする点で、分岐国

---

[16] 南アフリカにおける人類学とアフリカ人統治の結び付きを分析した研究は非常に多いが、代表的なものは以下の通りである。Robert Gordon, “Early Social Anthropology in South Africa,” *African Studies* 49, no. 1 (January 1990): 15–48, https://doi.org/10.1080/00020189008707715; Hammond-Tooke W. D., *Imperfect interpreters : South Africa Anthropologists* (Johannesburg: Wits University Press, 1997); Sekibakiba Peter Lekgoathi, “‘Colonial’ Experts, Local Interlocutors, Informants and the Making of an Archive on the ‘Transvaal Ndebele’, 1930-1989,” *The Journal of African History* 50, no. 1 (2009): 61–80; Saul Dubow, *Racial Segregation and the Origins of Apartheid in South Africa, 1919-36* (Houndmills: Macmillan, 1989); Saul Dubow, *Scientific Racism in Modern South Africa* (Cambridge: Cambridge University Press, 1995).

[17] Catherine Higgs, *The Ghost Of Equality: The Public Lives of D.D.T. Jabavu of South Africa, 1885-1959* (Athens: Ohio University Press, 1997). ANC の大衆化については、Tom Lodge, *Black Politics in South Africa since 1945* (London: Longman, 1983), chaps. 1–2.及び Gish, *Xuma*, chap. 5.を参照

[18] この世代の中心人物としては、アダムズ学院での同僚であったレンベデ（Anton Lembede）、ANC からの分派パンアフリカ会議（Pan African Congress, PAC）の設立者であるムダ（A.P. Mda）とソブクエ（Robert Sobukwe）、またフォートヘア大学での教え子であるマンデラがいる。Anton Muziwakhe Lembede, *Freedom in Our Lifetime : The Collected Writings of Anton Muziwakhe Lembede* (Cape Town : Kwela Books, 2015); A. P. Mda, *Africa’s Cause Must Triumph: The Collected Writings of A.P. Mda*, ed. Robert R. Edgar and Luyanda ka Msumza (Cape Town, South Africa: Best Red in association with African Lives, 2018); Benjamin Pogrund, *Robert Sobukwe: How Can Man Die Better*, New edition (Johannesburg: Jonathan Ball Publishers, 2015); Adam Sitze, “Mandela and the Law,” in *The Cambridge Companion to Nelson Mandela*, ed. Rita Barnard (New York: Cambridge University Press, 2014), 134–61.

家における価値を反転させたものであり、この国家体制の基盤である二分法それ自体を問うことはなかった。青年同盟は確かに新しい指導者を輩出したものの、闘争の中心となる新たなイデオロギーを生み出したわけではなかったという、歴史家グレイザーの見解[19]が正しいとするならば、40 年代以降の ANC の中心的なイデオロギーとなった、人種に関わらず法の下での平等を求めるという意味での「非人種主義(non-racialism) 」の形成及びその思想が宣言された文書である自由憲章の成立の原動力[20] を、青年同盟以外に求めなくてはならない。そして、この新しい解放イデオロギーの構築という点においてマシューズは重要な位置を占めるのである。

Z. K. マシューズの政治的姿勢の変遷を概観して感じるのは、年を追うごとに急進的な方向へと振れていくということだ。1956 年に国家反逆罪で法廷に立つまで、マシューズはリベラルな知識人として、またアフリカ人政治家の中での穏健派として、白人政治家たちに認識されてきた。しかし、大学教員としての生活を送ってきたマシューズの晩年は、人種隔離政策を強権的に推し進める国家との対立に費やされた。バンツー教育法後のフォートヘア大学改変（「コーサ族」の部族大学に再編する）への抗議としての辞職、自由憲章の起草の提案、ANC 青年同盟に同調しての暴力革命も辞さないという演説での意見表明、そして最後は南アを離れてボツアナ国連大使として訪れていたニューヨークでの客死と、1950 年代半ばからの彼の人生は、それまでの教員・研究生活を中心としたものとは対照的に波乱に満ちたものだった。本章は、マシューズの政治思想を彼の人類学者としての研究と結びつけて論じることで、晩年の国家との対立をそれ以前の彼の政治姿勢からの飛躍としてみるのではなく、30 年代からの人類学研究と大学での講義という地道な日々の歩みによって準備されてきたものとして捉え直す。

0.3. 伝記という形式

序節の最後にマシューズという個人から 20 世紀半ばの解放闘争のイデオロギーの変容を分析する際の利点と制約について述べておきたい。本章は、マシューズの思想の発展をたどるという点で、伝記的な手法を取っているといえる。しかし、現在の南アフリカにおける歴史研究においては、伝記研究への忌避、あるいは警戒感が存在する。アパルトヘイト終焉後、活動家の回顧録また伝記が数多く出版された。その多くが自己あるいは記述の対象を英雄として描くものだ。この状況を踏まえて、ラソールは、伝記研究の集合体が、解放運動が理性的なリーダーの合理的な行動によって指導され、アパルトヘイトを終わらせたのだという幻想を作り出していると指摘する[21]。またヘイスロップは、ラソールへの応答において、伝記という形式それ自体が批判的姿勢を

---

[19] Clive Glazer, *The ANC Youth League* (Auckland Park, South Africa: Jacana Media, 2012), 159.

[20] David Everatt, *The Origins of Non-Racialism: White Opposition to Apartheid in the 1950s* (Johannesburg: Wits University Press, 2009); Raymond Suttner, Jeremy Cronin, and Patrick Lekota, *50 Years of the Freedom Charter* (Pretoria, South Africa: Unisa Press, 2006).

[21] Ciraj Rassool, "Rethinking Documentary History and South African Political Biography," *South African Review of Sociology* 41, no. 1 (April 1, 2010): 28–55, https://doi.org/10.1080/21528581003676028.

欠くジャンルであるというラソールの指摘は妥当ではないとしながらも、現在の南アにおける反アパルトヘイト運動の歴史が、ANC 中心主義に陥っているという点では同意している[22]。本章はZ.K.マシューズという 20 世紀半ばの ANC の中心人物の一人を対象とするという点で、まさに現在の解放運動史が抱える陥穽に嵌ってしまっていると思えるかもしれない。しかし、本章は、マシューズ個人の解放運動への貢献を主眼とするのではなく、彼をいわば思想の交差点[23]として捉えることで、広く 20 世紀半ばの南アの思想状況を明らかにすることを目指す。その際に重要となるのは次の二点である。

第一に、マシューズが論文を発表する、あるいは集会でスピーチをする、その際に彼が批判の対象とする政策の理論的前提と、また彼自身が影響を受けた思想とのつながりを明らかにする。このことは、人類学者や行政官、あるいはスマッツのような政治家とマシューズとの緊張関係を含んだ人脈と、彼らとマシューズとの共有された政治的前提を把握することにつながる。この点はより抽象的に述べるならば、マシューズの思想が統治と抵抗との往復から生み出されたものであるという理解につながるだろう。アフリカ人統治と一見すると協力的な関係を持っていたのはマシューズに限られているわけではなく、初代 ANC 議長デュベ（John Dube）や先に述べたルツーリ、マンデラなど多くの活動家に見られる特徴である[24]。しかし、人類学者であり、原住民法・原住民行政の専門家であったマシューズの著述及び演説には、先に述べた分岐統治体制への反論が最も綿密にまた原理的な形で表れているのだ。

第二に、本章はマシューズの政治的主張の中でも、ANC の綱領となる文書に加え、政府設置の委員会での発言および委員会の報告書への批判を重視する。人種隔離政策の基礎を築いたとされ

---

[22] Jonathan Hyslop, “On Biography: A Response to Ciraj Rassool,” *South African Review of Sociology* 41, no. 2 (June 1, 2010): 104, https://doi.org/10.1080/21528586.2010.490387. ヘイスロップ自身、スコットランド出身のサンジカリスト・ベインの伝記の著者であり、彼は、伝記が南アフリカの政治文化を綿密に描くことのできる形式であるとラソールを批判している。個人を通して、より広く南アフリカ社会を分析するという点に重点を置いた伝記研究のもっとも優れたものとして以下の 3 点を挙げることができるだろう。Charles Van Onselen, *The Seed Is Mine: The Life of Kas Maine, a South African Sharecropper 1894-1985* (Cape Town: David Philip, 1996); Jonathan Hyslop, *The Notorious Syndicalist: J.T. Bain, a Scottish Rebel in Colonial South Africa* (Johannesburg: Jacana, 2004); Hlonipha Mokoena, *Magema Fuze: The Making of a Kholwa Intellectual* (Scottsville, South Africa: University of KwaZulu-Natal Press, 2011).

[23] 社会学者の佐藤は、ライフヒストリー研究において個人を最小の単位とするのではなく、様々な社会的事象が交差する場（「フィールドとしての個人」）として捉えるべきではないかという論点を提示している。佐藤健二「ライフヒストリー研究の位相」『社会調査史のリテラシー―方法を読む社会学的想像力』新曜社、2012 年。

[24] 歴史家のマークスは、投票権や土地の所有権を求めるという近代主義的な活動家が同時に首長との結びつきを重視する伝統主義者であるという一見すると矛盾する状況が生じるメカニズムを、「従属における曖昧さ」を鍵概念として説明する。Shula Marks, *The Ambiguities of Dependence in South Africa: Class, Nationalism, and the State in Twentieth-Century Natal* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1986).フォートヘア大学入学時のマンデラは、法廷通訳を目指しており、そのための学習の一環としてマシューズが担当する原住民行政の講義に出席していた。Tom Lodge, *Mandela: A Critical Life* (Oxford: Oxford University Press, 2006), 9–10.

る、南アフリカ戦争直後の南アフリカ原住民政策委員会（South African Native Affairs Commission, 1903-1905）から、アパルトヘイト体制のほころびが明白になり、その修正を迫られた時期に開催されたリッカート及びヴィーハン委員会（Riekert and Wiehahn Commissions, 1977-1981）まで各年代の重要な政府委員会を検討したアシュフォースは、政府は必ずしも委員会の勧告に従ったわけではないが、各委員会はその後に政府が推し進めようとする政策の理論的基礎を提供してきたと主張し、委員会は総体として白人政府が「原住民」の福祉を人種隔離体制によって管理する一連の政策に「正当化の図式」を与えるものであったと結論する[25]。委員会が政府の推し進める政策に学術的な裏付けを付与するものであったという点は、マシューズ自身指摘するものでもある[26]。それゆえにマシューズの政府委員会における発言、また報告書への批判は、彼個人の観点というだけではなく、人種隔離政策に対して—それは年を追うごとに強化され、またその基礎付けは複雑になるのであるが—抵抗運動がいかに思想的な対抗策の端緒を見出したのかを明らかにすることにつながるのだ。

第 1 節　ミッション・エリートから人類学者へ

マシューズは、ダイヤモンド鉱山によって発展した都市キンバレーのロケーション（都市近郊のアフリカ人が居住することを定められた地区の法的名称）に、1901 年に生まれた。「私が見た初めての白人はバードという名前のロケーション管理官だった」と、彼は自伝を書き始める。マシューズは、バードがアフリカ人の警察官を引き連れて、パスを持たずにロケーションに滞在する人々を捕まえようとする、その喧騒の場面を描き、捕らえられた人々が「白人の恐るべき世界」へと消えていくことによって終わるこの出来事が、子供の彼に恐怖心を植え付けるものであったと回顧する。そしてマシューズは、この子供時代の体験を、彼がこの草稿を書いている時点（1953 年の 3 月）で直面している国家権力との対立と結び付ける。息子のジョー（Joe Matthews）は前年の不服従運動（Defiance Campaign）を指揮した廉で訴追され、アフリカ人に機会の平等を求める Z.K.マシューズ自身のスピーチも「法を逸脱した狂信的な」内容であると国会で糾弾されたのである[27]。しかし彼と白人との関わりは、抑圧という側面だけではなかった。その生涯においてマシューズは宣教師が設立したアフリカ人教育機関を中心とした、南アフリカにおけるリベラリズムの伝統と深い関わりを持っていた。マシューズはアフリカ人のエリート校ラブデール学院で教育を受け、設立間もないフォートヘア大学に進学し、アフリカ人として初めてとなるアフリカ国内での学士号を取得した。そして、1936 年から 1959 年に辞職するまでフォートヘア大学でアフリカ人としては二人目の専任教員として教鞭をとった。紛れもなく輝かしい経歴である。しかし、

---

[25] Adam Ashforth, *The Politics of Official Discourse in Twentieth-Century South Africa* (Oxford : Clarendon Press, 1990), 252–54.

[26] Zacharia Keodirelang Matthews, “Civil Rights for Africans and the Tomlinson Report.” (1956), http://uir.unisa.ac.za/handle/10500/6309.

[27] Matthews and Wilson, *Freedom for My People*, 1–3.

マシューズと宣教及びそれが体現する近代性[28]との関わりは、南アフリカにおけるツワナ人への宣教の歴史の最初期に改宗した祖父母から始まる家族の歴史を含めて、考えられるものである。実際にマシューズの父はキンバレー・ロケーションに土地を所有し、白人が経営する飲食店で働いた後に友人と共同でカフェを開き、また父方の祖父も運送業に携わるなど、典型的なミッション・エリートの家系に生まれた[29]。そして、宣教師が植民地化の過程で、「意識の植民地化(colonization of consciousness)」の先鞭を着けたとするコマロフ夫妻の議論を受け入れるならば、マシューズは、キリスト教への信仰と資本主義の精神が生を意味付ける植民地空間、それもとりわけ濃密な空間に生まれ育ったということができるだろう[30]。それではなぜミッション教育の粋と考えられる人物が、伝統社会の決まりをあらわす原住民法を専門とし、特定の「部族」の歴史を調査するに至ったのか。この点を明らかにするためには、彼の学校教育とともに、ナタール州原住民教育視学官ロラム（Charles T. Loram）との関係に言及しなくてはならない。

1.1. フォートヘア大学

フォートヘア大学に進学するまでのマシューズの経歴はまさにミッション・エリートの典型である。キンバレーの宣教師団が運営するユナイテッド・ミッション・スクール及びリンドハースト・ロード・スクールを卒業後、アンドリュー・スミス奨学金を得て、ケープ州グラハムズ・タウン近郊の町アリスの由緒あるラブデール校に進学する[31]。スコットランド宣教団によって運営

---

[28] 宣教師及び彼らが持ち込んだ聖書の近代性への改宗したアフリカ人知識人との関わりに関しては、David Attwell, *Rewriting Modernity: Studies in Black South African Literary History* (Athens: Ohio University Press, 2005).を参照。

[29] アフリカ人の土地の所有権がミッションエリートにとって最重要の課題であったことは設立間もない ANC が 1913 年土地法への反対を目的としてイギリスに代表を派遣していることからも明らかである。Sol T. Plaatje, *Native Life in South Africa, before and since the European War and Boer Rebellion* (Johannesburg: Ravan Press, 1982); Keith Breckenridge, “African Progressivism, Land, and Law: Rereading Native Life In South Africa,” in *Sol Plaatje’s Native Life in South Africa: Past and Present*, ed. Brian Willan, Bhekizizwe Peterson, and Janet Remmington, (Johannesburg: Wits University Press, 2016), 175–95. アフリカ人ミッションエリートにとって運送業が重要な収入源であったことについては、Norman Etherington, *Preachers, Peasants and Politics in Southern Africa, 1835-1880: African Christian Communities in Natal, Pondoland and Zululand* (London: Royal Historical Society, 1978), 124-26.を参照。

[30] Matthews and Wilson, *Freedom for My People*, 9–12.コマロフ夫妻は、「意識の植民地化」を、世界を表象する象徴の意味付け、生産様式、及び言語という三つの側面において宣教師がアフリカ人の世界観に変容をもたらす過程として説明する。John L. Comaroff and Jean Comaroff, “The Colonization of Consciousness in South Africa,” *Economy and Society* 18, no. 3 (August 1, 1989): 267–96, https://doi.org/10.1080/03085148900000013.この論文で提示された、彼らの議論は、ツワナ人へのロンドン宣教団（London Mission Society）の宣教の歴史という、まさにマシューズの家系と直接関わる事例を対象とした浩瀚な二巻本によって詳述されている。Jean Comaroff and John L. Comaroff, *Christianity, Colonialism, and Consciousness in South Africa* (Chicago: University of Chicago Press, 1991); Jean Comaroff and John L. Comaroff, *The Dialectics of Modernity on a South African Frontier* (Chicago: University of Chicago Press, 1997).

[31] Matthews and Wilson, *Freedom for My People*, 16–29. リンドハースト・ロード校はキンバレーにおけるエリート校であり、マシューズは、当時同校の教師であった。サイラス・モレマと出会っている。

され、マシューズの義父ボクエ（John Knox Bokwe）[32]を含め多くのアフリカ人エリートを輩出してきた同校でマシューズは優秀な成績を収め、教員からの推薦を受けて、1918 年にその 3 年前に設立されたばかりのフォートヘア大学に進学することとなった[33]。

フォートヘア大学の設立経緯は、アフリカ人教育に対する南ア政府の背反した姿勢を反映している。フォートヘア大学開校以前、アフリカ人は南アフリカ国外に大学教育の機会を求めなくてはならなかった。それゆえ、第３章で見たジャバヴやデュベのようにマシューズより上の世代のアフリカ人知識人は、イギリスあるいはアメリカにおいて大学教育を受けていた。フォートヘア大学の設立に向けた動きは、直接的には D.D.T. ジャバヴの父ジョン・テンゴ・ジャバヴ（John Tengo Jabavu）の政府への働きかけに起因する。南アにおけるアフリカ人が経営権を所有する最初の新聞 Imvo zaBantsudu (The Voice of Africans)の発行人であり、アフリカ人男性もヨーロッパ系住民と同様の基準で投票権を得ることができたケープ植民地において政治的影響力を有していたジョンは、1903 年から 05 年にかけて開かれた南アフリカ原住民問題会議においてアフリカ人向けの大学設置の必要性を説き、新聞紙上においてアフリカ人専用大学の設置を目指すキャンペーンを行う[34]。白人政府の側にも、黒人専用の大学を設置することに利点を見出す要素はあった。それは、ヨーロッパ系住民のみに入学を許可する大学の現状を維持するということだけではなく、アフリカ人エリートの一部を南アフリカ国内の監視の届く範囲に留め置くことができるという利点である。フォートヘア大学の設置は海外の大学への留学、特にアメリカへの留学中に、アメリカ黒人の影響を受けて南アの黒人が急進化するという当時問題視されていた傾向への抑止策の一環でもあったのである[35]。そして、マシューズは、このような経緯で設立されたフォートヘア大学に 1918 年に入学した。マシューズはその年に入学した 5 名の学生のうちの一人であった[36]。

モレマは、その後スコットランドで医師免許を取得し、南アフリカに帰国後、開業医として働く傍ら歴史書『アフリカ人の現在と過去』、またモンチィワというロロン人の首長の伝記を記している。S. M. Molema, *The Bantu-Past and Present.*, reprint (Cape Town: Struik, 1963); S. M. Molema, *Montshiwa 1815-1896: Barolong Chief and Patriot*, reprint (Cape Town: Struik, 1966). 本章第二節で述べるようにマシューズはロロン人の調査において、モレマから助言を得ている。モレマに関しては、以下の博士論文を参照。Jane Starfield, “Dr S. Modiri Molema (1891-1965): The Making of an Historian” (Ph.D. Thesis, University of the Witwatersrand, 2008), http://wiredspace.wits.ac.za/handle/10539/5872.

[32] 自身牧師であったボクエはコーサ人の初期改宗者ンチカーナの伝記で知られる。Bokwe John Knox, *Ntsikana. The Story of An African Hymn* (Lovedale: Lovedale Mission Press, 1904).アットウェルはこの著作がコーサ人の歴史をキリスト教改宗者の観点から、また同時に宣教の歴史をコーサ人の観点から書き換えるものであったと指摘する。Attwell, *Rewriting Modernity*, chap. 2.

[33] Matthews and Wilson, *Freedom for My People*.

[34] Catherine Higgs, *The Ghost of Equality: The Public Lives of D.D.T. Jabavu of South Africa, 1885-1959* (Athens: Ohio University Press, 1997), 32–34.フォートヘア大学の歴史については、Daniel Massey, *Under Protest: The Rise of Student Resistance at the University of Fort Hare* (Pretoria: Unisa Press, 2010)も参照。

[35] James T. Campbell, *Songs of Zion: The African Methodist Episcopal Church in the United States and South Africa* (New York: Oxford University Press, 1995), 249–50.

[36] Matthews and Wilson, *Freedom for My People*, 50.

当時アフリカ大陸唯一のアフリカ人高等教育機関であったフォートヘア大学には南アフリカ国内だけではなく、南北ローデシア、ニアサランドなど他のイギリス領アフリカからも入学者が来ており、マシューズは、この多文化的な環境が、アフリカ人が部族主義を超えて協調することが可能であることの実質的な証明であったと回想する[37]。

フォートヘア大学の学生であった時期を回顧するマシューズの筆致からは、アフリカ大陸におけるアフリカ人の最初の高等教育機関として、初めての学生として失敗することは許されないという緊張感が伝わってくる。彼は慢性的な疲労を覚えながらも、勉学に励み、1923 年に通信制の南アフリカ大学の試験を受け学士号を取得する（この時点ではフォートヘア大学では、教育のみ行い、卒業試験は別に受ける必要があった）。卒業後、マシューズは、アメリカン・ボードがナタール州で運営するアダムズ校ハイスクール部門に、初のアフリカ人校長として就任する。周囲からは無謀とも言われたが、「もし私がアダムズ校で成功すれば、同胞の教育の地平をまた少し広げることにつながる」と考え、申し出があったその場で引き受けることを決定したと言う[38]。アフリカ人の能力に疑問を付す白人社会に、自身をその反証として指し示すことが、この時期のマシューズの活動の目的であり、それはまさにデュボイスの「才能のある 10 分の 1」を体現するかのようだ[39]。そして、またデュボイスのエリート主義に呼応するかのように、彼の受けた教育は古典主義的なものであった。マシューズは英文学の講義で読んだ作家たち、またラテン語の学習で読んだ著述家たちの名前を嬉々として列挙する[40]。この点で、マシューズは、フォートヘア大学の教師であり、のちに同僚となった D.D.T. ジャバヴとともにケープ植民地のアフリカ人エリートの伝統を最もよく体現する存在であった。

しかし、1936 年にマシューズがフォートヘア大学に講師として戻ってきた時に彼が担当した科目は、社会人類学及び原住民法・原住民行政という、文明と未開というヨーロッパの二分法に従えば「未開の人々」により深く関わるものであった。マシューズのこの関心の転換を説明するためには、イギリス系南アフリカ人知識人とアフリカ人統治行政の関わりに背景として注意を払いながら、マシューズのアメリカ及びイギリスへの留学とその時期の彼の研究関心を検討しなくてはならない。

---

37 Matthews and Wilson, 126–27.

38 Matthews and Wilson, 83.

39 W. E. B. Du Bois, “The Talented Tenth,” in *The Negro Problem; a Series of Articles by Representative American Negroes of Today;* (New York: J. Pott & Company, 1903), 31–76, http://archive.org/details/negroproblemseri00washrich.

40 Matthews and Wilson, *Freedom for My People*, 71.ラブデール校のディベーティング・ソサエティを事例に、アフリカ人エリート学校における教養主義の影響を論じた論文として、Isabel Hofmeyr, “Reading Debating/Debating Reading : The Case of the Lovedale Literary Society, or Why Mandela Quotes Shakespeare,” in *Africa's Hidden Histories: Everyday Literacy and Making the Self*, ed. Karin Barber (Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, 2006), 258-277.がある。

1.2. 「バンツー法と西洋文明」

アダムズ校で教員となった後も、マシューズは学位のための勉強をやめたわけではなかった。1930 年にマシューズは通信課程で南アフリカ大学から法学学士号（LL.B）を取得する。マシューズは、彼を南アフリカ法学界の重鎮、ナタール大学教授のバーシェル（F.B. Burchell）に面会させ、法学の通信教育を受けるように促したのが、当時連邦原住民政策委員会（Native Affairs Commission）の委員を務めていたロラム（Charles T. Loram）であったと述べる[41]。第２章で述べたように、ロラムはコロンビア大学で博士号を取得し、博士論文に基づいて『南アフリカ原住民の教育』を上梓した。この著作においてロラムは、当時のアフリカ人教育が、学生にヨーロッパの古典を中心とした教養を身につけさせることに重きを置き、その内容がアフリカ人の現実の生活からかけ離れたものとなっていると指摘する。改善策としてロラムは、農業・工芸を中心とした職業訓練の重視を唱えたのである。ロラムは帰国後、ナタール州の主任教育視学官に就任し、アメリカ南部の黒人教育に大きく影響を受ける形で、新カリキュラムの作成など同州のアフリカ人教育の改革を行った[42]。マシューズはフォートヘア大学に入学するために勉学に励んだのはロラムの著作に代表される学校教育におけるアフリカ人の劣等性という臆見に反証を突きつけるためであったという[43]。

しかし、ロラムの役割はアフリカ人の教養への切望を抑圧するということだけではなかった。ロラムは、自身が視学官として巡回した先の学校で出会った優秀なアフリカ人教員をより上位の教員資格を得ることができるように、奨学金に推薦するということも行っていたのである。例えば、アダムズ校でのマシューズの同僚であり、のちに ANC の議長となるルツーリは、ロラムの教育思想に対する批判を展開する自伝の中の一箇所で、ロラムによってフォートヘア大学で学ぶための奨学金に推薦されたと書いている[44]。先に見たマシューズの法学士の取得とともに、その後のイェール大留学にもロラムの助力が大きく作用していた。ロラムは、1929 年に原住民政策委員会を辞任し、イェール大学の教育学の教授に就任した。その後、第 3 章で言及したアフリカにおける教育調査の実施以来つながりのあるフェルプス＝ストークス財団にマシューズを推薦し、自身の下で学ぶことができるように取りはからったのである[45]。

ただしイェール大学留学の開始時にマシューズの研究関心が定まっていたわけではなかった。ロラムはイェール大学での専攻として考えられる分野として、教育学、法学、人類学の３つを挙

---

41 Matthews and Wilson, *Freedom for My People*, 89. バーシェルは 1928 年にナタール原住民法典の改定委員会委員を務めている。Dubow, *Racial Segregation and the Origins of Apartheid*, 118.

42 C. T. Loram, *The Education of the South African Native* (London: Longmans, Green & Co, 1917); R. Hunt Davis, “Charles t. Loram and an American Model for African Education in South Africa,” *African Studies Review* 19, no. 2 (1976): 87–99, https://doi.org/10.2307/523566.及び本論文第 2 章を参照。

43 Matthews and Wilson, *Freedom for My People*, 46–48.

44 Luthuli, *Let My People Go*, 32–34. ルツーリは金銭上の理由から、この申し出を辞退している。

45 Charles T. Loram, “A Letter from Charles T. Loram to ZK Matthews, 30, March, 1933,” March 30, 1933, http://uir.unisa.ac.za/handle/10500/4994.

げている[46]。それでは、なぜマシューズは原住民法を研究テーマとして選んだのか。この点については、マシューズの自伝、また残された手紙も明らかにしない。しかし、1920 年代後半の連邦におけるアフリカ人統治政策をめぐる議論の状況を考慮すると、法学の素養を持った人材、特にアフリカ人統治行政と関わる分野の専門知識を身につけたアフリカ人エリートが、制定された法律の実施においても、あるいは逆に政策を批判するにあたっても、必要とされる存在であったことがわかる。

1920 年代はそれまで連邦成立以前の状況を引き継いで個別に実施されていた 4 州のアフリカ人統治政策の統合が目指された時期である。また工業化に伴うアフリカ人の都市化に対応するため、移動を管理するための法的整備が進められた。20 年代に制定された法律で、特に重要なものが、原住民都市法 Native Urban Areas Act(1923 年)と原住民行政法 Native Administrative Act (1927 年)である。前者が、労働力需要を基準としてアフリカ人の都市への移動を管理することを目指したのに対して、後者はリザーブでの統治行政を、連邦総督（Governor-General）を長とし、アフリカ人首長及びヘッドマンを末端に組み込む体制として規定した。原住民行政法は、連邦総督に宣言による立法（law by declaration）を認め[47]、アフリカ人間の紛争を裁定する機関として、首長あるいは白人行政官である原住民監督官（Native Commissioner）が裁定する原住民法廷（Native Court）が定められた。また、原住民法廷において、その裁定は原住民法（Native Law）に依拠すべきであるとされた[48]。1927 年の原住民行政法は、連邦全体の立法プロセスからアフリカ人統治に関わる法を除外するという点で、マムダニのいう「分権化された独裁制（decentralized despotism）」の法的基礎を築くものであったと言える[49]。

歴史家のデュボウが述べるように、1920 年代の人種隔離政策に理論的基礎を提供したのはロラムを含めたイギリス系の知識人たちであったが、彼らはヘルツォーク政権の進める人種隔離法案に徐々に対立する立場をとるようになる。白人リベラル知識人たちは、人種隔離それ自体に反対していたのではなく、政権が成立を目指す法案が、抑圧的であり、アフリカ人の文化を保持することよりも、白人の経済的支配に益することが明白であることに反発していたのである[50]。それゆえに、政策への批判としては、ケープ州のアフリカ人の投票権を奪うことがアフリカ人の政治への参加を奪うという平等の原則に立ったもの[51]の他に、首長や慣習法を利用した政策が、実際

---

46 Loram.

47 ただし、南アフリカ連邦総督は、イギリス王室の象徴的存在であり、実質的な政治権力は有していなかったため、実際には原住民政策長官（the Secretary of Native Affairs）がその役割を担った。

48 Howard Rogers, *Native Administration in the Union of South Africa* (New York: Negro Universities Press, 1933), 224–33.ただし、原住民法はその性格上、各部族にそれぞれの原住民法があることにあり、どの原住民法を用いるのかという問題が生じる。Martin Chanock, *The Making of South African Legal Culture 1902-1936: Fear, Favour and Prejudice* (Cambridge: Cambridge University Press, 2006), 353–54.

49 Mamdani, *Citizen and Subject*, 71–73.

50 Dubow, *Racial Segregation and the Origins of Apartheid*, 45–50.

51 Dubow, 47.

にはアフリカ人本来の生活を反映していないという文化を保存するという観点からのものが存在した。この点は、ロラムがカーネギー財団からの資金援助を得てその設立に尽力し、リベラル知識人の意見交換の場として、また調査機関として機能した南アフリカ人種関係研究所（South Africa Institute of Race Relations）での議論に明らかである。彼らは、1927 年原住民行政法及び 1932 年のナタール原住民法典（Natal Code of Native Law）改定の際に、原住民法廷や婚資の支払いなど様々な点において、アフリカ人の実際の慣習を反映していないという観点から批判的な検討を行っている[52]。以上の状況を踏まえると、ロラムがマシューズを自身の下で学ぶように促した背景には、ロラムがカーネギー財団などアメリカの財団から資金援助を呼び込みその設立に尽力した人種関係研究所に集う白人リベラルと関心を共有するアフリカ人知識人を育成するという目的があっただろう[53]。

マシューズの 300 ページを優に超える長大な修士論文「南アフリカにおけるバンツー法と西洋文明」[54]は、その期待に十二分に応えるものであった。この修士論文は、構成上、アフリカ人の文明社会への参入の実現が人種隔離を通して段階的になされるとする白人リベラルの思考に沿うものに見える。マシューズは、原住民法の定義及びその構成要素（1 章・２章）から記述を始め、その後連邦成立以前の各植民地（ケープ、ナタール、及びベチュアナランド[55]）、共和国（オレンジ自由国、トランスファール）における原住民法の法律としての承認の過程（3 章）、連邦成立後の原住民法のアフリカ人統治における利用を説明する（4 章）。このような叙述の構成を採ったという点で、マシューズの修士論文は、 既存の研究とりわけ人種関係研究所の中心人物の一人ブルッケス（Edgar Brookes）の『南アフリカにおける原住民政策の歴史』[56]に依拠しつつ、アフリカ人統治政策における原住民法の利用に焦点を絞り、そこに人類学的な知見を付け加えたものと捉えることができる[57]。また、論述が現代に近づくにつれて、1927 年原住民行政法など法律の説

---

[52] Reinallt Jones Papers, A394 C9a Natal Code of Native Law. Correspondence. 1931-1932 及び C9b Natal Code of Native law. Papers. 1931-1932. Historical Papers, Cullen Library, Wits University.を参照。

[53] ただし、第 2 章で言及したマシューズのタスキーギを含めた南部の視察記録が明らかにするように、マシューズのアメリカ留学にはアメリカ南部黒人教育について知悉し、帰国後のアフリカ人教育に活かすという目的があったことも確かである。

[54] Zacharia Keodirelang Matthews, “Bantu Law and Western Civilization in South Africa: A Study in the Clash of Culture.” (Master Thesis, Yale University, 1934), http://uir.unisa.ac.za/handle/10500/5046.

[55] ベチュアナランドは南アフリカ連邦には含まれないが、マシューズがベチュアナランドを事例として取り上げたのは、彼自身の出自によるものと想定される。

[56] Edgar Harry Brookes, *The History of Native Policy in South Africa from 1830 to the Present Day*, 2nd rev. ed. (Pretoria: Van Schaik, 1927). 南アフリカ大学へ提出した博士論文を基にして、1924 年に出版された本書の初版は、ヘルツォーク政権の人種隔離政策に理論的基礎を提供した。Dubow, *Racial Segregation and the Origins of Apartheid*, 28–29.

[57] 教育史家のクロスは、マシューズの教育思想を分析した報告において、マシューズの修士論文が、スイス人宣教師ジュノ（Henri Junod）のトンガ人を対象とした人類学的著作『南アフリカのある部族の生活(A life of a South African tribe)』を重要な参考資料として活用し、ジュノのアフリカ人の西洋文明への段階的な移行という主張とマシューズの教育観とに関連を見出している。Cynthia Kros,

明という要素が増えており、実務的な観点からの原住民法の現状の整理という面が強くなる。この点も、政策への批判的な助言を行っていた白人リベラルと関心が共通する点である。

しかし、マシューズの原住民法に関する論考は、人種隔離を前提とするブルッケスの著作とは異なり、南アフリカにおいて一つの全国民に共通の法体系を作り出す道筋を示すことを目指すものであった。マシューズは序論において、連邦成立後の南アフリカの課題は、「いかにして異なる文化的遺産と人種的背景を持つ多様な人々から南アフリカ国民を作り上げるか」であると指摘する[58]。そして、法的側面から見るとこの課題は、ローマン・ダッチ法、イギリス慣習法、アフリカ人の原住民法という異なる 3 つの法体系を、それぞれの特質を損なうことなく調和させることであると主張する[59]。マシューズはこの目的を述べた後、原住民法の定義・主な要素を挙げ、歴史的な展開を詳細に説明していく。そこでは婚資や紛争の裁定方法、罪を犯した者への罰則についての事例や、基礎となる規範及び法律が言及される。長々と続く個別具体的な解説においては、法の統一によって南アフリカ国民を造るという当初の課題は忘却されたように思えてくる。しかし、マシューズの修士論文は、その最終章において論述の方向性が大きく変化する。原住民法の展望を述べる最後の章において、マシューズは、修士論文執筆当時の南アフリカの法体系は入植者社会の法と原住民法とに分かれているが、将来的には両者を混淆した統一の法が作り出されるべきであると主張するのだ[60]。入植者社会の法と原住民法の統一を考えていたのは、マシューズに限られていたわけではない。例えば、マシューズ自身引用しているが、ブルッケスは、原住民法と入植者社会の法（ローマン・ダッチ法）の融合の可能性を指摘する。しかしブルッケス自身はその可能性に言及しながらも、「アフリカ人をヨーロッパ人とは別の人々として維持することが最も望ましい」と述べるように、原住民法を保持することは人種隔離のための支えであると考えられていたのである[61]。それに対して、マシューズはアフリカ人の生活は現在大変な速度で近

"'Deep Rumblings': ZK Matthews, 'Culture Contact' and the Eiselen Commission of Inquiry into Native Education, 1934 - 1939," in *Paper Presented at the Wits History Workshop: Structure and Experience in the Making of Apartheid, 6-10 February, 1990*, 1990, http://wiredspace.wits.ac.za/handle/10539/7859. しかし、この原住民法に関する修士論文の全体の構成は、植民地化以前の原住民法をアフリカ人のそれぞれの部族の規範を体現するものとして説明した後、連邦成立以前から現在までのアフリカ人統治政策における原住民法の利用の歴史をたどり、その過程で原住民法がいかに変容したかを説明したものとなっている。ジュノの著作は、アフリカ人牧師ソガ（James Henderson Soga）の『コーサ人』とともに、植民地化以前の部族社会の規範としての原住民法を措定するために引かれている。

58 Matthews, "Bantu Law and Western Civilization in South Africa," 2.

59 Matthews, 5. 法の統一によって国民意識を醸成するという観点は奇異に見えるかもしれないが、その背景には、法が社会の一体性を保つものであるという前提がある。例えば以下の引用を参照。"Law is concerned with the regulation of the rights and duties of the members of a particular society. Every society develops a legal system in which is enshrined what it regards as the best arrangement for the maintenance of its solidarity, for the prevention of its disintegration and for its proper adjustment to the environment in which it has to work out its existence." Matthews, 4.

60 Matthews, "Bantu Law and Western Civilization in South Africa," 354–56.

61 統一した法体系の実現可能性を論じる文脈で、マシューズは Matthews, 25.で、Brookes, *The History of Native Policy in South Africa from 1830 to the Present Day*, 202.に言及している。ただし、引用部分の直

代化しているため、過去を理想化し原住民法をそれ自体の保持を目的とするのではなく、状況に合わせてヨーロッパ法と原住民法を統一した法体系を目指すことが唯一とることのできる道であると主張する[62]。しかし、それまでの章が、実際の法律や文献に基づいて論証されているのに対して、この展望を述べた部分は説得的な論述というよりはマシューズの希望となっている。統一した法体系を導くようなアフリカ人の生活の変化を裏付ける作業は、その後のマシューズ自身も関わった調査を待たなければならなかったのである。

1.3. マリノフスキー・セミナーからロロン人調査へ

修士号を終えた段階で、マシューズはロラムの下に残るのではなく、イギリスに渡り、人類学者マリノフスキーの元で人類学を学ぶ事を選んだ。マシューズの自伝はこの選択の理由を明らかにしてはいない。それは、ルツーリと同様にマシューズもロラムの意図が人種隔離政策を維持することにあると感じたという政治的理由かもしれないし、あるいはロラムが専門とする教育学よりも、マリノフスキーの人類学に惹かれていたという学問的な理由であったかもしれない。しかし、マリノフスキーの下で人類学を学ぶということは、マシューズのその後の教員生活に、そしておそらくは政治活動に大きな影響を与えた。マリノフスキーから直接教えを受けた事実は、マシューズをヨーロッパ人人類学者の下で働く現地アシスタントとしてではなく、対等な学者として扱わせるに十分な権威づけを与えた。またマリノフスキー・セミナーにはジョモ・ケニヤッタなどのちに独立運動家、政治家として活躍する人物が出席しており、彼らとつながりを得る機会ともなった[63]。

1936 年に帰国後マシューズは母校フォートヘア大学に社会人類学及びバンツー研究を教える講師として採用された。バンツー研究は、その内容に原住民法を含むものであり、同科目の設立は、ロラムの提案が承認されたものであった。マシューズの採用は、それまで同科目を教えていたジャバヴによる推薦が大きく作用した。マシューズは、大学においてその専門を生かし、原住民行政に関わるアフリカ人官吏の育成に携わることが期待されることとなったのである[64]。

マシューズの修士論文が近代法と「部族」法という二重の法体系によって成り立つ南アフリカの統治制度を批判的に整理し、すべての国民を統一された法体系の下に置く一元的な制度を構築することの妥当性を説くものであったとすれば、マリノフスキーのセミナーを経て 30 年代後半

後でブルッケスは原住民法を別個の法として維持する必要性を指摘している。Brookes, 206.

62 Matthews, “Bantu Law and Western Civilization in South Africa,” 354–56.

63 Matthews and Wilson, *Freedom for My People*, 103–5. マリノフスキーのセミナーには、グラックマン（Max Gluckman）、クリゲ（Emily Krige）、そしてスキャペラなどその後南部アフリカの人類学研究を支える人々が集っていた。マシューズの自伝を編集したモニカ・ウィルソンもマリノフスキー・セミナーの出身者である。

64 NTS 9291 “Minutes of Meeting of Governing Council,” National Archives of South Africa, Pretoria. Minutes of Meeting of the Governing Council 21st March, 1928 (バンツー研究の設立に関して) ;Minutes of Meeting of the Governing Council 8th November,1934.(マシューズの採用に関して)

から発表された論文は、人類学的研究に基づいて修士論文の結論を裏付けようとするものだったと考えることができるだろう。

イギリスでの学会発表を基にして、南アフリカ帰国後に発表された二つの小論は、概念的なレベルで南アフリカにおけるアフリカ人統治の前提に疑問を投げかけるものであった。「アフリカ人から見たアフリカにおける間接統治」においては、アフリカ植民地統治における伝統の利用が、首長の権限という一点に集中し、しかも歴史的には首長の権限が臣民によって様々な形で制限されていたという側面を捨象していると批判する[65]。この批判は明示こそしていないが、1927 年原住民行政法において、連邦総督が最高首長（Supreme Chief）の地位にあり、宣言による立法を行うことができるとした点を踏まえている。この法律の基礎はナタール原住民法典にあり、元をたどればズールー王シャカの伝統に行き着く[66]。それに対して、マシューズの提示する首長像は、シャカのような独裁的な権力者ではなく、臣民の意見を尊重する民主的な統治者である[67]。マシューズはもう一つの論文、「教育を受けた南アフリカ人における部族の精神」においては、マシューズ自身がその典型である都市に住むミッション教育を受けたアフリカ人においても、その親族ネットワーク、すなわち「部族的なつながり」を失っていないことを指摘し、人類学が真正な伝統を保持した「部族」のみを研究対象として措定し、都市のアフリカ人を等閑視しているという現状が、現代アフリカにおける重大な課題を見落としているのではないかと問題提起を行う[68]。この点は、人類学が実際的な面において価値を持つためには、ヨーロッパ人の文明とアフリカ人の文化との衝突と混淆（当時のことばでは「文化接触（Cultural Contact）」）のプロセスの解明を課題とすべきであり、そのためには都市のアフリカ人を研究対象とすべきであるというマリノフスキーの指摘とも呼応するものである[69]。しかし、この議論は、南アにおける抗議運動の歴史を考えれば、同時に、ミッション教育を受けたアフリカ人からの抗議をアフリカ人の大部分を代表するものではないとして斥けてきた南ア政府への間接的な批判ともなっているのである[70]。

---

[65] Z. K. Matthews, “An African View of Indirect Rule in Africa,” *Journal of the Royal African Society* 36, no. 145 (1937): 433–37.

[66] Matthews, “Bantu Law and Western Civilization in South Africa,” 337–40.ナタール州の原住民政策が連邦全体の基礎となったという視点は、David John Welsh, *The Roots of Segregation; Native Policy in Colonial Natal, 1845-1910* (Cape Town, New York: Oxford University Press, 1971).によって提示されている。またアフリカ人統治政策におけるズールー王シャカの独裁的な権力者という構築されたイメージの利用については、Carolyn Hamilton, *Terrific Majesty: The Powers of Shaka Zulu and the Limits of Historical Invention* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1998).を参照。

[67] Matthews, “An African View of Indirect Rule in Africa,” 434–35.

[68] Z. K. Matthews, “The Tribal Spirit Among Educated South Africans.,” *Man* 35 (1935): 26–27, https://doi.org/10.2307/2791272.

[69] Bronislaw Malinowski, “Practical Anthropology,” *Africa: Journal of the International African Institute* 2, no. 1 (January 1929): 22–38.

[70] 例としては、1913 年土地法への南アフリカ原住民会議の反対運動に対するイギリス議会での反論をあげることができる。Correspondence relating to the Natives Land Act, 1913, including a copy of the Act (Africa, South: Natives Land Act), 19c & 20c HCPP (House of Commons Parliamentary Papers)

この二つの小論においてマシューズが提示した視点は、1935 年のイギリスからの帰国後に開始し、ケープタウン大学の人類学者アイザック・スキャペラと協力して行われたバロロン調査（ロロン人に関する人類学的調査）において詳細に裏付けられている[71]。マシューズがロロン人の調査に基づいて発表した論文は、一見するとアフリカ人統治行政との結びつきにおいて実施されてきた人類学的調査と同様のものと思われるかもしれない。しかし、マシューズがその専門としてフォートヘア大学で教えていた「原住民法」及び「原住民行政」の内容、またアフリカ人統治政策における「部族史（tribal history）」の利用を考慮すると、マシューズのロロン人の歴史及び婚姻慣習に関する詳細な記述が、アフリカ人を「伝統」の枠組みの中に押し込めようとする政府への暗黙の批判となっていることに気付く。「ロロン人における婚姻慣習」は、一つの部族の婚姻における慣習（誰と結婚することが望ましいと考えられているのか、また婚資はいかにして支払われ、それはどのような意味を持つのかなど）を説明したものである[72]。マシューズは、アフリカ人の婚姻を「慣習」として規定する法律が、ズールー人のものとされる「慣習法（Natal Code of Native Law）」にのみ依拠していることを指摘し、ロロン人の婚姻慣習を明らかにすることの重要性を強調する。また政治活動に時間を取られ、その後の研究で詳述するということはなかったが、過去の慣習が現代の都市のアフリカ人の婚姻も規定しているという指摘も行っており、「教育を受けた南アフリカ人における部族の精神」で提示した「脱部族化」という議論への反論をするための事例研究として考えられていたこともうかがわせる[73]。

一方で、「ツディ・ロロン人の部族略史」は、一見すると原住民政策省民族学部局（Native Affairs Department, Ethnographic Division）の下で収集され、首長継承の際の紛争の調停や、特定の部族の居住地を定めるための資料として利用された部族史と類似していると思われるかもしれない[74]。しかし、前章でズールー人学生のエッセイをマルコムがいかにして読んだかを分析した際に述べたように、統治のための部族史が、ヨーロッパ人との接触以前の部族の歴史を明らかにすることで、現在の脱部族化しつつあるアフリカ人が戻るべき真正な文化を記述したものと考えられていたのに対して、マシューズは彼が対象とする「ツディ・ロロン」という一つの「部族」がヨーロッパ人勢力との交渉を通して形成されていく過程を記述するのである[75]。マシューズは、ツディ・ロロンが、その首長の継承と部族の土地の境界画定をめぐって北上してきたボーア人と争い、植

---

http://reo.nii.ac.jp/hss/1000000000131190

[71] バロロン調査の開始時期に関しては、以下の手紙を参照。Z. K. Matthews, “Barolong Research: Correspondence. From Z. K. Matthews to Miss D.G. Brakett,” May 13, 1935, http://uir.unisa.ac.za/handle/10500/5064.

[72] Z. K. Matthews, “Marriage Customs among the Barolong,” *Africa: Journal of the International African Institute* 13, no. 1 (1940): 1–24, https://doi.org/10.2307/1156989.

[73] Matthews, 6.

[74] 民族学部局における部族史の収集と利用に関しては、Lekgoathi, “‘Colonial’ Experts, Local Interlocutors, Informants and the Making of an Archive on the ‘Transvaal Ndebele’, 1930-1989.”を参照。

[75] Z K Matthews, “A Short History of the Tshidi Barolong,” *Fort Hare Papers* 1 (1945): 9–28.

民地政府や時には宗主国を交えて折衝を行う、そしてその過程で宣教師の持つ技術や交渉力を利用していく様をたどる。この点で、マシューズの部族史は原住民政策省の期待にそうというよりも、アフリカ人とヨーロッパ人のそれぞれの勢力のバランスをとることで、ソト人の持つ権力を保持しようとした人物としてソト王モシェシェを描くトンプソンの伝記など、後の歴史家の仕事に連なるものであると考えることができるだろう[76]。

人類学、特に慣習法という点で、マシューズは、白人リベラルと関心を共有し、彼らとの人脈を通して自身のキャリアを築いて来た面がある[77]。しかし、その視点は微妙に異なる。ヘルツォーク政権下でのアフリカ人統治行政に関する立法への白人リベラルの批判は、同政権下で準備された法案が、白人支配を明白に利する形でアフリカ人の伝統を歪曲させた上で利用していることに焦点を当てており、分離それ自体を問題視することはなかった。一方、マシューズの「原住民」法及び人類学的研究は、アフリカ人社会の可塑性を指摘することで、人々がその人種によって異なる法の下に置かれることのない統一された法制度に基づく南アフリカの実現可能性を追求するものであった。そして、このマシューズと白人リベラルとの緊張関係（あるいは齟齬）は、1930年代を代表する南アフリカ白人知識人の一人、ヘルンレの著作『南アフリカ原住民政策とリベラル精神』(Reinhold Friedrich Alfred Hoernlé, *South African Native Policy and the Liberal Spirit: Being the Phelps-Stokes Lectures, Delivered before the University of Cape Town, May, 1939* (Cape Town: University of Cape Town, 1939).に対するマシューズの書評に明らかである[78]。

人種関係研究所の所長を務めるとともに、ヴィッツ大学の哲学科教授でもあったヘルンレの著作は、アフリカ人統治における「信託（Trusteeship）」の理念の否定という点でブルッケスやスマッツを中心とした原住民政策論からの決別を宣言するものだった[79]。ヘルンレは、まだ文明の初期にあるアフリカ人社会への西洋文明の急激な流入を防ぎ、段階的に西洋社会へと「原住民」を引き上げるというトラスティーシップによる人種隔離統治の論理が、実際には白人入植者の利益を確保し、その支配を維持するための口実にすぎなかったと、白人と黒人の分離を規定する様々

---

[76] Leonard Thompson, *Survival in Two Worlds: Moshoeshoe of Lesotho, 1786-1870* (Oxford: Clarendon Press, 1975).

[77] ただしブリケンリッジが指摘するように、アパルトヘイト終焉に至るまでほぼすべての黒人知識人は白人リベラルと彼らが築いた制度（大学・団体）に何らかの形で恩恵を受けており、マシューズが例外というわけではない。Keith Breckenridge, “Hopeless Entanglement: The Short History of the Academic Humanities in South Africa,” *The American Historical Review* 120, no. 4 (October 2015): 1265, https://doi.org/10.1093/ahr/120.4.1253.

[78] Z. K. Matthews, “‘South African Native Policy and the Liberal Spirit’: Reviews of Professor R. F. A. Hoernlé’s Phelps-Stokes Lectures,” *Race Relations Journal* 7, no. 2 (1940): 34–37.

[79] ブルッケスの、原住民政策論については、Brookes, *The History of Native Policy in South Africa from 1830 to the Present Day*.を参照。ただし、ブルッケスは、30年代以降アフリカ人統治政策に対する見方を大きく変えている。E. H. Brookes, *The Colour Problems of South Africa* (Lovedale: Lovedale Press, 1934).を参照。スマッツの統治論に関しては、Jan C. Smuts, *Africa and Some World Problems: Including the Rhodes Memorial Lectures Delivered in Michaelmas Term, 1929* (Oxford: Clarendon Press, 1930).を参照。

な法を検討した後に結論する[80]。ヘルンレはこの現実を踏まえると、彼と同様にリベラルな信条を持つ白人には三つの道が残されていると主張する。一つは、人種隔離政策を維持したままその改善を目指す方向（Parallelism）。二つ目は、人種隔離関連法をすべて取り払う方向（Assimilation）。３つ目は人種間の交渉をできるだけ取り除き、人種ごと別々の政治体制を造ることを目指す完全分離（Total Separation）という方向である。ヘルンレはこのうち、「完全な分離」こそが、リベラルな白人が現実的に望むことができる方針であると主張する。ヘルンレの後のバンツースタン政策を思わせるような「完全な分離」という主張を、マシューズは即座には否定しない。現状の段階的な改善の可能性が薄く、また人種差別的な法律を廃止しいわばカラーブラインドな社会が到来したとしても黒人の生活が良くなる保証はないということを考えれば、ヘルンレの提案は真剣に検討するに値すると述べるのである。この書評の論述は、「完全な分離」こそがリベラルが唯一とることのできる立場であるというヘルンレの見解を問題視しながらも、白人リベラルと彼らが体現する分離に基づく体制という考え方と決別しているわけではないことを示している。しかし、1940 年代に入り、ANC の急進化及び大衆化が進む時期においては、マシューズは人種隔離という考え方を捨て去っていた。これにはおそらく２つの要因が考えられる。１つ目は第二次世界大戦及び直後に発表された大西洋憲章や世界人権宣言という国際的な権利の言説と、国内のアフリカ人の権利要求を接合する過程で、南アフリカ市民であることの重要性が再認識されたということだ。２つ目は、マシューズが、彼の祖父や父が行使してきたケープ州のアフリカ人の投票権が 1936 年信託土地法によって奪われ、その代替として設置された原住民代表委員会の委員を 1942 年から務めたことに起因する。政府に対し、アフリカ人の苦境を訴え、また状況の改善をするための政策提言をするものの聞き入れられないという不満の中で、マシューズは、入植者社会とアフリカ人社会の分離という実験が失敗に終わったことを訴えるようになるのである。次節ではこの二点を中心に、マシューズの南アフリカ市民であることから来る権利を要求するという立場を検討する。

第 2 節　南アフリカ市民権の拡充を求めて

2.1. 大西洋憲章から「アフリカ人の主張」へ

1941 年にアメリカ合衆国大統領ローズヴェルトとイギリス首相チャーチルの連名で公表された大西洋憲章は、ナチス・ドイツとの戦争の目的と、戦後社会の構想を提示した。この憲章は、ローズヴェルトが同年はじめアメリカ国民に向けて発表した「４つの自由」の内容を引き継ぎ、また第一次大戦後ウィルソンが発表した１４カ条のうち、領土拡大の否定と民族自決の内容を繰り返し含むものとなっている[81]。大西洋憲章は、ボグワートが述べるように、発表直後から世界各

[80] Reinhold Friedrich Alfred Hoernlé, *South African Native Policy and the Liberal Spirit: Being the Phelps-Stokes Lectures, Delivered before the University of Cape Town, May, 1939* (Cape Town: University of Cape Town, 1939), chap. 1.

[81] “The Atlantic Charter,” Text, accessed December 20, 2018, http://avalon.law.yale.edu/wwii/atlantic.asp.

地で議論され、特にアフリカでは、チャーチルの大西洋憲章は植民地には適用されないという否定にもかかわらず、戦後の脱植民地化を推進するものとして受け入れられた[82]。しかし、大西洋憲章が、ボグワートの述べるように個人の権利を尊重する人権レジームの端緒として実際に脱植民地化の過程において影響力があったのかについては議論がある。一方で大西洋憲章への言及が、国際的人権規範の独立運動における利用を示しているという立場があり[83]、他方で脱植民地化を求める運動は個人の権利には焦点を当てず、もっぱら民族の自決を求めていたのであり、国家を超えた人権という考え方が独立運動のあり方に影響を与えたわけではなかったとする立場がある[84]。このような大西洋憲章の反植民地運動全体における影響力を論じる議論に対して、ハンターは特定の地域における大西洋憲章の用いられ方を分析する必要性を指摘する、1940 年代の独立運動期から、ウジャマー政策までのタンザニアにおける政治思想を検討したハンターは、大西洋憲章あるいは国際人権宣言への言及はたしかに世界各地の独立運動で見られるものの、それはこれらの国際的な権利言説に対する共通理解が存在したということではないと述べる。ハンターは、タンガニーカのスワヒリ語新聞において個人の権利を重視する国際的な言説が、首長によって臣民は代表される、それゆえに民主化は不要であるという植民地統治と親和的な言説を批判するために用いられていたことを明らかにした[85]。

本節では、まずハンターの視点を受け継ぎ、南アフリカ国内の文脈を重視して、同国における大西洋憲章の受容を検討する。大西洋憲章は ANC のような黒人政治団体だけではなく、議会や政党、調査団体など、様々な場で言及されていた。それゆえ、マシューズを議長とする ANC の会合において採択された「アフリカ人の主張」の分析の前に、第２次大戦期の南アフリカにおいて、大西洋憲章がどのように論じられていたかを明らかにする必要がある。白人側の大西洋憲章への言及として最も顕著な例はスマッツの議会における発言である。当時首相であり、イギリス連邦の一員として参戦を決定したスマッツは、その内部に参戦への反対派を多く抱えるアフリカーナー住民に対して、参戦の意義と、戦後、特に雇用と福祉の面で（白人内部において）公正な社会が実現されることを説かなくてはならなかった。大西洋憲章（及びビバレッジ報告書）に言及することは、そのための有力な手段であったのだ[86]。またアフリカ知識人と関係の深い人種関係研

---

82 Borgwardt, *A New Deal for the World*; Bonny Ibhawoh, "Testing the Atlantic Charter: Linking Anticolonialism, Self-Determination and Universal Human Rights," *The International Journal of Human Rights* 18, no. 7–8 (November 17, 2014): 842–60, https://doi.org/10.1080/13642987.2014.951340.

83 Ibhawoh, "Testing the Atlantic Charter."

84 Jan Eckel, "Human Rights and Decolonization: New Perspectives and Open Questions," *Humanity: An International Journal of Human Rights, Humanitarianism, and Development* 1, no. 1 (2010): 111–35, https://doi.org/10.1353/hum.2010.0008.

85 Emma Hunter, *Political Thought and the Public Sphere in Tanzania: Freedom, Democracy, and Citizenship in the Era of Decolonization* (Cambridge: Cambridge University Press, 2015), chap. 2.

86 Jeremy Seekings, "The Origins of Social Citizenship in Pre-Apartheid South Africa," *South African Journal of Philosophy* 19, no. 4 (January 1, 2000): 391–92, https://doi.org/10.1080/02580136.2000.11644285.

究所においても、大西洋憲章の南アフリカへの適用について議論が重ねられていた[87]。しかし、それは、大西洋憲章であげられた権利を南アフリカ国内のアフリカ人が得られるような道筋を考えるというのではなく、福祉や政治的権利の現状を調査し、整理するという活動に費やされた。この点については、同研究所と関わりの深いアメリカのフェルプス＝ストークス財団が会合を主催し、その後『大西洋憲章とアフリカ：アメリカの視点から』においても同様である[88]。大西洋憲章を検討していた当時の人種関係研究所に対して、ANC 議長のクマ（Alfred Xuma）[89]は、同研究所が人種隔離政策に対して明白に反対の立場を取らないのはなぜかと問いただす手紙を送っている[90]。1930 年代にはその活動が停滞した ANC であるが、クマ体制のもとで成員の大衆化と政府への対決姿勢を強めることで再び活発化した[91]。白人リベラルの集う人種関係研究所への質問状は、人種隔離政策の明確な否定という ANC の姿勢を表すものである。

クマを議長とする ANC の体制において準備され、1943 年に発表された「アフリカ人の主張」は、その付録として加えられた「権利の章典（Bill of Rights）」とともに国際的な権利言説に依拠しつつ、南アフリカ国家に対してアフリカ人の権利を主張した文書として捉えられている[92]。実際に、大西洋憲章の世界的な影響を検討する中で、ボグワートは、ネルソン・マンデラの自伝に依拠しつつ、大西洋憲章は、個々の市民が超国家的な法的規範と直接的な関係を有していると示した点で、マンデラのような活動家にとって役立つものであったと主張する[93]。またデュボウも、「アフリカ人の主張」がそれまでの ANC の活動において、政治的要望と権利に関する最も大胆で明確な主張であっただけでなく、大西洋憲章で提示された自由を真に普遍化するものであったと述べ、この点においてマシューズの貢献を指摘する[94]。

「アフリカ人の主張」は、しかし、国家に先立つ個人の不可侵の権利を主張することに主眼があるのではなく、アフリカ人にも南アフリカ市民としてその権利を享受することを可能にすることを求めることが、その要点であった。「アフリカ人の主張」は大西洋憲章の南アフリカへの適

---

87 SAIRR, “SAIRR Confidential Minutes and Memoranda, AD843 B4.8” (n.d.), Historical Papers, William Cullen Library, Wits University; “Documents Relating to Peace Aims AD1715, SOUTH AFRICAN INSTITUTE OF RACE RELATIONS (SAIRR), 1892-1974” (n.d.), Historical Papers, William Cullen Library, Wits University.

88 Committee on Africa, the War, and Peace Aims, ed., *The Atlantic Charter and Africa from an American Standpoint* (New York: The Committee, 1942).

89 Xuma の X はクリック音であり、表記が難しいため、便宜上クマと記す。英語においても、文脈があればクマで通じる。

90 SAIRR 議事録 1941 年（Historical Papers, Wits University）

91 Gish, *Xuma*.

92 Dubow, *South Africa's Struggle for Human Rights*, 55–63; Kader Asmal, David Chidester, and Cass Lubisi, eds., *Legacy of Freedom: The ANC's Human Rights Tradition: Africans' Claims in South Africa, the Freedom Charter, the Women's Charter and Other Human Rights Landmarks of the African National Congress* (Johannesburg: Jonathan Ball, 2005), 1–7.

93 Borgwardt, *A New Deal for the World*, 29.

94 Dubow, *South Africa's Struggle for Human Rights*, 57.

用という形式をとりながら、むしろ南アフリカ国民であることによって付与される権利の充実と、それが人種に関係なく与えられるべきであると主張した文書として読むことができるのである。この点は、民族自決の原則を再度説いた大西洋憲章の第３条へのコメントに明らかである。「アフリカ人の主張」は、植民地化の過程においてアフリカ人の主権が侵されたとして、その回復を求めると述べる。一方で、同文書は、アフリカ大陸の一部地域においては、ヨーロッパ人マイノリティが黒人マジョリティを支配する体制を築いているとして、そのような地域においてはアフリカ人にもヨーロッパ人と同様の権利を認めることを要求すると主張するのである[95]。また国家の役割を重視する姿勢は、権利の章典にも明確に表れている。アメリカ憲法に付された権利の章典とは異なり、大西洋憲章の検討に続く、ANC 起草の権利の章典は、南アフリカ連邦のアフリカ人（the African people in the Union of South Africa）はヨーロッパ人が享受するものと同様の完全な市民権を要求するという宣言から始まり、教育、福祉、また労働という諸点に置いてヨーロッパ人との平等とともに国家の役割の拡大を期待するものとなっている。それゆえに、この文書は、国際的な権利の言説に依拠しつつも、国民であるという事実によって人種を問わずに保障されるべき権利が生じるという論理を展開するのである。そして、国民であるということを強調する点において、この文書は、ケープ州のアフリカ人の投票権を剥奪しアフリカ人統治政策を南アフリカ全体で統一することを目指したヘルツォーク政権の 1936 年原住民信託土地法への反対運動を目的とする全アフリカ集会（All African Convention, AAC）における権利要求の論理とは異なるものである[96]。マシューズも参加した AAC がケープ植民地時代からのアフリカ人の投票権の維持を目的とし、それゆえにアフリカ人自身の文明化の度合いと、アフリカーナーの共和国と対比した上でのイギリス植民地の自由主義の伝統を訴えたのに対して[97]、「アフリカ人の主張」は他の条件を捨象し、南アフリカ国民であるという点に、彼らが主張する要求が保障されるべき論拠を置く。しかし、南アフリカ人であるという国籍の法的輪郭が明確になったのは、「アフリカ人の主張」の作成時点から見てそれほど古いものではなかった。法制史家クラーレンが述べるように、1910 年の連邦成立時に南アフリカ国籍という概念は存在しなかった。クラーレンは一方で中国系やインド系などのアジアからの移民の流入を管理する過程で、他方でアフリカ大陸内において隣接するイギリス及びポルトガル領からの鉱山へのアフリカ人労働力の導入と管理の過程において、省

---

[95] African National Congress Exactive Committee, “Africans’ Claims in South Africa, Including ‘The Atlantic Charter from the Standpoint of Africans within the Union of South Africa’ and ‘Bill of Rights’ Adopted by the ANC Annual Conference,” in *From Protest to Challenge: A Documentary History of African Politics in South Africa, 1882-1964.*, ed. Thomas Karis and Gwendolen M. Carter, vol. Volume 2. Hope and Challenge, 1935-1952 (Stanford, Calif.: Hoover Institution Press, 1943), 209–23.

[96]全アフリカ集会（All African Convention, AAC）のヘルツォーク法案への批判については、T. R. H. Davenport and Christopher C. Saunders, *South Africa: A Modern History*, 5th ed (Hampshire [England] : New York: Macmillan Press ; St. Martin’s Press, 2000), 329–33.を参照。AAC とその主要メンバーであった D.D.T. ジャバヴに関しては、Higgs, *The Ghost Of Equality*.を参照。

[97] 法案成立後も AAC は存続し、アフリカ人、カラード、インド人団体を糾合する組織として機能した。

庁間の管轄をめぐる議論の帰結として国籍の概念が発展してきたと述べる[98]。また、1937 年の原住民都市法（Urban Areas Act of 1937）は、その主目的はアフリカ人の都市への流入の管理にあるものの、南アフリカ国内のアフリカ人と国外からのアフリカ人を区別し、前者に南アフリカ国籍があることを明確にした上で、前者に条件付きの都市での居住を認めた。クラーレンは、その内実はともかく、統一された南アフリカ市民権を作り出したという点で、1937 年を法的な市民権が確立された年として位置付ける[99]。

そして、1936 年信託土地法及び 1937 年原住民都市法は、南アフリカ国民のうちアフリカ系の人々の住民のリザーブへの居住を基本とし、都市への移住を規制するという点で（南アフリカ国外からのアフリカ人が都市へ入ることはできないとされた）、南アフリカ国民を「原住民」と「非原住民」とに分け、前者は基本的にはリザーブに居住し、都市には労働力として有用な限り居住すべきとするものであった。それゆえ、アフリカ人は南アフリカ市民権を有していたとしても、その内容は大幅に制限されたものとなっていたのである。

「アフリカ人の主張」は、それまでは分岐した統治体制を法的に基礎付けるいわば地としてのみしか重要性を持たなかった南アフリカ市民権を前面に押し出し、その権利を主張するのである。この点において第一次大戦直後の ANC の派遣団との主張の違いは明らかだ。先に見たように、ロンドン及びパリを訪問した ANC 派遣団が政治的権利をイギリス臣民として求めるのに対して、「アフリカ人の主張」は南アフリカにおける完全な市民権を要求するのである[100]。

この点で、マシューズを中心に起草された「アフリカ人の主張」は、フランス領アフリカ植民地における権利を求める運動を分析したワイルダーが述べるような「植民地市民権」の持つ可能性を追求したものだということができるだろう[101]。戦時中に急速に進んだ都市化への対応を調査したファガン委員会でのマシューズの発言からは、南アフリカ市民権を用いた論理が、アフリカ人統治政策を批判する基礎となっていたことがわかる。彼は、パス法に代表されるアフリカ人の移動を規制する法及びアフリカ人の居住を都市周辺のロケーションに限定する政策が、アフリカ人の福祉を侵害していると主張するのである[102]。都市居住においてもアフリカ人とヨーロッパ人

---

98 Klaaren, *From Prohibited Immigrants to Citizens*. 南アフリカ国内出身のアフリカ人に関しては原住民政策省（the Department of Native Affairs）が管理を行うこととし、南アフリカ国外出身のアフリカ人に関しては、移民及びアジア人政策長官（the Commissioner of Immigration and Asiatic Affairs）に権限があるとされた。

99 Klaaren, 186.

100 1934 年に南アフリカ議会は、Status of the Union Act を成立させ、立法においてイギリス王室の同意を必要としないと規定したことも関係しているだろう。

101 Gary Wilder, “Practicing Citizenship in Imperial Paris,” in *Civil Society and the Political Imagination in Africa: Critical Perspectives* (Chicago: University of Chicago Press, 1999), 44–71. ワイルダーは、アフリカ植民地においてアフリカ人に与えられたフランス市民としての権利は、実質を持たなかったものの、アフリカ人エリートが本国を批判する際の足がかりを築いたと主張する。

102 Zacharia Keodirelang Matthews and M. Wilson, “Native Laws Inquiry Commission. The Social Effects of Migrant Labour.,” October 17, 1946, http://uir.unisa.ac.za/handle/10500/6192.

との間で平等が達成されなくてはならないのである[103]。

2.2. ANC の大衆化と人種隔離政策との決別

「アフリカ人の主張」で示された社会権の要求は、独立後のアフリカ諸国の状況を考えれば、過大なものと見えるかもしれない。しかし、第二次大戦中の南アフリカという時代状況を考えれば、妥当な要求であることがわかる。デュボウは、1948 年のアフリカーナーを主体とする国民党の選挙での勝利とその後のアパルトヘイト政策の前史としてのみ捉えられがちな 1940 年代が、実際には様々な可能性に満ちた時代であったと主張する[104]。特に社会保障という面においては、シーキングスが示したように大西洋憲章やベヴァレッジ報告書に影響を受けつつ、その改革が議論されており、例えば、人種に関わらず給付を行う年金制度が計画されていた[105]。「アフリカ人の主張」は大西洋憲章をその枠組みとして利用したものであるが、同時に当時首相であったスマッツの、アフリカ人の社会福祉は南アフリカが取り組むべき基本的な課題である、という趣旨の言葉を引用し、第二次大戦中という好機を意識した文書となっている[106]。しかし、スマッツを首相とする戦時政府のアフリカ人の要求に対する宥和的な姿勢は長くは続かなかった。ヨーロッパ戦線が好転し、実際に戦後社会が視野に入ってくると、スマッツ政権はパス法の取り締まりを強化し、また「アフリカ人の主張」の草稿を送付したクマに対して、扇情的な文書であると批判するなど、アフリカ人の要求に対する強硬な姿勢に転じるのである[107]。

戦時中の期待の高まりと、その後の政府の人種隔離法の取締強化は、アフリカ人知識人にフラストレーションを生み出し、1946 年には原住民代表会議（Native Representative Council, NRC）の開催延期につながる。NRC は 1936 年の信託土地法において、ケープ州のアフリカ人の選挙権の失効を決定する代わりに、アフリカ人が国会にアフリカ人に関わる政策への助言を行う機関として設置された。NRC の議員は政府の任命と選挙により、マシューズはケープ州の選挙によって 1942 年より議員を務めていた。NRC の延期は、直接には 1946 年のヴィトヴァータスランド鉱山でのストライキと、それに対する強硬な取り締まりへの反発として決定されたものである。マシューズは NRC を代表して、なぜ NRC が機能せず、会合を延期しなければならないのかを説明す

---

103 Matthews and Wilson, 1.

104 Saul Dubow, “Introduction: South Africa’s 1940s,” in *South Africa’s 1940s: World of Possibilities*, ed. Saul Dubow and Alan Jeeves (Cape Town: Double Storey Books, 2005), 1–19.

105 Jeremy Seekings, “Visions, Hopes & Views about the Future: The Radical Moment of South African Welfare Reform,” in *South Africa’s 1940s: Worlds of Possibilities*, ed. Saul Dubow and Alan Jeeves (Cape Town: Double Storey Books, 2005), 44–63.

106 African National Congress Exactive Committee, “Africans’ Claims in South Africa, Including ‘The Atlantic Charter from the Standpoint of Africans within the Union of South Africa’ and ‘Bill of Rights’ Adopted by the ANC Annual Conference,” 211.

107 Dubow, “Smuts, the United Nations and the Rhetoric of Race and Rights,” 64.ギッシュは、スマッツ政権は、1943 年の総選挙において白人有権者に強硬な人種隔離路線を示すことでその支持を獲得する必要があったと指摘する。Gish, *Xuma*, 126–27.

る文書を作成し、公表した。この文書は、南ア国民としてのアフリカ人の意見を代表し、その権利を守るという NRC に期待された役割が現状の制度では果たせないことを指摘し、1936 年信託土地法に体現される人種隔離という実験が失敗に終わったのだと主張する[108]。

そしてマシューズは、NRC の延期がヨハネスブルクのストライキによって急に決定されたわけではなく、NRC の提言が政府によって受け入れられることがないというフラストレーションから生じたものであるという。しかし、同時にこの文書の重要性は、NRC の決定が、労働者の要求も組み込む形で展開されたことであり、ANC の戦時中からの大衆化を如実に表すものとなっていることだ。1946 年のストライキは戦後のインフレによる鉱山労働者の窮乏がその一因としてあげられるが、ムーディーの論文が明らかにしたように、ストライキへの労働者の動員は、しばしばリクルーターでもあった出身地域のリーダーを介したものであり、その要求も統一されていたわけではない[109]。マシューズの NRC 延期を求める文書、及びその後の ANC における活動は、しばしば流動的で無定形であった政府に対する大衆的抗議活動に、明確な権利要求という形で不満に枠組みを与え、形式化するものであったと考えることができるだろう。

原住民代表審議会はマシューズの声明からも分かるように、アフリカ人の利益を代表する機関としては機能しなかった[110]。それゆえ、その評価は低く、研究対象としてもほとんど取り上げら

---

[108] Z. K. Matthews, “Reasons Why the Native Representative Council in the Union of South Africa Adjourned,” in *Hope and Challenge, 1935-1952*, ed. Thomas Karis and Gwendolen M. Carter (Stanford, Calif.: Hoover Institution Press, 1973), 224–33. マシューズは、次のように NRC が人種隔離政策のリトマス試験紙であったのだと述べる。“The Native Representative Council purported to be a body which would on the higher level of policy and on a Union-wide basis do for the African population as a whole what these other organs of government did in the narrower sphere of purely local matters. This was to be the acid test of the policy of segregation to which European South Africa paid so much lip service.” (226-27). （原住民代表会議は、純粋に地域的な事柄についてという狭い範囲で他の政府組織（トランスカイの原住民会議など、上林注）が行っている事をより高次の政策について、連邦全域のレベルで、アフリカ人全体のために行う事を意図して設置された会議である。この会議はヨーロッパ系の南アフリカ人がリップサービスを払ってきた人種隔離政策に対するリトマス試験紙であったのだ。）

[109] このストライキに関する古典的研究は、Dan O’Meara, “The 1946 African Mine Workers’ Strike and the Political Economy of South Africa,” *The Journal of Commonwealth & Comparative Politics* 13, no. 2 (July 1, 1975): 146–73, https://doi.org/10.1080/14662047508447235.であり、オメアラはこの論文において、1946 年ストライキをアフリカ人鉱山労働者が、労働者としての階級意識を獲得したことの表れであると主張した。それに対して、ムーディーは、労働者の動員における出身地域・民族のつながりの重要性を指摘し、このストライキを政府に対する労働者としての権利要求としてよりも、モラル・エコノミーの視点においての方がより正確に捉えられると主張する。T. Dunbar Moodie, “The Moral Economy of the Black Miners’ Strike of 1946,” *Journal of Southern African Studies* 13, no. 1 (October 1, 1986): 1–35, https://doi.org/10.1080/03057078608708130.また、1920 年代のストライキを事例とした論文であるが、ブリケンリッジもストライキという場が、出身民族を同じくするリクルーターと労働者との間での協議の場として機能したと指摘している。Keith Breckenridge, “‘We Must Speak for Ourselves’: The Rise and Fall of a Public Sphere on the South African Gold Mines, 1920 to 1931,” *Comparative Studies in Society and History* 40, no. 01 (January 1998), https://doi.org/10.1017/S0010417598980033.

[110] Matthews.青年同盟は次節で述べる ANC の時期議長候補に対して、「行動要綱」の採択だけではなく、アフリカ人に原住民代表審議会の選挙をボイコットすることを求めていた。Gish, *Xuma*, 155.

れることがなかった[111]。しかし、マシューズの委員としての活動から見えてくるのは、原住民代表審議会において ANC に集うようなアフリカ人エリートだけでなく、アフリカ人大衆の利益を代表しようとする姿勢である。イェール大学での修士論文においては、マシューズは南アフリカにおける法の統一を目指しながらも、現状における二重の法体系を容認していた。また原住民法からの除外規定（exemption）においても、一度除外されたアフリカ人が実際にヨーロッパ人社会に資するかを決定する保護観察期間を設定することに賛成するなど、その見解はミッション・エリートを中心に置く姿勢を示していた[112]。しかし、逆説的なことに、ケープ州でのアフリカ人の投票権を剥奪する代わりに設置された原住民代表審議会での経験が政治的権利をアフリカ人全体として追求する方向へとマシューズを転じさせたのである。マシューズが原住民代表審議会の議員として選出されたのは、1942 年の選挙においてであり、彼はケープ州の地方区域（Rural Areas）という区分けから出馬していた。彼はこの選挙において、高校時代の教師であった Macaulay Javabu を出し抜いて当選している[113]。政府に対して、アフリカ人の声を伝え、統治政策のアドバイスをする役割を、少なくとも名目においては与えられていた原住民代表審議会において、マシューズは、彼自身のようなミッション・エリートだけではなく、すべてのアフリカ人の利益を代表しようと試みたのである。このことは、36 年信託土地法以降深刻化するアフリカ人農家の白人農場からの追い出しへの対策や、アフリカ人労働者の賃金改善を求める原住民政策長官へのマシューズの手紙からも知ることができる[114]。

それでは、マシューズは、南アフリカに住むアフリカ人にもヨーロッパ人と同様の完全な市民権を要求するというその主張をどのように基礎づけたのか。1949 年に発表された論文「南アフリカにおけるアフリカ人政策」において、マシューズは、南アフリカの歴史における近代化の過程を、ヨーロッパから文明が持ち込まれたことを端緒とするのではなく、様々な人種間の協力によって進められたものであり、この国を人種及び部族ごとの居住地域に分けることは不可能であると述べる。そして、南アフリカに住むアフリカ人にとって、民族自決とは、完全な市民権を獲得し、ヨーロッパ系住民と同じ立場で政治に参加することを意味すると主張する[115]。次節では、マシューズのこの歴史観が解放運動において持った意味を検討する

---

111 例外的に、ロスの博士論文が、原住民代表審議会の活動を詳細に追っている。Mirjana Roth, “The Natives Representative Council, 1937-1951” (Ph.D. Thesis, University of the Witwatersrand, 1987).

112 Matthews, “Bantu Law and Western Civilization in South Africa.”

113 Z. K. Matthews and Monica Wilson, *Freedom for My People: The Autobiography of Z.K. Matthews: South Africa, 1901-1968* (Cape Town: David Philip, 1981), 138–39. 原住民代表審議会の議員は、首長から政府が任名する議員、選挙によって選出される議員の二つのグループによって構成されていた。マシューズは、政府から給料をもらっているために政府に対して対立し姿勢をとることができない、原住民代表審議会での首長たちの言動を批判的に描いている。Matthews and Wilson, 141–42.

114 Zacharia Keodirelang Matthews, “Letter from Prof. Z. K. Matthews to the Secretary for Native Affairs.,” December 22, 1942, http://uir.unisa.ac.za/handle/10500/6342; Zacharia Keodirelang Matthews, “Letter from Prof. Z.K. Matthews to Mr. D. L. Smit.,” December 28, 1942, http://uir.unisa.ac.za/handle/10500/5813.

115 Z. K. Matthews, “An African Policy for South Africa,” *Race Relations Journal* 16, no. 3 (1949): 71–82.

第 3 節　アフリカ・ナショナリズムとの思想的対立

南アフリカ市民権を基礎とした権利要求の公式化が自由憲章の起草の提案であった。これまで自由憲章の起草過程をめぐる議論では、この憲章の作成が解放運動において、アフリカ系、インド系、カラード、及び共産党を中心とした白人急進派を結びつける運動であったという点が強調されていた。しかし、1953 年のマシューズの呼びかけからわかるのは、自由憲章の起草において彼が重視したのは、解放闘争が目指すべき南アフリカ市民権を提示することであった[116]。そしてこの点において、マシューズは青年同盟と鋭く対立するのである。マシューズによる市民権に実質を持たせようとする試みから見えてくるのは、アパルトヘイト政策と対峙した際のアフリカ人の姿勢を、保守派（部族主義）－リベラル派－急進派（アフリカ・ナショナリズム）と直線上に並べ、その直線上にマシューズを位置付けるという見方では、この時期のマシューズの思想を捉えることができないということである[117]。

マシューズはしかし、この軸から離れて、南アフリカ市民であることからくる権利を拡充することを目指していたのである。国民党政権成立後の 1949 年に発表した「南アフリカにおけるアフリカ人政策」にはマシューズの立場がよく表れている。南アフリカのアフリカ人統治政策の歴史をまとめたこの論考の意義は、白人リベラル派のアルフレッド・ヘルンレの原住民政策論[118]及び青年同盟のマニフェスト的文書である「行動要綱（Programme of Action）」[119]と比較すると明確になる。先に見たように、ヘルンレは、1939 年の段階でそれまでの人種隔離政策がアフリカ人をあるいは文明化し、またあるいはその文化を保持するという名目を謳いながら、実際にはアフリカ人を矮小な土地に押し込め、その労働力を搾取する事を目的としていたと批判し、その対応策として人種による完全な政体の分離を主張した。一方でレンベデやムダという青年同盟の創設時の中心人物たちが主導してまとめた「行動要綱」は、アフリカ人以外の政治参加に関して不明瞭

---

116 Z.K. Matthews “ANC Cape Branch Presidential Address, 1953” Thomas Karis and Gwendolen M. Carter, *Hope and Challenge, 1935-1952 Vol.3.* (Stanford, Calif.: Hoover Institution Press, 1987), 99-106.

117 例えば、ゲイル・ガーハートは、黒人意識運動に関する古典的著作の冒頭で、第二次大戦後の南アフリカにおける人種隔離をめぐる思想状況を、イデオロギーのスペクトラムとして捉える視点を提示している。Gail M. Gerhart, *Black Power in South Africa: The Evolution of an Ideology*, 5th ptg. edition (Berkeley: University of California Press, 1979), chap. 1.　一般的な理解としては次のようになるだろう。人種隔離政策に迎合し、白人政権の傀儡として機能したのが、伝統的首長を中心とした保守派だとすれば、急進派は白人を南アフリカの権力の座から追い落とし、黒人の人間としての尊厳を回復することを主眼としていた。それに対して、リベラル派は、個人ベースの権利の付与を念頭に入植者社会への「文明化されたアフリカ人」の包含を目指していた。解放運動における黒人の思想に関しては、以下も参照。George M. Fredrickson, *Black Liberation: A Comparative History of Black Ideologies in the United States and South Africa.* (Oxford: Oxford University Press, 1996).

118 Hoernlé, *South African Native Policy and the Liberal Spirit*.

119 ANC, “‘Programme of Action.’ Statement of Policy Adopted at the ANC Annual Conference, December 17, 1949,” in *Hope and Challenge, 1935-1952*, ed. Thomas Karis and Gwendolen M. Carter (Stanford, Calif.: Hoover Institution Press, 1973), 337–39.

な部分を残しながらも、アフリカ人が中心となる政治体制を求めて、民族自決を強く主張するものであった。

青年同盟は「行動要綱」の ANC 総会での採択を目指し、1949 年の議長選での再選を目指すクマに要請を行ったが、運動方針の違いからクマは「行動要綱」の採択を選挙公約に組み込むことを拒否した[120]。その結果青年同盟はクマに勝つことのできる可能性のある人物としてマシューズに白羽の矢を立て、議長選への立候補と、議長となった際に「行動要綱」の ANC 総会での採択に協力することを依頼したのである[121]。しかし、マシューズはこの申し出を断り、結果として青年同盟はタバ・ンチュの医師ジェイムズ・モロカ（James Moroka）を担ぎ出すこととなった。「行動要綱」はアフリカ人中心の運動、及びその帰結としてアフリカ人主体の政府の樹立を目指すことにあり、人種によらない南アフリカ市民権を理想としていたマシューズとは相いれない内容を持っていたため、マシューズの拒否は、当然の帰結といえるだろう。

マシューズが南アフリカ市民権を運動の目的としていたことは、トムリンソン委員会報告書への批判においても明らかである。アッシュホースが述べるように、17 巻 3,755 ページに及ぶ膨大な報告書は国民党の政権奪取時にはその輪郭が曖昧であったアパルトヘイト政策をその理論面においても、また実施していく上での基礎的事実の確認という意味でも、基礎を固める重要なものであった[122]。その内容も、都市へのアフリカ人の出入の管理から、リザーブ経済の開発、政治権限の移譲など多岐に及ぶ。

その中で、マシューズの観点から最も重要だと考えられるのが市民権と関わるリザーブの伝統権威への権力の移譲である。マシューズは、リザーブの伝統権威の中には、権限の移譲を植民地化以前のアフリカ人の主権の回復として喜ぶ向きもあるとしながらも、それが白人政権にとって都合の良い傀儡の体制を生み出すにすぎないことを問題視する[123]。バンツースタン/ホームランド政策は、アフリカ諸国独立の気運を受けて、アパルトヘイト体制を正当化するための手段として捉えられることが多い[124]。しかし、当時の解放運動側からすれば、それは南アフリカのアフリカ

---

120 採択を目指す CYL の視点からの記述は以下を参照。Robert Edgar, “Changing the Old Guard: A.P. Mda and the ANC Youth League, 1944-1949,” in *South Africa’s 1940s: World of Possibilities*, ed. Saul Dubow and Alan Jeeves (Cape Town: Double Storey Books, 2005), 163.　クマからの視点は以下の文献に描かれている。Gish, *Xuma*, 159–62.

121 Edgar, “Changing the Old Guard: A.P. Mda and the ANC Youth League, 1944-1949,” 164; Mda, *Africa’s Cause Must Triumph*.

122 Ashforth, *The Politics of Official Discourse*, 149–53.

123 Z K Matthews and D.G.S. M’Timkulu, “The Future in the Light of the Tomlinson Report,” *Race Relations Journal* 24, no. 1&2 (1957): 12–19. マシューズは、バンツースタンにおける市民権の獲得が、南アフリカ市民権の代替となるのするトムリンソン委員会の見解を、バンツースタンは白人政権によってコントロールされており、その地域で得られる「権利」は白人が南アフリカ市民権として得ているものと同等ではないとして否定する。Matthews, “Civil Rights for Africans and the Tomlinson Report.,” 26–27.

124 Laura Evans, “South Africa’s Bantustans and the Dynamics of ‘Decolonisation’: Reflections on Writing Histories of the Homelands,” *South African Historical Journal* 64, no. 1 (March 1, 2012): 117–37, https://doi.org/10.1080/02582473.2012.655941.

人から市民権を奪うことで、運動のよって立つ基盤を破壊するものであったのである。それゆえ、バンツースタン政策への理論的基礎を提供したトムリンソン委員会報告書へのマシューズの批判は、アフリカ人に完全な市民権を与えるという動きが全く見られないばかりか、アフリカ人は南アフリカ市民ではなく、特定のバンツースタンの市民であるとすることで、南アフリカ市民権の基礎を奪おうとする機運さえ見られることに集中する[125]。

完全な市民権を求め、そのために自由憲章の起草を提案するというマシューズの試みは、政府から暴動を扇情する行為であると捉えられ、マシューズは国家に対する反逆者であると糾弾され、他の多くの活動家たちとともに法廷に立つことになるのである。しかし、ウィルソンが述べるように法廷でのマシューズの証言は、南アフリカ市民としての権利を基礎にアパルトヘイト政策を批判するというマシューズの論理を広く知らしめることとなった。この証言において、マシューズは ANC が暴力によって国家を転覆し、権力を握ることを目論んでいるという政府の非難を裏付けがないものとして否定し、ANC は多人種によって構成される南アフリカにおいて、一つの人種が他の人種を支配するということがない社会を作り出そうとしているのだと主張するのである[126]。

マシューズの完全な市民権を求めることこそが解放運動の目的であり、その条件はこれまでの南アフリカの歴史によって整えられているという主張[127]は、一見して相応しくないと思われる演説の舞台でも繰り返されている。それは 1964 年の世界教会会議での演説であり、そこでマシューズは、闘争の手段として武力を用いることを決定した ANC を擁護しなくてはならないという苦しい立場に置かれていた。この演説においてマシューズは、アフリカ人の権利要求の歴史をたどり、武力の使用が、強硬な態度をとる政府への不可避の方策であったと主張する[128]。そして、この決定が、共産主義など外部からの影響によってなされたものではなく、ANC 内部からの必然的な決断であったと強調する。しかし、実際には近年の研究が明らかにしたように、ANC の武装組織「民族の槍（Umkhonto weSizwe）」を率いていた時期のマンデラは、南アフリカ共産党と密接な関係にあり、南アフリカ共産党は武装闘争への方針転換において重要な役割を果たしていた

---

125 Matthews, “Civil Rights for Africans and the Tomlinson Report.”

126 Matthews and Wilson, *Freedom for My People*, 193-95.

127 Matthews, “An African Policy for South Africa.”

128 Z. K. Matthews, “The Road from Non Violence to Violence,” 1964, World Council of Churches, https://www.aluka.org/stable/10.5555/al.sff.document.ydlwcc0083?searchUri=so%3Dps_collection_name_str%2Basc%26Query%3Dz%2Bk%2Bmatthews. ANC の武力闘争への方針転換に関しては、以下の文献を参照。T. Karis and G. Gerhard, ‘The Turn to Violence Since May 31, 1961’, in Karis and Gerhard, eds., Challenge and Violence, 1953 1964 (New York: Hoover Institution Press, 1977);Bernard Magubane and Philip Bonner, “2 The Turn to Armed Struggle,” in *The Road to Democracy in South Africa, Volume 1, 1960-1970* (Houghton [South Africa]: Mutloatse Arts Heritage Trust, 2008), 93; Paul S. Landau, “The ANC, MK, and ‘The Turn to Violence’ (1960–1962),” *South African Historical Journal* 64, no. 3 (September 1, 2012): 538–63, https://doi.org/10.1080/02582473.2012.660785.

[129]。この演説内容は、マシューズも ANC 議長ルツーリと同様に名目上は指導的立場にありながらも、実際には ANC の方針を指揮する立場にはなかったことを示しているだろう[130]。

しかし、マシューズの思想的な影響力は現在に至るまで強く残っているのである。確かにマシューズは 1950 年代後半以降 ANC 内の実権を握っていたわけではなく、武力闘争への転換の決定に関わっていたわけではなかった。しかし、その暴力の行使は、マシューズが説いた南アフリカにおける完全な市民権の付与を人種に関わらず実現するという理想を実現するために為されたのである。他のアフリカ諸国が独立後排他的なナショナリズムの傾向を強めていったことに対して、マシューズは批判的であり、それゆえにこそ体制転換後に白人が植民地下、また人種隔離政策下で得た特権を残すことには否定的であったものの（マシューズは権利の章典の憲法への記載が、そのような目的で使われる可能性があることを認識していた）[131]、南アフリカをアフリカ人の国として規定し、その状態を解放運動の目的として述べるということはなかった。

青年同盟に思想的基盤を提供したレンベデやムダといったマシューズより若い世代の活動家たちが、シャカ統治時代のズールー王国など植民地化以前のアフリカ国家を持ち出して、アフリカ人に主権を取り戻すことを唱えたの[132]に対して、マシューズは南アフリカの歴史を、そこに住む人々が搾取や暴力を伴いながらも一つの国民として統一されていくプロセスとして捉えた。その歴史観は、あるいはすべての人種に開かれた宣教の初期に改宗したマシューズの家系や、すべての人種に開かれた「部族化」以前のフォートヘア大学での教育という経験に基づいている点で限定されたものと思われるかもしれない。しかし、マシューズの人類学的研究から明らかになるのは、人種隔離政策下でそれぞれが独自の文化と発展の路線を持つとされる「部族」が法的カテゴリーとして創出される過程であり、また植民地化以前の状態に戻ることを期待される「部族」がその輪郭を宣教師や入植者、植民地政府との交渉の過程の中で変容させる歴史であった。植民地化以前のアフリカ人の栄光の時代を求めるという歴史への関心のあり方は、独立後のアフリカ諸国においても広く見られるものではあるが、人々をその「本質的文化」によって分断しようとするアパルトヘイト下の南アフリカにおいては、人々を分けるその論理を正当化してしまうという危険性を伴う行為でもあったのである。

---

[129] Stephen Ellis, “The Genesis of the ANC’s Armed Struggle in South Africa 1948–1961,” *Journal of Southern African Studies* 37, no. 4 (December 1, 2011): 657–76, https://doi.org/10.1080/03057070.2011.592659; Landau, “The ANC, MK, and ‘The Turn to Violence’ (1960–1962).”

[130] Couper, *Albert Luthuli*. ただし、ルツーリは最後まで非暴力の優位を信じていたとするスコットの議論に対しては、ノーベル賞受賞後、容認できる暴力も存在するとして選択的に受け入れていたとする反論がある。Robert Trent Vinson and Benedict Carton, “ALBERT LUTHULI’S PRIVATE STRUGGLE: HOW AN ICON OF PEACE CAME TO ACCEPT SABOTAGE IN SOUTH AFRICA,” *The Journal of African History* 59, no. 1 (March 2018): 69–96, https://doi.org/10.1017/S0021853717000718.

[131] Z. K Matthews, *African Awakening and the Universities: The Third T.B. Davie Memorial Lecture Delivered in the University of Cape Town on 15 August 1961* (Cape Town: Cape Town University, 1961).

[132] Mda, *Africa’s Cause Must Triumph*; Lembede, *Freedom in Our Lifetime*.

それゆえに、マシューズは、南アフリカの歴史を多様な人種の統合の歴史と捉えることによって、修飾語のつかない「南アフリカ市民」であるということ自体に意味を持たせ、そこから派生する権利が存在すること、及びその獲得のために行動することを主張したのである。マシューズの思想を理解するということは、「南アフリカ市民としての権利を主張する」というあまりにも単純な運動方針が持つ、複雑な含意を把握し、その来歴を明らかにすることに他ならないのである。

終章

はじめに

1948 年に国民党が政権を取りアパルトヘイト政策を開始する以前から南アフリカは様々な形で人種隔離政策を実施してきた。1910 年の連邦形成後から 1948 年の国民党政権誕生までの期間において、特に重要と考えられるのが以下法律である。第一にアフリカ人の取得することのできる土地を大幅に制限した 1913 年の原住民土地法、第二に分岐的な法制度を連邦レベルで定めた 1927 年の原住民行政法、第三に 1936 年に成立した二つの法、1913 年土地法の時点では未確定だった部分を確定した信託土地法、及びケープ州のみに残っていたアフリカ人の選挙権を剥奪した原住民代表法である。

これらのアフリカ人統治に関わる法律は、アフリカ人とそれ以外の人々との法的分断と人種ごとの空間的な分離を目指す、連邦全体としての人種隔離政策を造り上げた。本論文は、このような人種隔離政策の展開を背景としつつ、政策形成における「伝統」の利用、アフリカ人教育を通した「伝統」の浸透の過程を論じてきた。さらに前章で述べたように、「伝統」を利用した人種隔離政策への批判が、抵抗運動の方針において、南アフリカ国民というカテゴリーに内実を持たせようと尽力する方向へと舵を切ることにつながったことを明らかにした。

終章では、民主化後四半世紀が過ぎた南アフリカにおいて、その国民像及び政治のあり方はどのように変化したのかを、包摂と排除の論理に従って簡単にまとめる（第１節及び第２節）。その後、現在という視点に立った時、前章までに記述してきた人種隔離政策の形成と抵抗運動の形態が共時的に決まってくる、その過程がどのように認識されうるのかを論じる（第３節）。具体的には、次の二つの観点から考察する。第一に、南アフリカにおいて国民、民族、あるいは部族という特定の集団への帰属を促す構造はどのように変化してきたのか。第二に、第一の点を論じる政治的な議論の場はどのように形成されたのか。終章の目的は、以上の二つの観点から、本論文全体の議論を説明することである。

第１節　受苦の共同体

第６章で述べたように、マンデラは政府機関やインフラ施設の破壊など暴力的な手段を用いて解放運動を展開するという方針へと ANC が舵を切る際に中心的な役割を果たした[1]。マンデラは、暴力的手段の使用という決断は、不服従運動(Defiance Campaign) など非暴力的な訴えが聞き入れられず、それどころか、反対運動をあらゆる暴力を使って鎮圧しようとするアパルトヘイトとい

[1] 南アフリカ共産党の影響力については見解の相違があるものの、以下の二つの論文はマンデラがこの方針転換について中心的な役割を果たしたという点では一致している。 Stephen Ellis, “The Genesis of the ANC’s Armed Struggle in South Africa 1948–1961,” *Journal of Southern African Studies* 37, no. 4 (December 1, 2011): 657–76, https://doi.org/10.1080/03057070.2011.592659; Paul S. Landau, “The ANC, MK, and ‘The Turn to Violence’ (1960–1962),” *South African Historical Journal* 64, no. 3 (September 1, 2012): 538–63, https://doi.org/10.1080/02582473.2012.660785.

う過酷な体制ゆえにもたらされた、不承不承になされたものであったと述べる[2]。それゆえ、マンデラは、暴力行使の正当性をアパルトヘイト体制のもとでの黒人の受苦に帰するのだ。この論理は、アディスアベバで開かれた会議で、ANC 代表としてマンデラが行った演説「銃に支配された土地」において明確に表明されている。マンデラは、ブルフークで、ボンデルスヴァルトで、そしてシャープヴィルで、アフリカ人は政府によって虐殺されたと述べる。そして、「赤裸々な武力と暴力を公然と用いて、アフリカ人の闘争を攻撃し、かれらの希望を抑えつけている」南アフリカ政府に対して、ANC は「破壊活動に出ることで、いかなる代償を払ってでも必ず自由を勝ち取ってみせるという、人民の揺るぎない決意を明らかにした」と、暴力を用いることの必要性を主張する[3]。

このようなマンデラの暴力に関する公的な見解は、武力闘争の目的であった人種に関わらず政治に参加することができる民主的体制が達成された後、どのように変化したのだろうか。同様の虐殺事件に言及したマンデラのアパルトヘイト体制終焉後の演説に注目してこの点を考察したい。

1994 年 4 月 27 日に実施された全人種参加の選挙において ANC は勝利し、党首であったマンデラは大統領に選出された。大統領として初めての議会での演説を、マンデラは、一つの詩を朗読することから始めた。詩の題名は Die Kind(子ども)である。マンデラは、アフリカーンス語から英訳されたものを読み上げた。

The child is not dead
the child lifts his fists
against his mother
who shouts Afrika! ...
The child is not dead
Not at Langa nor at Nyanga
nor at Orlando nor at Sharpville
nor at the police post at Philippi
where he lies with a bullet through his brain ...
the child is present at all assemblies and law-giving
the child peers through the windows of houses
and into the hearts of mothers
this child who only wanted to play in the sun of Nyanga
is everywhere

---

[2] ネルソン・マンデラ「銃に支配された土地」『自由への容易な道はない: マンデラ初期政治論集』鈴木隆洋訳 (青土社, 2014), 142–59.

[3] マンデラ, 145–46, 158.

the child grown to a man treks on through all Afrika
the child grown to a giant journey
over the whole world
without a pass![4]
その子どもは死んでいない。
その子どもは拳を突き上げる。
母親に向かって、
そして子どもはアフリカ！と叫ぶ。
その子どもはまだ死んでいない。
ランガでも、ニャンガでも
オランドでも、シャープヴィルでも
あるいはピリッピの警察署でも。
そこで、その子は頭を銃弾に貫かれて倒れている[上林注:それでも死んでいない]。
その子どもはすべての議会、立法の場に出席している。
その子どもは、窓から部屋の中を覗いて、母親の心の中を覗こうとする。
ニャンガの太陽のもとで遊びたかっただけだったその子どもは、
すべての場所にいる。
その子どもは大人になり、アフリカ中を旅する。
その子どもは大いなる旅人となって、
世界中をめぐる
パスを持たずに！

ランガで、ニャンガで、オランドで、シャープヴィルでと、政府による黒人の殺害が起こった場所を列挙するように、マンデラが地名を読み上げるとき、彼は黒人の苦しみの遍在を、そして同時に黒人の苦しみが無駄ではなく、将来の解放につながっていくことを確認している。アフリカーナー白人であるヨンカーのこの詩は解放闘争の中で、受苦と解放の象徴として利用されてきた。「Die Kind（子ども）」は、黒人向け雑誌ドラム誌 Drum（May, 1963）にも英語訳・ズールー語訳

[4] ヨンカーはこの詩にもともと “Die kind wat doodgeskiet is deur soldate by Nyanga” （ニャンガで兵士に撃たれて死んだ子ども）という説明的な題をつけていた。しかし、この詩を含む詩集 Rook en Oker(煙と黄土、1965 年)を出版するに際して、政治的な詩を掲載することに反対する出版社に対してヨンカーは、題を単に「子ども」とする譲歩を行った。それでも、検閲・回収を恐れた出版社はこの詩を本体ではなく、末尾の子どものための詩のセクションに移動した。Rachel Matteau Matsha, *Real and Imagined Readers: Censorship, Publishing and Reading under Apartheid* (Scotsville, South Africa: University of KwaZulu-Natal Press, 2019), 74–75. 南アフリカの検閲制度に関しては、Peter D. McDonald, *The Literature Police: Apartheid Censorship and Its Cultural Consequences* (Oxford: Oxford University Press, 2009).も参照。

で掲載され、アフリカーンスを母語としない南アフリカ人にも広く知られるようになった。マンデラ以外の政治的演説での利用としては、当時の ANC 議長オリバー・タンボが、1987 年のジンバブエのハラレで行った演説で引用した事例を挙げることができる[5]。

しかし、マンデラのこの議会での演説は、アディスアベバでの彼自身の演説とは異なり、アパルトヘイトという体制のもとでの苦しみという経験を、黒人に限られたものとして捉えられてはいない。マンデラはヨンカーの詩を引用する前に、この詩人のことを、「特定の経験を超越し、南アフリカ人に、アフリカ人に、そして世界市民となったアフリカーナーの女性」として紹介した[6]。マンデラにとってヨンカーは、「絶望のさなかに希望を祝福し、死に直面しては生の美しさを説く」詩人であった。マンデラは、しかし、ヨンカーは、自分の声が聞き入れられないとわかった時、その生命を自分自身で奪ったのだと付け加える。マンデラはこのように詩人の生涯を語り、新生南アフリカはその存在を彼女や彼女のような人々に負うていると主張する[7]。ヨンカーの苦しみに触れるマンデラがほのめかすのは、アパルトヘイト体制において現在南アフリカ国民となった人々は全て、様々な形で受苦を耐え忍んで来たのだという理解である。マンデラは、ヨンカーの意思を継ぐために、解放という目的を同じくし、そこに向かって一緒に歩んでいく共同体として南アフリカ国民を想像する。マンデラは、共通の未来を創っていく新生南アフリカ政府が依拠すべき理念は、人民を中心とした社会であり、政府の活動の目的は自由の拡張であると述べる[8]。そして、遠い目的に向かう共同体として南アフリカ国民をまとめ上げていく、その基礎とな

---

[5] Jonker の Die Kind が、南アフリカでどのように受け入れられていたのかについての歴史は、Louise Viljoen, *Ingrid Jonker: Poet under Apartheid*, 1 edition (Athens: Ohio University Press, 2013), 62–69. を参照。マンデラがヨンカーの詩を引用した際の意図の分析については、Tom Lodge, *Mandela: A Critical Life* (Oxford: Oxford University Press, 2006), 207–8. に依拠した。ヨンカーの詩も含めたマンデラのスピーチの全文は、Philippe-Joseph Salazar, *An African Athens: Rhetoric and the Shaping of Democracy in South Africa* (London: Lawrence Erlbaum Associates, Inc., 2002), 171–80.に再録されている。

[6] "an Afrikaner woman who transcended a particular experience and became a South African, an African and a citizen of the world."

[7] Salazar, *An African Athens*, 171–72. 多くの自殺がそうであるように、ヨンカーの自殺も複合的な要因が重なり合っての帰結である。幼い時の母との離別や、国民党の国会議員であった父との確執、そして詩人・小説家との結果的には不幸な恋愛関係などをあげることができる。ヨンカーの生涯については、アフリカーンスまたオランダ語で多く書かれ、映画化もされたが（オランダ語）、英語で読める研究書は、Viljoen, *Ingrid Jonker*.のみである。

[8] 共同体の拡張を端的に表す、その原文は以下の通りである。 "And so we must, constrained by and yet regardless of the accumulated effect of our historical burdens, seize the time to define for ourselves what we want to make of our shared destiny./The government I have the honour to lead and I dare say the masses who elected us to serve in this role, are inspired by the single vision of creating a people-centred society. Accordingly, the purpose that will drive this government shall be the expansion of the frontiers of human fulfilment, the continuous extension of the frontiers of the freedom." Salazar, *An African Athens*, 172. 政治学者のチプキンは、南アフリカ国民が植民地主義に抵抗し、アパルトヘイト体制の撤廃を目指す人々の共同体として想像されたと主張する。Ivor Chipkin, *Do South Africans Exist? Nationalism, Democracy, and the Identity of the People* (Johannesburg: Wits University Press, 2007), 2. この見解を踏まえれば、マンデラの議会での最初の演説は、解放の時を先延ばしすることで、国民の境界を広げる行為であったと捉え

るのが、演説から２年後に発行された新憲法である。自由憲章を踏まえて、人権の尊重という理念を掲げた憲法は、世界でもっとも民主的な憲法であるとも評される。

社会学者のオートリーは、かつて黒人たちに「プリズン・フォー」と呼ばれる刑務所であった場所に立つ憲法の丘（Constitution Hill）に言及し、憲法裁判所と人権博物館を含むこの場所が、人権など普遍的な理念を国民統合の原則に組み込む憲法愛国主義を体現していると述べる[9]。アパルトヘイト体制に抗する中で生成されてきた理想を反映した憲法は、新生南アフリカの国民統合の導き手となっているのだ。しかし、この憲法は南アフリカ国民だけでなく国外から来た移民に取っても、自身の権利を主張する際の根拠として利用することができるものとなっている。

社会学者のロビンズは、2008 年に起きた南アフリカにおける外国人排斥暴動の後、難民保護団体が、南アフリカ憲法に人権規定が含まれることを指摘し、移民・難民の権利を南アフリカ国家が保障すべきであると要求していたと述べる。難民団体の主張は、自由憲章と、それを受けて作成された南アフリカ憲法が南アフリカ国民の権利を保障するものではなく、南アフリカに住む人々の権利を保障するものであるという論理に基づいているのである[10]。これらの主張は、論理的には、人権を市民権に組み込むことで、政治学者アレントの指摘するアポリア、すなわち「諸権利を持つ権利」を誰がどのように保障するのかという難問を解決しようとするものだ[11]。

南アフリカのアパルトヘイト体制とそれを支えてきた人種主義を乗り越えようとする試みは、結果として、民主化後の南アフリカにおいて権利を主張する権限をより広く人々に開かれたものにしたということができるだろう。しかし、実際の人権に政策が違反していると人々が主張し、法廷においてその主張を認めさせようとするときに生じるのは、法廷に訴える主体が、ひたすら苦しむ客体（肉体）として置き換えられるという事態であったと旧タウンシップであるソウェトでのフィールドワークに基づいて人類学者のフォン・シュニツラーは指摘する[12]。

フォン・シュニツラーはまた、公共サービスへの旧タウンシップ住民の不満が、ANC によって主導された移行期とその後の政治の中で多くの住民が政策決定の過程から取り残されていると感じているという現状を反映していると主張する[13]。2007 年に、リンポポ州ポロクワネで開かれ

ることができるだろう。

[9] Robyn K. Autry, *Desegregating the Past: The Public Life of Memory in the United States and South Africa* (New York: Columbia University Press, 2017), 76–77.

[10] Steven Robins, “Humanitarian Aid Beyond ‘Bare Survival’: Social Movement Responses to Xenophobic Violence in South Africa,” *American Ethnologist* 36, no. 4 (2009): 637–50. アパルトヘイト終焉後、2000 年代初めまで荒廃した場所であった現在の憲法の丘の再開発の過程については、Mark Gevisser, “From the Ruins: The Constitution Hill Project,” in *Johannesburg : The Elusive Metropolis*, ed. Sarah Nuttall and Achille Mbembe (Durham; London: Duke University Press, 2008), 317–36.を参照。

[11] 川崎修『ハンナ・アレント』(講談社, 2014), 145–50.

[12] Antina von Schnitzler, “Performing Dignity: Human Rights, Citizenship, and the Techno-Politics of Law in South Africa,” *American Ethnologist* 41, no. 2 (2014): 336–50, https://doi.org/10.1111/amet.12079.

[13] Antina von Schnitzler, *Democracy’s Infrastructure: Techno-Politics and Protest after Apartheid* (Princeton: Princeton University Press, 2016), 3.

たANCの党大会において大衆扇動的な政治家ジェイコブ・ズマが現職大統領ターボ・ムベキに勝利し、ANC党首に就き、その後10年にわたり南アフリカ大統領となったことは、この大衆の不満を一面では反映していると言える。しかし、ズマが大統領であった 10 年間（2009 年から 2018 年）、多発する汚職事件と拙劣な経済政策の結果として、南アフリカ政治は混迷を極めた。 民主化後の25年間はフランツ・ファノンの『地に呪われたる者』における独立後のアフリカ国家に対する批判、すなわち脱植民地化後のアフリカ人エリートは植民地時代に築かれた特権を自分たちが引き継ぐことにのみ注力しているという批判が、悲しいほど当てはまってしまう。政策の設計を担うべきアフリカ人エリートたちは、今や私腹を肥やすことにのみ執着しているようにも見える[14]。そして、この期間にズマが推し進めたのは、政治学者ミュラーが提示するような、討議を中心とした民主主義を阻害するポピュリズムの政治であった[15]。 民主化から 25 年が経ち、遠くにある目標がその輝きを失い、人々の日常生活の必要が満たされない中で、南アフリカは政治家の言説においては人種対立の様相を示している。次節では、マンデラの議会開始時の演説と対比させる形で第３代大統領ジェイコブ・ズマの歌を分析することで 2010 年代の政治的苦境がいかにもたらされたのかを考えたい。

第２節 歌う大統領ズマと排外主義

ネルソン・マンデラは、2013年12月5日に亡くなった。それから10日後、マンデラの亡骸は彼の生地イースタンケープ州のクヌ（Qunu）に戻り、埋葬された。埋葬前の式典において当時の大統領ジェイコブ・ズマはスピーチを『Thina’ Sizwe/We, the people/私たち、民族』を合唱することから始めた。反アパルトヘイト闘争の中で、士気を上げるために歌われたフリーダムソングのひとつである、この歌は、しかしその歌詞とともに議論を引き起こすことになった。その歌詞は以下の通りである[16]。

Thina’ Sizwe

Thina’ Sizwe esimnyama

---

[14] フランツ・ファノン『地に呪われたる者』鈴木道彦・浦野衣子訳, 新装版 (東京: みすず書房, 1996), 147.　チプキンを中心とした研究者の報告は、ズマ政権による汚職と言えるレベルを超えて、国家体制の変更による合法的な公的資源の私的収奪に進んでいたと指摘する。Ivor Chipkin et al., *Shadow State: The Politics of State Capture* (Johannesburg: Wits University Press, 2018).

[15] ミュラーは、政権を取ったポピュリズム政治家が推し進めるのは、国家の植民地化（公務員の任命の増加、司法権、メディアへの侵食）、大衆恩顧主義（物質的・非物質的な恩恵と政治的支持の交換）、差別的法治主義（「人民」の確定とそこからの排除）という三つの統治方法であると主張する。ヤン=ヴェルナー・ミュラー『ポピュリズムとは何か』板橋拓己訳(岩波書店, 2017), 58–63.

[16] CNN, *Jacob Zuma Sings at Mandela Funeral*, accessed April 26, 2019, https://www.youtube.com/watch?v=yk1nR6n5KPw. 歌詞は、この動画から筆者が書き起こした。

Sikhalela izwe lethu
Elathathwa ngabamnhlophe
Mabawuyeke umhlaba wethu

Abantwana eAfrika
Bakhalela izwe laba
Elathathwa ngabamnhlophe
Mabawuyeke umhlaba wethu

私たち、民族
私たち、黒い民族は、

私たちの土地を要求する
土地は白人たちに奪われた
私たちの土地を返せ
アフリカの子どもたち
彼らは彼らの土地を要求する
土地は白人たちに奪われた
私たちの土地を返せ

反アパルトヘイト闘争の中で歌は、過酷な状況下で運動に関わる人々を糾合し、また国際的な連帯を呼びかけるために使われてきた[17]。それでは、アパルトヘイト体制の終焉からほぼ 20 年が経ち、ポストアパルトヘイトという時代において、一つの時期が過ぎ去ったことが、マンデラという解放闘争の中心人物が死去によって明確となった後に、大統領自身がフリーダムソングを歌うことにはどのような意味があったのだろうか。『Umshini wami（俺のマシンガン)』という、 解放闘争下で歌われた別のより好戦的なフリーダムソングをズマが歌うことの意味を考察した、リズ・ガーナーは、「この歌は、エスニシティ、地域、そして階級を超えた公衆（public）、実際にはいくつかの公衆と呼ぶべきかもしれないが、を作り出す上で中心的な役割を果たした」と述べる[18]。ガーナーの知見に依拠するならば、ポロクワネでの ANC 党大会でのムベキ政権の否定と、

[17] Anne-Marie Gray, “The Liberation Songs: An Important Voice of Black South Africans from 1912 to 1994,” *Journal of Education* 33, no. 1 (January 1, 2004): 85–102; Shirli Gilbert, “Singing against Apartheid: ANC Cultural Groups and the International Anti-Apartheid Struggle,” *Journal of Southern African Studies* 33, no. 2 (2007): 421–41.

[18] L. Gunner, “Jacob Zuma, the Social Body and the Unruly Power of Song,” *African Affairs* 108, no. 430 (November 28, 2008): 28, https://doi.org/10.1093/afraf/adn064.

2009 年のズマ政権の誕生は、アパルトヘイト終焉後の経済発展から取り残されたと感じている大部分のアフリカ人を取り込んだポピュリズムに支えられており、ズマの歌は、時には対立する利害関係にある多様な集団を糾合する役割を果たしたということになるだろう。

しかし、このマシンガン（具体的には AK47）の歌は、その過剰なマスキュリニティとともに、排外性をも内包していると考えることができる[19]。その排外性は、運動路線をめぐって ANC から分派した PAC のスローガン「One Settler, One Bullet」[20]ほど明確ではないが、白人に対して向けられたものである。マンデラの葬儀で歌われた Thina Sizwe のメッセージが「南アフリカがアフリカ人の国である」ということを、土地を奪われたというアフリカ人の経験した受苦を主題とすることで示している。それゆえに、ズマの歌は、マンデラの先に述べたスピーチと同様に人々の受苦に焦点を置いているが、和解の推進者としてのマンデラのイメージと相反する歌詞を持ち、南アフリカ国民として黒人のみ（Abantu abamnyama）を措定する行為であったと考えることができる。

さらに大衆を取り込むという点においてズマが、ズールー語で歌い、多くのスピーチを英語ではなく、ズールー語で行っていたことも重要である。ズールー語は、英語という南アフリカにおけるビジネスエリートの言語とは別の言説空間を作り出し、その言説空間内部に入ることのできる者こそ真正な黒人であると条件付けることで、南アフリカの正当な構成員であるかどうかを峻別することを可能にする[21]。それゆえに、大統領であるズマ自身が歌うことで行ったのは、民主化後の南アフリカにおいて期待が満たされていないと感じる人々に自分への支持を訴えかけたというだけではない。「自分たちが、それも自分たちだけが真正な人民を代表する」という主張こそが、ポピュリストを定義づけるとするミュラーの規定に従えば[22]、ズマが、英語ではなくズールー語で語りかけることで、暗に主張するのは、ズマの言葉を理解し、彼を支持する者こそが南アフリカにおいて、「私たちに力を！（Amandla wethu）」と叫ぶ時の、「私たち」であり、人民で

---

19 実際、ガーナーは 2008 年の外国人排斥暴動の中で、この歌が歌われていたと指摘する。Gunner, 47.

20 このスローガンについては、J. M. Coetzee, *Giving Offense: Essays on Censorship* (Chicago: University of Chicago Press, 1996), 1–3.を参照。

21 ズールー語を話すことができるということが、黒人としての真正性につながっていることを表す言葉として「Umuntu Phaqa 全くのズールー人（あるいは黒人）」がある。この言葉の含意を説明してくれた Hlonipha Mokoena 及び Mbali Manatha に感謝。ただし、ズールー語あるいは英語を話すことができるということがそれだけで一方で黒人・ズールー人であることを、他方でビジネスエリートであることを示すわけではない。様々なズールー語あるいは英語があるのだ。教育社会学者のマーク・ハンターは、ダーバンの旧タウンシップ内のエリート校において正しいズールー語を教授する体制があるということが、旧白人学校と比較した際のセールスポイントになっていると指摘する。また英語においては南アフリカの経済界においてはイギリス系白人の発音が好まれる一方で、活動家としての経歴を持つ、現在の大部分の政治家たちの間では、イギリス系の発音がその話者の信頼性の欠如を含意すると述べる。Mark Hunter, *Race for Education: Gender, White Tone, and Schooling in South Africa* (New York: Cambridge University Press, 2019), 209–14.

22 ミュラー『ポピュリズムとは何か』、v.

あるという主張であると考えることができるだろう。

しかし、ズールー語を話すことは、白人と黒人との間の敷居となっているだけではない。ズールー語は、南アフリカ国民であるアフリカ人と諸外国から来たアフリカ人を判別するためのリトマス試験紙としても使われた。文学研究者のマーク・サンダースは 2008 年に起きた大規模な移民排斥運動の渦中に、ヨハネスブルクにおいてズールー語を解さない人々が攻撃の対象になっていたと指摘する[23]。金鉱業の発達によって南アフリカ各地及び周辺国から多くの労働者を引きつけてきたヨハネスブルクにおいて、ズールー語はアフリカ人の間での共通語として機能してきた。極端な経済格差や高い失業率を抱え、虹の国を標榜しながらも未だに人種間・農村都市間に分断が残る南アフリカ社会において、ズールー語は南アフリカのアフリカ人と他の国のアフリカ人を峻別し、移民排斥を行う者は、前者のみが南アフリカに住むという権利を享受することができるのだと暴力を持って主張する。各政党は、移民排斥暴動を非難しながらも、選挙においては移民をスケープゴートにし、有権者の支持を取り付けようとする[24]。2019 年 8 月にも起きた移民排斥暴動に関して、移民研究者ローレン・ランダウは、暴動は旧タウンシップやダウンタウンで起きていることを指摘し、政府の統治が行き届かず、インフォーマルなグループである「自警団」が支配する旧タウンシップの状況が、暴動の一因としてあると説明する[25]。ランダウは、このような現状を捨象して、理念的な言説（それがたとえ南アフリカの歴史に基づいているとしても）を振りかざしても意味がないと主張する[26]。また日本の南アフリカ研究では対象とされることは少ないタウンシップというローカルな歴史をたどることで、身内とよそ者という二分法による移民排斥感情の生成のメカニズムを探る研究も出てきている[27]。マンデラが、共同体の構成員、そして構成員が享受する自由という、二つの要素の拡張として描いたポストアパルトヘイトの南アフリカ社会が直面した政治的困難の原因は、達成すべき二つの目標の相克にこそあったのだと考えることができるだろう。

---

[23] Mark Sanders, *Learning Zulu: A Secret History of Language in South Africa* (Princeton: Princeton University Press, 2016), 115–18.

[24] 牧野久美子「スケープゴート化される移民」国際開発ジャーナル, no. 753 (2019): 30–33.

[25] Loren B. Landau, “Opinion | What’s Behind the Deadly Violence in South Africa?,” *The New York Times*, September 16, 2019, sec. Opinion, https://www.nytimes.com/2019/09/16/opinion/south-africa-xenophobia-attacks.html. 自警団による統治とそれに伴う暴力については、ダーバン及びヨハネスブルクそれぞれの近郊にある旧タウンシップ地区のフィールドワークに基づいて、自警主義が南アフリカの民主主義にとっての阻害要因であると指摘する、ニコラスの研究も参照。Rush Smith Nicholas, *Contradictions of Democracy: Vigilantism and Rights in Post-Apartheid South Africa* (New York: Oxford University Press, 2019).

[26] Landau, “Opinion | What’s Behind the Deadly Violence in South Africa?”

[27] Noor Nieftagodien, “Xenophobia’s Local Genesis: Historical Constructions of Insiders and the Politics of Exclusion in Alexandra Township,” in *Exorcising the Demons within: Xenophobia, Violence and Statecraft in Contemporary South Africa*, ed. Loren B. Landau (Johannesburg: Wits University Press, 2011), 109–34.

第３節　人種隔離体制下の公共圏と主体形成：本論文のまとめ

上記のようなポストアパルトヘイト社会の対立状況とローカルな権益を巡る争いに注目する必要性を主張する多くの研究が出てきている現状を考えると、本論文で述べてきた伝統に関する議論を中心としたカテゴリーとアイデンティティの形成過程は､本研究が直接の対象とした 20 世紀初頭からアパルトヘイト政策開始までの時代にのみ関するものであり、現在の南アフリカには直接的には関係がないと思われるかもしれない。しかし 新自由主義的政策を遂行する政府に対する抗議運動が同時に排斥主義への回路を開くという社会史家ネフタホーディエンの指摘[28]は、本論が検討してきた支配への抵抗と人種隔離政策への組み込みという二つの現象のもつれと相似性を持っているように思われる。すなわち、アフリカ人の歴史をないものとするヨーロッパ系入植者の歴史観に抗してズールー人の歴史を書くことが、部族ごとに分かれたズールー人というカテゴリーを固定化させ伝統的首長による統治を正当化したように、ネフタホーディエンが対象としたアレクサンドラというタウンシップにおいてはアパルトヘイト政策に対抗しながら住んできたという歴史を想起し、政府に住環境や雇用状況の改善を要求することが、同時にただ乗りする新参者として外国人移民を排除することにつながっているのである。この相似性を、抽象的なレベルで述べるならば、特定の主張をするためには、別の言明を排除する言説空間に入る必要があり、それはその主張を行う者を特定のアイデンティティに結びつける、ということになるだろう。この観点から重要になってくるのが、討議の場としての公共圏と、議論の場に入る主体のアイデンティティ形成である。

本論文の各章で扱ってきた対象、特にアフリカナ関連資料の収集、教科書の執筆と歴史作文、原住民代表委員会での議論などは、公共圏というテーマで論じられてきた研究と結びつけられると考えられるかもしれない。実際にジョン・デュベが創刊したズールー語の新聞 Ilanga laseNatal(ナタールの太陽)における投書に注目して、ズールー語新聞が読者である教育を受けたズールー人たちが歴史を議論する場を開いたとするモコエナの研究や、金鉱山での労働争議においてアフリカ人労働者の出身地のモラル・エコノミーを引き継いだ形で、すなわち労働者はアフリカ人リクルーターをヘッドマン（首長の補佐役）に見立てて、彼を通して鉱山会社に意見をし、雇用条件の改善を要求するというブレッケンリッジの論文など本論文の対象に隣接する分野を扱った研究においても公共圏の議論は取り入れられている[29]。しかし、ハーバーマスの公共圏や、ハーバーマスを批判する形で提示されたフレイザーの対抗的公共圏論がともに見逃してしまうのは、議論を行う空間に入るということが、議論に参加する者を特定の主体として形成すると

---

[28] Nieftagodien, 112.

[29] Hlonipha Mokoena, “An Assembly of Readers: Magema Fuze and His Ilanga Lase Natal Readers,” *Journal of Southern African Studies* 35, no. 3 (September 1, 2009): 595–607, https://doi.org/10.1080/03057070903101839; Keith Breckenridge, “‘We Must Speak for Ourselves’: The Rise and Fall of a Public Sphere on the South African Gold Mines, 1920 to 1931,” *Comparative Studies in Society and History* 40, no. 01 (January 1998), https://doi.org/10.1017/S0010417598980033.

いう観点であろう[30]。しかし、植民地化の後、現在の南アフリカとなる空間においては、そこに住む人々をカテゴライズし、特定のアイデンティティを与え、異なる法的制度の下に置くことが、統治の基本的なあり方であった。そして、この人々の分断には、それぞれの集団ごとに異なった伝統を割り当て、内面化させようとする政府の、そしてその政策に同調する被統治者の試みが伴った。以下では、各章の内容を、特定の形態を持った議論の場の形成とそれに伴う主体の形成、そしてその過程において「伝統」を持ち出すことが持った意味をまとめたい。

南アフリカにおけるアフリカ人のブルジョワ公共圏の祖型を挙げるとすれば、スコットランド長老派が運営した学校ラブデール校におけるディベート活動であろう。そこではミッション教育の内容を反映して、シェイクスピアなどの文芸が論じられるとともに、ロボラ（婚資の慣習）を廃止すべきかなど、アフリカ人の伝統社会のあり方の是非についても議論が交わされた[31]。ナタール植民地においてもラブデール校の位置するケープ植民地に比べると規模は小さいが、ミッションエリート層の形成が見られた。1893 年にナタール植民地に責任政府が設立され、入植者が政策を主導するようになると、ミッション出身のアフリカ人の経済活動に対する制限は強化された。また入植者たちは自身の経済的利益を追求し、労働力を供出させるための課税を推し進めたのである。結果として生じたバンバタの反乱は、「原住民」政策の見直しを迫るものであった。1903 年から 1905 年にかけて開催された南アフリカ原住民問題委員会（South African Native Affairs Commission）について、アッシュホースは、問題として対処されるべき「原住民」という対象を作り出したと指摘している[32]。それに対して、バンバタの反乱の原因究明と「原住民」政策の見直しを目的として 1906 年に召集されたナタール植民地原住民問題委員会の委員であったエヴァンズが作り出したのは対象としての「原住民」だけでなく、「原住民」について権威をもって語ることのできる専門家としての自身の存在であった。第 1 章で述べたように、エヴァンズやブルックスなど「原住民」問題の専門家であった政治家たちは、アフリカ人を利用することしか念頭にない入植者や、アフリカ人を文明化し、ヨーロッパ人と同じくすることを理想とする宣教師とは異なり、客観的にアフリカ人が本来持つ性向を見極め、その方向に沿ってアフリカ人を発展させていく政策を提示する、そのような能力を持った専門家として自己を提示した。そして、アフリカ人に関する深い知識を持った理想的人物として想定されたのが、ナタール植民地初代原

---

[30] ユルゲン・ハーバーマス『公共性の構造転換』細谷貞雄訳 (未來社, 1973); Nancy Fraser, "Rethinking the Public Sphere: A Contribution to the Critique of Actually Existing Democracy," *Social Text*, no. 25/26 (1990): 56–80, https://doi.org/10.2307/466240. ただしフレイザーは、ブルデューのディスタンクションの議論を引きながら、ブルジョワ公共圏に入ることがそこに入る者をブルジョワとして労働者階級から卓越したものとして自己を提示することを可能にしたと説明し、ハーバーマスの開かれたものとしての公共圏の理念型を批判している。Fraser, 60.

[31] Isabel Hofmeyr, "Reading Debating/Debating Reading : The Case of the Lovedale Literary Society, or Why Mandela Quotes Shakespeare," in *Africa's Hidden Histories : Everyday Literacy and Making the Self*, ed. Karin Barber (Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, 2006), 258–77.

[32] Adam Ashforth, *The Politics of Official Discourse in Twentieth-Century South Africa* (Oxford : Clarendon Press, 1990), chap. 2.

住民政策長官のセオフィラス・シェップストンであった。実際にはその場の状況に応じて作り出された現場主義的なシェップストンのアフリカ人統治政策は、ナタール出身の論者たちによって体系立ったシェップストン・システムとして描き出され、連邦レベルのモデルとなっていったのである。デュボウが述べるように、人種隔離という「原住民」統治政策における基本的な原理は、異なった立場を持つ人々を糾合する力があったことは確かであろう[33]。しかし、人種隔離を前提として議論を進めることは同時に、政策への批判の幅を、その政策が基礎としてのアフリカ人の文化をいかに適切に反映しているかという点や民族独自の発展という人種隔離の目的に実際に沿っているかという政策遂行に関する論点に狭めることともなったのである。

第 1 章で描いた人種隔離政策の大まかな枠組みは、アフリカ人の「伝統」にその基礎を置くものであった。そしてその政策は、連邦全体の政策として、また各州個別の政策において具体化されていったのである。ナタール州では特にアフリカ人教育を通して、人種隔離政策に適合する形で、「伝統」の人口への膾炙が計られた。第 2 章、及び第 4 章、第 5 章では、人種隔離政策との整合性を念頭に置いて教育改革がなされたこと、またズールー人の歴史を教える科目の目的としてズールー人の「伝統」の浸透があったことを明らかにした。第 2 章では、アフリカ人の生活に適合的な教育という理念のもとになされた教育改革に着目し、この改革がアフリカ人エリートを白人入植者と同様の権利を主張する南アフリカ市民として養成するのではなく、アフリカ人に割り当てられた狭矮な土地で指導者となることを想定し、ロラムを中心とした教育官僚たちはその方向性に沿ってカリキュラムを書き換えたと論じた。第 4 章及び第 5 章は、ロラムによって開始され、マルコムに引き継がれたアフリカ人教育の改革とその帰結を、ズールー語で読み、書くという行為の持つ含意という観点から分析した。マルコムのもとで、ズールー文学・歴史という科目は、ズールー人の道徳と伝統を統治政策のあり方に沿った形で訓育する回路となった。またズールー部族歴史作文コンテストを検討する過程で論じたように、ズールー人自身が部族の歴史について書くことは、首長の系譜を辿り、特定の土地を居住地として定める点で、人種隔離統治に親和的な部族像を正当化するものであった。また集められたエッセイは、ブライアントの『ズールーランド及びナタールの古き時代』とその内容が校合されることによって、ブライアントを中心としたズールー史を正当な歴史として確立していく集合的行為の一部となったのである。

しかし、「創られた伝統」の浸透は、ロラムやマルコムという教育行政官によって上から押し付けられたのだとのみ理解することはできない。教科書を執筆したズールー人作家や作文コンテストに応募した多数のズールー人学生・教員の存在から分かるように、ズールー人自身がズールー人の「伝統」を保存するという試みに積極的に参加したのである。ズールー人の「伝統」を守るために歴史を書くという記録保存のための行為は、その歴史が人種隔離政策を基礎とするアフリカ人統治と結びついている限りで、植民地主義への協力であったと考えることもできるだろう。

---

[33] Saul Dubow, *Racial Segregation and the Origins of Apartheid in South Africa, 1919-36* (Houndmills: Macmillan, 1989).

しかし、この協力関係は、帝国史・植民地主義研究の文脈で協力者（collaborator）と呼ばれる人々が植民地統治と切り結んだ関係とはやや異なる。「伝統」の浸透過程に参加することは、ヨーロッパ経済圏への組み込みの橋頭堡[34]となったわけではなく、またアパルトヘイト体制の末端を担う[35]というようなわかりやすい植民地支配への加担ではない。ズールー人の伝統をめぐる議論に加わった人々の動機は様々である。ズールー人の歴史叙述の中にはズールー人の過去の栄光をたどり、現在の苦境を批判することを意図した著作[36]や、白人政府による首長の扱いの不当性を述べようとする作文[37]など一見して植民地支配と真っ向から対立するような観点や対象を選んだ物も散見される。それにもかかわらずズールー人の歴史について書くということが植民地主義への表立った抵抗とならなかったのは、ズールー人の歴史をズールー語で書き、読み、語るということが、すでに定められた位置からのみ発言を許す植民地主義の機制によって、その可能性を制限されていたからである。ズールー人の「伝統」をめぐる議論に加わるということは、植民地支配のもとで特定の主体的な位置を占めることであった。それは時に「原住民」統治に有用な情報の提供者であり、またズールー人や特定の部族の伝統の保持を目指す、保守主義者という立場であった。ズールー人の王家を中心とした歴史教科書や、教育を受けたズールー人の苦境を扱った文学作品はズールー文学・歴史という教育科目の一部として教えられることで「伝統」を利用した統治の一部へと回収されたのである。そして第 3 章で論じたように、ズールー部族歴史作文コンテストを主催したキリー・キャンベルのアーカイブ形成がその一事例をなすアフリカナ収集は、白人入植者の共通の歴史を説くとともに、アフリカ人の伝統社会を入植者の歴史からは分離したものとして扱うことを前提としていた。ズールー人の歴史叙述は、この収集の秩序に、組み込むことのできる形で収集され、並べられていったのである。

同様の事態は、アメリカ南部黒人教育の受容においても見られる。白人行政官たちが従順なアフリカ人労働者、植民地支配に協力的なアフリカ人エリートを養成するために職業訓練を中心とする南部黒人教育をモデルとして教育改革を進めたのに対して、ANC 初代議長ジョン・デュベやフォートヘア大学教授 D.D.T.ジャバヴなどのミッションエリートはアフリカ人の自立性を確保するために、タスキーギ学院をモデルとしてアフリカ人教員のみによる学校運営や、経済的自立を目指した農業技術指導を行った。アフリカ人エリートのタスキーギ学院を模倣した事業は、植

---

[34] この点については、イギリス帝国史における自由主義貿易拡大への協力者として現地エリートを捉えるロビンソンとギャラハーの古典的論文を参照。Ronald Robinson, “Non-European Foundations of European Imperialism: Sketch for a Theory of Collaboration,” in *Studies in the Theory of Imperialism*, ed. Roger Owen and Robert B. Sutcliffe ([Harlow]: Longman, 1972).

[35] Jacob Dlamini, *Askari: A Story of Collaboration and Betrayal in the Anti-Apartheid Struggle* (Auckland Park, SA: Jacana, 2014).

[36] Petros Lamula, *U-Zulu kaMalandela: a most practical and concise compendium of African history, combined with genealogy, chronology, geography and biography.* (Mariannhill, Pinetown: Marianhill Mission Press, 1930); H. Rider Haggard, *Umbuso kaShaka*, trans. F. L Ntuli (Mariannhill, Pinetown: Mariannhill Mission Press, 1979).

[37] 第 5 章を参照

民地支配のもとで、できるだけ自身の権益を拡大させようとする試みだったと考えることができるだろう。しかし、文明化したアフリカ人の白人と同等の権利を唱えるのであれ、隔離を受け入れ、居留地での発展を目指すのであれ、タスキーギ学院及び同校校長ワシントンをモデルとする運動は、徐々に強度を増していく人種隔離政策という状況のもとではアフリカ人の生活を実際に改善するには至らなかった。

第 6 章の対象である Z.K.マシューズの思想をたどることで見えてくるのは、植民地支配という制約的な状況において割り当てられた役割を否定し、南アフリカに住むすべての人々の解放を目指すという方針の確立こそが、第二次大戦後の反アパルトヘイト運動再興の契機であったという点である。20 世紀南アフリカにおけるアフリカ人知識人の代表的存在であるマシューズは、アフリカ人エリートを南アフリカの政体からは排除しつつ、「原住民」政策にかかわる助言のみにアフリカ人エリートの役割を縮小させた 1936 年の原住民代表法によって設置された原住民代表審議会において他のアフリカ人エリートと議論を重ねる中で、政府との対決姿勢を鮮明にしていったのである。マシューズは、反アパルトヘイト運動の要綱的文書の策定を通して、白人リベラルから彼に与えられた「原住民」の立場から、「原住民」問題について発言する人類学者という役割を捨て去り、普遍的な人権という理念こそが解放運動の目的であると明示するに至った。マシューズが提案し、1955 年に採択された自由憲章に体現される人権意識と、その採択に至るまでの人種を超えて議論し協力する場を創り出すことの重要性は、現在も南アフリカの民主主義を支える理念として、政策の、そして市民運動の底流として脈打っている。そしてこの水脈の反響は、2019 年という自由憲章採択の年から、遠く隔たった現在においても聞き取ることができる。最後に個人的な体験から、この点を論じることで本論文の叙述を閉じたい。

おわりに

詩人の家に招かれて、彼女の詩を朗読することになった。３冊目の詩集の出版を記念するパーティーを彼女（以下では、普段呼んでいた通りにコーシと呼ぶことにする）は南アフリカ人らしく自宅で開き、友人・知人をもてなすことにしたのだ。パーティーでコーシは趣向を凝らして、自身による朗読ではなく、集まった人それぞれに彼女が詩集から一つの詩を割り振って、参加者は順番に詩を読み、簡単な感想を述べることにしようと言った。その方が、対話が生まれるから、と。私の番が来てコーシが、ズールー人の歴史と文学を研究する日本から来た友人のトモヒロと紹介するのを聞いた後で、私が読んだのが以下の詩である[38]。

The sky agrees

They understand our sorrows, imbibe our stories.

[38]Makhosazana Xaba, *The Alkalinity of Bottled Water* (Braamfontein: Botsotso, 2019), 14.

They carry our memories and create their own.
They articulate philosophies and choose fitting actions.
They show us our shortcomings.

Though they feel deceived, they stand up and speak out,
Demand and proclaim, occupy.
They study while sitting; tweet, post,
Broadcast the revolution.

They have changed the new we thought we had created.
Even the sky agrees – the beautiful ones have arrived.

空も同意する

彼らは私たちの悲しみを理解し、私たちの物語を受け入れる。
彼らは私たちの記憶を引き継ぎ、自分たちの記憶をつくる。
彼らは思想的方針を明確にし、適切な行動を選ぶ。
彼らは私たちの欠点を示すのだ。

彼らは裏切られたと感じている。それでも彼らは立ち上がり、声を上げる。
要求し、宣言するとともに、占拠する。
彼らは座り込みをしながら、勉強する。そして、ツイートし、ポストし、
革命を広めるのだ。

彼らは、私たちが造ったと思っている「新しさ」を変革したのだ。
空も同意するだろう。「美しきもの」が到来したのだと。

「彼らは私たちが造ったと思っている『新しさ』を変革したのだ」。「私たち」とコーシが呼ぶ世代が造った「新しさ」とは端的に、1994 年に誕生した新生南アフリカを指すのだろう。しかし、現在四半世紀が経ち、希望に充ちて出発したはずの南アフリカが、なぜ混迷と不平等に苛まれる社会のままであるのかという声の高まりの中で、特に 1990 年代のアパルトヘイト体制から全人種参加の民主主義体制への移行期のあり方が問題視されている。体制転換の不徹底が糾弾される中で、もう一人の南アフリカの知人の言葉を借りるならば、1994 年以降の南アフリカにおける政治的議論は、まるでアパルトヘイト時代に一党支配体制を築いた国民党を指示した人などいなか

ったように進められたが、今ではまるで皆が体制転換に関わったことなどなかったように素知らぬ顔をしている、と[39]。大学生の抗議運動を鎮圧するために民間警備会社が大学当局によって要請され、黒人の警備員が学生と向かい合う。希望に満ちて始まった南アフリカが、このように変容した責任を誰も取りたくはないだろう。そして、体制転換のあり方への糾弾は、政治・経済的な不平等を問うものであるとともに、歴史観の問い直しを迫るものでもある。コーシが最後の行で言及する「美しきもの（beautiful ones）」は、独立後のガーナの社会状況を風刺したアイ・クウェイ・アルマの小説『美しきもの未だ生まれいず』を踏まえている。ンクルマ失脚後のガーナにおいて独立を果たしたことが、民衆の生活の向上には繋がらず、言論弾圧によって人々の不満は抑圧される。このような社会において独立前に期待した言論の自由や生活水準の向上といった「美しきもの」は未だ到来していないとアルマは、汚職に満ちた社会を悲観的に描く[40]。

コーシはそれに対して、大学紛争とそれに引き続く様々な局面での抗議運動こそが、「美しきもの」であると主張する。最後の二行は、このことを端的に表している。解放運動で獲得した全人種参加の民主主義という政治体制が機能不全を起こしていると見れば、それを作り変えていく。人種隔離そしてアパルトヘイト体制下の、統治のための「伝統」と対比させて、討議とそれがもたらす変革を南アフリカ解放運動の伝統として示すことで本論文を終えたい。

---

[39] Hlonipha Mokoena の指摘に感謝。

[40] Ayi Kwei Armah, *The Beautyful Ones Are Not yet Born*, African Writers Series, no. 43 (Oxford: Heinemann, 1988).

資料文献一覧

マニュスクリブト

南アフリカ共和国

National Archives of South Africa, Central Archive Depository(Pretoria)

Files of Department of Bantu Education (DBE) & Department of Education and Training (DET)

National Archives of South Africa, Pietermaritzburg Depository

Zulu Society Papers

Historical Papers, Witwatersrand University

John Gaspard Gubbins Papers

J.D. Rheinallt Jones Papers

Records of South African Institute of Race Relations

Killie Campbell Library, University of KwaZulu-Natal

Killie Campbell Papers

Heaton Nicholls Papers

Papers of Zulu Tribal History Competition

Archives and Special Collections, University of South Africa (UNISA) (Digital Collections)

Z. K. Matthews Papers

D. D. T. Jabavu Papers

アメリカ合衆国

Library of Congress

Booker T. Washington Papers

Sterling Memorial Library, Yale University.

C.T. Loram Papers

Schomburg Center for the Research of Black Culture, New York Public Library

Papers of Phelps Stokes Fund

主要刊行史料

新聞・雑誌・定期刊行物

Africa: Journal of the International African Institute

Africana notes and News

Bantu Studies

Man

Natal Mercury

Natal Witness

Native Teachers' Journal

Race Relations

Southern Workman

書籍

1. ズールー語

Dhlomo, R. R. R. *Izikhali Zanamuhla*. Pietermaritzburg: Shuter & Shooter, 1935.

Dhlomo, R.R.R. *UShaka*. Pietermaritzburg: Shuter and Shooter, 1937.

Fuze, M. *Abantu Abamnyama: Lapa Bavela Ngakona*. Ise ng'eyokuqala. Pietermaritsburg: City printing works, Limited, 1922.

Haggard, H. Rider. *Umbuso kaShaka*. Translated by F. L Ntuli. Mariannhill, Pinetown: Mariannhill Mission Press, 1979.

Lamula, Petros. *Isabelo sikaZulu*. Pietermaritzburg: Lincroft Books, 1967.

Made, Emman H. A. *Ubuwula Bexoxo*. Pietermaritzburg: Shuter & Shooter, 1945.

———. *Indlalifa Yase Harrisdale*. Rev. ed. Pietermaritzburg: Shuter and Shooter, 1974.

Molefe, A. I, and T. Z Masondo. *Ezomdabu wezizwe zabansundu nezokufika nokubusa kwabelungu*. Pietermaritzburg: Shuter & Shooter, 1938.

2. 英語

Brookes, Edgar Harry. *The History of Native Policy in South Africa from 1830 to the Present Day*. 2nd rev ed. Pretoria: Van Schaik, 1927.

Bryant, A.T. *Olden Times in Zululand and Natal*. London: Longmans, Green and Co., 1929.

Evans, Maurice S. *The Native Problem in Natal.* Durban: P. Davis, 1906.

———. *Black and White in South East Africa : A Study in Sociology*, 1916.

———. *Black and White in the Southern States: A Study of the Race Problem in the United States from a South African Point of View*. Columbia, SC: Univ. of South Carolina Press, 2001.

Faye, Carl. *Zulu references for interpreters and students*. Pietermaritzburg: City printing works, Limited, 1923.

Fuze, Magema M. *The Black People and Whence They Came*. Translated by Harry C. Lugg. Pietermaritzburg: University of Natal Press, 1979.

Jabavu, Davidson D. T. *The Black Problem: Papers and Addresses on Various Native Problems*. Lovedale: Book Dept., Lovedale Institution Press, 1920.

Matthews, Z. K., and Monica Wilson. *Freedom for My People: The Autobiography of Z.K. Matthews: South Africa, 1901-1968*. Cape Town: David Philip, 1981.

Loram, C. T. *The Education of the South African Native*. London: Longmans, Green & Co, 1917.

主要 2 次文献目録

1. 英語文献

Ashforth, Adam. *The Politics of Official Discourse in Twentieth-Century South Africa*. Oxford : Clarendon Press, 1990.

Barber, Karin, ed. *Africa's Hidden Histories: Everyday Literacy and Making the Self*. Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, 2006.

Beinart, William. *Twentieth-Century South Africa*. 2nd ed. Oxford ; New York: Oxford University Press, 2001.

Beinart, William, and Peter Delius. "The Historical Context and Legacy of the Natives Land Act of 1913." *Journal of Southern African Studies* 40, no. 4 (July 4, 2014): 667–88. https://doi.org/10.1080/03057070.2014.930623.

Bradford, Helen. *A Taste of Freedom: The ICU in Rural South Africa, 1924-1930.* New Haven: Yale University Press, 1987.

Breckenridge, Keith. "'We Must Speak for Ourselves': The Rise and Fall of a Public Sphere on the South African Gold Mines, 1920 to 1931." *Comparative Studies in Society and History* 40, no. 01 (January 1998). https://doi.org/10.1017/S0010417598980033.

Bundy, Colin. "Vagabond Hollanders and Runaway Englishman." In *Putting a Plough to the Ground : Accumulation and Dispossession in Rural South Africa, 1850-1930*, edited by William Beinart, Peter Delius, and Stanley Trapido. Johannesburg: Ravan Press, 1986.

Byala, Sara. *A Place That Matters Yet: John Gubbins's MuseumAfrica in the Postcolonial World*. Chicago: University of Chicago Press, 2013.

Campbell, James T. *Songs of Zion: The African Methodist Episcopal Church in the United States and South Africa*. New York: Oxford University Press, 1995.

———. "Models and Metaphors: Industrial Education in the United States and South Africa," in Ran

Greenstein, ed., *Comparative Perspectives on South Africa*. London: Routledge, 1998.

Carton, Benedict. *Blood from Your Children: The Colonial Origins of Generational Conflict in South Africa*. Charlottesville: University Press of Virginia, 2000.

Carton, Benedict, John Laband, and Jabulani Sithole, eds. *Zulu Identities: Being Zulu, Past and Present*. Scottsville, South Africa: University of KwaZulu-Natal Press, 2008.

Chanock, Martin. *The Making of South African Legal Culture 1902-1936: Fear, Favour and Prejudice*. Cambridge: Cambridge University Press, 2006.

Chipkin, Ivor. *Do South Africans Exist? Nationalism, Democracy, and the Identity of the People*. Johannesburg: Wits University Press, 2007.

Cope, Nicholas. *To Bind the Nation: Solomon KaDinuzulu and Zulu Nationalism.* Pietermaritzburg: University of Natal Press, 1993.

Cooper, Frederick. *Colonialism in Question: Theory, Knowledge, History*. Berkeley: University of California Press, 2005.

Couper, Scott. *Albert Luthuli: Bound by Faith*. Scottsville, South Africa: University of KwaZulu-Natal Press, 2010.

Davenport, T. R. H., and Christopher C. Saunders. *South Africa: A Modern History*. 5th ed. Hampshire [England] : New York: Macmillan Press ; St. Martin's Press, 2000.

Davis, R. Hunt. "Charles T. Loram and an American Model for African Education in South Africa." *African Studies Review* 19, no. 2 (September 1976): 87. https://doi.org/10.2307/523566.

———. "*Up from Slavery* for South Africans: Booker T. Washington's Classic Autobiography Abridged." In *Booker T. Washington and Black Progress: Up from Slavery 100 Years Later*, edited by W. Fitzhugh Brundage, 193–219. Gainesville: University Press of Florida, 2003.

Dubow, Saul. *Racial Segregation and the Origins of Apartheid in South Africa, 1919-36*. Houndmills: Macmillan, 1989.

———. *Scientific Racism in Modern South Africa*. Cambridge: Cambridge University Press, 1995.

———. *South Africa's Struggle for Human Rights*. Jacana Pocket Series. Auckland Park, SA: Jacana, 2012.

Dubow, Saul, and Alan Jeeves, eds. *South Africa's 1940s: Worlds of Possibilities*. Cape Town: Double Storey Books, 2005.

Ellis, Stephen. "The Genesis of the ANC's Armed Struggle in South Africa 1948–1961." *Journal of Southern African Studies* 37, no. 4 (December 1, 2011): 657–76. https://doi.org/10.1080/03057070.2011.592659.

Etherington, Norman. "A.T. Bryant's Map of the 'Native Clans in Pre-Shakan Times.'" In *Tribing and Untribing the Archive*, edited by Carolyn Hamilton and Nessa Leibhammer, 1:238–61. Scotsville, South Africa: University of KwaZulu-Natal Press, 2016.

———. "The 'Shepstone System' in the Colony of Natal and beyond Its Borders." In *Natal and Zululand*

from Earliest Times to 1910: A New History, edited by Andrew Duminy and Bill Guest. Pietermaritzburg: University of Natal Press : Shuter & Shooter, 1989.

Glazer, Clive. *The ANC Youth League*. Auckland Park, South Africa: Jacana Media, 2012.

Golan, Dafnah. *Inventing Shaka: Using History in the Construction of Zulu Nationalism*. Boulder, Colo: L. Rienne, 1994.

Guy, Jeff. *The Destruction of the Zulu Kingdom : The Civil War in Zululand, 1879-1884*. Pietermaritzburg: University of Natal Press, 1979.

———. "The Tribal History Project, 1862-4." In *Tribing and Untribing the Archive: Identity and the Material Record in Southern KwaZulu-Natal in the Late Independent and Colonial Periods*, edited by Carolyn Hamilton and Nessa Leibhammer, 216–37. Pietermaritzburg, South Africa: University of KwaZulu-Natal Press, 2016.

———. *Theophilus Shepstone and the Forging of Natal: African Autonomy and Settler Colonialism in the Making of Traditional Authority*. Scottsville: University of KwaZulu-Natal Press, 2013.

Hamilton, Carolyn. "Backstory, Biography, and the Life of the James Stuart Archive." *History in Africa* 38 (2011): 319–41. https://doi.org/10.1353/hia.2011.0015.

———. "Ideology, Oral Traditions and the Struggle for Power in the Early Zulu Kingdom." Master Dissertation, University of the Witwatersrand, 1985. http://wiredspace.wits.ac.za/handle/10539/16715.

———. "'Living by Fluidity': Oral Histories, Material Custodies and the Politics of Archiving." In *Refiguring the Archive*, edited by Carolyn Hamilton, 209–27. Cape Town, South Africa : Dordrecht, Netherlands: David Philip ; Kluwer Academic Publishers, 2002.

———. *Terrific Majesty: The Powers of Shaka Zulu and the Limits of Historical Invention*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1998.

Hamilton, Carolyn, and Nessa Leibhammer, eds. *Tribing and Untribing the Archive: Identity and the Material Record in Southern KwaZulu-Natal in the Late Independent and Colonial Periods*. Pietermaritzburg, South Africa: University of KwaZulu-Natal Press, 2016.

Hamilton, Carolyn, and John Wright. "Moving Beyond Ethnic Framing: Political Differentiation in the Chiefdoms of the KwaZulu-Natal Region before 1830." *Journal of Southern African Studies* 43, no. 4 (July 4, 2017): 663–79. https://doi.org/10.1080/03057070.2017.1323539.

Harlan, Louis R. "Booker T. Washington and the White Man's Burden." *The American Historical Review* 71, no. 2 (January 1966): 441. https://doi.org/10.2307/1846341.

Healy-Clancy, Meghan. *A World of Their Own: A History of South African Women's Education*. Scottsville: University of Kwazulu-Natal Press, 2013.

Herd, Norman. *Killie's Africa: The Achievements of Dr. Killie Campbell*. Pietermatritzburg: Blue Crane Books, 1982.

Heyman, Richard D. “C. T. Loram: A South African Liberal in Race Relations.” *The International Journal of African Historical Studies* 5, no. 1 (1972): 41. https://doi.org/10.2307/216800.

Higgs, Catherine. *The Ghost of Equality: The Public Lives of D.D.T. Jabavu of South Africa, 1885-1959*. Athens: Ohio University Press, 1997.

Hobsbawm, E. J., and T. O. Ranger, eds. *The Invention of Tradition*. Past and Present Publications. Cambridge: Cambridge University Press, 1983.

Hughes, Heather. *First President: A Life of John Dube, Founding President of the ANC*. Auckland Park, South Africa: Jacana Media, 2011.

Karis Thomas, and Carter Gwendolen M., eds. *Protest and hope, 1882-1934. From protest to challenge : a documentary history of African politics in South Africa, 1882-1964. Vol.1*. Stanford, Calif.: Hoover Institution Press, 1972.

Kelly, Jill E. *To Swim with Crocodiles: Land, Violence, and Belonging in South Africa, 1800-1996*. East Lansing, Michigan: Michigan State University Press, 2018.

King, Kenneth. *Pan-Africanism and Education: A Study of Race Philanthropy and Education in the Southern States of America and East Africa.* Oxford: Clarendon Press, 1971.

Krige, Sue. “Segregation, Science and Commissions of Enquiry: The Contestation over Native Education Policy in South Africa, 1930–36.” *Journal of Southern African Studies* 23, no. 3 (September 1997): 491–506. https://doi.org/10.1080/03057079708708552.

Kros, Cynthia. *The Seeds of Separate Development: Origins of Bantu Education*. 1st ed. Pretoria: Unisa Press, 2010.

La Hausse de Lalouviere, Paul. *Restless Identities: Signatures of Nationalism, Zulu Ethnicity and History in the Lives of Petros Lamula(c. 1881-1948) and Lyomn Maling(1889-c.1936)*. Pietermaritzburg: University of Natal Press, 2000.

Lacey, Marian. *Working for Boroko: The Origins of a Coercive Labour System in South Africa*. Johannesburg: Ravan Press, 1981.

Lambert, John. *Betrayed Trust: Africans and the State in Colonial Natal.* Scottsville: University of Natal Press, 1995.

Lekgoathi, Sekibakiba Peter. “‘Colonial’ Experts, Local Interlocutors, Informants and the Making of an Archive on the ‘Transvaal Ndebele’, 1930-1989.” *The Journal of African History* 50, no. 1 (2009): 61–80.

Mahoney, Michael R. *The Other Zulus: The Spread of Zulu Ethnicity in Colonial South Africa*. Durham, NC: Duke University Press, 2012.

Mamdani, Mahmood. *Citizen and Subject: Contemporary Africa and the Legacy of Late Colonialism*. Princeton: Princeton University Press, 1996.

Manela, Erez. *The Wilsonian Moment: Self-Determination and the International Origins of Anticolonial*

Nationalism. Oxford: Oxford University Press, 2007.

Marable, W. Manning. "Booker T. Washington and African Nationalism." *Phylon (1960-)* 35, no. 4 (1974): 398–406. https://doi.org/10.2307/274742.

Marks, Shula. "Patriotism, Patriarchy and Purity: Natal and the Politics of Zulu Ethnic Consciousness." In *The Creation of Tribalism in Southern Africa*, edited by Leroy Vail. Berkeley: University of California Press, 1989.

———. *Reluctant Rebellion: Disturbances in Natal, 1906-08.* Oxford: Clarendon Press, 1970.

———. *The Ambiguities of Dependence in South Africa: Class, Nationalism, and the State in Twentieth-Century Natal*. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1986.

McClintock, Anne. *Imperial Leather: Race, Gender and Sexuality in the Colonial Contest*. New York: Routledge, 1995.

Mokoena, Hlonipha. "An Assembly of Readers: Magema Fuze and His Ilanga Lase Natal Readers." *Journal of Southern African Studies* 35, no. 3 (September 1, 2009): 595–607. https://doi.org/10.1080/03057070903101839.

———. *Magema Fuze: The Making of a Kholwa Intellectual*. Scottsville, South Africa: University of KwaZulu-Natal Press, 2011.

Nettleton, Anitra. "Arts and Africana: Hierarchies of Material Culture." *South African Historical Journal* 29, no. 1 (November 1, 1993): 61–75. https://doi.org/10.1080/02582479308671762.

Nuttall, Sarah. *Entanglement: Literary and Cultural Reflections on Post Apartheid*. Johannesburg: Wits University Press, 2009.

Pearce, Susan M. *On Collecting: An Investigation into Collecting in the European Tradition*. Collecting Cultures. London: Routledge, 1995.

Peterson, Bhekizizwe. "Black Writers and the Historical Novel: 1907-1948." In The Cambridge History of South African Literature, edited by David Attwell and Derek Attridge, African Edition., 291–307. Cambridge: Cambridge University Press, 2012.

———. *Monarchs, Missionaries & African Intellectuals*. Trenton, NJ: Africa World Press, Inc., 2000.

Peterson, Derek R. *Ethnic Patriotism and the East African Revival: A History of Dissent, c. 1935-1972*. Cambridge: Cambridge Univerisity Press, 2013.

Posel, Deborah. *The Making of Apartheid, 1948-1961 : Conflict and Compromise*. Oxford: Clarendon, 1997.

Roth, Mirjana. "The Natives Representative Council, 1937-1951." Ph.D. Thesis, University of the Witwatersrand, 1987.

Sanders, Mark. *Learning Zulu: A Secret History of Language in South Africa*. Princeton: Princeton University Press, 2016.

Saunders, Christopher C. *The Making of the South African Past: Major Historians on Race and Class*. Cape Town: David Philip, 1988.

Schnitzler, Antina von. *Democracy's Infrastructure : Techno-Politics and Protest after Apartheid*. Princeton: Princeton University Press, 2016.

Schumaker, Lyn. *Africanizing Anthropology: Fieldwork, Networks, and the Making of Cultural Knowledge in Central Africa*. Durham [N.C.]: Duke University Press, 2001.

Scott, James C. *Domination and the Arts of Resistance: Hidden Transcripts*. New Haven: Yale University Press, 1990.

Sitze, Adam. "Mandela and the Law." In *The Cambridge Companion to Nelson Mandela*, edited by Rita Barnard, 134–61. New York: Cambridge University Press, 2014.

Spear, Thomas. "Neo-Traditionalism and the Limits of Invention in British Colonial Africa." *The Journal of African History* 44, no. 1 (2003): 3–27.

Stoler Ann Laura. *Race and the Education of Desire: Foucault's History of Sexuality and the Colonial Order of Things*. Durham, NC : Duke University Press, 1995.

Swanson, Maynard W. "The Sanitation Syndrome: Bubonic Plague and Urban Native Policy in the Cape Colony, 1900-1909." *The Journal of African History* 18, no. 3 (1977): 387–410.

Tischler, Julia. "Education and the Agrarian Question in South Africa, c. 1900-40." *The Journal of African History* 57, no. 2 (July 2016): 251–70. https://doi.org/10.1017/S0021853716000062.

Viljoen, Louise. *Ingrid Jonker: Poet under Apartheid*. 1 edition. Athens: Ohio University Press, 2013.

Vinson, Robert Trent. *The Americans Are Coming! : Dreams of African American Liberation in Segregationist South Africa*. Athens: Ohio University Press, 2012.

Waetjen, Thembisa. *Workers & Warriors: Masculinity and the Struggle for Nation in South Africa*. Cape Town: HSRC Press : Distributed in South Africa by Blue Weaver, 2006.

Welsh, David John. *The Roots of Segregation; Native Policy in Colonial Natal, 1845-1910*. Cape Town, New York: Oxford University Press, 1971.

West, Michael O. "The Tuskegee Model of Development in Africa: Another Dimension of the African/African-American Connection." *Diplomatic History* 16, no. 3 (1992): 371–87.

Wolpe, Harold. "Capitalism and Cheap Labour-Power in South Africa: From Segregation to Apartheid." *Economy and Society* 1, no. 4 (November 1, 1972): 425–56. https://doi.org/10.1080/03085147200000023.

Worden, Nigel. *The Making of Modern South Africa: Conquest, Apartheid, Democracy*. 5th ed. Chichester, West Sussex ; Malden, MA: Wiley-Blackwell, 2012.

Wright, John. "Making the James Stuart Archive." *History in Africa* 23 (January 1996): 333–50. https://doi.org/10.2307/3171947.

———. "The Dynamics of Power and Conflict in Theukela-Mzimkhulu Region in the Late 18th and Early 19th Centuries: A Critical Reconstruction." Ph.D. Dissertation, University of Witwatersrand, 1989.

———. "Thinking beyond 'Tribal Traditions': Reflections on the Precolonial Archive." *South African*

Historical Journal 62, no. 2 (June 1, 2010): 268–86. https://doi.org/10.1080/02582473.2010.493003.

Xaba, Makhosazana. *The Alkalinity of Bottled Water*. Braamfontein: Botsotso, 2019.

Zimmerman, Andrew. *Alabama in Africa: Booker T. Washington, the German Empire, and the Globalization of the New South*. America in the World. Princeton, N.J. ; Woodstock: Princeton University Press, 2012

2. 日本語文献

網中昭世. 『植民地支配と開発: モザンビークと南アフリカ金鉱業』 山川出版社、2014年

永原陽子. 「アフリカ史・世界史・比較史」平野克己編『アフリカ比較研究: 諸学の挑戦』日本貿易振興会アジア経済研究所、2001年

永原陽子編. 『「植民地責任」論: 脱植民地化の比較史』 青木書店、2009年

エリック・ホブズボウム、テレンス・レンジャー編（前川啓治・梶原景昭訳）『創られた伝統』 紀伊國屋書店, 1992年

フーコー、ミシェル（高桑和巳訳）. 『安全・領土・人口: コレージュ・ド・フランス講義1977-1978年度』筑摩書房、2007年

堀内隆行. 『異郷のイギリス: 南アフリカのブリティッシュ・アイデンティティ』丸善出版、. 2018年

松田素二. 『抵抗する都市: ナイロビ移民の世界から』 岩波書店、1999年

峯陽一. 「解説『新版　南アフリカの歴史』を読む―リベラル・ラディカル論争をこえて」レナード・トンプソン（宮本ほか訳）『南アフリカの歴史』明石書店、2009年

マンデラ、ネルソン（東江一紀訳） 『自由への長い道 : ネルソン・マンデラ自伝』日本放送出版協会、1996年

ムダ、ゼイクス（くぼたのぞみ訳）「マンデラの矛盾 (総特集 ネルソン・マンデラ) – (追悼)」『現代思想』 42 (3): 27–29.、2014年

ヤン=ヴェルナー・ミュラー. 『ポピュリズムとは何か』板橋拓己訳. 岩波書店、2017年

年度別ズールー語指定教科書一覧

Native Teachers' Journal に掲載された指定教科書一覧より、ズールー語、ズールー史・ズールー文学に関するものを抜き出し記載した。なお、T.は Teachers Certificate を表す。本論文が対象としている時代のナタール州においては、免許を持たない限り学校で教えることができないという教員免許制度はなかったが、教員の能力を保証する教員資格（teacher certificate）制度は存在した。

	1930, 1931, (NTJ Oct. 1929 vol.9 no.1 p.47)
T3	N/A
T4	N/A
T5	N/A
T6	N/A
Std.9	First Grade: uKulumetule
Std.8	Second Grade: uKulumetule.
Std.7	Third Grade: uBaxoxele.
Std.6	UHlangakula.
Std.5	uJeqe, Insila kaShaka.
Std.4	uTulasizwe.
Std.3	Vusezakiti.
Std.2	uCakijina or Vulingoqondo.
Std.1	Kwe Sukela
Second year infants	Ezasekaya or uGenisise.
First year Infants	Ukucatula or any other Reading Chart booklet
Note	

	1933(NTJ Oct. 1932 Vol.12 no.2 pp.81-82)
T3	N/A
T4	N/A
T5	N/A
T6	N/A
Std.9	Firs+D16t Grade: uKulumetule.First Grade: uKulumetule.
Std.8	Second Grade: uKulumetule.
Std.7	Third Grade: uBaxoxele.
Std.6	UHlangakula.
Std.5	uJeqe, Insila kaShaka.
Std.4	uTulasizwe.
Std.3	Vusezakiti.
Std.2	uCakijina or Vulingoqondo.
Std.1	Kwe Sukela
Second year infants	Ezasekaya or uGenisise.
First year Infants	Ukucatula or any other Reading Chart Booklet
Note	

	1934(NTJ Oct. 1933 p.37 Vol.13 no.1)
T3	Guqabadele, by M. J. Mpanza (Mission Book Room)
T4	Abantu Abamnyama, by Fuze. (City Printing Works).
T5	uKulumetule, by Stuart (Longmans)
T6	uBaxoxele, by Stuart (Longmans)
Std.9	N/A
Std.8	N/A
Std.7	Ukuziphata Kahle, by Dube (Mariannhill)
Std.6	uHlangakula, by Stuart (Longmans).
Std.5	uJeqe insila ka Shaka, by Dube (Mariannhill)
Std.4	uTulasizwe, by Stuart (Longmans)
Std.3	uVusezakiti, by Stuart (Longmans)
Std.2	uCakijana or uVulinqondo.
Std.1	Kwe Sukela.
Second year infants	Ezasekhaya.
First year Infants	Ukucathula.
Note	

	1935 (NTJ oct. 1934 p.45 Vol.14 no.1)
T3	Umbuso kaShaka, by Ntuli (Mariannhill Press)
T4	Guqabadele, by M. J. Mpanza (Mission Book Room)
T5	uKulumetule, by Stuart (Longmans)
T6	uBaxoxele, by Stuart (Longmans)
Std.9	uSukabekhuluma, Zung (Shuter &Shooter)
Std.8	N/A (ミスあるいは誤植か)
Std.7	uSukabekhuluma, Zung (Shuter &Shooter)
Std.6	uJeqe insila ka Shaka, by Dube (Mariannhill)
Std.5	Ukuziphata Kahle, by Dube (Mariannhill)
Std.4	uTulasizwe, by Stuart (Longmans)
Std.3	Izikhali Zanamuhla, by Dhlomo (Shuter &Shooter)
Std.2	uCakijana or uVulinqondo.
Std.1	Wozanazo, by V. Dube (Oxford Press)
Second year infants	Ezasekhaya.
First year Infants	Ukucathula.
Note	

	1936(NTJ vol.15 no.1 Oct. 1935 p. 30)
T3	Umbuso kaShaka, by Ntuli (Mariannhill Press)
T4	Guqabadele, by M. J. Mpanza (Mission Book Room)
T5	uHlanganiselumasheqe, by R. Laumula.
T6	uBaxoxele, by Stuart (Longmans)
Std.9	N/A
Std.8	N/A
Std.7	uSukabekhuluma, Zung (Shuter &Shooter)
Std.6	uDingane, R.R. Dlomo (Shuter & Shooter)
Std.5	Ukuziphata Kahle, by Dube (Mariannhill)
Std.4	uSambulele, by Molife (Shuter & Shooter)
Std.3	Izikhali Zanamuhla, by Dhlomo (Shuter &Shooter)
Std.2	uCakijana or uVulinqondo.
Std.1	Wozanazo, by V. Dube (Oxford Press)
Second year infants	Ezasekhaya.
First year Infants	Ukucathula or uQedizaba by Mabatha & Mdhladhla (Shuter & Shooter)
Note	

	1937(NTJ vol.16 no.1 Oct.1936 p.23)
T3	Umbuso kaShaka, by Ntuli (Mariannhill Press)
T4	Inkomo YakwaZulu, Zaba (Shuter & Shooter).
T5	Isabelo sikaZulu, Lamula (Shuter & Shooter).
T6	uShaka, Dlomo (Shuter & Shooter)
Std.9	N/A
Std.8	N/A
Std.7	uShaka, Dlomo (Shuter & Shooter)
Std.6	uDingane, R.R. Dlomo (Shuter & Shooter)
Std.5	uPhetheni, Bengani (Shuter & Shooter).
Std.4	uSamubulele, Molife (Shuter & Shooter).
Std.3	Izikhali Zanamuhla, Dlomo (Shuter & Shooter)
Std.2	Ukwazi Kuyathuthukisa, Dlomo (Shuter & Shooter) or uCakijana Bosecolo, Mabata and Mdhladhla (Simpkin Marshall)
Std.1	Kwesukela, Stuart (Longmans), or Wozanazo, V. Dube (Oxford Press)
Second year infants	Ezasekhaya. Malcolm (Longmans)
First year Infants	uQedizaba by Mabatha & Mdhladhla (Shuter & Shooter) or Ukucathula (Ebenezer Press, Dundee)
Note	

	1938 (NTJ vol.17 no.1 Oct.1937 p.27-8)
T3	Umbuso kaShaka, by Ntuli (Mariannhill Press)
T4	Inkomo YakwaZulu, Zaba (Shuter & Shooter).
T5	Isabelo sikaZulu, Lamula (Shuter & Shooter).
T6	uShaka, Dlomo (Shuter & Shooter)
Std.9	N/A
Std.8	N/A
Std.7	uShaka, Dlomo (Shuter & Shooter)
Std.6	(Note. - Every pupil must have two books- either 1 or 2 and the history reader No.3). 1. Umohlomi, Luthango (Shuter & Shooter). 2. Udingane, Dhlomo (Shuter & Shooter). 3. Ezomdabu Wezizwe Zakithi Nezokufika kwabo, Molefe & Masondo (Teachers' Book) (Shuter & Shooter).
Std.5	(Note. - Every pupil must have two books- either 1 or 2 and the history reader No.3). 1. Unkosibomvu, Stuart (Shuter & Shooter). 2. Uphetheni, Bengani (Shuter & Shooter). 3. Ezomdabu Wezizwe Zakithi Nezokufika kwabElungu NokubusaKwabo, Molefe & Masondo (Teachers' Book) (Shuter & Shooter).
Std.4	(Note. - Every pupil must have two books- either 1 or 2 and the history reader No.3) 1. Umpande, Dhlomo (Shuter & Shooter). 2. Usambulele, Molefe (shuter & Shooter). 3. Ezomdabu Wezizwe Zakithi Nezokufika kwabElungu Nokubusa Kwabo, Molefe & Masondo (Teachers' Book) (Shuter & Shooter)
Std.3	Izikhali Zanamuhla, Dlomo (Shuter & Shooter)
Std.2	Ukwazi Kuyathuthukisa, Dlomo (Shuter & Shooter) or uCakijana Bosecolo, Mabata and Mdhladhla (Simpkin Marshall)
Std.1	Izwe lakithi KwaZulu, Zaba (Shuter & Shooter): Kwesukela, Stuart (Longmans): or Wozanazo, V. Dube (Oxford Press)
Second year infants	Ezasekhaya. Malcolm (Longmans).
First year Infants	uQedizaba by Mabatha & Mdhladhla (Shuter & Shooter) or Ukucathula (Ebenezer Press, Dundee)
Note	Since compiling the above lists notice has benn received of the following: Uhlabanengalwi, by Mbata and Mdhaldhla, an alternative reading book for Standard III, or Standard IV. (published by T.W. Griggs & Co.). Uvelabahleke, by J.D. Mthembu, an alternative reading book for Standard IV. (published by THe New Castle Advertiser). UThatezakho, by Mbata and Mdhadhla, an alternative reading book for Second Year (published by The Newcastle Advertiser). A Pupil's Zulu manual for Standard I. to IV., by A.M.C. and A.B.C. Xaba (published by The Newcastle Advertiser).

	1939 (NTJ Vol.18 no.1 Oct 1938 pp.25-6)
T3	Isabelo sikaZulu. Lamula. (Shuter and Shooter) InkondloKaZulu. Vilakazi. (Lovedale Press.)
T4	Nomanini. Vilakazi. (Mariannhill Press). Inkomo kaZulu. Xaba. (Shuter and Shooter) uDingane. Dlomo (Shuter and Shooter). Ezomdabu Wezizwe Zakithi. Molefe and Masondo. (Shuter and Shooter). Izinganekwane Nezindaba Ezindala. Ntuli. (Longmans)
T5	N/A
T6	N/A
Std.9	N/A
Std.8	N/A
Std.7	Ushaka. Dhlomo. (Shuter and Shooter.)
Std.6	Umohlomi. Luthango. (Shuter and Shooter.) Udingane. Dhlomo. (Shuter and Shooter.) Ezomdabu Wezizwe Zakithi Nezokufika kwabElungu Nokubusa Kwabo. Molefe and Masondo. (Shuter and Shooter) (Pupil's book)
Std.5	Unokosibomvu. Stuart. (Shuter and Shooter). Uphetheni. Bengani. (Shuter and Shooter).
Std.4	Umpande. Dholomo. (Shuter and Shooter). Usamblele. Molefe. (Shuter and Shooter) Ezomdabu Wezizwe Zakithi Nezokufika kwabElungu Nnokubusa kawbo. Molefe and Masondo. (Shuter and Shooter.)(Teachers Book). Amaqhawe Omlando. Made. (Adams and Co.); Uvelebahleke. Mthembu. (Newcastle Advertiser).
Std.3	Izinganekwane. Nezondabu Ezindala. Ntuli. (longmans); Izikhali Zanamuhla. Dhomo. (Shuter and Shooter); Amaqhawe Omlando. Made. (Adams and Co.): Uhlabanegalwi. Mbata and Mdladhla. (T.W. Griggs and Co.);
Std.2	Ukwazi Kuyathuthukisa. Dhlomo. (Shuter and Shooter); Ilanga ilkaNqelebana. Mthiya. (Shuter and Shooter): Uchakijana. Mbata and Mdhladhla. (T. W. Griggs and Co.)
Std.1	Izwe Lakithi kwaZulu. Xaba. (Shuter and Shooter): Kwesukela. Stuart. (Longamans): Untiningwe. Mpanza. (Shuter and Shooter): Wozanazo. V. Dube. (Oxford Press)
Second year infants	Ezakhethelo. Masondo. (S/S):Ezasekhaya. Malcolm. (Longmans): or Uvulindlebe. Masondo. (S/S): Uthathezakho. Mbata and Mdhladla. (Newcastle Advertiser)
First year Infants	Uqedizaba. Mbata and Mdhladhla. (S/S): Ukucathula. Ebenezer Press, Dundee.: Incwadi Yokuqala Yesizulu. G.R. Dent. (Longmans).
Note	

	1940 (NTJ Vol.19 no.1 Oct 1939 pp.16-7)
T3	Made: Indlafa Yase Harrisdale (S/S). Lamula: Isabelo Sikazulu (S/S).
T4	
T5	Ntuli: Izinganekwane Nezindaba Ezindala (Longmans).
T6	Malinga: Umbazwane (S/S). Made: Indlafa Yase Harrisdale (S/S). Molefe & Masondo: Ezomdabu Wezizwe Zabansundu Nezokufika Nokubusa Kwabelungu (S/S)
Std.9	N/A
Std.8	N/A
Std.7	Masondo: Uqamunda (S/S) or Dhlomo: Ushaka (S/S)
Std.6	Luthango: Umohlomi (S/S). Dhlomo: Udingane Kasenzangankhona (S/S). Molefe & Masondo: Ezomdabu wezizwe Zabansundu Nezokufika Nokubusa Kwabelungu (S/S).
Std.5	Stuart (P.A.): Unkosibomvu (S/S). Bengani: Uphetheni (S/S). Molefe & Masondo: Ezomdabu Wezizwe Zabansundu Nezokufika Nokubusa Kwabelungu (S/S).
Std.4	Made: Amaqhawe Omlando (S/S) And one of the following: Dhlomo: Umpande (S/S). Molefe: Usambulele (S/S). Mthembu: Uvelabahleke (Newcastle Advertiser).
Std.3	Made: Amaqhawe Omlando (S/S). And one of the following: Dhlomo: Izikhali Zanamuhla (S/S). Mbata & Mdhladhla: uHlabanengalwi (Griggs &Co.). Kubone: Umlondolozi (S/S). Bennie: Stewart Zulu Readers: Isigamu Sesithathu (Griggs & Co.). Ntuli: Izinganekwane Nezindaba Ezindala (longmans).
Std.2	Any one of the following:- Mthiya: Ilanga Likanqelebana (S/S). Mbata &Mdhladhla: uChakijijana (Griggs & Co.). Dhlomo: Ukwazi Kuyathuthukisa (S/S). Bryant: Inkambo Enhle (S/S). Bennie: Stewart Zulu Readers: Isigamu Sesibili (Griggs & Co.). Zungu: Ukuthuthuka Kwesizwe. (S/S).
Std.1	Any one of the following:- Dube: Wozanazo (Oxford Press). Zaba: Izwe Lakithi Kwazulu (S/S). Stuwart: Kwesukela (Longmans). Mpanza: Utiningwe (S/S). Mhlongo: Utholakele (S/S). Bennie: Stewart Zulu Readers: Isigamu Sokuqala (Griggs & Co.)
Second year infants	Any one of the following:- Malcolm: Ezasekhaya (Longmans). Masondo.: Ezekhetelo (Shuter & Shooter): Bennie: Stewart Zulu Readers: Elandela Yokuqala (Griggs & Co.). Masondo: Uvulindlebe (S/S). Mbata & Mdhladhla: uThathezakho (Newcastle Advertiser).
First year Infants	Any one of the following:- Ukucathula (Ebenezer Press). Mbata & Mdhladhla: Uqedizaba. (S/S): Dent: Incwadi Yokuqala Yesizulu (Longmans).: Bengani: Wozuyithathe (S/S): Bennie: Stewart Zulu Readers: Eyokuqala (Griggs & Co.): Mngomo: Vukani Kusile (Shuter & Shooter)
Note	In addition to the foregoing, all children in Standards I.-IV. Should possess a copy of Umendo KaDokotela, by L. E. Hertslet (S/S).

	1941 (NTJ Vol.19 no.4 July 1940 p.172)
T3	For Teachers' Third Class Certificate- Both of the following: 1. Indlafa YaseHarrisdale (Made). 2. Isabelo SikaZulu(Lamula).
T4	For Teachers' Fourth Class Certificate (1940-41) All of the following:- 1. Ezomdabu Wezizwe Zabunsundu Nezokufika Nokubusa Kwabelungu (Molefe and Masondo). 2. Indlafa yaseHarrisdale (Made) 3. Izinganekwane Nezindaba Ezindala (Ntuli). 4. Mbazwane (Malinga).
T5	N/A
T6	N/A
Std.9	N/A
Std.8	N/A
Std.7	For Standard VII- One of the following:-1. Uqamunda (Masondo). 2. Ushaka (Dhlomo).
Std.6	For Standard VI- "Ezomdabu Wezizwe" and One Other Book:- 1. Ezomdabu Wezizwe Zabansundu Nezokufika Nokubusa Kwabelungu (Molefe and Masondo). (This is a complusory History Reader.) 2. Udingane KaSenzangakhona (Dhlomo). 3. Umohlomi (Luthango).
Std.5	For Standard V - " Ezomdabu Wezizwe" and One Other book:- 1. Ezomdabu Wezizwe Zabansundu Nezokufika Nokubusa Kwabelungu (Molefe and Masondo) (This is a Compulsory History Reader.) 2. Unkosibomvu (P. A. Stuart). 3. Uphetheni (Bengani).
Std.4	For Standard IV - "Umendo KaDokotela" and One Other: 1. Umendo KaDokotela (Hertslet). (This is a compulsory Health Reader). 2. Umpande (Dhlomo). 3. Usambulele (Molefe). 4. Uthulasizwe (James Stuart). 5. Uvebahleke (Mthembu).
Std.3	For Standard III - "AmaQhawe Omlando" and "Umendo KaDokotela" and One Other book: - 1. AmaQhawe Omland (Made). (This is a compulsory History Reader.) 2. Umendo KaDokotela (Hertslet). (This is a compulsory Health Reader.) 3. Izikhali Zanamuhla (Dhlomo). 4. Izinganekwane Nezindaba Ezindala (Ntuli). 5. Stewart Zulu Reader for Standard III. 6 UHlabanengalwi (Mbata and Mdhladhla). 7. UMlondolozi (Kubone). 8. UVusezakithi (James Stuart).
Std.2	For Standard II- "Umendo Kadokotela" and One Other book:- 1. Umendo kaDokotela (Hertslet). (This is a compulsory Health Reader.) 2. Ilanga LikaNqelebana (Mthiya). 3. Inkambo Enhle (Bryant). 4. Stewart Zulu Reader for Standard II. 5. UChakijiana Bogcololo (Mbata and Mdhladhla). 6. Ukuthuthuka Kwesizwe Esinsundu (ZUngu). 7. Ukwazi Kuyathuthukisa (Dhlomo). 8. Uvulingqondo.
Std.1	For Standard I - "Umendo Kadokotela" and One other book:- 1. Umendo kaDokotela (Hertslet). (This is a compulsory Health Reader.) 2. Izwe Lakithi KwaZulu (Xaba). 3.

	Kwesukela (James Stuart). 4. Stewart Zulu Reader for Standard I. 5. Untingwe (Mpanza). 6. UTholakele (Mhlongo). 7. Wozanazo (Dube).
Second year infants	One of the following:- 1. Ezasekhaya (malcolm). 2. Ezekhethelo (Masondo). 3 Stewart Zulu Readers, Infant Reader. 4. Uthathezakho (Mbata and Mdhladhla). 5. Uvulindlebe (Masondo).
First year Infants	one of the following:- 1. Incwadi Yokuqala YesiZulu (G. R. Dent). 2. Stewart Zulu Readers, Primer. 3. Ukucathula. 4. Uqedizaba (Mbata and Mdhladhla). 5. Vukani Kusile (Mngoma and Makhathini). 6. Wozuyithathe (Bengani).
Note	For the period 1941-42 the same books will again be prescribed.

	1942 (NTJ April 1941 Vol.20 No.3. p.120)　same as 1941
T3	
T4	
T5	
T6	
Std.9	
Std.8	
Std.7	
Std.6	
Std.5	
Std.4	
Std.3	
Std.2	
Std.1	
Second year infants	
First year Infants	
Note	Set Books For 1942 the same as for 1941
	Change in Set Books. For Std. III history book, "Amaqhawe Omland, II," should be used. For health reader foro Stds. III and IV, Indlela Yempilo by L. E. Hertslet should be used. NTJ Oct. 1941 Vol. 21 No.1 p.27

	1943 記載なし	1943 記載なし	1944 記載なし	1945(NTJ Vol.23 no.4 July, 1944. p.104)
T3				1. ubuwula bexoxo by Made (S/S) 2. Amaciko EsiZulu by Masondo (S/S) 3. Akusenjalo by Zalo (S/S)
T4				1. Indlafa YaseHarrisdale by Made (S/S) 2. KwaSigweje by Xaba (S/S) 3. Nomalanga kaNdeagezi by Dhlomo (S/S) 4. Ezondabu Wezizwe Zabansundu by Molefe and Masondo (S/S).
T5				
T6				
Std.9				
Std.8				
Std.7				
Std.6				
Std.5				
Std.4				
Std.3				
Std.2				
Std.1				
Second year infants				
First year Infants				
Note				English: Standard VII. Endulo by Hertslet (S/S) or An African Attila by Stuart (S/S)

	1946-47(NTJ Vol.25 no.1 Oct., 1945p.24)
T3	T.3 Junior- Second Year, 1946. Bird Calls, by Dunning, 3/6. Nomalanga kaNdengeze, by Dhlomo. T.3 Junior - First Year, 1946, Second year, 1947. Ubuwula Bexoxo by Made. Nomalanga ka Ndengeze by Dhlomo.
T4	T.4 - Second Year, 1946. Either: Indlafa yase Harrisdale by Made; or Kwa Sikewje by Xaba. T.4- First year, 1946; Second Year, 1947. Idlafa yase Harrisdale by Made. Kwa Sikweje by Zaba. Amasiku esiZulu by Masondo.
T5	N/A
T6	N/A
Std.9	N/A
Std.8	NB
Std.7	"Nkosiyezwe" by Mseleku. (The Ladysmith Gazette). And Chief Above and Chief Below by Tracy.
Std.6	Dingane by Dhlomo.
Std.5	Nkosibomvu by P.A. Stuart.
Std.4	Two alternate series. Either Masihambisane (S/S). Or: Zulu Readers (Longman's).
Std.3	Two alternate series. Either Masihambisane (S/S). Or: Zulu Readers (Longman's).
Std.2	Two alternate series. Either Masihambisane (S/S). Or: Zulu Readers (Longman's).
Std.1	Two alternate series. Either Masihambisane (S/S). Or: Zulu Readers (Longman's).
Second year infants	Two alternate series. Either Masihambisane (S/S). Or: Zulu Readers (Longman's).
First year Infants	Two alternate series. Either Masihambisane (S/S). Or: Zulu Readers (Longman's).
Note	The Education Department will not examine T.4(1) or T.3(1) in Zulu Literature in 1946. The books prescribed above for these classes will constitute a two-years' course. The examination at the end of the second year will be based on the work of both years.

	1947-48(NTJ Oct., 1946 Vol.26 no.1 p.36)
T3	T4 and T3- First Year, 1947; Second year, 1948. Indlela yababi. By Dlomo. Published by S/S. Nomalanga kaNdengeze. By Dlomo. Published by S/S. Ubuwula Bexoxo. By Made. (S/S) Akusenjalo. By Zulu. (S/S) Amasiko Esizulu. By Masondo. (S/S).
T4	
T5	
T6	
Std.9	
Std.8	
Std.7	Umamazane, by R.H. Mthembu. Published by Griggs; and Ekuhambeni. By Gili kaNobantu. Published by S/S; and either Kwa Sikweje, By Xaba; or Indlela yababi. By Dlomo.
Std.6	Uvelengazi. By G. S Mthiya. Published by S/S. By E. Mdhladhla. Published by Tarbotton and Mitchell. (Both Books must be read by all students).
Std.5	Umandla. By G. B. Twala; and Uvumindaba. By M. R. G. Mseleku. Both books must be read by all students). (Note: For 1947 each of the Standars V., VI. Must study Tow Zulu set books, and Standard VII must study Three.)
Std.4	
Std.3	
Std.2	
Std.1	
Second year infants	
First year Infants	
Note	

	1948(NTJ Vol.27 no.1 Oct., 1947 p.33)
T3	T.4 and T.3 First Year, 1948. 1. Nomalanga kaNdengeze, by Dlomo. 2. Ubuwula Bexoxo, by Made. 3. Nigabe Ngani? By J. M. Zama. (Note: These THREE books must all be studied.)
T4	
T5	
T6	
Std.9	
Std.8	
Std.7	1. Ekuhambeni, by Gili KaNobantu. 2. Dingane, by Dlomo. 3. Nigabe Ngani? By J.M. Zama. (Note: Every pupil must have these THREE books.)
Std.6	1.Uvelengazi, by G. S. Mthiya. 2. Umgcogcoma, by E. Mdhladhla. (Note: Every pupil must have BOTH books.)
Std.5	1. Umandla, by G. B. Twala. 2. Uvumindaba, by M.R.G. Mseleku. (Note: Every pupil must have BOTH books.)
Std.4	
Std.3	
Std.2	
Std.1	
Second year infants	
First year Infants	
Note	

	1949(NTJ Vol.28 no.1 Oct., 1948 p.54)
T3	T.3 Junior and T.4 Second Year 1949. 1. Nigabe Ngani? By J. M. Zama. 2. Nomalanga kaNdengezi, by Dlomo. 3. Kwa Sikweje, by Xaba. 4. Ubuwula be Xoxo, by Made. (Note: The examination at the end of the year will be set on all four of these books.)
T4	T.3 Junior First year 1949 and T.4 Second Year 1950. 1. Nigabe Ngani? By J. M. Zama. 2. Nomalanga kaNdengezi, by Dlomo. 3. Zulu Poems, by Mthembu. 4. Ubuwula be Xoxo, by Made. (Note: The examination at the end of the year will be set on all four of these books.)
T5	
T6	
Std.9	
Std.8	
Std.7	1. Standard VII 1949 -1. Ekuhambeni, by Gili Ka Nobantu. 2. Nigabe Ngani? By J.M. Zama. 3. Zulu Poems, by Mthembu. (Note: Every Pupil must have these three books.)
Std.6	1. uVelengazi, by G. S. Mthiya. 2. Umbumbuli, by D. Mahlobo. (Note: (a) Every pupil must have both books. (b) The Education Department hopes to supply all pupils with "Umbumbuli."
Std.5	1. Umandla, by G. B. Twala. 2. Umgcogcoma, by E. Mdhladhla. (Note: every pupil must have both books. As this book was supplied to Std. VI in 1948, there should be nearly enough copies in the schools for Std. V.)
Std.4	
Std.3	
Std.2	
Std.1	
Second year infants	
First year Infants	
Note	

	1950(Vol.28 no.4 July 1949. p. 270-271 and Vol.29 no.1 Oct., 1949 p.45)
T3	Uzwelonke. By J. A. W. Nxumalo (S/S). Umuthi Wokufa Nezinye Izikondlo. By Made (rowell & Son). Nigabe Ngani? By Zama (S/S)
T4	Indaba Yempilo Ka Paule. By J.F. Scutt (S/S) Uzwelonke. By J. A. W. Nxumalo. (S/S). Umuthi Wokufa Nezinye Izikondlo. By Made (Rowell & Son).
T5	
T6	
Std.9	
Std.8	
Std.7	Indaba Yempilo Ka Paule. (=Indaba Yezindaba by Scutt.) (S/S). Umuthi Wokufa nezinye Izikondlo. By Made (Rowell & Son). Inqaba ka Mabelemade. By Yengwa (Tarboton & Mitchell). (all three books)
Std.6	Ukhabethule by K. Bengu. Nigabe Ngani? By Zama. Umyalezo by E.T. Mthembu. All three.
Std.5	uKhabethule. By K. Bengu (S/S) Indaba Yempilo ka Paule. By J. F. Scutt (S/S) Both Books
Std.4	Ubude Abuphangwa. By N. V. Nxumalo(S/S)
Std.3	
Std.2	
Std.1	
Second year infants	
First year Infants	
Note	For T.3 and T.4 above books are prescribed books for 1950 and 1951. (Note- Students will buy all three books at the beginning of the course in 1950, and will be examined on the three at the end of 1951).

	1951(Vol.28 no.4 July 1949. p. 270-271)
T3	Uzwelonke. By J. A. W. Nxumalo (S/S). Umuthi Wokufa Nezinye Izikondlo. By Made (rowell & Son). Nigabe Ngani? By Zama (S/S)
T4	Indaba Yempilo Ka Paule. By J.F. Scutt (S/S) Uzwelonke. By J. A. W. Nxumalo. (S/S). Umuthi Wokufa Nezinye Izikondlo. By Made (Rowell & Son).
T5	
T6	
Std.9	
Std.8	
Std.7	Uzwelonke. By J. A. W. Nxumalo (S/S). Umuthi Wokufa Nezinye Izikondlo. By Made (S/S). Indaba Emangalisayo Kunazozonke Emhlabeni. By J. F. Scutt (S/S). (all three)
Std.6	Indaba Yempilo Ka Petro. By J. F. Scutt (S/S) uVusumuzi No Madoda. By B. J. Malinga (S/S) Both Books
Std.5	Indaba Yempilo Ka Petro. By J. F. Scutt (S/S) uVusumuzi No Madoda. By B. J. Malinga (S/S) Both Books
Std.4	Ubude Abuphangwa. By N. V. Nxumalo (S/S)
Std.3	
Std.2	
Std.1	
Second year infants	
First year Infants	
Note	

	1952(NTJ Vol.30 no.4 p.576-577 July 1950)
T3	1. Mntanami! Mntanami! By L. Nyembezi (Nationale Pers). 2. Umpande, By R. R. Dhlomo (S/S). 3. Nigabe Ngani, by Zama (S/S) 4. Manla Iyokwendela Egodini, By L. L. T. Mncwango (S/S);(NTJ Vol.30 no.4 p.576-577 July 1950) Nigabe Ngani, Mntanami Mntanami, Izithopho Nezibongo, Manhla Iyokwendela Egodini, Nasike IsiZulu
T4	1. Uzwelonke, by J. A. W. Nxumalo(S/S) 2. Mntanami! Mntanami! By L. Nyembezi (Nasionale Pers). 3. Indaba Yezindaba, by J. F. Scutt (S/S) 4. Manhla Iyokwendela Egodini, L. L. T. Mncwango (S/S);(NTJ Vol.30 no.4 p.576-577 July 1950) Nigabe Ngani, Mntanami Mntanami, Izithopho Nezibongo, Manhla Iyokwendela Egodini, Nasike IsiZulu
T5	
T6	
Std.9	
Std.8	
Std.7	Uzwelonke, Umuthi Wokufa, Ekuhambeni, Ezemvelo Nemvelo, Nasike Isizulu
Std.6	(i)Ushaka or Longmans Std. VI Zulu Reader; (ii) Ezemvelo Nemvelo (iii)Nasike IsiZulu
Std.5	(i)Uvusumuzi NoMadoda or Umandla or Ukhabethule or Uvelangazi; (ii) Ezemvelo Nemvelo
Std.4	(i) Masihambisane(Std.IV) or Ubude Abuphangwa or Usokuzulu; (ii) Umcebo Wolwimi LwesiZulu
Std.3	(i)Mashihambisane(Std.III) or Unozizwe; (ii)Umcebo Wolwimi LwesiZulu
Std.2	(i)Mashihambisane(Std.II) or Unokuklekisa or Uchakijane;(ii) Umtapo Wolwazi LwesiZulu
Std.1	(i) Wozanazo or Mashihambisa(Std.I) or Ufundukhuphuke; (ii) Umtapo Wolwazi LwesiZulu.
Second year infants	Mashihambisane(2nd year) or Uvulindlebe or Ezasekhaya
First year Infants	Masihambisane(First Year) or Incwadi Yokuqala YesiZulu
Note	Prescribed Books for the 1952 Examination Natal Junior Certificate Zulu-A: Nigabe Ngani by J. M. Zama. Uzwelonke by J A. W. Nxumalo. Umbubuli by D. Mahlobo. Udingane by R. R. Dhlomo. Umyalezo by E.T. Mthembu.

	1953
T3	UCetshwayo, Mntanami Mntanami, Izithopho Nezibongo, Manhla Iyokwendela Egodini, Nasike IsiZulu
T4	Ucetshwayo, Mntanami Mntanami, Izithopho Nezibongo, Manhla Iyokwendela Egodini, Nasike IsiZulu
T5	
T6	
Std.9	
Std.8	
Std.7	Uzwelonke, Okwami Okwezandla, UMamazane, Ezemvelo Nemvelo, Nasike Isizulu
Std.6	(i)Ushaka or Longmans Std. VI Zulu Reader; (ii) Ezemvelo Nemvelo (iii)Nasike IsiZulu
Std.5	(i)Uvusumuzi NoMadoda or Umandla or Ukhabethule or Uvelangazi; (ii) Ezemvelo Nemvelo
Std.4	(i) Masihambisane(Std.IV) or Ubude Abuphangwa or Usokuzulu; (ii) Umcebo Wolwimi LwesiZulu
Std.3	(i)Mashihambisane(Std.III) or Unozizwe; (ii)Umcebo Wolwimi LwesiZulu
Std.2	(i)Mashihambisane(Std.II) or Unokuklekisa or Uchakijane;(ii) Umtapo Wolwazi LwesiZulu
Std.1	(i) Wozanazo or Mashihambisa(Std.I) or Ufundukhuphuke; (ii) Umtapo Wolwazi LwesiZulu.
Second year infants	Ezasekhaya or Mashihambisane(2nd year) or Ingqaqamazinyo
First year Infants	Masihambisane(First Year) or Incwadi Yokuqala YesiZulu
Note	

	1954
T3	UCetshwayo, Ubudoda Abukhulelwa, Izithopho Nezibongo, Manhla Iyokwendela, Nasike IsiZulu
T4	Ucetshwayo, Ubudoda Abukhulelwa, Izithopho Nezibongo, Manhla Iyokwendela, Nasike IsiZulu
T5	
T6	
Std.9	
Std.8	
Std.7	Uzwelonke, Okwami Okwezandla, Ekuhambeni, Ezemvelo Nemvelo, Nasike Isizulu
Std.6	(i)Udingane or Longmans Std. VI Zulu Reader; (ii)Ezemvelo Nevelo (iii) Nasike IsiZulu
Std.5	(i)Umandla or Ukhabethule; (ii) Ezemvelo Nemvelo
Std.4	(i) Masihambisane(Std.IV) or Ubude Abuphangwa or Usokuzulu; (ii) Umcebo Wolwimi LwesiZulu
Std.3	(i)Mashihambisane(Std.III) or Unozizwe; (ii)Umcebo Wolwimi LwesiZulu
Std.2	(i)Mashihambisane(Std.II) or Unokuklekisa or Uchakijane;(ii) Umtapo Wolwazi LwesiZulu
Std.1	(i) Wozanazo or Mashihambisa(Std.I) or Ufundukhuphuke; (ii) Umtapo Wolwazi LwesiZulu.
Second year infants	Ezasekhaya or Mashihambisane(2nd year) or Ingqaqamazinyo
First year Infants	Masihambisane(First Year) or Incwadi Yokuqala YesiZulu
Note	

	1955
T3	Ucetshwayo, Ubydoda Abukhulelwa, Izithopho Nezibongo, Manhla Iyokwendela, Nasike IsiZulu
T4	Ucetshwayo, Ubydoda Abukhulelwa, Izithopho Nezibongo, Manhla Iyokwendela, Nasike IsiZulu
T5	
T6	
Std.9	
Std.8	
Std.7	Uzwelonke, Masixoxelane, Manuscript to be prescribed, Ezemvelo Nemvelo, Nasike Isizulu
Std.6	(i)Udingane or Longmans Std. VI Zulu Reader; (ii)Ezemvelo Nevelo (iii) Nasike IsiZulu
Std.5	(i)Unkosibomvu or Umandla or Ukhabethule; (ii) Ezemvelo Nemvelo
Std.4	(i) Masihambisane(Std.IV) or Ubude Abuphangwa or Usokuzulu; (ii) Umcebo Wolwimi LwesiZulu
Std.3	(i)Mashihambisane(Std.III) or Unozizwe; (ii)Umcebo Wolwimi LwesiZulu
Std.2	(i)Mashihambisane(Std.II) or Unokuklekisa or Uchakijane;(ii) Umtapo Wolwazi LwesiZulu
Std.1	(i) Wozanazo or Mashihambisa(Std.I) or Ufundukhuphuke; (ii) Umtapo Wolwazi LwesiZulu.
Second year infants	Ezasekhaya or Mashihambisane(2nd year) or Ingqaqamazinyo
First year Infants	Masihambisane(First Year) or Incwadi Yokuqala YesiZulu
Note	

	1956	1957	1958	1959
T3	Manuscripts to be prescribed			
T4	Manuscripts to be prescribed			
T5				
T6				
Std.9				
Std.8				
Std.7	Uzwelonke, Masixoxelane, Manuscript to be prescribed, Ezemvelo Nemvelo, Nasike Isizulu			
Std.6	(i)Udingane or Longmans Std. VI Zulu Reader; (ii)Ezemvelo Nevelo (iii) Nasike IsiZulu			
Std.5	(i)Unkosibomvu or Umandla or Ukhabethule; (ii) Ezemvelo Nemvelo			
Std.4	(i) Masihambisane(Std.IV) or Ubude Abuphangwa or Usokuzulu; (ii) Umcebo Wolwimi LwesiZulu			
Std.3	(i)Mashihambisane(Std.III) or Unozizwe; (ii)Umcebo Wolwimi LwesiZulu			
Std.2	(i)Mashihambisane(Std.II) or Unokuklekisa or Uchakijane;(ii) Umtapo Wolwazi LwesiZulu			
Std.1	(i) Wozanazo or Mashihambisa(Std.I) or Ufundukhuphuke; (ii) Umtapo Wolwazi LwesiZulu.			
Second year infants	Ezasekhaya or Mashihambisane(2nd year) or Ingqaqamazinyo			
First year Infants	Masihambisane(First Year) or Incwadi Yokuqala YesiZulu			
Note				